



Title	図書寮本類聚名義抄の基礎的研究
Author(s)	申, 雄哲
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11629号
Issue Date	2015-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k11629
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58740
Type	doctoral thesis
File Information	Shin_Woongchul.pdf



平成廿六年度
博士學位論文

図書寮本類聚名義抄の基礎的研究

北海道大学大学院文学研究科

申 雄哲

目次

序

研究背景と意義	2
論文構成	3
凡例	4

第一部 翻字篇

図書寮本名義抄の書誌	6
翻字凡例	8
翻字本文	10
一 言部	10
二 足部	28
三 山部	40
四 石部	47
五 玉部	53
六 心部	61
七 糸部	85

第二部 研究篇

第一章 序論	109
第一節 日本古辞書史の概略	109
一 辞書とは何か	109

二 中国辞書の伝来と種類	110
三 日本辞書史のはじまり	111
四 日本辞書史の発達	112
注	112

第二節 類聚名義抄	114
一 はじめに	114
二 書名について	114
三 諸本の系統	114
四 図書寮本名義抄の価値	116
五 図書寮本名義抄の仕組み	117
注	119

第三節 先行研究	120
一 図書寮本名義抄研究の濫觴	120
二 出典研究の深化	120
三 出典序列論の実証	121
四 出典利用と辞書成立をめぐる議論と実証	121
注	123

第二章 図書寮本名義抄の編纂材料	124
第一節 はじめに	124
第二節 編纂材料の概況	124
一 辞書編纂の目的	124
二 編纂材料の分類	125
三 仏典音義類の基本的な特徴	127
四 辞書類の基本的な特徴	128
五 仏典音義類と辞書類の対比	128

第三節 掲出語における編纂材料	129
一 単字掲出語と複数字掲出語	129
二 複数字掲出語の更なる分類	131
三 漢語熟語のばあい	132
四 梵語訳語のばあい	133
五 字体掲出のばあい	135
第四節 注文における編纂材料	136
一 注文の出典注記	136
二 掲出語形態との関連	137
第五節 まとめ	140
注	140
第三章 図書寮本名義抄の項目配列	142
第一節 はじめに	142
第二節 部首をめぐる問題	142
第三節 項目について	143
一 掲出項と被注項の定義	143
二 出典における掲出項と被注項	145
三 掲出項と被注項の対応	146
第四節 項目群の設定	148
一 項目間の類縁性	148
二 項目群の類型	149
第五節 まとめ	151
注	151
第四章 図書寮本名義抄の注文類型	153

第一節 はじめに	153
第二節 注文の類別	153
第三節 注文類型の検討	154
一 字体注の検討	154
二 音注の検討	155
三 義注の検討	155
四 和訓の検討	157
第四節 項目群と注文類型	158
第五節 まとめ	161
注	161
第五章 図書寮本名義抄の意味記述の構造	162
第一節 はじめに	162
第二節 図書寮本名義抄の辞書記述	162
一 辞書記述の類型	162
二 意味記述における二重言語使用	163
第三節 意味記述の概観	164
一 義注について	164
二 和訓について	165
第四節 義注と和訓の分布	166
一 分布のパターン	166
二 分布の現状	167
第五節 義注と和訓の共存(Ⅱ)	168
一 義注と和訓の意味的な対応	168
二 訓点本における日本語対応の実用例と和訓の対応	170
第六節 和訓のみ(Ⅲ)	170

第七節 まとめ	171
注	172
第六章 図書寮本名義抄の和訓収容の実際―毛詩訓点本の和訓を中心に―	174
第一節 はじめに	174
第二節 研究対象	175
第三節 毛詩訓点本との比較検討	176
一 被注字・和訓ともに一致（一二五例）	177
二 和訓は一致せず（一六例）	179
三 被注字が見えず（一六例）	182
第四節 毛詩訓点本からの和訓の性質	183
一 被注字の平易度について	184
二 意味注釈の存在について	185
三 色葉字類抄による常用性の検討	187
第五節 まとめ	189
注	190
第七章 結論	192
参考文献	194
使用テキスト	196

序

研究背景と意義

古辞書の研究の使命は、まず、辞書に投影された認識体系に対する究明である。辞書の現状から、編纂の趣旨と方針、編纂資料の集積と利用の実態といった事実を解明し、学術的に位置づけることに意義がある。

もう一つは、良質の言語資料であり、また優れた参考資料でもある古辞書に対して、その一次資料としての利用が促進される基盤を整えることであろう。

現代の辞書には凡例が付いている。利用者はこれを熟読することによって辞書の基本体裁や構造など、利用の前提となる事項を把握したうえで、難無く利用できるようになる。そして、そのような凡例や辞書の説明などに使われる言語と字体は、その辞書を必要とする言語社会における言語規範のある水準以上習熟している人間なら誰でも差支えなく理解できるものである。

ところが、このような現代の辞書利用における当然な前提が、古辞書には当てはまらない。古辞書の中には平安時代のもので『倭名類聚抄』・『新撰字鏡』・『類聚名義抄』などが重要な言語資料としてよく取り上げられる。凡例のようなものを備えるものは珍しく、あるとしても十分な情報とはいえないばかりが多い。しかも、その辞書本文は漢文で書かれたり、あるいは現代の通用字体とは違う漢字仮名が使われたり、くずし字が頻繁に現れたりするものである。それを一次資料のまま利用

できる研究者はどれだけいるだろうか。もしくは、そのような利用障壁を乗り越えず、古辞書の利用を断念する人はいないだろうか。

院政期の重要文献である類聚名義抄に関しては「図書寮本」と「観智院本」が主要なものとして知られている。戦後発見された図書寮本に関しては、六〇年あまりの年月にわたる研究史は輝かしいものといえよう。

そのような研究の進展によってその価値と位置づけは明々白々となってきた。しかし、それによって、図書寮本『類聚名義抄』という古辞書の本文が容易かつ正確に理解できることに繋がったとは断言できない。

資料としての利用を考えると、今まで発表された論考を熟読し、入手も難しい複製本を用いて本文の書写字体に直接ぶつかりながら、判読能力と理解を深めていく方法は穏当である。しかし、このような方法は、関連する論考にどれほど触れて、どこまで本文判読能に熟達できるかは利用者個人の能力に任せることとなる。本文判読の責任を利用者に負わせることによって、実在する利用障壁は存置したままである。そして、利用者の熟達度によっては、内容の理解に難を感じ、不正確な理解で終わることもあり得よう。

日本語学の分野の研究者の間では、本辞書の和訓と漢字音といった限られた部分に偏り、解読が困難な漢文注は注目されない場合も多かった。しかし、こういった偏った利用は上述の利用障壁を考えれば、ある意味では研究上の効率を高める方策として採られたであろう。しかし、文献

の利用というのはある特定の部分だけでは限界があり、その全体の構成の中での部分という観点が重要である。古辞書に関しては、つまり、辞書本文を構成する様々な類型の注文の組織と体系を視野に入れた上での研究こそ、より正確かつ望ましいものと考えられる。

筆者は古辞書の研究を志す者として、このような古辞書利用の現状に問題意識を覚えた。図書寮本『類聚名義抄』については、今まで成し遂げられた先学の輝かしい業績に支えられ、この一帖の辞書をより容易かつ正確に利用できるようにする手引きを学界に提供する使命を認識している。池田(二〇〇五)『図書寮本類聚名義抄の翻字本文及び注解の作成に関する基礎的研究』における「水部」の翻字と注解は、良いモデルとして参考された。辞書本文を偏りなく全面的に視野に入れ、その利用性改善の手立てを作る。

本研究は、上述したような古辞書研究の使命と問題意識に基づき、その基礎的な作業として、まず図書寮本『類聚名義抄』の主要部首に対する「翻字」を行う(「第一部翻字篇」に相当)。そして、その基礎的な作業の過程で気づいた本辞書の基礎的な構造に関する見識をまとめる(「第二部研究篇」)。

論文構成

まず第一部翻字篇では、図書寮本『類聚名義抄』の主要部首に対する掲出語及び注文の翻字を行った。対象部首の選定で、池田(二〇〇五)がすでに行った水部とミ部は除外した。ある程度まとまった分量を持ち、原本玉篇残巻などの関連辞書との比較検討における便宜を考慮し、言・足・山・石・玉・心・糸部を選んだ。そして、所蔵先である宮内庁書陵部における三日間にわたる原本調査を行い、複製本だけでは判読が難しい箇所を確かめた。その際に調べた新しい書誌事項を翻字の前に添える。これは図書寮本『類聚名義抄』の書誌としては一九五〇年最初の複製に付いた解説以来であり、その修理改装後のものとしては初めてである。

第二部研究篇では、翻字を行う過程で気づいた図書寮本『類聚名義抄』の基本的な特徴についての見識をまとめたものである。

第一章は、序論として、本論の前提知識となる事項をまとめて記した。日本辞書史についての概観、類聚名義抄という辞書の諸系統とその価値について記述し、主要先行研究についてまとめた。

第二章では、編纂材料に着目して、仏典音義類と辞書類を出典とする編纂材料が本辞書の注文と掲出語でどのように利用されているかを検討した。

第三章は、項目配列について、掲出項と被注項という二段階の単位設

定によって検討した。そして、そのような項目配列に見られるグループについて詳細な検討を行った。

第四章では、注文の類型に注目し、その分布上の特徴を検討したうえで、前章で述べた項目群との関連について検討した。

第五章は、図書寮本『類聚名義抄』において意味記述という共通の働きを持つ漢文義注と和訓との関係に注目し、本辞書が有する二重言語的な辞書記述の一端を分析した。

第六章では、和訓について個別出典、毛詩訓点本との関連を突き止めて、その収録意義と属性を考察した。

凡例

一 略称

本論では頻出文献名に対して下記のように略称を用いることとする。

〈文献名〉

図書寮本『類聚名義抄』

観智院本『類聚名義抄』

『妙法蓮華経釈文』（中算撰）

慈恩大師窺基の撰書の総称

『妙法蓮華経音訓』（慈恩大師窺基撰）

〈略称〉

図書寮本名義抄

観智院本名義抄

中算釈文

慈恩撰書

法華音訓

『妙法蓮華経玄賛』（慈恩大師窺基撰）

法華玄賛

『大般若経音訓』（真興撰）

真興音訓

『一切経音義』（玄応撰）

玄応音義

『一切経類音決』（郭彦撰）

類音決

『大般若経字抄』（藤原公任撰）

公任字抄

『篆隸万象名義』（弘法大師空海撰）

万象名義

原本系『玉篇』（顧野王撰）

原本玉篇

『大広益会玉篇』

宋本玉篇

『大宋重修広韻』

広韻

『倭名類聚抄』（源順撰）

倭名抄

『色葉字類抄』

色葉抄

二 古辞書本文の引用

図書寮本名義抄に関しては翻字篇の資料を基に、字体はいわゆる康熙字典体を用い、句読点と区切り点以外の符号類は省略して記した。他の古辞書および文献の翻字引用も基本的にこれに準じて行った。項目の所在は「複製本頁数―行段」の形式で記した。

三 本文と引用文の用字

翻字以外の本文においては新漢字新仮名遣いを基本原則とした。引用

文献の旧漢字旧仮名遣いもこれに従って適宜直したが、個別的に断ることはしない

第 一 部

翻

字

篇

図書寮本名義抄の書誌

本資料の書誌に関しては一九五〇年宮内庁書陵部で発刊した「図書寮本名義抄解説」に詳しく記されている。その後、裏打ちなどの朱売りが行われたと聞くが、新しい書誌の記述は管見に入らない。筆者は宮内庁書陵部図書課図書寮文庫にて二〇一三年十月二十二～二十四日の三日間の原本調査を行い、修理後の姿を確認した。まずは「図書寮本類聚名義抄解説」における書誌を要約し、新しく確認した修理後の状態との相異だけ記すことにする。

《旧書誌》

○形状

一帖（法部前半の残欠）、粘葉装、素表紙、厚手の楮斐混漉の紙、

縦二七・七mm×横一六・七mm

○本文

一面八罫五線（七行四段）白押界、一面二十八劃、一劃に一つの掲出語を太字書、その下に細字二行の注文。部首ごとに改頁書写、墨付両面書写の三四二頁、総丁数一七三葉、全紙数八六枚および表紙の半紙一枚。同紙質の入紙一枚（二〇九～二二二頁）を含む、糊代に虫損甚だしく、一枚・半紙一葉ずつ離脱

《新書誌》

①形状

粘葉装（改装紙縫露出）、香色無地表紙、一帖（法部）、二七・六×一八・八cm、改装表紙の次に元装表紙あり

②外題

左肩後補題簽（香色料紙）墨書「類聚名義抄 清水谷本」、元装表紙無題

③見返し

元装表紙見返しに墨書「此書不可出經藏外若有其志／之人臨砌可令披覽非是／慳悛（慙）之義只爲護持正法也」行書、文頭に印記「圖書寮印」（朱陽方）

③前付

「類聚名義抄篇目頌法」以下二十部首（水／衣）に墨声点（六声・濁双点）・片仮名字音傍記・朱書通し番号（冊一～六十）付随

④本文

押界（裏から押す）七行四段、界高二二・〇cm、界幅二二・八cm（行幅一・八～九cm）、掲出語大字楷書、注文小字双行楷行書漢字漢文片仮名混、朱書乎已止点（喜多院点）・声点（六声／濁双点）・句点（右寄り）・読点（中）・区切り（中）・片仮名傍記、一七三丁

⑤ 本文特記

掲出語―注文順に同筆で書写（墨の濃淡連続）、擦消訂正（改行間違え等）、同筆及び別筆（二種類）による本文補入訂正と字画補正、見消朱墨二両用

翻字凡例

一 字体

○本文の翻字は、いわゆる康熙字典体を基本とする。

○但し、万葉仮名和訓に対しては原文に近い字体で翻字する。

○但し字体記述の上で有意味なものは、ユニコード内の原形に近い字体を入力する。

○略字(字形の一部を省略した字体)はできるだけ原字に戻して入力する。その例は次のとおりである。

丶(也)／メ(反)／ㄣ(音)／ㄣ(云)／ㄣ(不)／ㄣ(從)／ㄣ(於)
谷(俗)／牛(物)／ㄣ(訓)／𠂔(類)／𠂔(經)／ㄣ(羅)／𠂔(論)
彖(緣)／𠂔(疏)／𠂔(翻)／𠂔(喜)／𠂔(乍)／ㄣ(利)／𠂔(禾)／(和)
兹(慈)／𠂔(貌)／川(順)／ㄣ(麤)／𠂔(律)／方(魴)／𠂔(𠂔)
离(離)／𠂔(髮)／𠂔(染)／𠂔(帛)／𠂔(綿)／𠂔(既)／𠂔(遽)／𠂔(隱)
古(故)／𠂔(龍)／𠂔(犬)／𠂔(獄)／𠂔(德)／𠂔(阿)／𠂔(部)／𠂔(毗)／𠂔(比)
沙(娑)／𠂔(迦)／𠂔(惱)／𠂔(滅)／𠂔(畢)／𠂔(疏)

○合字(二字以上のものを一字にした字)の場合は二字に戻して入力した。ただし、数字の場合(卅・卅)はそのまま入力した。その例は次のとおりである。

井(菩薩)／𠂔(菩提)／𠂔(如來)／𠂔(般若)／𠂔(涅槃)／𠂔(養)／𠂔(供養)

二 省略・句読類

○掲出字の省略符号は「―」にし、後ろに原字を「」で示す。

○様々な踊り字の形態は漢字は「々」、仮名は「ゝ」「(二字)」と「(二字以上)」に統一する。

○注文中の中略記号は「〜」にし、略された内容を「」で示すことがある。

○区切り点(中央)は「・」で示す。

○句点(右傍)は「。」で、読点(中央)は「、」で示す。

三 声点・ヲコト点・仮名類

○本文中に示されている付随情報(声点・ヲコト点・添え仮名)は()で解釈を示す。

○声点に関しては「L(平声 Law)／H(上声 High)／R(去声 Rising)／S(入声 Stop)／F(平声軽 Falling)／T(入声軽 Stop)」に

濁音の場合は「○」の形式で。和訓の場合は当該和訓の最後にまとめて示し、途中の無声点の字は「○」にする。

○鼻音化の符号は「N(Nasalization)」で示す。

○ヲコト点は平仮名、仮名の傍訓・字音注記は片仮名で。万葉仮名和訓には「」に括って片仮名で示す。

○返点は「レ」(U+3192)、待点は「レ」(U+3193)でそれぞれ示す。

○一字に複数の符号が使われる場合、「レ」で区切るか、別の括弧を使う。

四 本文・校訂・参考注記など

○本文の注文は【】で括って示すが、注文中の更なる割注および小書きは≪≫(全角)で示す。

○掲出語の下のもとまったに注文より先に、掲出字の間に挿入されている注文(●●)は、もとまった注文(○○)より前に【】で括り、「在某字之下」と注記する。
(例) 【●●「在某字之下」】 【○○】

○片仮名和訓の出典の小書きは特記しない。

○虫損による判読不可箇所は「□」で示し、それ意外の判読不可箇所は「■」にする。

○本文(▲)の傍らに施された参考注記(△)は「▲(△)」の形で記す。

○明白な誤写、あるいは他文献による校勘によって訂正した箇所に対しては、正しい本文(★)に直し、原文の字面(☆)を「」に括って記す。
(例) ★「原作☆」

○本文中の補入および入替・抹消の指示は、反映して翻字し、補入・入替箇所は「レ」、抹消箇所は『』で括って示す。但し項目単位での補入および入替などの場合はこれを用いず、項目の所在の後ろに(補)

や(消)などを付けて示す。

○本文の理解に便するために翻字者が任意補入した情報(省略符と略字の原字など)は「レ」を用いて示す。

翻字本文

一 言部

七〇頁

言<070-11>【弘云魚韃^(L)反我也問也從也情也問也・應云直^{「原作惠」}言曰^{「原作月」}言々己事也。答述爲語一爲人說也。一^{「言」}亦云也發端也^{「原作文」}・中云語也・眞云說也。・大覺云一^{「言」}是在飛龍前一行是在跋鼈後^{「に」}・季云和札^{「ワレ」^(LH)}・珠曰伊布去々呂波^{「イフコ、ロハ」^(LHLLH)}去々^{「ロ、ニ」^(L)}ル^(HH)コト^(LH)記モノイフ^(LHLH)マウス^(LH)選コトハ^(LLL)トク^(LH)切】

言<070-31>【魴云魚匱^(H)反。言脣急口弱。・類云去匱反。】

言<070-33>【魴云去匱^(H)反言急貌。・類云魚匱反脣上急。】

言<070-41>【魴云而涉反・類云修葉反。】

言<070-43>【魴云叱涉反・類云醜周反不中。】

方言<070-51>【湛然曰唐梵二方言音不同。云々】

所言<070-53>【信云一^{「言」}即讒也故尼有言人戒僧言人得吉尼得墮】

讀誦<070-61>【上音獨^(S)・弘云抽也出也書也說也・眞云目對文一而口唱

也。ヨム^(LH)論下音「頌^(R)」・弘云詩也歌樂也公也言也。應云倍^{「オヒたる」を}文一曰一^{「諷」}以聲一節之曰一^{「誦」}。倍^{「ハ」}佩。・慈云讀者披文一誦者暗說。】

諷誦<070-73>【慈曰方鳳^(R)反一^{「諷」}謂詠讀也誦背文也又鄭玄云倍文一曰一^{「誦」}。以聲一節之曰一^{「誦」}。上弘云教也誦也。・眞云不由長行一忽爾孤起之頌。】

七一頁

誦詔<071-14>【應云誦^{「原作謂」}習、經一^{「謂」}。丑俠反言不止也。非。】

諷諫<071-22>【上、風、上^{「ト」}同。見詩。下音澗^{「カン」^(R)}・弘云正也更也・眞云淨也又直言以悟入也公云音謨^(L)イサム^(LH)珠云伊佐牟^{「イサム」^(LH)}眞云一^{「諫」^(R)}諫《且録》】

三諫<071-32>【或反古云三遍伊佐牟^{「ハ、イサム」^(OOLH)}】

諫一^{「諫」}<071-34>【干云上通。】

論議<071-41>【弘云力昆^(F)反思也倫也理也擇考議也讀也・中云上聲議也。以事一相難也談競理也・眞云郎^{「原作郎」}寸反一^{「論」}議也。又平聲。・玉云又力遵反・韻銓云平^{「ハ」}說、去^{「ハ」}議。オモフ^(LH)アケツラフ^(HHOO)遊」・下魚斯反一^{「議」}量也。又去聲謀也謂決擇解說諸法性相也・下「弘云魚^(L)寄^(R)反謀也擇也圖也語也。・中云宜音量也又《去》謀也・東云又音義^(R)論也評也語也宜也反言也詳說也・玉

云廣詳之也——^{【議】}猶擇也圖也。ハカル^(LH)律[】]

論說<071-62>【中云。如上注。】

言論<071-63>【中云力屯反言有理^{【言論】}也。又盧魂反說也。——猶言說也。】

論曰<071-72>【鸞云——^{【論】}者議也。言議偈所以也。曰者詞也。】

耶——^{【論】}<071-74>【真云盧昆反說也義也語也又郎寸反談競理也講法也。今案平去通用。】

七二頁

記別<072-13>【真云居吏反決也別也。下兵列⁽¹⁾反亦以別、訓。即是弟子當來成佛等事。】

開論<072-22>【瑜伽略纂云顯說話名——^{【開論】}】

合——^{【論】}<072-24>【又云隱密約喻說話合之令解名合說】

々^{【論】}(R)⁽¹⁾。<072-32>【湛然云平聲】

戲論<072-33>【慈云——^{【戲論】}者分別之異名】

記——^{【論】}外道<072-41>【應云卽毗伽羅——^{【論】}是】

聲因論<072-43>【真云聲明——^{【論】}、因明——^{【論】}。五明中一也。】

議中<072-51>【應云謂伯仲兄弟也。伯^は長、仲^は中也。】

不思議<072-53>【真云息慈反念也宜奇反評也謀也・唯識^{【原作議】}云超過尋思言議道故・又云妙用難測名——^{【不思議】}。ハカラク】

分別論者<072-63>【慈云本即大乘唯說新熏・心濶師等名——^{【分別】}・了義登云或大乘異師或小乘諸部皆名分別不定一部。】

唯識<072-74>【慈云唯謂簡別、遮^{【無ニ外境識】}也』無^{【無ニ外境識】}外境識謂能了、詮有^{【有ニ内心】}内心。章有十門。釋名^{【如第二門】}。】

七三頁

々^{【識】}蘊<073-13>【真云記也了也。】

知——^{【識】}<073-14>【宋云音式⁽¹⁾・弘云知也・然日聞「名爲知・見形」爲^{【識】}。是人益」我菩提之道「名善知識^{【識】}・唯識云了別名——^{【識】}・慈云識者驗也・法花云善知識者是大因緣 真云サトル^(HHL) シル^(HL) 記モノシル^(LHL)】

信受<073-31>【音迅^(ハハ)・弘云誠也明也驗也用也敬也宿也重也處也・慈云——^{【信】}者證入、受者領納・又云「玄贊等云」於此——^{【信】}中略爲十釋云々《理趣疏又可見》・華嚴云——^{【信】}能增長智功德——^{【信】}能必到如來地云々・玉云極也再宿⁽¹⁾曰——^{【信】}遣使^{【信】}相聞曰——^{【信】}マコト^(HHH) 易ノフ^(LH)後《申也》 オモヒテ^(LHL)遊 カタミ^(HHH) 勝曼云——^{【信】}ツカヒ^(HHH)】

一【信】度河<073-52>【應云舊云辛頭。此云驗河。從池（無熱敷）南面銀牛口，流出還入南海。】

討伐<073-61>【慈云恥老（旦）反除也誅也・應云古訓・弘云治（原作治）也去也雜也 東云浚尋也伐也理也科也覓也訪也治也從言從寸。々法度也難也一【討】猶去也】

訶<073-72>【弘云呼多反責也怒也。呵《同》 眞云力（R）】

沙一【詞】<073-74>【應云又作娑一【詞】樓陀或娑婆一訛。正云索一【詞】。此云能忍。或堪忍。一言雜會世界。】

七四頁

一【詞】獸<074-13>【應云一【詞】大言而怒也・憲云亦作呵責也怒發聲・眞云言責也。】

一【詞】梨恒鷄<074-22>【應云舊云呵梨勒。翻爲天主持來。此果堪爲藥以功（原作切）用極多如此土人參石斛等。】

一【詞】羅<074-32>【應云古河反。】

不計<074-33>【音係（ケイ）（R）・弘云會也算也謀也・應云一【計】樂也。經係非也。ハカル（LH）「月」カソフ（LH）律】

訐<074-42>【弘云況俱（ク）（F）反大也差也美言也僞也。マコト（LHH）才ホイナリ（LLOOO）】

訐<074-44>【弘云柯戴反揚惡也。】

一【計】アハク（LH）群臣之德失を。<074-51>【顔氏】

譌<074-53>【類云哥音】

言詞<074-54>【音辭（シ）（L）・應云意内而言外也。審言語也・中云言辭也。或作辭。不受也訟也。辭辭辭辭四形聲類以爲皆一【詞】字。新切韻一【詞】辭異・眞云言語也告也。直（原作真）言曰言「々己事」也。答述曰一【詞】爲人說也。論語作辭・東云請也安定一【詞】也。□「ト」□「ク」選 眞云（LN）「俱舍云詞謂訓釋言詞」】

祝詞<074-65>【ノトリト（H HH）ハラヘトリ（L L L L）】

許<074-74>【弘云虛語反進也聽也從也然也諾也所也與□「也」・中云聽也一【許】可也・了義燈云以悔一【許】字少相近故寫者有悞。スム（H HL）】

七五頁

爲一【許】<075-14>【眞云聽也 珠云由流須（LH）】

爾一【許】<075-21>【眞云一【許】猶所。】

於某甲一【許】<075-22>【同】

幾一【許】<075-23>【同・又云擬也。イクハクハカリ（L HH HH HL）集 ソコハク（LHL）】

芥子―^{【評】}<075-31>【中云擬也然也。】

作―^{【評】}<075-33>【ソロハク^(LHL)遊】

那―^{【評】}<075-34>【同】

如―^{【評】}<075-41>【同】

何―^{【評】}<075-42>【^{（HH）}集】

訢<075-43>【弘云許殷反樂也喜也亦欣字。】

―^{【訢】}婆<075-51>【應云虛斤反。】

訢<075-52>【音素^(R)愬《說文同上》ウタフ^(SH)詩】

訓訢<075-53>【應云下又欣。虛殷反―^{【訢】}樂也。】

訢<075-61>【弘云匹付反赴也至也。 眞云フ^(L)】

教誡<075-63>【暉云教者教授令人條善―^{【誡】}者―^{【誡】}勗令人斷惡。】

訴彌<075-71>【信云蘇故反】

諮詢<075-72>【音詢^(F)・弘云問親戚^(F)之儀訪也。・應云問也左傳訪問於

善^(F)爲諮。々親爲―^{【詢】}。々問親戚^(F)之儀^{【原作議】}也。―^{【詢】}問善道^(F)也。・季

云波賀留^{【ハカル】^(LH)} トフラフ^{【HHH】}】

七六頁

―^{【諮】}問<076-12>【音咨^(F)・弘云謀也咨字問善道也・眞云請問也・東云詢訪也啓也問尊者^(F)曰―^{【諮】}謀^(F)也。】

―^{【詢】}陀<076-21>【應云私旬反】

設<076-22>【弘云尸熱反置也施也合也・眞云陳也計也列也飼也。マウ

ク^(LH)記】

―^{【設】}使<076-24>【タトヒ^(LH)律】

―^{【設】}如<076-31>【同^{【タトヒ】}集】

―^{【設】}得<076-32>【中云―^{【設】}許也―^{【設】}會也 眞云權之所言曰―^{【設】}】

敷―^{【設】}<076-34>【眞云施―^{【設】}也】

―^{【設】}固<076-41>【眞云―^{【設】}假―^{【設】}也】

―^{【設】}利羅<076-42>【眞云舊云舍利。唐云身骨。】

酬^(X)答<076-44>【音授^(R)・弘云詛也呪也講字・應云亦酬字也―^{【酬】}報

也・眞云以言答也。作酬^(F)非・東云答也又平以言^(F)相恐也贈也。】

詡<076-54>【吁甫反東云―^{【詡】}々猶普也大也人語也偏也―^{【詡】}猶普也和也】

訓詁<076-62>【應云吁運反―^{【訓】}導也教也誡也・中云誨也・眞云言―^{【訓】}

也試也・東云赦也注解也以善言―^{【訓】}男女也。又男曰教^(F)女曰―^{【訓】}】

也。議也從也。ヲシフ^(H L)詩・下音故^(R)・弘云釋^{「詁」}也・應云又音古訓古言也訓導也釋也・東云古今異辭訓古言又姑戸反俗音古非訓也故古也。】

七七頁

訓^{「訓」}一<077-12>【干云上通・弘云翊運反誠也導也教也從也。ヲシフ詩】

一^{「訓」}狐<077-14>【應云關西呼爲^{「訓」}侯山東謂之^{「訓」}。經作薰^{「原作薰」}胡^{「非」}。】

設支<077-22>【應云舊云舍脂。此云能縛。謂女人若可愛能生男子深^{「案」}着^{「通名」}——^{「設支」}。】

誠勗<077-31>【音界^(R)・應云警勗曰^{「誠」}自^{「原作自」}勵曰勗。又一^{「誠」}告^{「原作吉」}慎也勗勉強也・憲云告也命也・眞云言警也・東云相警以言^{「也」}。警告也命也敕也左傳作戒。イマシメ^(L L L L)詩 眞云カイ】

誠^{「誠」}一<077-42>【東云通・弘云警也告也命也。】

一^{「誠」}々々々々<077-42(補)>【イメ^{「顔」}】

試問<077-43>【音弒^(R)・弘云用也・眞云考能也。・東云嘗視也考功也
一^{「試」}猶嘗^{「試」}。 ロノロミル^(L L L L L)易 モチキル^(L H H)詩 眞云
シ^(一)】

嘗^{「試」}一<077-53>【ロノロミル^(L L L L L)選】

詁<077-54>【弘云託兼^(E)反轉語也・東云又佇陷反被誑也誤也設也又叱涉^(T)反^{「詁」}。謹細語也咄囁《作輒》附耳語也。又他協^(S)反竹咸占陷反。】

詰難<077-64>【弘云去質^(T)反治也謹也責也無也・應云責問也^{「詁」}問也。・魴云又維摩^{「詁」}・眞云^{「詁」}問其罪也窮問也。・公云音吉ナシル イサム^(L L H)月】

調話<077-74>【弘云胡快反謂也調也・應云會合善言也謂調戲也訛言也。モノカタリ^(L L L H L)選】

七八頁

々^{「話」}言<078-13>【上ヨシ^(L F)詩 善言也】

聖詔<078-14>【弘云古到^(R)反告也謹也語也・應云所以幼謹戒衆^{「也」}。ツク^(H L)書 アラハス^(L L H)集】

典詔<078-23>【應云同上】

諦觀<078-24>【慈^{「ハ」}——^{「諦觀」}者審緣也。】

誠諦<078-31>【音成慈云信也敬也・弘云審也・應云^{「誠」}實也。・眞云志也。・下類云帝音】

課<078-34>【音科^(L)・弘云訂也誠也第也・東云差也役也。又《去》試也斂也功^{「原作切」}也勸也稅取也第也責功^{「原作切」}也・玉云^{「課」}猶訂《平

議也》也。オホス^(LH)集】

訛言<078-44>【弘云五戈反化也偽也動也覺也・應云古譌、吡。詭言也謂詐偽也。・東云謬也稜言也人之「訛」言也語不定也。ウコク^(LH)詩 イツハリ^(LH)月・眞云タカフ^(LH)】

詭詐<078-61>【弘云俱毀反責也欺也奇也公云音貴^(L)異詐言也 アヤシ^(LH)選 イツワル^(LH)集・下憲云測駕反偽也・慈云「詭詐」者虛偽之稱。下アサムク^(H, H)記 イツハリ^(LH)後 眞云作^(R)】

註記<078-73>【音住^(チウR)・慈云疏也議也解也記物曰「切韻作注」・中云丁住反「猶記」也又之戌反非此旨「註」注同・下弘云居意反疏也。録□^(也)慈云「別解釋之義・眞云識持也。シルス^(HL)月】

七九頁

説<079-14>【弘云始悅^(T)反言也解也讀也告也・慈云「説」者示也。珠云止久^(トクL)ツク^(LH)詩《音悅服也》ヤトル^(LH)舍也 又音選音決云ヨロコフ^(LH)悦《兩都賦》・又音与税同 恤云誘。・中云「説」猶言。】

授記<079-31>【慈云授者與也「記」者別也 淄^(原作繼)州云授者付也與也記者分別也爲其分別驗其當果而以與之・中云慈云決也】

該羅<079-41>【音垓^(カイF)・弘云備也咸也皆也譖也包也・玉云浮也・東

云博學也軍中約也巾也兼也博也。ソナハル^(LLOO)選カヌ^(LH)集】

「該」那<079-51>【應云古來反】

錯「該」<079-52>【季云マシハリソナハレリ^(L, HLLHLH)】

馱該^(原作説)<079-54>【應云古來反三昧名。】

訖<079-61>【弘云謚字。】

謚<079-62>【弘云時林^(L)反信也誠也諦也。マコト^(HH)詩】

訖林<079-64>【應云又作牲辨莖三形同使陳反。「訖」々衆多也。・弘云致言也馳也。】

婢謚<079-73>【應云市針反。】

訖陀<079-74>【應云所巾反經或作訖駄。】

八〇頁

訖駄<080-11>【見上注・又云所奸反。依字「訖」謗也。又作散《桑讚》或蹴。無所出。】

「訖」若<080-13>【信云所姦反云々】

詭誑<080-14>【「魴云居委反詐妄言也。」・應云誑也不實也隨惡也。タカフ^(L, H)列 イツハル^(LH)顔 アヤシ^(LH)選】

一【詭】制<080-23>【アヤシキツクリ(L L L F L L L)】選】

一【詭】𠵿<080-24>【應云又作𠵿。謂變「詐也謂變」異也詐妄也變詐不實也。一【詭】欺也。一【詭】變詐「原作誑」也。一【詭】謫詐也。一【詭】惡也。】

黑說大說<080-33>【應云若佛及弟子所說惡法名黑說。所說善法名大說。

又四果人及獨苦「玄応音義作「獨覺菩薩等」所說名黑。佛說名大。涪州「原作緇抄」云】

訕大<080-43>【應云所紆反。論亦刪陀迦梅延「原作稱述」】

謀議<080-51>【音牟(L)・弘云問患也榮也謨也。・應云莫侯反「謀」論也議圖也。諮事爲「謀」一詳論曰議「原作論」也。・東云心也計慮也諮難也案諮問患難也謨也圖也詢也訪也「謀」謂議也。又莫浮反。ハカル論】

譚<080-63>【弘云徒(L)耽(F)反着也詭也誕也。・東云國也。又《上》。・季云之豆加爾須「ツカニス」(L H L H F)】

譚婆<080-71>【應云徒南反今借爲徒紺反西國食狗犬「肉」人也】

一【譚】𠵿<080-73>【應云《音同》下□「薄」□「米」反】

一【譚】耆<080-74>【應云投南反】

八一頁

具「譚」一<081-11>【應云徒南反。此因仙人名「爲姓」

俱「譚」一<081-13>【應云□「或」作。具經多云瞿曇。皆梵二是輕重也。】

俱「譚」一滑提<081-21>【應云徒南(L)反諸佛名也經作讀。】

俱讀<081-23>【見上注】

諾<081-24>【弘云那各(L)反徒也辨也總也旃也。・東云相然許詞也應辭也唯也而也■也。・玉云從也應「諾」從客辭也。眞云若音】

摩訶諾伽那力<081-34>【應云謂露身大力神名。】

一【諾】瞿陀<081-42>【眞云奴各「在諾之下」】【具俱「在瞿之下」】【應云舊云尼俱陀樹・或尼俱律、尼俱類陀、居屢陀、尼拘盧陀。舊云無節一云從廣樹。・眞云內典云其種小於芥子。生長之時覆五百車。】

一【諾】拘羅<081-54>【沼法師云此云鼠狼。神名。】

自說<081-62>【眞云「謂無」問者自說意說】

謹譁<081-64>【弘云呼丸反讓也鳴也呼召也應云又謹虛元反「謹」譁聲也鳴也驚聲也謹譁也謹聲驚呼也カマミスシ(L L L L F)列】

調譁<081-74>【應云調話。經「譚」音花誼「譚」也非。】

八二頁

誼譁<082-12>【弘云虛園(L)反譁也忘也驚呼也。・應云又謹古喧、誼。鳴也吏聲也。下桑到反擾耳孔也群呼煩擾也。上東云多言也與喧一同・玉

云譚也亦謹字。】

讀^{【讀】}〈082-23〉【ノフ^(LH)】記】

誼譚〈082-24〉【應云言語詢《徒刀》々也。下音花^(L)——^{【讀譚】}聲也「往來也」謂言語亂譚《女交》々也謹——^{【譚】}也・上公云音官^(R)正喧カマヒスシ^(LLL, LH)・宋云亦作喧・下弘云化也然也 カマミスシ^(LLH)切】

燕會〈082-34〉【應云又作宴、燕。同於薦反——^{【譚】}飲也樂也小會也。不脱屨、升堂——曰——^{【譚】}。益云設也】

諧耦〈082-43〉【音骸^(L)・應云和也耦合也對也。經作皆調——非・東云誹——^{【譚】}善戲言也調也耦也同也順也・弘云合也和也調也。ヤハラク^(HOO)書 ト、ノフ^(LLOO) カナフ^(LLH)集】

皆調〈082-54〉【見上注。音偶 魴云言所合】

諧令〈082-62〉【應云讒令經——^{【譚】}非】

伊諧〈082-63〉【應云下皆反】

諧雅〈082-64〉【應云謂閑雅雍容音聲和也】

談譚〈082-72〉【應云許虐^(T)反戲——^{【譚】}也謂相調戲也亦喜樂也・眞云戲言□^{【也】}・東云戲也讒慝也——^{【譚】}浪戲談也——^{【譚】}々然喜樂也・公云音逆^(S)正虐^(T)・□^{【弘】}云戲也樂也讚惡也。タハフレ^(HH, H)詩 眞云客^(S)

音】

八三頁

談語^{【話】}〈083-14〉【應云胡快反合會善言也。話正作。】

調——^{【譚】}〈083-22(消)〉【タハフレ^(HH, H)遊】

診^{【脈】}〈083-23〉【弘云除刃反視也驗也・應云視也候也驗也。・東云候脈^{【原作】}也從分也疾之或來也又之忍反視也驗也・又音軫・魴云候人之血脉也】

診病〈083-34〉【應云脈候也 類云說文音陳】

誌^{【也】}〈083-42〉【類云志^(R)音・東云識也認記也意也銘——^{【誌】}也・恤云記也。シル^(HL)顔】

譌^{【也】}〈083-44〉【弘云葛^(T)羅^(L)反歌也・玉云曲合樂——曰——^{【譚】}。或作歌。廣韻云長言也。 眞云力^(R)】

診脈〈083-53〉【然曰——^{【診】}者候脈】

調〈083-54〉【音條^(L)・弘云合和選也期也賣也求也・又云志良部^{【シラヘ】}(L)——中云均也正也。・魴云習也理也。ト、ノフ^(LLH)月又音誅 アシタ^(LLL)詩 シラヘ^(OOO)白・公云——^{【調】}者弄也 ナヤマス^(LLHL)遊 クヒル^(HH, L)】

輕一^{【調】}<083-64>【眞云徒弔反欺弄也。平聲他用。】

一^{【調】}謔<083-72>【應云徒弔反一^{【調】}欺也一^{【調】}賣也嘲一^{【調】}也相嘲一^{【調】}也嘲弄也一^{【調】}弄戲謔也。「タハフレ^(H H H, H)遊」】

八四頁

一^{【調】}擬<084-11>【應云徒弔五戒反一^{【調】}調也謂相周也。大一^{【調】}曰一^{【調】}也一^{【調】}欺也謂相嘲一^{【調】}也欺一^{【調】}也。】

一^{【調】}謔<084-14>【應云相承魚世^(R)反此應作^ニ擬。】

調達<084-22>【中云提婆達多略云一^{【調達】}】

一^{【調】}伏<084-24>【慈云一^{【調】}和、控御身語等業、制伏、滅除諸或業、故。又一^{【調】}和善生制伏惡滅】

訟詞<084-33>【應云羸痛徒痛反。言過謂之一^{【訟詞】}「也」一^{【訟詞】}「急急也。】

々^{【調】}疾<084-41>【應云徒貢反訟《羸貢》一^{【調】}急也言過謂之訟一^{【調】}。】

講張<084-43>【應云竹尤反一^{【講張】}誑也謂欺或^{【惑】}者也。】

洲<084-51>【音讎^(『R』)以言、答之。又去】

鬱洲<084-52>【應云又講陟尤反比丘名二蒼亦酬字。】

佉洲<084-54>【應云古講。同是由竹鳩^{【原作鳩】}反叢林名。】

譙謔<084-62>【應曰又呶同才妙才焦反一^{【譙】}訶也又譙也。・下女交反一^{【譙】}々謹呼也一^{【譙】}々悲訟聲也。】

誰<084-71>【弘云是惟^(レ)反何也讓也。・中云不知其名之稱 タレカ記

書云^{【音】}タレカ^(H H H)注云一^{【誰】}。誰《音同又音遺》】

何一^{【誰】}<084-74>【タレニカ白】

八五頁

一^{【誰】}經<085-11>【中云一^{【誰】}何也。】

警心<085-12>【弘云居^(E)形^(H)反戒也起也衆也・應云誠慎也勅解^{【原作悉】}也不安也。律景、大也光明也、非・東云察也機宿也一^{【警】}々不安也。】

譙譙<085-22>【應云譙宜作^ニ話。】

一^{【譙】}話<085-23>【應曰竹交反。下又緇^ニ形。同胡快反訛言。】

諄那<085-31>【應云古訕之閏反。此云碎末。人名也。經訕、非。】

諄調<085-33>【弘云之純反然也佐也罪也增苦也。・應云諄調經一^{【諄】}又之閏反苦曉也罪也非。】

警宿<085-42>【選音決云音景^{〔H〕}・應云謂一^{〔警〕}戒也亦起也一^{〔警〕}々不安也
律景非。イマシム^{〔LHL〕}詩 オトロカス^{〔LLLo〕}】

譏一^{〔警〕}<085-51>【ンくロト^{〔LLLL〕}遊】

諄々<085-52>【應云之聞之純反告曉之熟也一^{〔諄〕}々誠懇之貌。・音准^{〔H〕}
之平聲・韻銓云至心教。】

諦婆<085-61>【應云經有作諦。】

端婆<085-63>【應云依字一充絹主緣反相讓也。】

諦<085-71>【類云帝音・弘云都計反審也・中云實也・慈云一^{〔諦〕}是實義。】

諛然<085-73>【應云蘇了反一^{〔諛〕}亦了也。】

八六頁

詭<086-11>【弘云達鳥^{〔H〕}反諛也諛也挑也。・玉云相呼誘也。】

訛^{〔詭〕}<086-13>【類云今】

認^{〔R〕}過<086-14>【音仍・應云失物一而誌《記也》也。經作仞。《八尺曰
一^{〔仞〕}》律仞、仞、非・東云諸物案失物而諸之曰一^{〔認〕}。議己物在他
人^{〔一〕}識而索也。・珠云去聲倭言止牟^{〔トム〕}^{〔LH〕}止米之利弓^{〔トメシリテ〕}^{〔L〕}
^{〔HHLH〕}ナヤメリ^{〔LHL〕}記《難也》】

所仞<086-31>【應云所認律一^{〔仞〕}非。音刃・弘云難也讀也解也・玉云不
忍言也。カタムス^{〔HHLF〕}論】

仞<086-34>【東云認又作一^{〔仞〕}・弘云如陵反厚也因也就也重也仍字】

謹責<086-42>【留志云遣^{〔R〕}音・弘云問也訶也責也怒也宛轉也讓也・應
云文有作詰《責問也責也一^{〔詰〕}問也》・眞云責問也・東云以言辭一責
人^{〔一〕}也。問罪一責也。謫^{〔T〕}《陟革》問也誤也。又《上》眞云問^{〔L〕}
^{〔R〕}】

一^{〔謫〕}罰<086-53>【眞云問也責也怨也讎也。】

謫罰<086-61>【弘云知革反責也過也數也怒也・應云罪小曰罰。々折伏
也。罰罪一曰一^{〔謫〕}也。一^{〔謫〕}罪過也過責也。律「倘非。・東云涉革
反徒麦反丈厄也」相責讓也罰罪一^{〔謫〕}責也數咎也怒罪也。「セム^{〔L〕}
^{〔H〕}詩」】

過謫<086-72>【應云知革徒厄反罰罪一^{〔H〕}謫。々責也。亦罪過也。一^{〔謫〕}
罰也怒也謂相責怒也。一^{〔謫〕}謹也責也呵也。セメ^{〔L〕}集】

八七頁

審訥<087-11>【「文集或音義云音蹇弘云難也吃也。・應云言不通利、
謂一^{〔審〕}吃。・下」應云古訥同奴骨反遲鈍也難也《弘同》・東云言
語艱難也鈍也難言也審言也・應「又」云難蹇也。】

謬吃<087-22>【應云又作刼。同吃也楚人語也居展反言不通利謂之——

【謬吃】。文寒、騫。非。又騫。《跛——騫也》非。】

——【謬】オシ(HH)於言<087-31>【論語】

誣謂<087-32>【上弘云武虞反欺也忘也罔也諱也・眞云狂也・應云加言——

曰——【誣】。以是——爲非——曰——【謬】。也。以惡——取善——曰——【誣】。也。妄也・下

眞云古罔文兩反欺覆也——【謬】誣也狂也欺也・公云音武(L)網(L)欺也。

上シフ(LH)書】

誣構<087-44>【イツハリカマフ律集解】

謬<087-51>【弘云於題(L)反助也然也。眞云衣伊(LH)】

——【謬】羅葉<087-53>【沼法師云醫羅葉則舊云伊蘭樹】

謬<087-61>【弘云之類反謬多言也・東云拾——【謬】多言也謬也又之十(S)都

叶(S)反。】

詔<087-63>【應云名於經——【詔】近字也。相——【詔】目也武并反・魴云名正反

一目也・廣云名聘切——【詔】謔也。】

謬效<087-72>【慈云口冷反效也聲也有作聲《口定反樂器也》非也。・東

云坑杏反何效也又去挺反昆弟親戚之——【謬】咳也・信云利喉曰——【謬】。】

八八頁

謫林<088-12>【應云掬林、經又——【謫林】。同居六反。】

教詔<088-14>【音照(R)・慈云明也告也導也教導之也——【詔】照也人聞して不

にありば見事理——即有所犯。以此二示之——照然として知べし其所由——。有本

作教招。教無平音。招は誘進也・應云教誨也效也——【詔】雅教語也——【詔】

道也・弘云教也助也道也書也・覺苑云——【詔】謂——【詔】命・魴云天子徵

名書曰手——【詔】。ツク(HL)書】

々【詔】旨<088-34>【ロトラント(LHLH)宣命】

諂曲<088-41>【慈云丑冉反佞也諂——【諂】同悌其意道其言——曰——【諂】諛——也。

傾身——似有下——也・應云亦佞也。・眞云——【諂】偽。也【マ】曲媚也。】

調轉<088-51>【弘云丑冉反佞也。へツラフ(LHL)易應云是鹽蒲迷反國

名。】

——【調】語<088-53>【應云又音鹽。此俗間語耳。】

諂諂<088-61>【干云上土高(F)反諸字同聲者竝從昏。下丑冉(H)反諸字同

聲者從留・弘云調字疑也悅也・上季云宇多加不【ウタカフ(HHH)】

諂誇(L)<088-71>【干云上通 ホコル(HHL)白】

波利拈縛謫<088-73>【慈云女咸(L)反。【云】円寂。】

八九頁

囉―【誦】〈089-11〉【應□】云奴感反。】

自誇〈089-12〉【應云苦瓜^(L)反自矜曰―】^{【誇】}。華而無實、曰―^{【誇】}々相誕也。

ホコル^(HH)唱 アサムク^(HH,HL)】

誹謗^{【謗】}〈089-21〉【音與沸^(L)同・宋云又音非・眞非匪沸三音・慈云―

亦謗也・弘云謗毀他非也・下弘云謗補浪反毀人^{【謗】}也。・慈云毀也
詛也惡也對人、道其惡、曰―^{【謗】}。『訓皆曰―』訓皆ソシル^(HH)詩^{【詩】}

―^{【誹】}毀〈089-33〉【慈云―者謗黷之異名】

問訊^{【訊】}（「訊」）〈089-41〉【慈云息晉反問也辭也言也執問通問曰―^{【訊】}。】

訊〈089-43〉【中云又作訊 眞云審問^{【原作問】}也 然云廣辭也廣以己事宜其

問辭如法花中云々 眞云信^(L)音】

訕訊〈089-52〉【干云上俗類云信^(R)音 「トフ^(HL)後」】

祝詛〈089-53〉【慈云側據反古文禴祝屬也以善惡之辭、相屬着也。―^{【詛】}阻

也謂「使」人行事阻限於言。有本作咀《才與反嚼也》非・中云咀有
兩音。一側據反與―^{【詛】}同。果意也。二才與反嚼也。爲有此濫慈
不取^{【詛】}而已・恹云呪―^{【詛】}以言相厭也・弘云祝之使敗^{【詛】}也。】

安詳〈089-73〉【宋云本音祥^(L)・慈云安者徐也、―^{【詳】}者審也。或以章反

―^{【詳】}狂也。今從初・中云探玄記云―^{【安詳】}は審諦之狀。捷作庠。養

也。庠之言詳也亦通・弘云審也論也議也諛也詐也。・又音與羊同

アキラカ^(LHL)詩 イツハル^(LHL)記 ツハヒラカニ^(L,HL,LO)選
眞云シヤウ^(OOLN)】

九〇頁

譬喻〈090-22〉【慈云匹義反喻也比類以相曉・又云―^{【譬】}者況也類也喻者

開也曉也陳也―^{【譬】}讚詠也又―^{【譬】}即喻也】

々々^{【譬喻】}〈090-31〉【中云慈云以―^{【譬喻】}而說諸法^{【十二分教】}也。

語〈090-33〉【弘云魚舉反說也言也喜也・中云又牛據反去聲。イフ^(HL)易

カタラク^(HHH)記 「コト^(L)選 サヘツリ^(HH,H)遊^{【遊】}】

談〈090-41〉【音痰^(L)・弘云語也戲調也・眞云話也又言論也。カタル^(H)

HO遊 カタラフ^(HHO)切】

謂〈090-43〉【音胃^(HR)・弘云言也道也勤也使也指也報也說也告也。ツト

メ^(LHL)詩 カタル^(HL)イフ^(HL)記 ノタ^(ウ)ハク^(HL,L,H)論才

モフ^(LHL)律】

諒詆〈090-52〉【類云亮音・弘云信也知也助也佑也・眞云謀誠―^{【諒】}信

也・公云音量^(L) マコト^(HHH)易 ・下應云又咤、古詆。都禮反。
―^{【詆】}欺也亦呵也。 眞云良^(LR)】

蚩誚〈090-62〉【弘云譙似醮反讓也誚也呵也燒也殺也―^{【誚】}誰字。・應云

才笑反燒弄譏責也呵也・眞云―^{【誚】}輕笑責也・公云音少^(L)輕責也同

譙。ソ□^{〔シ〕}ル^(HH)白^(L)】

戲語<090-73>【タハフレコト^(HH, HH, H, H)遊^(H)】

大―^{〔譚〕}<090-74>【コワタカ^(L, L, H, H)同^(H)】

九一頁

無謂<091-11>【イハレナシ^(H, □, □, □, □)後^(H)】

所―^{〔謂〕}<091-12>【イハユル^(H, H, H, H)記^(H)】

三請<091-13>【音與清^(F)同・弘云問也乞也求也告也禱也招呼也・中云七靜^(H)反求―^{〔譚〕}也又疾政^(R)反延屈也又疾盈^(L)反受也今從初二・眞云在性^(R)反迎屈也延也。又清井^(H)反求也乞也問也。又《音清》同《受也》。】

無―^{〔譚〕}<091-31>【應云且領^(H)反求問也。經情、非。】

諸<091-32>【弘云至餘反非一也於也之也衆也・應云―^{〔譚〕}詞之總也。】

詩<091-34>【弘云舒之^(F)反極也・玉云毛詩序―^{〔詩〕}者志之所之^(ユク)一也。

周禮六義一曰比二曰興三曰賦四曰風五曰雅六曰頌。ウタ^(H, L)切^(H)】

謀謨<091-44>【ハカリハカル^(L, L, L, L, H)選^(H)】

南謨<091-51>【「季云音模^(L)」・弘云『模』謀也僞也議也・眞云亦云南無亦納慕此云歸命亦敬禮。若云南莫其義頗異。和云暮^(H)」ハ

カル^(L, H)詩 謀也^(H)】

持譽<091-54>【弘云羊庶^(R)反美也繩也眞云名―^{〔譽〕}也・又云下稱美也。梵云邪輸多羅。持或作特。謬言也。】

暮羅<091-63>【應云莫孤反。】

謂^{〔譚〕}<091-64>【弘曰相旅^(H)反長也。】

謂<091-71>【有才智之稱】

諗<091-72>【弘云戸甚^(H)反念也告也深謀也。ツク^(H, L)】

能詮<091-74>【音筌・弘云具也・應云―^{〔譚〕}謂顯了義也―^{〔詮〕}具也。案具說事理一曰―^{〔詮〕}也。―^{〔譚〕}言謂譬類人事與相解喻也。アラハス^(L, H, L)白^(H)】

九二頁

謙下<092-14>【弘云去嫌反輕也敬也虔也。・憲云讓也・中云輕己敬人一曰―^{〔謙〕}也。卑而不踰一曰―^{〔謙〕}也。ヤキ^〱シ^(L, L, L, F)白 眞云ケム^(L, F)】

歌謠<092-24>【・弘云與照反獨歌也・應云與招反徒《空也》歌爲―^{〔謠〕}。ウタフ^(H, H, L)詩^(H)】

謳歌<092-33>【季云音謳^(F)・弘云歌也喜也。・應云徒歌曰―^{〔謳〕}。齊歌

曰「諱」。ウタフ切】

諍訟<092-42>【弘云側進(イR)反引也諫也・應云又側耕反「諍」訟也競引物也。・下音松(L)。又頌(R)・弘云責也理也爭罪「曰歌」爲頌也。爭財「曰「諍」、獄」也。・中云爭也訴也・眞云爭罪「曰獄」爭財「曰「諍」」。下ウタフル(SLHL)記】

講【諱】<092-54>【弘云古(H)項(H)反誥也謀也習也論也和也・玉云和解也讀也・魴云教後進也・中云薛峯云談經典義也。カマフ詩 カムカフ選】

諱「諱」<092-64>【干云上通。】

諛諂<093-11>【音與(L)弘云與珠(F)反諂「諛」也。・應云不擇是非而言【原作之】謂之一「諛」。希其意道其言謂之諂。面從曰「諛」佞言曰諂。經作諂《今喻告也譬也諫也》非經旨 ヘツラフ(LHO)書】

九三頁

諭諂<093-12>【見上注 應云又云【今】喻翼樹反】

諛諂<093-14>【應云大可反兗州人以相欺爲「諛」。又湯和反「諛」避也。】

匿諂<093-22>【應云湯和大可反。兗州謂欺「曰「諛」。々不信也。】

諛他<093-24>【應云動他、經「諛非」。】

譏嫌<093-31>【音機・弘云『居依反』譏也誹也諫也問也・應云刺也謝而諫【原作諫】《音刺》也。束《敷》ソシル(HHL)詩】

迷謬<093-34>【弘云靡幼(イウR)反僻也誤也許也差也・眞云欺也・慈云「謬」者錯也。眞云妙(R)】

謫<093-43>【類云決音 弘云詐也奇恠也。然云權詐也 イツハテ論】
謳<093-51>【弘云詘丘勿反伸也撓也聚也曲也收也折也。・類云屈音クタク(LH)記】

諡比<093-53>【弘云時志反申也・應云行之迹也「諡」之言列也。物在後爲甲【甲】言名之於人也。】

諲<093-62>【留志云音牒(S)・弘云伺也候也問也。ウカ、フ(HOO)】

翻譯<093-64>【弘云餘石反傳也見也教道度語也。・說文傳四夷之語也。類云亦音】

重テ譯ラサフ(LLO)を奉貢スは<093-73>【後漢書】

九四頁

識記<094-11>【應云楚蔭(イムR)反「識」祕密書也出河洛也。一「識」驗也謂占後有效驗也「識」織也。其義織微而有效驗也。土漸反諛也上聲】

一「識」謎<094-21>【應曰初蔭反下莫閉(イR)反】

一【譏】蒲<094-23>【應云轉舌聲】

一【譏】羅半尼衣<094-24>【信曰又云觀羅鉢尼又差羅波尼又羅波膩譯曰灰水】

素泣謎<094-33>【應云迷細^(セイミ)反香名此無正翻。 眞云迷音】

羅謎<094-41>【應云莫閉反。】

誕^(H)育<094-42>【音但 類云正也大也俗又音延誤也。・應云大也不實也謾《莫諫》也欺也・公云音但不實也 イツハリ^(LHH)選 眞云一^{【誑(一)】}】

鼓譟<094-51>【應云先到反鼓動也誼鳴也雷呼曰一^{【譟】}家語言云萊人鼓一^{【譟】}切定公是。】

謗讟<094-54>【留志云讀^(S)音・應云謗^(レ)也一^{【謗】}誹也一^{【謗】}惡也痛也謂惡痛也。】

誘誑<094-63>【音酉^(H)・慈云淺教初學一名一^{【誘】}と。・弘云導也教也引進也・應云教引也相勸也文呼^(誘)非・憲云誑引也・中云誨一^{【誘】}也・公云音酉^(L) ス・ム^(HH) アサムク^(HH) 書 ミチヒカヌカ^(HH) ^(HH)詩 コシラフ^(HH) 記 眞云由^(イウ)・下應云私律反誘一^{【誑】} 誑《先九》也。經作恤《思律^(T)反憂也》卹□非】

九五頁

謏<095-12>【留志云虛懈】

讜能<095-13>【應云讜能、經一^{【讜】}當□^{【朗】}反直言也。】

一^{【讜】}泥<095-21>【音同上】

護持<095-22>【然云流通之異名】

護念<095-24>【慈云一^{【護】}者加持、念者記憶。】

外一^{【護】}<095-32>【然曰自己身心爲内一^(ムネ)望^(ヲ)他の身心^(ヲ)爲々外「々」所護一故名一^{【外護】}。】

誓多<095-34>【慈云一^{【誓多】}太子。此云戰勝。】

弘一^{【誓】}<095-42>【文句云弘廣也一^{【誓】}制也。廣制要心一故言一^{【弘誓】}。】

誓<095-44>【音逝^(R)・弘云命也謹也約束也・眞云結言也。 チカフ^(HH) ^(一)記】

和訛<095-52>【應云字又作諺。同丑嫁反。婆一^{【和訛】}は比丘名。】

沙訛^{【原作訛】}<095-54>【應云勅嫁反經或阿迦尼吒天是。】

託<095-62>【音橐・弘云寄也依也累也・憲云委附也。 ツク^(LH)易】

倪謔<095-64>【應云許朱反】

謬難<095-71>【應云呼故反。】

一【謬】夷<095-72>【應云人名也】

紛羅<095-73>【應云於禮反。】

眞諺<095-74>【應云俗言也。眞猶眞實也。言了別眞言「俗語無疑難」也。

文嘒非弘云宜箭反傳言也・應云謂傳世「常言也」コトワサ^(L L L F)】

九六頁

諱<096-14>【弘云呼故反嘒・顔氏云火故反 ヨハフ^(H H L) ヨフ^(H L)】

陂提<096-22>【應云匙爾反比丘名・弘云視爾反正也理也。コレ^(H H)詩】

池誠<096-24>【應云湯^{「原作渴」}歴反。】

讚嘆<096-31>【音贊^(サン R)・弘云解也・眞云稱人之美也・鸞云「^{「讚」}者」

揚也・嘆者歌嘆也。・沼云「^{「讚」}者稱也、歎者吟也。則稱揚吟詠。

應言「觸事「美德」云「^{「讚」}是理」論揚爲歎。】

諧諧<096-43>【干云上俗 弘云壯賃反翹也毀也。・應云亦讒也旁入曰

「^{「諧」}也。 シコツ^(L L H) 記 イツハリ^(L L H H) 詩「《不信也》」】

誅<096-52>【季云音株^(L)・弘云責也罰也殺也計也教也。コロス^(H H L) セ

メ^(L L)】

誅<096-54>【音耒・弘云力水反辭也累也。】

謾訛<096-61>【類云慢慢二音・弘云欺也怠也懼也・應云不信也。アサ

ケル^(H H O O)・下應云他和^(L)反「^{「訛」}不信也。】

謾論<096-64>【應云麻諫^(カン R)力均反菩薩名】

評論<096-72>【季云音平^(L)・弘云皮柄反訂也・應云謂量議也訂唐頂反

訂平議也・宋云又音病^(R)。 コトハル^(L H L) 白】

九七頁

諠<097-12>【音奄^(L)・弘云諷□^{「也」}誦□^{「也」} ソラニス^(L H O O) 切】

諼<097-14>【或文集□^{「音」}義云音暄・弘云許園反詐也忘也。 ワスル^{(H}

H L) 白】

讒儔<097-22>【弘云仕咸^(L)反譖也。】

諛訛<097-23>【上弘云匹爾反告也訛字・類云紕音・下類云紫音】

諛訛<097-33>【廣益玉篇并宋韻云同上 應云資爾反「難可謂之」^{「諛」}

訛。 文或啤吡誤也・下公云同皆罵也。 眞云之音《已上》】

詒<097-41>【季云音怡^(イ E) オクラヌカ^(H H H L) 詩 オクレリ^(H H L H) 詩

ツタフ^(H H L)】

諺<097-43>【弘云千紺反相怒使也。 カツテ^(LHL)詩】

訾計<097-51>【應云經作貲貨之貲非子移反思也量也】

誠<097-53>【類云咸音・弘云和也調也戲也。 ヤハラク^(HHH)書】

謹慎<097-61>【弘居隱反敬也信也從也。・眞云潔也。 ツ、シム^(LLH)易】

訾輸<097-63>【應云貲輸、經一^[訾]非】

詎有<097-64>【類云巨^(H)音・弘云止也格也槍也・應云一^[詎]猶何也未也
謂未知詞也。經儻非。・公云音去 タレ^(HH) 眞云巨^(R)】

一^[詎]非<097-74>【眞云豈也】

九八頁

訪括<098-11>【音妨・弘云問天道也謀也求也・眞云問覓也眞云ハウ^(H)】

之誼<098-13>【弘云宜寄反理也善也義也宜也・應云制事宜也。・玉云
今爲義字。 ハカル^(LLH)書】

訾<098-22>【益云俗辯字。】

訾<098-23>【アキラカ^(LLH)書】

諱<098-24>【音弁 イミナ^(LLL)白 ナイフ^(FOO)顔】

不諱<098-31>【イマス^(LHL)顔】

愧謝<098-32>【音舍^(R)・弘云聽也去也辭也・應云往也。ユルス^(LLH)禮・眞
云拜一^[謝]也以言相敬也慙一^[謝]也。】

詠<098-41>【弘云爲命^(R)反歌也謳也・中云吟諷也・宋云咏《上同》】

詣<098-43>【弘云魚計^(R)反到也至也祈也。 イタル^(HH)記 マウテ、
^(LHLH)選】

紕謬<098-51>【應云靡幼^(R)「原作初」反一^[謬]猶錯亂一也。一^[謬]誤也一^[謬]詐也
狂者之 中云欺也差也。 アヤマツ^(LLH)詩・善珠義燈增明記云
上亂也匹毗反。】

疾證<098-61>【弘云諸孕^(R)反告也驗也任也徵也。・慈云一^[證]者冥會・又
云一^[證]者契也。アラハス^(LLH)論】

膺<098-64>【弘云於甌反對也・玉云今爲應字。】

誤人<098-72>【音悞・弘云謬也。・應云謬一^[誤]也。經忤非・中云錯謬
也又悞・玉云爲人一得罪曰一^[誤]・珠云阿夜麻知弓「アヤマチテ」^(LLHH)
アヤマリナラシ^(LLLLHL)□「記】

九九頁

詬<099-12>【弘云居候^(R)反罵也恥辱也 ノル^(H_L)列】

譜<099-14>【弘云甫□^{〔魯〕}□^{〔反〕}屬也牒也布也引見其事也。】

譽<099-22>【宋云音預^(R)又平聲 珠云保麻礼^{〔ホマレ〕}^(L_LL_L) 玄贊云面讚爲
一^{〔譽〕}背讚名稱 眞云余】

諂誑<099-31>【弘云俱放^(R)反欺也誤也狂字・憲云或也・中云妄言惑<sup>〔原
作或〕</sup>人也・然曰一^{〔誑〕}誤也令他誤解故 アサムク^(H_H,H_L)禮 イツハル^(L_LH_L)顔 誑《任》】

詳 イツハテ 譽 ホムルマネス^(L_LH_HH_F)太子ヲ<099-41>【史記世家^{〔原作界〕}】

謁<099-43>【弘云於歇^(ケチ_T)反告也白也請也。 マウス^(L_LH_L)記】

謫古<099-51>【應云烏蓋反梵言一^{〔謫〕}支此云起尸鬼】

諛得<099-53>【應曰庶得經作一^{〔諛〕}之若反非】

未訖<099-61>【弘云居迄^(T)反止也・中云畢也・眞云盡也。 ツクス^(H_HL_L)
書 スヘヲヘ^(H_L,H_L) コト／＼クニ^(H_HL_LL_LL_O) ヲハヌ^(H_FH_L)律 ツ
ヒ^(L_LH_L)白 眞云乞^(S)音】

謚<099-64>【弘云莫橘^(T)反靜也奈也。 シツカナリ^(L_H,L_OO)後】

辟訣<099-72>【應云古穴反與死者一別謂之一^{〔訣〕}。 ヲ絶也亦別也。 ワ

カル^(L_LH_L)集】

謔<099-74>【ニクム^(L_LH_L)顔】

一〇〇頁

善<100-11>【弘云是闡^(H)反吉也工也佳也大也或爲善字。】

讐怖<100-13>【弘云章葉^(T)反失氣也不止也・應云胡葉反一<sup>〔讐
怖也〕</sup>言不止也懼也。 ヲノ／＼ク^(H_HH_L)選 オトス^(H_H,L_L)集 オヒヤカス^(H_H,H_HL_L)】

暮詔<100-23>【應云暮習經一^{〔謔〕}傷協丑協反一^{〔謔〕}讐也讐言不止也。】

詩<100-31>【毛一^{〔詩〕}序云一^{〔詩〕}者志之所之也周禮六義一曰比二^{〔目〕}興三
曰賦四^{〔目〕}風五^{〔目〕}雅六^{〔目〕}頌】

謫^{〔原作謫〕}詭<100-34>【應云又『謫』公穴反。下又脛居毀反。自關一而東西
或謂詐一爲一^{〔謫詭〕}。 一^{〔謫〕}々^{〔詭〕}亦奇怪也 下謂變詐也。 一^{〔詭〕}謫<sup>〔原
作謫〕</sup>也一^{〔詭〕}欺也。 然云謫詭變異也】

讓<100-44>【弘云如尚^(R)反責也・中云又人樣反推堅^{〔賢〕}曰一^{〔讓〕}。 ヲツ
ル^(H_H,L_L)記 セム^(L_LH_L)列】

諭<100-52>【弘云翼樹^(R)反陳也告曉也。・眞云會也見良賁仁王疏。 サ
トス^(H_HL_L)孝 タトフ^(L_LH_L)集 眞云ホム^(L_LH_L)】

誨<100-61>【音悔・弘云諫也示也教也。 眞云教―「誨訓也。 眞云ヲ

シフ^(HHL) 眞云クエ^(L□LL)】

訝<100-63>【弘云魚嫁反迎也。 ムカフ^(HHL) 詩 アサムク^(HH,HL) 唱

訃<100-71>【類云紅^(L) 音 ・季云詩曰―「訃□」師三多流^{「ミタル」(LLH)}】

讎<100-73>【音洲 アタ^(HH) 書 ・公^{「呉音」}云音愁^(R) 《可在佳部》】

一〇一頁

諸<101-11>【弘云主餘^(L) 反非一也於之也衆也。 オホヨソ^(LLL)】

誇<101-13>【玉云苦華^(F) 反 ホコル^(HHL) 唱 アサムク^(HH,HL)】

薩謔<101-14>【應云直移反】

謔<101-21>【 】

訛加<101-22>【斯蠅反 闇】

調謔<101-23>【魚記反紹也欺也調也】

二 足部

一〇二頁

足<102-11>【干云上通・弘云子欲^(T) 反趾也止也滿也得也成也・宋云
本音入声。・中云脚趾也又持喻^(R) 反充也・順云訓阿之^{「ア」(L)}・公
云音趣^(L) タス^(HL) フモト^(HH) 詩 ユク^(HL) 遊 アク^(LH) 集 ユタ
カナリ^(LHLOO)】

百足<102-22>【順云和ノ牟加天^{「ムカテ」(HHL)} 又云和ノ阿末比古^{「アマヒコ」(LLH,HL)}】

蹇^{「原作無足」}<102-24>【武^{「原作成」} 音 見兜沙經】

未足<102-31>【イマタアキタラス^(OOOLL,HO) 書】

六足<102-32>【東大寺長載云―^{「足」}者枝義。 疋《色魚》】

跋<102-34>【「音鉢^(T)」・弘云蹠也疾也獵也。・應云相跋蹠《力沙反
踐也》也。・東云草行也草名也蹠也疾踐也疾動也。又《音同貝^(R)》
蹠―^{「跋」}急走也又蒲物^(T) 反屨也覆巾也・玉云莊也。 フム^(HL) 詩 眞
云ハチ^{「ZO」}】

多摩羅―^{「跋」}旃檀香<102-51>【慈云性無垢旃檀香佛・中云慈云具云多
阿摩―^{「羅跋」}。 古藏玄範「釋」如波。】

由跋<102-61>【順云和ノ加歧都波奈^{「カキツハナ」(HHHL,LL)}】

跋陀和〈102-62〉【然曰智論及諸經名一〔跋〕陀婆羅。音輕重耳。】

跋提河<102-71>【阜部可見】

三一〔跋〕致〈102-72〉【應云又拔蒲沫_(T)反晉言發趣。

一〔跋〕渠102-74【應云此云部類□〔或〕云郡同其義也。亦云伐伽。此云部亦品之別名也。】

一〇三頁

跋難陀〈103-13〉【博末_{〔在跋之下〕}】【中云慈_{〔云〕}唐_{〔云〕}賢喜】

一〔跋〕堀<103-21>【應云古尸反亦云婆稚阿修羅名舊譯云縛居云々】

跋闍子<103-24>【信云應言一^{〔跋〕}闍羅譯曰金剛。是比丘名。第二犯人也。】

一^{〔跋〕}者國〈103-33〉信云又作一^{〔跋〕}祇國。又云一^{〔跋〕}城。胡語。譯曰聚^一也。】

一〔跋〕提國<103-41>【信云又云一〔跋〕提羅城。譯曰賈一也。】

跂<103-43>【音企^(H)・弘云足指也履也・應云登也。・東云足亦指也跳也―^{〔跂〕}々鹿走貌又《音同祇^(L)》登也行貌獸行足不着地―^{〔跂〕}々舒貌

跂《池爾》―^{〔跂〕}也・長載三量撮云丘支反履 玉云墟跂反人行脚跟不着地也如人之企也登也足多指也躡也又《平》―^{〔跂〕}々舒貌・有記云音知 クハタツ^(HH L)詩 ソハタツ^(L L H L)集】

畢蘭陀筏〔蹉〕へ〔イ〕ヨウヤ〔蹉〕【良刃〔在蘭之下〕】〔見上注・眞云〕〔畢〕(S・ヒチ)―〔蘭〕(I・リン)―〔陀〕(H・タ(N))―〔筏〕(H・ハ)―〔蹉〕(H・シヤ)

伐一^{〔蹠〕}104-53>【應云舊云婆一^{〔蹠〕}婆羅門姓。】

一^{〔蹠〕}者<104-61>【應云遮何反】

一^{〔蹠〕}蹠<104-62>【應云子亦反蹠跔也跔一^{〔蹠〕}也。蹠應作錯。七各反蹠跔不正也錯謬誤失也。】

蹠跔<104-71>【應云一^{〔蹠跔〕}不進也一曰畏敬也謂恭敬之貌。】

驅蹠<104-73>【應云驅蹠經一^{〔蹠〕}蹠々然避席也一^{〔蹠〕}蹠也非。】

一〇五頁

加趺<105-11>【慈云古^{〔反〕}退□^{〔反〕}加重□^{〔也〕}□^{〔則〕}□^{〔交〕}足坐也除災橫經等

云□^{〔結〕}交趺坐一^{〔是〕}是。有作跏不知^{〔二〕}所從。「玄應同之」江南謂開膝坐爲跏《平患》跨《口瓜》坐。山束謂之一甲趺坐^{〔と〕}・中云捷云跏「字書所無一^{〔跏〕}」猶結交「今案古書無之」新『切韻』有之。蔣飭武玄之云跏古無新有但無其訓後人用意不必依馮跏趺大坐也是後人拾經文以加也大般若華嚴皆作加矣「甲^{〔原作申〕}一即交足坐」眞云】

跏趺<105-33>【上音嘉^{〔反〕}・蔣^{〔反〕}切^{〔韻〕}麻韻云結一^{〔跏〕}跏坐・下季云音夫^{〔反〕}・順云字亦作跏。阿奈比良^{〔アナヒラ〕}（^{〔LLHL〕}）足上也。眞云フ^{〔LH〕}】

交趺<105-43>【應云又跏。足上也。謂交足一而坐。經跏非。】

跏趺<105-51>【見上注。・上季云音敲^{〔カウ反〕}波支^{〔ハキ反〕}】

跏<105-53>【音膚^{〔フ〕}弘云『方俱反』足上也。・東云戎服也。】

明踰<105-61>【「音俞」弘云庾俱^{〔ク反〕}反越也遙也渡也・應云又逾過也度也勝也。經跨非。玉抄云スクコユ^{〔HL〕}書・慈云一^{〔踰〕}越也。眞云^{〔LH〕}】

一^{〔踰〕}繕那<105-71>【慈曰舊云由旬准俱合計五百弓爲一俱盧舍二里也八俱盧舍爲一^{〔踰繕那〕}一^{〔踰繕那〕}十六里也古有相傳或以卅里「西域記云舊曰由旬又踰闍那又由延皆訛。自古聖王一日運^{〔軍〕}一行也。舊傳卅里。印度國俗卅里。聖教所載唯十六里。八俱盧舍。」爲一^{〔踰繕那〕}一^{〔踰繕那〕}此亦無失玄贊引俱舍云十六里余若依余經乃卅里應云在糸部】

一〇六頁

阿一^{〔踰〕}闍<106-14>【應云弋朱反此云不可戰國。】

蹲踞<106-22>【音上存^{〔L〕}下選音決云據^{〔R〕}・慈云上猶虛坐也。下倚也垂足實坐也亦蹲也。舊經云箕坐也・上弘云踞也聚也・東云坐而足踰地也危也。屈脚一不着地一也。借音在損反・下弘云蹲也在也・應云跨也・東云箕也大坐也・中云^{〔空白〕}却一^{〔踰〕}如箕形也。上ウスクマル^{〔LLHL〕}下シリウタク^{〔LLHL〕}記ウスキ^{〔LH反〕}論】

踞師子床<106-43>【慈云一^{〔踰〕}者坐也。】

一^{〔踰〕}牀<106-51>【應云文倨非】

脚跟<106-52>【順云音根^{〔反〕}久比須^{〔クヒス〕}（^{〔HH〕}）俗云歧比春^{〔キヒス〕}（^{〔HH〕}）・公

云音根^(R)・眞云足後也・應云足踵也・信曰又岷・又云一^[蹠]劈^[蹠]《律》
一^[蹠]非・弘云脚一^[蹠]踵也】

跟蹤<106-62>【信云一^[蹠]劈律作一^[蹠]非】

蹠^(H)<106-64>【弘云胡瓦^(H)反跟也・順云上聲之重豆不奈歧^[ツフナキ]^(LH)・俗云豆不々之^[ツフ、シ]^(LHHH)・公云音果^(L)・眞云足跌外骨也。】

拜跪<106-74>【慈云・□^[丘]委反一^[蹠]拜也又渠委反。左傳□^[蹠]而載之・弘
□^[丘]膝行也・眞云跟《直陽反拜也》一^[蹠]也屈一足也・信云跟《奇
几反拜也》也・東□^[丘]音詭^(H)危也兩膝隱體也卽屈一足也跟也膝至
地・曰跟。《音長》一^[蹠]又《音同危^(L)》ヒサマツク^(HHH、L)記
眞云ク牛】

一〇七頁

躡<107-23>【音霽^(セイR)・弘云升也登也・東云又《平》陟也。ノホル
^(HH、O)切】

躡<107-31>【弘云子亦反黑足也小步也・類寂^(S)、脊^(T)音。】

踊躍<107-33>【音宋法花勇^(H)藥^(T)上慈云跳《中引云躡》也・弘云躍
也登也甚也・眞云上也。・下慈云跳也。・弘云越也《迅也上也》進
也・東云拔也出溺一爲極一出火一爲躡。又失^(T)灼^(T)反一^[蹠]意震動也
距一^[蹠]超越也・上倭名或本云亦作躡 ヲトル^(HH、L)保止波之流<sup>[示
トハシル]</sup>^(HHHH、L)下ヲトル^(HH、L)記・中云蹈云一^[蹠]喜甚也。文

句云内解在心一名喜々動於形一名踊躍。・玄贊云依俗間一釋^は踊躍也、
躍跳也。躡足一跳者喜之極也。一眞云用^(L)ヤク^(LL)】

躡<107-62>【】

惑躍<107-63>【ウタカヒホトハシル^(HHH、LHH、HH、L)易】

蹠<107-64>【弘云千^(L)陸^(リク、L)反蹠也躡也。・季云選竹阿之登豆比久<sup>ア
シトヒク]</sup>^(LLLLHH、L)又古由^[ヨ、ユ]^(HL)フム^(HL)記】

蹴蹠<107-73>【應云子^(千)六反以足一逆蹠之曰一^[蹠]・信云與蹠同・東
云蹠也。】

一〇八頁

蹋張<108-11>【弘云徒^(L)闔^(T)反覆也蹠也・應云又云踐之蹋地一張目一也。
文喻非。・東云蹠也蹠也或作蹠。】

蹋蟬<108-14>【應云・徒臘反】

踐躡<108-21>【干云上通音沓^(タフ、T)・中云一^[蹠]踐也亦作蹋躡・慈
云・・・・・以足一躡履名一^[蹠]・東云舛一^[蹠]也一^[蹠]跋行
疾也踐一^[蹠]也齧一^[蹠]也。】

搏踏<108-31>【應云上補莫^(T)反搏^は手^{もて}搏^{なり}、蹠^は足^{もて}踐也・弘云他
市^(T)反着地也。】

踐^(H)〈108-33〉【音餞 弘云詞翦反任也居也厭也升也 玉云行貌陳貌任之以政事也修也履也躡也 應云履也 公云音淺フム 眞云仙音】

不踐迹〈108-34(補)〉【シタカハス論】

躡^(T)〈108-43〉【音躡^(T)・弘云登也蹈也履也・東云蹠也・玉云急也。フム行田】

躡襪^(H)〈108-51〉【應云下足ニ所履一也。】

跨^(F)〈108-53〉【慈云口瓜^(F)反・弘云苦霸^(R)反服也渡也兩股間也・東云跨《上聲》胥一^(跨)也髀骨也又作跨躡也。又口寬^(F)反過其上^(一)也。舉足^(一)也。一^(跨)猶服也吳坐也。】

跨上^(H)〈108-64〉【「音苦」應云苦霸反一^(跨)躡也渡也一^(跨)距也。アフートコフ^(H□[H][H][H])選 マタカル^(L[H][H])集 玉「抄」ニワタル】

失一^(跨)〈108-73〉【應ニホ一^(跨)踞□^(也)文蹠直加反行不前□^(也)非。】

一〇九頁

失蹠^(H)〈109-11〉【見上注。】

柠跨^(H)〈109-12〉【應云柠髀、律一^(跨)、非。】

蹠迦^(H)〈109-13〉【應云茶迦經一^(蹠)、非】

蹈躡^(H)〈109-14〉【音導・慈云踐也履行也道也以足ニ踐之^(一)如道^(一)也・玉云一^(蹠)々行也・應云下自亦反蹈行也一^(蹠)踐也・公云音稻^(R)、フム^(H[L])ウコク^(L[L][H])詩】

躡^(H)〈109-24〉【季云音纏選師夜止流「ヤトル」夜須牟「ヤスム」・弘云修也行也舍也。】

蹠^(H)〈109-32〉【音苑 アカイト^(L[L][H][O])選 カ、(ム)マル^(H[H][O][□][H])トクス^(R[L][O])集 玉抄云タフル】

髀踵^(H)〈109-34〉【音腫^(H)・應云足跟也上蒲米反・魴云足後也又一^(蹠)前^(一)不改變^(一)也。ツク^(H[L])選 玉抄云クヒス キヒス】

踵相^(H)〈109-43〉【觀佛經云腫^(H)音・弘云趾也追也往也・應云又作踵相迹也亦追也往來之貌。】

癭踵^(H)〈109-52〉【應云癭瘡、文作一^(に)。非。】

躡踵^(H)〈109-54〉【倭名後人加部第四脚足類云唐韻龍^(L)鍾^(シヨウ[N][F])一^(一)音小兒行貌此間云宇比阿由美^(ウヒアユミ)^(H[H][H][L]) 一云多賀々々^(タカ〜)^(L[H][H])】

脚踵^(H)〈109-64〉【應云脚瘡、經一^(蹠)、非。】

躡躡^(H)〈109-71〉【順云擲^(T)直^(S)一^(一)音「上弘云躡也・眞云舉足ニ不前^(一)也跳一^(蹠)也」・東云或作蹠。一^(一)「蹠躡」行不進也藥名也跳也・魴云又從玉反一^(蹠)走也 フトル^(H[H][L])易公云音的^(T)・下弘云迹也・應云又作蹠軌一^(蹠)跡也三輔牛蹄處爲一^(蹠)也。一^(一)「蹠躡」駐足ニ不進^(一)

也―^{【蹢】}蹢躅也。・玉云蹢―^{【蹢】}也。】

一一〇頁

羊―^{【蹢】}蹢^{【蹢】}＜110-21＞【順云和伊波豆々之^{【アハツハシ】}（HHHL）一云毛知

豆々之^{【モチツハシ】}（HHHL）羊誤食之―^{【蹢】}蹢^{【蹢】}死故名】

蹢蹢＜110-23＞【弘云渠月^{【テ】}反挫也頓也。敗也・應云下又作蹢蹢走頓也

頓也―^{【蹢蹢】}蹢蹢猶頓仆也。フム^{【HL】}選】

則―^{【蹢蹢】}蹢蹢＜110-32＞【應云或蹢巨月居月反―^{【蹢蹢】}蹢蹢《却偃也》也敗也論作蹢

非《古躑居衛居月反動也》案蹢驚駭急疾之意也】

蹢蹢＜110-41＞【應云又居衛反謂―^{【蹢蹢】}蹢蹢之也―^{【蹢蹢】}蹢蹢動也―^{【蹢蹢】}蹢蹢搖之貌又驚駭

急疾之貌―^{【蹢蹢】}蹢蹢起也。】

蹢蹢＜110-44＞【應云埤蒼以爲―^{【蹢蹢】}蹢蹢起也禮記子憂―^{【蹢蹢】}蹢蹢然而起謂急疾之貌。

ウコク^{【LLH】}詩 ツマツク^{【HHHL】}集 フム^{【HL】}玉抄云アシナヘヲ

ツク】

蹢蹢＜110-54＞【音蹢^{【T】}・弘云走也動也敏也嘉也・應云―^{【蹢蹢】}蹢蹢猶頓仆。

反倒也前覆也。文顛蹢、非。】

蹢蹢＜110-63＞【應云巨月居月反僵《仰臥也》也。】

蹢蹢＜110-71＞【音迢^{【F】}・弘云躍也上也。・應云他弔達繞反懸擲也。・公

云音条^{【L】}」・玉云蹢也蹢也蹢^{【也】}蹢也。玉抄云ヲトル フム 眞
云テウ^{【LH】} チャク^{【OL】} ホトハシル^{【HHHO】}孝】

一一一頁

蹢蹢＜111-11＞【音條^{【テウ】}・東云躍也蹢也又《去》蹢也。 ホトハシル^{【HHL】}集 フトル^{【HHL】}】

蹢蹢＜111-13＞【應^{【□】}音致^{【R】}古蹢―^{【蹢蹢】}蹢蹢今蹢。事不利―^{【蹢蹢】}蹢蹢。・弘云
蹢也頓也蹢也蹢也・應云挫辱也蹢也足蹢手頓也不利也蹢也・東云
蹢也足曰―^{【蹢蹢】}蹢蹢「手曰頓」也。前倒曰―^{【蹢蹢】}蹢蹢「後曰―^{【蹢蹢】}蹢蹢」

蹢蹢＜111-24＞【應云蹢也云々事不利曰―^{【蹢蹢】}蹢蹢限至曰蹢文磧文綴、非。】

蹢蹢＜111-32＞【應云竹利反】

蹢蹢＜111-33＞【弘云徒結^{【T】}反仆也蹢也地也蹢也蹢也・應云蹢蹢也
失蹢曰―^{【蹢蹢】}蹢蹢亦偃也失蹢也。玉抄云ツマツク】

蹢蹢＜111-43＞【信云上楚崖反錯也 下仆也蹢也偃地又―^{【蹢蹢】}蹢蹢也】

蹢蹢＜111-51＞【季云音蹢^{【サウ】}乎豆久^{【ツク】}（HHL）「フトル^{【HHL】}集」・下
弘云孚豆^{【R】}反弊也前覆也帶也。・應云七羊^{【L】}反。下今作仆。蒲北
反蹢「動仆前覆也」・東云倒也偃也又敷救^{【H】}反貳也婦人首向
前倒也。又毗倒^{【R】}反。】

蹢蹢＜111-63＞【應云蒲北巨炎反。】

頓踰<11-64>【應云頓搶、經作「^{〔踰〕}」。々動也、非。】

距^{〔H〕}<111-72>【順云音巨訓阿古江「^{〔アコエ〕}」^{〔LL〕}。鷄雉脰有歧」也・弘云超也格也止也至也自也。・玉云居旅渠旅反鷄足」^{〔距〕}也拔」^{〔距〕}猶超」^{〔距〕}也。フセク^{〔LLH〕}論 眞云コ^{〔R〕}】

一一二頁

車路<112-12>【音露^{〔OR〕}・弘云長道也大也應也正也輅字・應云又輅言所以步之於」^{〔路〕}也。オホイナリ^{〔LLOO〕} アタル^{〔HHO〕}】

大」^{〔路〕}<112-21>【順云和」於保美知「^{〔オホミチ〕}」^{〔LLLL〕}】

道」^{〔路〕}<112-22>【中云塗也。】

頻蹙^{〔蹙〕}<112-23>【慈云子六^{〔T〕}反迫也。】

頻蹙<112-31>【中云亦作蹙。シ、マル^{〔LLHL〕}集 スミヤカナリ^{〔LLOO〕}】

〇】

躊躇<112-33>【音壽^{〔L〕}・弘云躇也躅也蹙也・東云行不進也猶徘徊也・應云又作踟躕又腸知^{〔F〕}反・下東云音除^{〔L〕}又厨・弘云豫也・應云」^{〔躊躇〕}踟躕也亦猶豫也亦住足也・東」行不進也猶徘徊也。・又音佇
《見魴》 玉抄云タチヤスラフ】

踟躕<112-52>【音馳^{〔T〕}・應云」^{〔踟躕〕}猶豫也「又住足躑躅也」・東云」

」^{〔踟躕〕}行不進貌。下類云厨音 玉云或躊字】

跣<112-61>【應云又」^{〔跣〕}】

蹄<112-62>【音提^{〔T〕}・順云訓比豆米「^{〔ヒツメ〕}」^{〔LLH〕}畜足圖曰」^{〔蹄〕}歧曰甲。辨色」^{〔立成〕}護杵《和」同》】

得兔忘」^{〔蹄〕}<112-71>【「師說和奈「^{〔ワナ〕}」^{〔LH〕}易」】

」^{〔蹄〕}漏<112-72>【楊氏云・都」^{〔麻〕}伊利「^{〔ツヤイリ〕}」^{〔OOHH〕}】

躋<112-73>【ノホル^{〔HOO〕}選】

蹠<112-74>【季云音其^{〔T〕}、阿登「^{〔アト〕}」^{〔LH〕}】

一一三頁

蹠<113-11>【順」^{〔云〕}音繁^{〔L〕}熊掌也。 タナウラ^{〔LOHL〕}】

熊ノ蹠<113-13>【タナロ、ロ^{〔LOHLH〕}】

踣踣<113-14>【上音敬^{〔キフ〕} 季云選師說宇知波夜之「^{〔ウチハヤシ〕}」^{〔HHHH〕}・應云崎嶇、經」^{〔踣踣〕}非。】

惡踣<113-23>【應云居綺反。】

諾」^{〔蹠〕}<113-24>【應云同上】

柴距<113-31>【應云居呂^(H)渠呂^(H)反鷄足^(H)】

馬蹄香^(L)<113-33>【倭名草類云和布太末賀^(二)「フタマカミ」^(H H H H L)一
云豆不祢久佐^(ツ)「フネクサ」^(L H, H H, L)形似馬^(一)「蹄」故^(タリ)名^(ナリ)。】

跣<113-42>【季云音臺^(L)、布牟^(フム)「^(H L)」】

踰<113-43>【且遵反 季云之里曾久^(リ)「シリソク」^(L L H, H)】

躑<113-44>【季云音攘疾行也 之里曾久^(リ)「シリソク」^(L L H, L)】

躑<113-52>【季云音輕、宇豆賀多之歧利^(ウツカタシキリ)「^(L H L L L H, L)」】

連躑<113-54>【ト^(L)エスキテ^(O H L L H, H)選】

蹤<113-61>【音縱^(リ) ニク^(L H)選 アト^(L H)後】

蹊徑<113-62>【眞云胡雞^(L)反徑也^(一)「蹊徑」禽獸之道也・公云・音奚^(R) ミチ^(H H)集 ワタル^(H H L)後】

蹊躑<113-71>【音秋仙】

蹊缺<113-72>【音疏^(ツシ)・中云稀也。捷云^(一)「蹊」字書所無只有疏字今案
古書云疏羸也不親也新切韻別有^(一)「蹊」字 ウトシ^(H H F)記】

一一四頁

踈髮<114-12>【信云梳髮亦作^(一)「踈髮」】

足趾<114-14>【應云音止^(一)「趾」足也足一進一止因以名也・弘云脚也・順
云音止訓阿之^(アシ) 最行云阿刀^(アト) フモト集】

暫<114-24>【益云暫《同上》・弘云徂濫反不久^(一)也。卒也倉猝也。珠云
尔波加^(ニ)尔^(ハカニ)】

一^(H)暫<114-32>【干云上通下正。】

跽^(ニ)<114-33>【慈云平患^(R)反・東云開膝^(一)也。江南六^(一)「跽」踞也。】

蹂躪<114-41>【應云仁求仁柳^(H)反踐穀曰^(一)「蹂」。々踐也熟躪也。・東云
又平音。説文亦以^(一)「蹂」爲犇《女久》字。・下音與蘭^(一)同。――
【蹂躪】トフ^(ニ)ニシテ^(O H L L L, H)選】

躑<114-51>【亦躑字】

蹤<114-52>【類云鄧音・玉云履也・賢云登也・公云音登^(L) ハシ^(H L)
可作^(ニ)蹤。】

躁動<114-54>【弘云子到反動也擾也不安也・應云擾動不安靜也^(一)「躁」燥
也言灼燥即動而飛揚也・又云震爲^(一)躁也。論語言未及之而言謂之^(一)
躁。謂不安靜也。亦^(一)「躁」動也・公云音掃^(L R) サワク^(カシ)易^(L H) ウコク^(L H)】

輕躁<114-72>【應云同上 信云律操捺竝非。】

踈^(一)<114-74>【干云上俗。】

一一五頁

躁擾<115-11>【憲_二□□慈_一】^{【躁】}者謂散擾者謂亂】

蹠<115-13>【順_二音□_一】^{【尺】}阿奈宇良^{【アナウシ】}（LHL）・應_二云又跣_一】

跣下<115-21>【「干_二云竝正入聲_一」・應_二云足下也今亦作蹠蹠也。水不着_一也】

蹠翁<115-23>【應_二云_一】^{【蹠】}補也謂補履老公也。】

蹠<115-31>【順_二音卜_一】^{【S】}和_一美豆賀伎^{【シツカキ】}（HH_二HH_一）鳧鷹足指間有幕_一相連着者也。】

蹠脚<115-33>【弘_二云渠略反蹠也澁也翹也健也・玉云_一】^{【蹠】}々蹠也。小人得志蹠蹠之貌壯貌也。行舉足_一高也・應_二云丘消反舉足行高也_一【蹠】猶翹也舉足也史記作翹。】

蹠脚<115-44>【應_二云他末_一】^{【T】}反足跣曰_一【蹠】^{【ア】}。取其義_一也。】

狼跟<115-52>【應_二云又跋補蓋反_一】^{【狼跟】}猶狼_一【跟】也_一【跟】步也賴_一【跟】也。】

一蹠<115-54>【應_二云丑白丑角反宜作越。半步曰越_一也。】

蹠擲<115-62>【應_二云今宜借音他弔反。字體作越。々擲也越也。】

恒姪他蹠<115-64>【應_二云丑白反。】

相蹠<115-71>【應_二云又蹠七羊反敬也客止貌_一】^{【蹠】}動也。】

蹠<115-73>【見上注】

蹠傷<115-74>【應_二云・烏臥反足跌傷曰_一】^{【蹠】}。挫足爲_一【蹠】。經痲非。】

一一六頁

蹠跣<116-12>【嘉詳_二云上音零慈云上不正也。下補諍反與迸_一同。散也。】

跣跣<116-21>【中_二云令揜音。行不正也。・下類云又貞音。】

威儀路<116-23>【應_二云所行爲_一】^{【路】}。々亦道。威儀所行也。謂意依香味_一爲_一【路】。又威儀依止爲_一【路】_一也。】

蹠僵<116-33>【應_二云又作僂、趨。同都田反。僂_一倒、僵_一僂也。謂反倒僂臥也。】

蹠<116-41>【應_二云渠員、渠玉反。——_一】^{【蹠】}不伸也。案蹠亦曲也。上弘云懼員反行背曲也。・下弘云渠足反_一【蹠】伸亦曲也。下類云局^{【C】}音。上跡也。玉抄云俱セク、マル^{【HH_二HH_一】}。】

長蹠<116-52>【應_二云古蹠。同奇几其矣反。——_一】^{【蹠】}長蹠也_一【蹠】忌也見所敬忌不敢自安_一也。】

蹠突<116-61>【應_二云今作邊。同徒郎反搶也駮貌亦失跡也_一】^{【蹠】}跌也。案

字宜作「揸揸。」】

間跲〔原作跲〕〈116-64〉【應云古詩同除理反言獨立也跲上也 魴云跲〔跲〕侍

難進貌 玉抄云タチモトホル】

徒跲〈116-73〉【應云上達胡反三蒼作跲又□〔跲〕□〔同〕大各反。】

一一七頁

蹠跲〈117-11〉【應云又□〔蹠〕徒各反。下四典千典反以脚□〔蹠〕土一也。諸〔原〕

作謂書作徒〔蹠〕・下類云銑〔日〕也。】

跲飢〈117-14〉【應云侘飢、經〔跲〕非。】

修跲〈117-21〉【應云丘跲〔跲〕反。】

跋跲〈117-22〉【應云才〔原作牛〕與反樹名。】

梯跲〈117-23〉【弘云丁鄧〔トウ(N)R〕反履也仰也登山路也・眞云正跲。作一

〔跲〕非。小坂也梯〔跲〕也。又《平》・東云跲《七贈》一〔跲〕行步失容過移也一〔跲〕跲行不整一也。最勝抄云上湯米反長二丈有十二尅也倭言波之〔ハシ〕豎波之〔タテハシ〕下板長五尺削平兩頭安足倭言『詔』橫波之〔ハシ〕又應《廿五》也】

岐一〔跲〕〈117-43〉【應云音登。】

爲一〔跲〕〈117-44〉【應云爲跲經一〔跲〕非。】

一〔跲〕祁〈117-51〉【應云丁・鄧反。】

摩跲〈117-52〉【中云瑫云徒旦反又登旦反】

躋伽〈117-54〉【應云頻伽、經作一〔躋〕檢無所出。】

一〔躋〕頭〈117-62〉【應云躋頭經一〔躋〕誤。】

蔡躋〈117-63〉【應無注】

癡躋〈117-64〉【留志云辟〔キ〕音・慈云手拘名癡一足跛名一〔躋〕と・弘云

不能行一也・中云或癖《腹中病也》非。眞云白〔S〕音】

躋地〈117-74〉【類云俗音癖〔キ〕・應云倒也或作僻《耶〔邪〕也》非・慈云

癖地癖撫心也今既倒地正應作二〔躋〕こ。】

一一八頁

道跡〈118-13〉【音積〔セキ〕・干云一〔跡〕迹《竝正》・弘云馬一〔跡〕也・應云

足一〔跡〕也。文作踐、跲、非。アト〔L〕選 六蹟〔ト〕亦疎 眞云シヤク】

道跲〈118-22〉【見上注。】

蹠足〈118-23〉【弘云徒篋〔S〕反蹈也履也躡也・應云蹠蹈也。】

經〈118-31〉【弘云胡定〔R〕反脚一〔經〕也。眞云經音】

躡<118-33>【弘云時充反踡也。真云セン】

躡<118-41>【弘云他殄反鹿跡也・東云行足之處也胝也足病眊「眊」一「躡足滑貌。」】

跬亦<118-44>【應云柱亦。文作一「跬俗字。」】

踣<118-52>【音帶(R)・東云倒也又丁(F) 佐(R)反小兒行也物垂下也又《上》又《音同大(R)》】

踣地<118-63>【應云都賀反江南俗音帶謂倒地也。】

踣姪他<118-71>【丁可「在踣之下」】【他「在姪之下」】【闇】

垂踣<118-73>【應云垂頽文一「踣非。」】

一一九頁

踣(「五十三」)疏<119-11>【干云「上」□「通」本草補遺音□「踣」ツフ・中云□「所」□「據」□「反」議也案議券一「疏」記議之也。瑫云券一「疏」契約也・應云山於反一「疏」通□「也」。說文・𡳿々窓也。字從足足也。從囟象其形一也。門戶窗牖皆所以引通諸物故與足足取通「行」意也・東云親一「疏」也希也羸也不親通也分條之也。除也通闊也國分也「・恹云記也・魴云所據反書義文一「疏」也 ウトムス(H L F)論 エル(L H)月 ■ホル(L H)集 ワカ(L L)後 オロソカナリ(L L H L O O)遊「然云通意之辭也

亦記也又踣音卽一「疏」通一「疏」條一「疏」鏤也】

踣治鬚髮<119-33>【信云律又踣宜作梳字】

百足<119-41>【中云馬蚺一名一「百足」。中斷則頭尾各異行而去也。關西謂之馬蠃也。馬踐「蠃」截蛆也。馬蚺謂之蛆渠。大者謂之馬軸「軸」。亦云萬足一也。馬蚺蟲老者長鳴似蟬一也。古來講者以斑拱蟲「爲」一「百足」太不當。形雖似一不的「百足」。此方無。長可一寸三四分。身色赤黑有少白斑駁。無臭香。在道路田畦。盛夏日中速疾而行乃藏畦畔下。斑拱蟲在爛樹孔中團聚而居。好潤濕處。其身腥臊其氣臭穢。】

充足<119-72>【應云一「足」猶止也亦周備充也一「足」得也子俞(L)反一「足」猶成也今謂一「足」成於人也相一「足」成】

一二〇頁

踣伽<120-11>【應云又檜徂陵反。依字一「所寢檜謂猪臥處也。」】

踣一「踣」<120-13>【應云七鄧反。】

頻跋羅<120-14>【應云蒲沫反。或作頻婆羅。佛本行云百啗迦羅名頻婆。此數當十兆。】

馬蹟<120-23>【應云亦迹跡子迹反。一「猶步處。」】

踣健達<120-31>【應曰舊云由乾陀羅一此云持雙。言山峯有二瀧道。因以

名。】

蹠蹠^{【蹠】}＜120-34＞【應云蒲眠蘇眠反。——^{【蹠蹠】}槃姍也亦旋行也。經蹠蹠、非。】

蹠蹠＜120-42＞【見上注】

阿蹠＜120-43＞【蒲眠反 菩薩】

阿蹠＜120-44＞【應云又作圻同他殄^{（レ）}反】

蹠陀＜120-51＞【應云詵陀經或作——^{【蹠】}無所出。】

蹠蹠＜120-53＞【 】

蹠手＜120-54＞【信云磔手律——^{【蹠】}未詳何出】

蹠＜120-62＞【音啼^{（レ）}・東云獸足殼也。字統有蹠字。切韻作——^{【蹠】}者大非。所以取免^{（レ）}之具也。・玉云亦蹠字】

蹠^{【蹠】}＜120-71＞【音同・弘云氏下也蹠也。・玉云畜足也所以取免之具也。】

疋＜120-73＞【音疎 魴云古爲□^{【雅】}】

蹠脚＜120-74＞【應云蹠脚戒——^{【蹠】}非。】

一一一頁

婆蹠＜121-11＞【應云音同前注】

末蹠＜121-12＞【應云直知反】

律蹠＜121-13＞【應□^{【云】}□^{【作】}□^{【蹠】}、經——^{【蹠】}非。】

蹠漏＜121-21＞【順云豆麻以利^{【ツマイリ】}（HHH） 瘡^{【蹠漏】}病也。】 瘡^{【蹠漏】}《音與頰^{（R）}同》牛——

蹠＜121-23＞【留志云長音。】

蹠＜121-24＞【・選音決云音決^{（S）} ハシル^{（LH）}選】

蹠＜121-31＞【オコク^{（LH）}孝 アカク^{（LH）}】

波蹠＜121-33＞【應云平患反】

跂蹠＜121-41＞【應云禹厥反。】

蹠蹠＜121-42＞【音變^{（セフ）}蹠^{（テフ）}・魴云——^{【蹠蹠】}馬行。アカク^{（LH）}白
ホトハシル^{（HH^{（H）}HL）}】

跂＜121-44＞【ツマツク^{（HH^{（H）}HL）} フム^{（HL）}】

蹠＜121-51＞【類捷^{（T）}音 ツマツク^{（HH^{（H）}HL）}詩】

躑<121-52>【類云獵^(イ)音 フム^(H)詩】

偃蹇<121-53>【應云巨偃紀偃居免三反。——^[偃蹇]驕傲也。廣雅——^[偃蹇]

夭橋<九小>也。謂自高大貌。釋名偃息而臥不執事^[一]也。——^[蹇]跛——

^[蹇]病不能作事。今託似此也。經作僂。誤。】

三 山部

一三五頁

山<135-61>【慈云所間反良爲——^[山]。々產也。宣氣散生萬物・中云大陵

也。・玉云土高大有石——曰——^[山]。實語教云——^[山]高故不貴以有樹爲貴

有云弘法大師所作仍載之】

十寶——^[山]<135-72>【中公引佛花云雪山香醉——^[山]毗略陀伽——^[山]仙聖——

^[山]由乾陀羅——^[山]馬耳——^[山]斫伽婆^[原作婆]羅——^[山]衆相——^[山]須彌——

^[山]・眞云即雪香七金須彌總名十也。云々】

一三六頁

前正覺山<136-13>【域曰摩揭陀國如來將證正覺先登此山故云——^[前正覺]】

鷲峯——^[山]<136-22>【類云蜂^(イ)音・中云山尖高處也山高頂也・東云巖也

案——^[案]山頂鐵<接鹽>也・順云和名美祢^(メ)又用岑・嶺二字・慈

云梵云姑利駄羅矩多。此云——^[鷲峯]。亦云鷲臺。山——^[案]多栖鷲鳥。

又類高臺一故。余音皆訛、余釋皆非。】

黑山<136-42>【眞云此洲從中、向北、三處各有三重——^[黑山]。合九。此有

大小。】

靈鷲山<136-44>【中云慈云正云鷲峰山 見上注】

岑<136-52>【玉云仕僉^(レ)反大也山小高也。ニネ^(H H)切】

嶺<136-54>【順云音領・公云音領^(レ)ニネ^(H H)・玉云陵也。・東云山狹長也長岡也山峻也・眞云山頂也。】

嶽^{〔嶽〕}<136-63>【音樂^(T)・玉云嶽也悌也。】

岳^{〔嶽〕}<136-71>【玉云古文。】

嶺<136-72>【應云仕角^(T)反・下干云竝正・順云字亦作丘。訓與丘同。

漢語抄云美多介^{〔ミタケ(H H)〕} □□^{〔ワカ(H H)〕} □^{〔選〕}】

一三七頁

岱<137-11>【音代^(R)・玉云山也。】

海島^{〔島〕}<137-12>【】

島<137-13>【應云海中有山可依止□□^{〔日島〕}々^{〔島〕}到也。人所奔^{〔島〕}一也。

水中山曰一^{〔島〕}。亦言鳥人物所趣^{〔島〕}一如鳥之下^{〔島〕}也。】

嶋<137-23>【順云都皓反一音鳥 和名之万^{〔ハナ(ハナ)〕}】

岐嶺<137-31>【・類云疑^(レ)音・應云渠宜反謂道有支分者也謂枝別義也道^{〔岐〕}二達謂之一^{〔岐〕}謂^{〔岐〕}道旁直出者也物兩^{〔岐〕}爲^{〔岐〕}一^{〔岐〕}此道似之也・下應云語棘反岐知意^{〔岐〕}也一^{〔岐〕}識別也。言能匍匐則岐々然意有所知^{〔岐〕}也。其貌嶺然有所別識^{〔岐〕}也。亦六七歲也。經奇非。】

奇嶺<137-51>【見上注】

輔峯<137-52>【釋不可亦議云一^{〔輔峯〕}者大山懷裏之峯可居安隱也。】

審密<137-61>【タシカニ^(L H L H) アキラカニ^(L H L H)詩】

毛^{〔密〕}<137-63>【コマヤカニシテ^(L H L O O)集】

遏^{〔密〕}<137-64>【タチシツム^(L H L L H)】

密^{〔密〕}<137-71>【玉云靡筆^(T)反山如堂・東云靜也隱曲處牢也止也山脊也。 キヒシ^(L L H)詩 タシカナリ^(L H L O O)月 ヒソカニ^(L H O O)記 シノヒヤカナリ^(L L L H O O O)遊】

一三八頁

嶺<138-11>【山云魚偃^(H)反別於大山^{〔山〕}】

岫<138-12>【音袖^(R)・玉云山有穴。】

嶺<138-13>【東云爾雅作嶺。山形也。案山形如重兩甌^{〔山〕}一也。峯也。】

岨<138-21>【玉云五骨^(T)反山名。】

峻<138-22>【鸞云高。俊音・玉云長也・眞云險也峭也高也速也。・東云高大也。 サカシ^(L L H)詩 眞云旬^(R)音】

嵩高<138-31>【應云又玉松思隆^(レ)反山大而高也・東云高山中岳・魴云

五岳之中名【高】】

崩<138-41>【中云北勝反毀落也類也・眞云山倒也「・玉云補朋反」・魴云天子死曰【崩と】類毀曰【崩】。毀也坤也。クツル【L、H】詩眞云ホウ【H、N】】

崩【崩】<138-44>【類云俗通】

峙【H】<138-51>【魴云《音同峙【チH】》山脚曰【峙】。】

峙【峙】時【峙】<138-52>【干云上俗、中下正。上ソナフ【L、H】記タクハフ【H、H】タテリ【L、H】選】

崖【H、H、K】岸<138-54>【上音涯【L】・應云高邊者也。又作厓。書有作涯。宜佳反涯涘無涯際也。釋不可思議云【崖】者側傍也謂河之【崖】側傍也・東云叶韻。《佳韻》キシ切・下順云音與厓【厓と】同。・應云兩厓累者爲【厓と】□□重涯也。上タカシ【L、H】ウタ【L、L】《訟也》眞云■カン】

崖岷<138-74>【應云崖底經【岷】□【直】移反山名】

一三九頁

田【崖】<139-12>【應云崖底□□子結反陬禹而高山之節也。】

陵【陵】嶺<139-14>【應【L】陵【L】經【L】——【陵嶺】近字也——【陵】阮《五環》隗《五

罪貌】

巉【H】巖<139-22>【音鑣【L】・應云【巉】高也。經岑《仕金》・又東云七檻【H】反峻山也・魴云嶮也。下順云五銜【L】反字亦作礧。和名伊波保【イホ】【H、H】峯也嶮也。眞云カム【L】】

岑【巖】<139-32(補)>【見上注】

彼岸<139-33>【中云清徹云彼【岸】也。内典云菩提涅槃爲【彼岸】。】

嵩嶺【嶺】<139-41>【應云國名。】

岸客<139-42>【音噴【L】・鸞云山不齊。下岸【客】五百反・上東云小商貌。【岸】嶺【嶺】山高貌。——【岸客】《音韻》山不齊也。】

岸<139-52>【玉云仕百【L】反山不叁【齊】。】

趣峪<139-53>【應云趣俗、經【峪】、非。】

從【嶺】<139-54>【玉云卽空反高也・音總【H】東云龍《力孔》——【從】山高貌。】

從<139-62>【】

屹<139-63>【東云魚乙【L】反【屹】嶮《魚列》山危貌。】

峽<139-71>【音洽【L】・東云高山夾水。兩山間長谷也。經【峽】山名。音

狹【L】・順云俗云山乃賀比【ヤマノカヒ】(OOH)】

大峽<139-14>【オホカヒ】

一四〇頁

小^{〔峽〕}<140-11>【ヨカヒ】

嶮嶮^{〔又〕}<140-12>【應云許奇^{〔〕}反案嶮嶮顛危也經嶮非。・下玉云魚檢

^{〔日〕}反嶮・東云嶮《丘檢》^{〔嶮〕}山不平也。高貌嶮^{〔嶮〕}山形也。眞云檢^{〔〕}音】

嶮^{〔嶮〕}<140-22>【見上注】

嶮^{〔嶮〕}<140-23>【】

炭<140-24>【音歎^{〔タ〕}・東云薪余也。書云人墜塗^{〔炭〕}。注云若陷泥^{〔炭〕}

墜火^{〔炭〕}也・玉云燒木也。】

塗^{〔炭〕}<140-33>【見上注。】

嶮^{〔炭〕}<140-34>【干云上通。】

歲歲歲<140-41>【干云俗通正。在止部。】

崑岡<140-43>【干云上俗。音與剛^{〔〕}同・玉云山脊曰^{〔と〕}。順云字正作

崑^{〔と〕}。】

山岡<140-52>【應^{〔と〕}古郎^{〔と〕}反山長脊^{〔と〕}者也。】

夷崑<140-54>【・魴云正也・應云「夷崑」又崑。人名「・應」云何夷他。

此云來。經^{〔崑〕}音端】

歩歩<140-62>【干云上通。】

出内^{〔又〕}<140-63>【慈云昌^{〔反〕}遂^{〔反〕}亦^{〔出〕}也。詩曰^{〔出〕}言^{〔有〕}

章^{〔是〕}。切韻亦尺出反・中云論語^{〔出〕}——^{〔出内〕}經典釋文云尺遂反又如字。内如字。□^{〔又〕}□^{〔音〕}納。今案——^{〔出内〕}猶出納。沙門清徹□^{〔云〕}□^{〔内〕}□^{〔字〕}閏類反□^{〔出〕}内也。又云内□】

一四一頁

出入息利<141-11>【□□去聲。】

——^{〔出〕}音<141-13>【】

——^{〔出〕}声<141-14>【眞云□^{〔去〕}□^{〔聲〕}】

諸^{〔出〕}高<141-21>【眞云或本作山不可依馮。公云或音義云《如上》今案此字不得心。字已重山^{〔〕}仍寫誤謬歟。摺本并普門寺本山字五十八帙】

岐路<141-32>【應云渠宜^{〔〕}反謂道有支分^{〔〕}者也。謂枝別義也。道二達謂^{〔岐〕}也。謂^{〔岐〕}道旁直出者也。物兩爲^{〔岐〕}。此道似之^{〔〕}也。】

兩^{〔岐〕}<141-42>【フタマタ^{〔HHH〕}集】

崩^{〔麗〕}起<141-43>【應云魚屈^{〔S〕}反特立也。】

巖嶠<141-51>【應云牛衫^{〔サムシ〕}反^{〔麗〕}峯峻險也。下又愕五各^{〔T〕}反重顛
《音言甄也》曰愕也。山如重顛曰^{〔愕〕}。上真云山邊峻也峯也
峻也岸也・順云和名伊波保^{〔イハホ〕}真云カム】

婆<141-62>【音婆・魴云^{〔麗〕}山。内典。】

峯^{〔地〕}<141-63>【益云迪利切古地字・類云則天時作此。】

波輪<141-71>【應云又波倫。此云常啼。明度云普慈。】

崑崙<141-73>【音昆^{〔F〕}論^{〔L〕}・千字文云玉出崑崙 眞論^{〔L〕}音】

一四二頁

嗟者<142-11>【應云昨歌反。】

一^{〔麗〕}梨<142-12>【又云徂娥反。】

窠^{〔窠〕}峨<142-13>【應云窠窠、經^{〔窠〕}音俄。非。】

嶽^{〔嶽〕}崑<142-21>【應云苦銜^{〔カムシ〕}反又音欽。下也語銜反又《音吟》——^{〔嶽〕}
高也又山阜之勢□高下倚傾也。】

鼻窠<142-24>【應曰鼻膚、經^{〔鼻〕}魚產反峻^{〔窠〕}也。】

鼻膚<142-32>【應云魚偃^{〔エムヒ〕}反鶩緩也緩唇謂之^{〔麗〕}礪《昌若》今同其
事經峻、非。】

岌多<142-41>【應云居士子名。依字一魚□^{〔反〕}反^{〔反〕}高危也亦盛也。】

崕嶙<142-43>【鸞云上深山容亦各山隋貌形音。下深無岸。力人反。】

徵<142-51>【魴云竹^{〔T〕}里^{〔H〕}反五^{〔原作太〕}音姓 又竹^{〔T〕}陵^{〔L〕}反メス^{〔LH〕}集
タル^{〔TOH〕} 玉抄云シルシ カス 眞云チヨウ^{〔OOLHN〕}】

微昧<142-54>【憲云微音無也輕也 慈云^{〔微〕}者劣也。イ部】

粘<142-62>【音奚】

峣<142-63>【類云詢音。】

崇重<142-64>【憲云助弓^{〔L〕}反重也敬也尊也高也。アカム^{〔LLH〕}後】

嗟峨<142-73>【上玉云慈柯^{〔L〕}反□□□高貌□□□牛何我多反——^{〔崕峨〕}
高也。】

一四三頁

峨者<143-12>【應云五歌反。】

嶠<143-13>【類云父音】

嵐<143-14>【季云音婪^{〔ラムレ〕} 順云和名阿良之^{〔ALL〕}】

崇^{〔崇〕}<143-22>【タフトフ^{〔HHO〕}選】

崎嶇<143-23>【音上與祈一同。下益云區・應云——^{〔崎嶇〕}不安也傾側也。

經踰區、非。ウチハヤシ^{〔HH, HHE〕}集】

傾崎<143-32>【カタフク^{〔LLH, L〕}集】

崔^{〔三四六〕}<143-33>【音摧^{〔サイ〕}下「玉云」牛廻牛尾反——^{〔崔鬼〕}石戴

土^一者也。高貌。トサカシ^{〔OLL, H〕}集トタカクサカシ^{〔OLHFL, F〕}選

眞云火イ^{〔OL〕}】

々^{〔鬼〕}罪<143-43>【應云牛廻徂傀反高而不平罪山貌。】

巒<143-51>【類云巒音・玉云小而高也。コヤマ^{〔HHH〕}】

巘<143-53>【玉云子公反九——^{〔巘〕}】

岨<143-54>【玉云且居反石山戴土也サカシ^{〔LL, F〕}選】

嶮巖<143-62>【「玉云魚檢反」下玉云許其反——^{〔嶮巖〕}猶包也——サカシ

^{〔LL, O, F, H〕}集 眞云檢音】

嶼^{〔H〕}<143-64>【順云上聲之重與序一同。和名比良之方^{〔ヒラシマ〕}^{〔HHH, H〕}海

中洲也一日海中山也。】

岱<143-73>【音代】

峻峭<143-74>【「ト」應云今作隋峭同。且笑^{〔醜〕}反急也峻阪曰——^{〔峭〕}。

山陵險峻亦謂之——^{〔峭〕}。サカシ^{〔LL, H〕}集】

一四四頁

岫<144-13>【音袖・順云久歧^{〔HH〕}】

巖峻<144-14>【ノイハ^{〔OH〕}選】

崦嵫<144-21>【應云又嶮猗廉^{〔L〕}反下子辭反山海經云鳥鼠同光山西南三

百六十里有山一名——^{〔崦嵫〕}。日所入也。王逸曰下有豪水。々中虞

淵。云々】

嵯峨<144-32>【選音決云音焦^{〔F〕}堯^{〔L〕}・上驚云高貌。トタカクサカシ

^{〔OLHFL, F〕}選】

嵯々<144-34>【七良 トタカシ^{〔OLLH〕}選】

嶠^{〔萃〕}<144-41>【音上適下辭律反・魴云——^{〔嶠嶠〕}山高西京 トタカシ

^{〔OLLH〕}選】

崢嶸<144-43>【魴云仕耕反——^{〔崢嶸〕}生峻貌・下音宏・魴云又永兵反——

^{〔崢嶸〕}トタカシ^{〔OLLH〕} トタカクサカシ^{〔OLHLL, H〕}選】

嶺崢<144-52>【攢崢^{〔L〕}一音・下魴云竟不安貌——^{〔嶺崢〕}山貌盤桓之狀危

貌 トタカウシテ^{〔OLHLO〕}選】

崑崙<144-61>【音宋法花云掘^{〔S〕}】

耆闍——【嵯】山<144-62>【見上驚峯注。】

岬<144-64>【類云甲^(イ)音日本紀私記云美佐岐^{「ミサキ」}【^(H L L)】

巖<144-72>【順云都年^(ニ)反和名伊多々岐^{「イタ、キ」}【^(H H H, H)】

巍々<144-74>【真云語韋反——^{【嵯巍】}大貌・然云高也・玉云高大也。真云——^{【嵯】}】

一四五頁

——^{【嵯】}然<145-12>【慈云高大之貌】

崔——^{【嵯】}<145-13>【トタカウシテ^(O L H L O)選】

豈^(「三三」)<145-14>【中欺狶反不必[「]之辭也。真云キ^(R)】

出^(「四六」)<145-22>【真云尺律^(イ)反——^{【出】}猶——^{【出】}也。又尺遂反發遣也。

如人之——^{【出】}入[「]者可用[「]入。如——^{【出】}入物[「]者可用[「]去。・類音決云

韻銓從兩重山[「]大誤矣・公云音遂^(ニ) イタス^(L L, H) ヤメツラナリ^(H H, L O O) 詩 ツクル^(L L H) 月 《作也》 フヒ^(H H) 男子謂姉妹之子[「] 謂——^{【出】}と。 列傳】

蛩<145-41>【ハサケル古】

補怛洛迦山<145-42>【慧苑云此翻小花樹山々多小白花樹其花甚香氣遠及】

前正覺山<145-51>【域云鉢羅笈菩提山、唐言——^{【前正覺】}。如來將證正

覺[「]先登此山[「]故云——^{【前正覺】}。】

驚峯——^{【正】}<145-61>【域云姑栗陀羅矩吒[「]咤^{【嵯】}、唐言——^{【驚峯】}。亦謂驚臺。

舊曰耆闍崛[「]訛。】

鷄足——^{【正】}<145-64>【域云屈《屈勿》咤播陀唐言——^{【鷄足】}。】

五岳<145-72>【然云博物誌嵩高爲中——^{【岳】}《屬豫州^{【原作抄】}》華山爲西——^{【岳】}《屬同州^{【原作抄】}》太山爲東——^{【岳】}《屬兗州^{【原作抄】}》恒山爲北——^{【岳】}《屬冀州^{【原作抄】}》衡山爲南——^{【岳】}《屬荊州^{【原作抄】}》。後開衡抄[「]從山[「]爲名。】

一四六頁

岷峨<146-13>【記云文選江海賦陽侯——^{【岷峨】}。岷五合^(イ)反】

四 石部

一四七頁

石<147-11>【音碩^(S)・中云土之精也甄類也。・野^(王)云^(石)謂斛也・觔云十斗也州名凝土也砂之大者^(石)也・後漢書鄭玄身長八尺、飲酒一斛秀尾明目容儀溫偉也、注云鄭玄腹中有石^(一)大飲酒。後年瀉石^(一)不能^(原作後)飲^(二)酒。石字爲斛^(一)是。・順云和^(一)以之^(イシ)^(H) ツチ^(L)【見土字注】】

一^(石)鐘乳<147-24>【順云出備中國英賀郡。和^(一)伊之乃遲^(イシノチ)^(H)】

慈^(石)<147-32>【順云此間云之蛇久^(シヤク)^(R)慈正從石^(一)作礎^(礎)^(H)に。見唐韻。】

礎^(礎)石<147-34>【「慈音」見上注・應云^(一)石也謂召鐵者也呂氏春秋^(一)——^(礎)黏鐵兼名苑一名鐵妬一名玄石。】

玄^(石)<147-43>【順云今案慈^(一)有^(一)——^(玄石)之名。】

絡^(石)<147-51>【一名領^(石)】

領^(石)<147-52>【和^(一)都太^(ツタ)^(H)葛類】

一^(石)衣<147-53>【一名^(石)髮】

一^(石)髮<147-54>【和^(一)知比佐岐古介^(チヒサキコケ)^(L)】

敷^(石)<147-61>【允云名曰天奈良須^(テナラス)^(L)造劍具】

桃花^(石)<147-63>【此間音道^(R)卦^(H)尺^(S)^(タウクエシヤク)】

浮^(石)<147-64>【和^(一)賀流伊之^(カルイシ)^(H)】

礬石<147-71>【順云音繁^(L)此間云悶^(R)尺^(S)^(ボンシヤク)。有青^(一)礬^(一)白^(一)礬^(一)黑^(一)——^(礬)絳不黃^(一)——^(礬)五種^(一)矣。】

磐<147-74>【順云音盤^(L)和^(一)以波^(イハ)^(H)日本紀私記云千人所引^(一)磐^(一)石知比岐乃以之^(チヒキノイシ)^(L)】

一四八頁

磐盤<148-12>【干云上^(一)是^(一)磐^(一)石、下^(一)是^(一)盤^(一)器。】

一^(磐)戸<148-14>【イハト古】

常磐<148-21>【トキハ^(H)】

堅^(磐)<148-22>【カキハ^(H)宣命】

増^(磐)<148-23>【ノモトキ^(O)選】

石流黃<148-24>【和云由乃阿波^(エノアハ)^(L)俗云由王^(ユウウ)^(L)礬石^(一)の液也。】

一^(石)流黃蓋<148-32>【流黃之類。】

碑^{〔キ〕}〈148-34〉【季云音破^{〔ヒ〕}】

磨^{〔キ〕}〈148-41〉【音摩^{〔ル〕} トク^{〔ヒ〕} 論 ミカク記】

圍碁^{〔キ〕}〈148-42〉【順云音期^{〔キル〕}字亦作碁。此間云五^{〔ル〕}舜造也。——^{〔圍碁〕}借聲^{〔キ〕}爲違期^{〔ヒ〕}。《遊》・玄贊云如俗觀^{〔キ〕}斧柯便爛。】

碁碁^{〔キ〕}〈148-52〉【干云上通】

一^{〔碁〕}子^{〔キ〕}〈148-53〉【順云藝經云白黑——^{〔碁子〕}各一百七十枚・或反古云碁石壺貳合。】

一^{〔碁〕}局^{〔キ〕}〈148-62〉【順云渠玉反俗云五半——^{〔碁〕}板枰也】

彈^{〔キ〕}——^{〔碁〕}〈148-64〉【法藏云以指^{〔キ〕}彈^{〔キ〕}遠^{〔キ〕}得遠^{〔キ〕}爲勝。・賢云始自^{〔キ〕}魏宮。・順云今案一名拍石。見^{〔キ〕}備。】

碁^{〔キ〕}〈148-73〉【順云音豈一名碁——^{〔碁〕}カイル々《トタカシ^{〔OLLH〕}》】

碁^{〔キ〕}〈148-74〉【順云音黃^{〔ル〕}和^{〔ル〕}阿良度^{〔アラト〕}^{〔HHH〕}麤礪石也】

一四九頁

礪^{〔キ〕}〈149-12〉【字書亦礪・公云音廣^{〔ル〕} アラカネ^{〔HHH〕}同^{〔キ〕}鑢^{〔ル〕}。】

研^{〔キ〕}〈149-14〉【玉云午堅^{〔ル〕}反礪也郭也・東云磨也摩也案摩之今熟謂^{〔研〕}之一^{〔研〕}一作礪以槌碎米又《音同硯》堅拒也 ミカク^{〔HH〕}易 トク

^{〔LH〕} アキラカニ^{〔LHLO〕}書 キシル^{〔LH〕}唱】

礪^{〔キ〕}〈149-31〉【順云力制反和^{〔ル〕}度^{〔ル〕}今案總名也磨鐵^{〔ル〕}石也。・應云磨石也。砥細於^{〔礪〕}也・眞云磨刃^{〔ル〕}石^{〔礪〕}和レイ】

青礪^{〔キ〕}〈149-34〉【】

礪碁^{〔キ〕}〈149-41〉【順云監諸^{〔ル〕}二音和^{〔ル〕}阿乎度^{〔アラト〕}^{〔LHL〕}青礪石也】

荒砥^{〔キ〕}〈149-43〉【允云名曰天志能久^{〔テシノク〕}。】

直^{〔砥〕}——^{〔砥〕}〈149-44〉【又云名曰天奈咩須^{〔テナメス〕}。】

碁碁^{〔キ〕}〈149-51〉【應云豬全反】

碁碁^{〔キ〕}〈149-52〉【宋法花云音車^{〔ル〕}渠^{〔ル〕}・順云廣雅車渠。陸詞切韻竝從石^{〔キ〕}作——^{〔碁碁〕}俗謝^{〔ル〕}古^{〔ル〕}】

缸^{〔キ〕}〈149-61〉【順云音江和^{〔ル〕}以之波之^{〔アシハシ〕}^{〔HHH〕}】

硯^{〔キ〕}〈149-62〉【季云音刑砥石也登免^{〔トメ〕}^{〔LHL〕}又音鏗】

硯谷^{〔キ〕}〈149-64〉【眞云亦嶠、溪、古今反。今案作谿爲本。是礪^{〔ル〕}石枕水也。頗乖此云義・公云音鷄^{〔ル〕} タニ^{〔ル〕}水注谷^{〔ル〕}曰^{〔ル〕}硯。硯和ニケイ^{〔LH〕}】

礪^{〔キ〕}〈149-74〉【季云土登^{〔ル〕}反益也麻須^{〔マス〕}^{〔HHL〕}イシハシ^{〔HHHL〕}白】

一五〇頁

刀碓<150-12>【順云知林^(L)反字亦作砧和^(L)岐沼伊太^(L)「キヌイタ」^(L)「LLH」

衣石也・應云鐵鉛・經^{「碓」}非。キヌイタ切

刀砧<150-21>【見上注・應云猪全反鉄^{「砧」}也經碓非。】

鐵碓<150-23>【干云上通下正字亦作樅揚^{「鐵碓」}賀奈之岐^(L)「カナンキ」】

鐵砧<150-31>【應云鐵砧經^{「砧」}丈心反甬屬也非】

碓<150-33>【順云音扇楊^{「マキイタ」}云万歧伊太^(L)俗云卷板】

砥^(R)<150-41>【順云音^(H)一名礪玉云石次玉也。東云細黑磨石也平

也有也均也礪石也 ト^(L)後 トク^(L)列】

礪<150-44>【順云音篠和^(L)万度^(L)「アライ本」細礪石也】

搥砑<150-52>【應云於甲^(S)反自上^(L)加下也。經推押^(L)非。】

礪聲<150-54>【應云於近^(H)反雷聲曰^{「礪」}破也^{「礪」}大聲也。】

礪々<150-62>【應云五合^(S)五闔^(T)反礪^(L)《才合》高貌。經儼々、非。】

砑々<150-64>【應云胡瞎反字指云礪^(L)《莫人》^(L)雷大聲也。律桴非。】

碓脚<150-72>【應云又縫直僞反。懸鎮曰縫。謂懸石^{「碓」}之也。一^{「碓」}下也。論鍾假借也。】

一五一頁

般碓<151-11>【音嵯・應云梵言。・東云治象曰^{「碓」}治骨曰^{「碓」}。又《去》磨也。】

々^{「碓」}切<151-14>【應云本作搓。骨曰切^{「象」}象曰^{「碓」}言^(L)骨切象碓以成器。譬人學問以成^(L)德也。治象^(L)曰^{「碓」}謂治璞^(L)之一名也。】

砑石<151-24>【應云都^(F)定^(R)反謂柱下石也。律砑非・魴云船頭^{「砑」}石。】

砑石<151-32>【見上注】

礪激<151-33>【應云居依^(F)反水中礪石也^{「礪」}礪也。】

礪<151-41>【音蟻】

碓<151-42>【玉云杜浪^(R)反石也・東云文石也漢高祖隱處也。又音唐^(L)】

三碓<151-44>【東云音竭^(S)・應云特立石也謂三石支釜者也・東云^{「碓」}山也。又《音同渴^(S)》又烏葛反^{「碓」}碓盛怒也・信云山畔山也東海

有一^{「碓」}石也。】

礪石<151-54>【音薑・應云形如薑。地多少石謂之^{「礪」}礪。經壇非・東

云^{「礪」}礪小石也石名。】

礪々<151-63>【東云苦盍^(R)反^{「礪」}繫湍聲也礪^{「礪」}大石也雷聲也石聲也砑^{「礪」}雷聲。又《音同割^(T)》・玉云火聲】

砵然<151-72>【應云又砵披萌反大聲也。經軫《車名也》非。】

山礧<151-74>【應云苦盍^(ト)反石聲也凡言打物碎爲一^{〔礧〕}破亦大聲也。】

一五二頁

礧毒<152-12>【眞云亦礧。食有砂也。一^{〔礧〕}毒也。沙入飯一曰礧。】

礧毒<152-14>【應云又作礧。同初錦^(目)反礧惡也一^{〔礧〕}惡毒害也。沙土入

食中一曰一^{〔礧〕}・東云食有砂也一^{〔礧〕}毒也・公云音寢食有砂也 眞云
シム(〇一)サム 『砂也』】

砂<152-24>【音沙^(サト)・眞云細末石也。俗作沙。《一^{〔沙〕}汰也》非・東云
水中一^{〔砂〕}石也小散石也水名也鳥斯也亦一^{〔砂〕}磧字。說文作沙一從水。
礧《側交》一^{〔砂〕}藥名・順云和一以佐古^{〔イサロ〕}(HHH)一云須奈古^{〔スナロ〕}
一^{〔一〕}】

研<152-41>【音妍 魴云磨也】

研^{〔研〕}<152-42>【魴云同上俗文・玉云午堅^(フ)反礧也郭也・順云章孝標集
有黃楊茶碾子詩。俗謂之茶一^{〔砂〕}。《音如彦》・東云磨也摩也。案
摩之使熟一謂之一^{〔砂〕}。一作礧。以槌一碎米一。又《音同硯》堅拒也。】

礧<152-54>【東云五對^(R)反磨麥也。又《音同機^{〔機〕}》礧《莫賀》石。案
研破穀麥之石也。牢□ 又《音同鬼^(レ)》、堅也。】

磊砢<152-63>【玉云力罪反・應云衆石也一^{〔磊〕}砢也。經作儗儗非。下音
攞^(ラ)云一^{〔磊〕}石衆也。】

礧<152-72>【玉云】

柱礎<152-73>【順云音楚・應云楚人謂柱礎一曰一^{〔礎〕}・東云礎^(目)《音烏》
也卽柱下石楚語也】

一五三頁

礧<153-12>【音眞^(フ)又田^(レ)・順云徒年反 和一都美以之^{〔ツミイン〕}(LLLH)
一云以之須惠^{〔インスエ〕}(HHH) 柱礎也柱下石也】

砂磧<153-21>【東云音戚^(ト)・應云水中沙灘《他丹^(フ)》也積石一爲一^{〔磧〕}
也。水渚有石也瀨也水淺石見也・東云沙渾在水下一也沙一^{〔磧〕}沙池
也沙場也。】

硯<153-31>【順云音細^(R)訓美歧利^{〔ミキリ〕}(レ、レ)一名階・東云屋基邊石也
階廡贅也以戸限國階次也。】

砥掌<153-34>【應亦底字音脂之硯反底平也直也一^{〔砥〕}細於礧皆磨石也。
皆可以磨刀刃一也・玄義云音止・玉云石次玉也・東云細黑磨石也平
也有也均也礧石也。】

砥<153-51>【本草補遺云音眞。】

硯<153-52>【玉云午見^(R)反石、滑也。野一所^(一)以研和墨一用爲一書字者

也・順云和春美須利「スミスリ」(L L L L)】

砥<153-61>【鮎正正文】

碎<153-62>【眞云所對^(R)反細破也・玉云壞也・東云綱一^[碎]綱山也綱破也細磨也散也礪也。クタク^(L L, H)集眞云サイ^(L H)】

碎^[碎]<153-71>【眞云亦作一^[碎]クタク^(L L, H)詩】

細一^[碎]<153-72>【クタ[〰]シ^(L L, O O O)白】

雜一^[碎]<153-73>【信云又碎碎蘇隲《徒雷》反礪《莫賀》也壞也】

一五四頁

一礪手<154-11>【音摘^(タク T)・應云張申曰一^[礪]張也開也。律礪《渠列反涼暴也》又礪未見所出。《又作托。俗字。》・信云又披一^[礪]也律礪《渠列》東云張開也牽也散也裂也「殺也」辜也祭風曰一^[礪]掛[〰]ル^(H)月《一^[礪]禳也》】

無礪<154-23>【慈云五代^(R)反古文硃同止也閔也。有作閔亦古文。限也外閉也。有作導。音得々取也衛宏詔定古文官書云導得二字同體。導非此用。・中云唐韻云内典無導・眞云距也。・野云亦與閔字同。サフ^(□[H,])白眞云ケ^(L N)】

硃<154-42>【公同礪^ニ。】

毗那砒迦<154-43>【應云丁各^(T)又竹格反山名也。此無會釋所以仍立本名^一也。】

礪<154-52>【】

礪礪<154-53>【應云案字體宜作礪礪。子容、其俱反。礪一石也細礪謂之礪礪。礪礪治玉、礪礪治金^一。】

礪礪<154-63>【應云口交^(F)苦角^(T)反物堅韌謂之一^[礪礪]謂瘠薄地也則不宜五穀也。・上信云一^[礪]堅也礪《苦革^(T)反堅也》】

々^[礪]瘦<154-73>【應云通俗文物堅韌謂之一^[礪]。今取其義。】

一五五頁

一^[礪]盡<155-11>【應云孟子曰一^[礪]瘠薄地也。今亦取此。】

指一^[礪]<155-13>【應云指懼經一^[礪]非。】

礪然<155-14>【應云堅貌一^[礪]謂堅韌牢固也一一^[礪然]堅貌。論攢・慈云一^[礪]者實也。】

碧樹<155-23>【見玉部〰タマ^(L L)選玉部可見】

礪長<155-31>【應云拍長經從石非】

碑闕<155-32>【應云彼爲反古制反施鹿盧以下棺。今人述君父之功書其

上建於陌頭、顯處一也。闕在門兩旁、中間闕然爲道一也。】

滿磳<155-42>【應云字體作𦵏。而充反𦵏弱也。文一「磳」非。】

磳<155-44>【應云桑^(F)朗^(H)反一「磳」柱下石卽柱礎《音楚》也。】

礎壓<155-52>【應云又槌丁廻反謂投下也槌擗也。・季云或爲槌字。字

豆^{「ツ」}(^{LH})】

礪佛(^H)<155-54>【應云力對^(R)反謂以石一投佛^(「物」)也。今言一「礪」石、是。今守城、者下擊賊曰一「礪」。論作雷。假借音也。】

磨礪<155-63>【順云一音與麻^(「籠」)同。又竝去聲。和須利字須^{「スリ」}

ウス^{「ウス」}(^{LH}) 上トク^(「LH」)論 ミカク^(「HH」)記^(「L」)】

礪礪<155-72>【宋本法花奧釋音云音馬惱^(「H」)】

礪<155-74>【唐韻音與怒^(「同」)同。云石可爲一矢鏃也。】

一五六頁

礎^(H)道<156-10(補)>【順云士輦反□□□□夜末乃加介知「ヤマノカケチ」山
路□^{「閑」}道也】

礎<156-10(補)>【□云甫□反以石一刺病一也。順云八歧伊之「ハキイシ」^(HH)
^(H)】

礪^{「硯」}<156-11>【礪^{「硯」}《硯》】

破<156-12>【中云普臥反壞也・玉云碎也。ワル^(H)詩】

確<156-14>【順云音與對^(「同」)同。和須賀良字須^{「カラウス」}(^{LHLH})字亦作槌・或
反古云倭言于須^{「ウス」}(^{LH})。】

礪石<156-22>【順云音礪一名澤乳礪石案石也。蠶食之肥、鼠食之死。】

瓦礪<156-31>【順云音歷^(S)和須佐々礼以之「サ、レイシ」^(HHHL)・慈云小

石也沙《眞■云砂》也。眞云リヤク^(LLO)】

礪礪<156-33>【應云而充反石次玉一也。シナ^(「HHL」)下益云音戚^(「T」)

一「礪礪」ノサ、レイシ^(「OHHL」)選^(「選」)】

礪<156-41>【ウスラク^(HHHL)論】

堅礪<156-42>【益云五更切堅一「礪」亦作鞭。アラシ^(HHO)集 フトシ^(「L」)

ト〇】

一「礪」鞭^{「鞭」}<156-44>【干云上通】

礎<156-51>【順云丁定反字亦作礪。和須伊加利「イカリ」^(HHH)海中以石一
駐舟、曰一「礎」也。】

礪<156-53>【音灼^(S)・眞云削也斷也。ウツ^(LH)律 クタク^(LLH)集 ク
サキル^(LHLH) 眞云シヤク^(LLO)】

礪^(R)<156-61>【順云與展^(「同」)同。訓歧之流^{「キシル」}(^{LHLH})】

砵<156-62>【ハカク^(H^ハ、L^ハ)書 トク^(L^ハ)】

磬^(「[[五]]」)<156-63>【玉^ハ口定反以石^ハ爲樂器也・順云和ノ字知奈之^{「ウチ}

ナシ」^(L^ハ、H^ハ) 伽藍貝】

方^一【磬^ハ】<156-71>【順^ハ俗音奉^(R^ハ)強】

一^{【磬^ハ】}咳<156-72>【信云警欬律^一【磬^ハ】樂器名】

金礦<156-74>【應云古文研。孤猛反礦鑽銅鐵璞也。經作𠂔人常金玉之地。侯^(ハ)猛^(ハ)又口^(ハ)猛^(ハ)【原作盤】反𠂔之言^一【礦】。金玉未成器^一曰𠂔。兩義大同。仍初體爲正^ト。・玉云強也。】

一五七頁

礦^{【礦^ハ】}<157-21>【玉^ハ同上・應云古猛^(ハ)反亦作鑛鑽鉞也^一【礦^ハ】璞也・東云金璞也金玉未成器也。亦礦。眞云火ウ^(O^ハ、L^ハ)】

一^{【礦^ハ】}研<157-24>【干^ハ上通】

紫礦<157-31>【應云婆羅奢樹汁也。其色甚赤用。染皮氎等^一也。】

礪<157-34>【觀佛經歷音】

一 礪<157-41>【陀羅尼集經云如來^一【礪^ハ】等人一肘】

梯磴<157-43>【然云可從^ハ足。謂升躡也。從木^一者雉莖^(ハ)反非此所用。

從石^一者山坂漸高也。亦可義用。正應從^二下。亦梯類也可以昇高^一也。】

磧<157-54>【之逸反柱下石張利反】

石磴寺<157-61>【俗澗字】

五 玉部

一五八頁

玉<158-11>【音獄^(ト)・眞云美石也・魴云寶石燒不熱水不濕有五德也有一百卅八般又明華也・千字文云金生麗水^一出崑崗。タマ記】

白^{〔註〕}<158-21>【順^{〔云〕}和^一與眞珠^一同。】

水^{〔註〕}<158-22>【順^{〔云〕}一名月珠。水精也。】

玉<158-23>【弘云欣救^(ル)思鞠^(ト)思錄^(ト)三反。・音夙^(フ)、栗^(リ)・玉云琢玉^一也。】

瑜伽師地<158-31>【弘云翼珠^(フ)反玉美也・慈云言^一【^{〔瑜〕}伽者名爲相應。此有五義^一故不別翻譯論云云々師有^一【^{〔瑜〕}伽。々々之師。音力師之地音力即地。・應云師舊經云觀行人是地即十七地。】

瑠璃<158-43>【順云流^(リ)離^(リ)音俗云留^(ル)利^(リ)・慈云吠^一【^{〔瑠璃〕}略言^一【^{〔瑠璃〕}・應云亦云轉頭梨。從山^一爲名。謂遠山寶《即須彌山》此寶青色一切寶皆不可壞。亦非煙焰所^二能鎔鑄^一。唯鬼神有通力^一者能破之爲物。或云是金翅鳥卵殼鬼神破之^一以賣與人^一也・中云青黃赤白色也。有云須彌山南面寶也。有云^一【^{〔瑠璃〕}火齊《去聲》也。憬云有青色如玉。亦狀如雲母。色如紫玉。光耀如蟬羽・眞引應云舊云轉稠利夜亦轉頭梨也。瑠云云々。不聞陀^一【^{〔瑠璃〕}云□女瑯琊故。知新人還用舊轉。】

一五九頁

吠瑠璃<159-11>【見上注】

毗琉璃<159-12>【見上】

波斯瑠璃<159-13>【陀羅尼集經云□^{〔一〕}——^{〔波斯瑠璃〕}二兩】

玳瑁<159-21>【信云作吠^一【^{〔環瑠〕}蒲蠲反說文珠也^一【^{〔環瑠〕}青色玉也火齊狀如雲光耀也】

珊瑚<159-24>【順云刪^(フ)胡^(フ)音俗云珊瑚音如殘^(ル)。・慈云紅赤色。石^{〔註〕}脂^{〔註〕}似樹形^{〔註〕}・中云上又思割反^一【^{〔珊瑚〕}崑崙山。碧樹在北。順憬云罽賓國出^一【^{〔珊瑚〕}也。高誘云青石也。玉云瑚夏曰^一【^{〔珊瑚〕}殷曰璫一周曰玳^{〔註〕}・弘云璫也璫簋也璫《力展》也器也^一【^{〔珊瑚〕}樹有枝無葉《上》出海中色白後漸赤玉^一【^{〔珊瑚〕}・眞云瑠云^一【^{〔珊瑚〕}寶樹生海底石上。・東云又《入》貝^{〔註〕}屬^{〔註〕}生海。寶^{〔註〕}出山之。《下》盛黍稷^一器也。受一斗。】

琥珀<159-53>【順云虎^(フ)伯^(フ)音俗音玖波久^{〔ハク〕}上弘云美玉名眞云クハク】

車渠<159-61>【音渠^(フ)・慈云牟娑洛揭婆此云^一【^{〔車渠〕}青白間色。・中云新唐韻作磚磔。美石次玉^一也。】

馬瑙<159-64>【見月部・慈云遏濕摩《杵義》揭婆《藏義或云胎堅實故》云杵藏。言^一【^{〔馬瑙〕}者色如馬腦^一故作馬腦字。寶類故從玉。有

多色。或純白。或青黃。或衆色間（マシハレシ）・應云梵言謨薩羅揭婆。此云杵藏《云々》・中云復云形似杵「藏在石中。」

一六〇頁

理（リ）〈160-13〉【音里（リ）・弘曰分也事也治也媒也・珠云去止和利「コトワリ」（（リ））
允（リ）云此云事破・眞云義「理」也正「理」也事「理」也 ヤム《止也》 玉抄云ヲサム ツクロフ】

析「料」―「理」〈160-23〉【シツラフ（リ）遊（リ）】

―「理」趣（リ）〈160-24〉【慈云―「理」者道―「理」、趣者趣向所趣處也・又云―「理」謂義―「理」、趣謂意趣。】

珍珍（リ）〈160-33〉【干云上通。・音鎮（リ）・弘云寶也獻也重也・應云周禮有八（リ）―「珍」々貴（リ）□也。タカラ（リ）選 メツラカナリ（リ）切】

七―「珍」〈160-42〉【】

八―「珍」〈160-43〉【】

―「珍」玩（リ）〈160-44〉【音翫（リ） 慈云珍は寶、―「玩」は弄也。好也戲弄也。尚書―「玩」人器「喪」惡「德」、―「玩」物「器」志。有本作翫。《習也》翫《好也》皆非・弘云翫也・眞云弄玩之處必可用「玩」。習翫之處必可用「翫」。自宗通用・東云或作翫。愛好也厭也戲予也又珍目也看也望也。

或作翫。 モテアソフ（リ）書（リ）】

瓊（リ）〈160-64〉【弘云求營（リ） 反玉樹也】

璿珠（リ）〈160-71〉【弘云辭緣反玉名 應云春山寶有―「璿珠」也玉類】

球琳（リ）〈160-73〉【順云求林二音 弘云上玉磬下玉名】

一六一頁

璆（リ）〈161-11〉【・弘云球字・季云多麻「タマ」音蚪】

球璆（リ）〈161-13〉【干云竝正】

琳珉（リ）〈161-14〉【選音決云旻音―「琳珉」ノタマ（リ）選】

瑋（リ）〈161-22〉【音唐（リ）・弘云玉名・東云瓊《音無》―「瑋」玉名。】

琛々（リ）〈161-24〉【弘云敕林（リ）反重也・東云寶也珠也美實也。】

璧玉（リ）〈161-32〉【音壁・弘云好孔也。・眞云瑞玉也。―「璧」方圓。外圓内孔方者也 東云玉笏也玉環也玉也・玉云瑞玉四方一尺也・千字文云尺―「璧」非寶一寸陰是競。】

紅環（リ）〈161-43〉【公云音貫（リ） タマキ（リ） 正還（リ）・弘云繞也旋也・眞云璧好倍肉者也。釧之屬也・又云圍也・東云玉事也遶也玉也圖也メクル（リ）選 眞云又クエン（リ）】

玲瓏<161-54>【類云零(レ)音下音籠(ル)・弘云玉有龍文(ル)也。季云――
【玲瓏】玉聲。――【玲瓏】トナル(OH)選 カ、ヤイテ(HHLLH)遊】

琬琰<161-63>【順云遠(H)掩(H)二音・弘云《上》圓也《下》美色也。】

瑒瑤<161-71>【順云陽(ル)遂(R)二音或用陽(瑒)二字和(ル)比度流太万(ルト
ルタマ)火精也 弘云《上》雉梗反《下》珮也】

瑋瑁<161-74>【應云音代(R)妹(R)如龜生南海中。大者如蘼蔕。背上有鱗
將欲用煮之其皮則柔隨意所用・順云又毒冒二音・下弘云冒也。】

一六二頁

環釧<162-14>【然云在指(ル)者爲(ル)一在臂(ル)者爲釧。】

琰摩<162-22>【應云以冉(H)反或作閻摩羅或閻羅、閻摩羅社、夜磨「盧
迦、皆梵音楚夏聲之訛轉也。此云縛。或云雙竊謂、苦樂竝受故名。」
又云閻摩此云雙羅社此云王兄及妹作地獄王兄治男事妹作女事故云
雙王】

嘉瑞<162-33>【慈云與睡(R)同音應也信也符也・應云言(ハ)有善美之德・
即應之以信(瑞)也。・中云節信也符應也・眞云祥也。有玉抄云
カナフ ノフ】

瑞殿<162-43>【古語美豆乃美阿良可(ミツノミアラカ)】

捉瑱<162-51>【弘云他見(R)反塞耳(ル)玉也・順云音鎮(F)美々不太歧(ミ、フタ

キ(LLLLH)・應云一【瑱】鎮也懸當耳旁不欲使人妄聽自鎮重也或名充
耳・季云音田(ル)】

玉一【瑱】<162-61>【】

一【瑒】瑒<162-62>【應云瑒瑒經一【瑒】塞耳也】

珥瑱<162-64>【弘云如志(R)反耳瑱也・應云珠在耳(ル)也。耳瑱垂珠(ル)者也。】

射珥<162-73>【應云一【珥】劍鐔《餘謚反劍口也》也】

一六三頁

瑱渠<163-11>【順云音當(F)文選師說古之利(シ)(LLL)・又云美々久佐
利(ミ、クサリ)(LLLH)・應云充耳穿耳(ル)施珠(ル)一曰(ル)。本出西戎(ル)也。西

國王等多用金銀(ル)一作之著耳匡中用以裝飾也。渠耳渠也・東云珠也。】

玷玼<163-23>【上音點(H)・弘云都簞反玼(ヒ)也・東云玉瑕也。又音店(ル)。

カケタリ(OLLOO)論 キス(HH)記 ・下弘云居穴反雜也・應云玷
玼經玼非。】

珮<163-33>【順云音與佩(R)同。於牟毛乃(オムモノ)(LLLL)・弘云王之帶(ル)
玉也・玉云凡帶物於(ル)身(ル)皆謂之(ル)一【珮】說文爲佩字。】

鈴珮<163-42>【弘有處云波江反訓於布毛乃(オフモノ)(LLLL)

珪<163-44>【弘云補抱反珍也端也・玉云古文寶字。】

璫印<163-52>【弘云柜於反・應云玉名也耳】^璫也印臂印也。】

瑋<163-54>【法花大宋本云音葦^葦・弘云珍^{原作玲}奇也。】

璽<163-62>【選音決云音徙^徙・弘云印也封書也信也。】

印璽<163-64>【應云天子之玉印也亦神器也。・魴云王印也秦始皇刻作也。】

琢琢<163-73>【干云上珪璧文音篆。下一^琢玉《下》・弘云都角^角反ミカク^{HH}集】

一六四頁

鉤琢<164-11>【應云鈞琢、論一^琢非。】

琢<164-12>【弘云力^力木^木反ハツル^{LLH}書】

琬<164-13>【弘云都堯^堯反雕也彫也・東云一^謂謂之琢。治玉^石。々似玉。】

瑕疵<164-21>【公云音計^計正河^河キス^{HH}・慈云過也病也玉内有病^一曰^一^瑕外有病^一曰玼^玼・中云捷作瘕々病也。・眞云玉病也・東云譬過也・玉云裂也穢也咎也。アヤマツ^{LLH}詩】

玼<164-32>【弘云且禮反鮮明也・玉云新色鮮也・季云音疵^疵玉病也。又音此^此】

璫<164-41>【弘云且我^我反璫《同》・東云玉色鮮又咲^咲貌又平聲。眞云サ】

磨瑩<164-43>【公云音永^永ミカク^{HH}正榮・眞云亦瑩^瑩飾也拭物^一使發光明^一也。又去聲・玉云律瓊^瓊爲明^明反美石也玉色也又於垠反摩也謂摩^一拭珠玉^一使發光明^一也。】

瑛吉祥<164-54>【應云於京反。依字^一玉光也。并^善名。】

寶瑛<164-62>【弘云於京^京反玉精華也・應云水精謂之石^一^瑛。一^瑛亦玉光也。】

璫^璫<164-71>【弘云子道^道反璫也。眞云サ^サ】

瑣<164-72>【音鎖^鎖・弘云鏤也鎖也錄也連也環也・東云青^一^瑣戸邊飾也。玉聲。入碎小也。字書作鎖^鎖・玉云小貌平器細陋貌。一^瑣尾少好貌干云上俗】

一六五頁

琨瑤<165-13>【順云昆^昆遙^遙一^音。】

碧玉<165-14>【弘云彼戟^戟反又伯。青也。・應云一^一^碧主貝玉也。今越嶲東山出一^一^碧也・眞云青玉・東云又美又青白色名^{なり}。涉翠^翠タマ^{LL}集ミトリ^{HH}アヲシ^{LLH}眞云ヘキ^{LL}白^S】

瓔珞<165-31>【上類云嬰音下音洛^(L)。中云以珠飾身^(L)也。或作纓《冠一纓》】

諸瓔<165-34>【慈云^(L)「瓔」珞珍^(L)——也冠纓作纓。】

玖<165-42>【類云九音・弘云黑色石。】

琕<165-43>【弘云力知^(L)、力計^(R)反力飾也。】

一^(L)「瑤」須<165-44>【應云力計^(R)反。比丘名。依字「蜃」《市忍》屬也。】

珠<165-52>【順云音朱^(F)・弘云蚌中陰精也。・真云^(L)「珠」玉也・魴云^(L)有廿六般明月^(L)——貴・千字文劍號巨闕——稱夜光^(L)。】

眞珠<165-62>【中側隣反實也。中云圓玉也・慈云佛地云赤蟲《栖復云蚌合也》所出也。或珠體赤名赤眞——】

眞一^(L)「珠」<165-72>【順云之良太麻^(L)「シラタマ」(LLLL)】

月一^(L)「珠」<165-73>【和^(L)美都度流太万^(L)「ミットルタマ」(HH.LHLL)】

一六六頁

火一^(L)「珠」<166-11>【塔乃比散久賀太^(L)「塔ノヒサクカタ」(OO.LL.LL.H)】

雲一^(L)「珠」<166-12>【辨色——云宇須^(L)「ウス」今案雲母之一名也。爲馬飾^(L)所出未詳。】

洛神——^(L)「珠」<166-14>【和^(L)保々都歧^(L)「ホ、ツキ」(LHH.L)】

璣<166-21>【弘云渠氣反小不圓^(L)玉・應云又居衣^(F)反珠之不圓者也。小珠】

赤一^(L)「珠」<166-23>【應云右旋寶之形狀。】

旋一^(L)「珠」<166-24>【應云字宜作璿】

玫瑰<166-31>【順云枚^(L)「廻」(L)音和^(L)與雲母^(L)同。・慈云赤色也火齊珠也。一曰石之美好曰改^(L)圓好曰瑰。石珠也琅玕也。出昆崙・應云經作珣。非・中云明月也一名琉璃。】

瓊瑋<166-42>【見下注 上アヤシ(LH)】

瓊異<166-43>【應云又瓊、傀。同古回反。傀美也盛也偉《奇也》也傀偉奇玩也。】

瓊^(L)「異」<166-52>【同上注】

琅玕<166-53>【順云音朗^(L)干^(L)「カン」】

瑯^(L)「瑯」瑯^(L)「那」<166-54>【音郎耶 魴曰——^(L)「那」郡名在沂州】

玢^(L)「玢」<166-62>【應云丁歷^(L)反——^(L)「玢」明珠也經的非・下弘云力的^(S)反。】

如珂<166-64>【慈云苦何^(L)反螺屬出海中。潔白如雪^(L)者也。有作軻。《中

云口佐反接軸也亦軾^{〔轉〕}《口紺》軻不遇也。《非・應云經舛、非。・中
云石似玉》也。馬腦也・眞云一^{〔珂〕}寶色如雪一者。自古一用爲市易。主
秦^を廢^二而用鈔^一。今案可用^二海蟲訓^を】

一六七頁

琿<167-13>【弘云胡^{〔一〕}紺^{〔二〕}反送終、口中、玉。】

璽<167-14>【初學記云音蕩^{〔三〕}黃金謂之一^{〔璽〕}・弘云金美也・順云和・古
賀祢^{〔「カネ」(H.L.)。〕}】

玦^{〔在「上」〕}玦<167-23>【弘云女九反印鼻也・應云玦如環、而一^{〔玦〕}不相連。

下或鈕印一^{〔玦〕}謂之鼻。今像一此也。】

佉玎<167-32>【弘云多庭反劣也。・應云竹耕^{〔一〕}反。】

琪樹<167-34>【音其^{〔一〕}】

璞<167-41>【眞云匹^{〔一〕}角^{〔二〕}反一^{〔璞〕}鑿也亦作璞矣・公云音博^{〔三〕}・順云和
一阿良太万^{〔「アラタマ」(H.H.H.)〕}玄義云周一^{〔璞〕}鄭一^{〔璞〕}名同質異】

擊泥邪<167-44>【應云鳥奚^{〔一〕}反鹿王名。舊經伊泥延又作因尼延、啞<一
賢>尼延、皆一也。和衣^{〔原作「夜」、傍書「衣敷」〕}伊^{〔「イ」音〕}】

珎^{〔H〕}<167-53>【音竄・魴云亦玉。内典。】

瑰<167-54>【音嬾^{〔H〕}・魴云未訓。内典。】

珊觀史多<167-61>【所殘 都古 疎士 眞云今案一^{〔珊〕}言與薩同。此云
妙。觀史多此云喜足。卽妙喜足。是彼天王名。】

一^{〔珊〕}若娑病<167-71>【應云此云發風病。一發不起一者也。】

一^{〔珊〕}闇<167-73>【應云蘇安^{〔F〕}反子名也。經有作鄚^{〔珊〕}所姦^{〔奸〕}反。】

一六八頁

珊地<168-11>【應云桑干反】

纓瓊<168-12>【應云纓貫論一一^{〔纓瓊〕}非。】

琰<168-13>【應云掖、經一^{〔琰〕}非。】

頊浮<168-14>【應云許玉反】

瓚^{〔H〕}<168-21>【昨旱反】

琮<168-22>【玉云祚宗^{〔F〕}反一^{〔琮〕}之言聚也】

王<168-23>【弘曰禹方^{〔F〕}反往也大也君也姓也威。・中云天子也・眞云
大君也又去聲・然云以一貫^{〔三〕}二名之爲一^{〔王〕}。三謂三才卽天地
人。俗中不知^二有^{〔「とくふ」〕}界諸天一故。キミ詩】

親王<168-34>【允^{〔H〕}云^{〔三〕}古^{〔H〕}】

一^{〔王〕}於三界^{〔168-41〕}【中云往況^{〔反〕}盛德之君南面之尊故謂^{〔王〕}。々天
下^{〔一〕}也。】

壬^{〔168-44〕}【音任】

壬^{〔二七〕}〔168-51〕【他井反善也】

主^{〔168-52〕}【慈^{〔二〕} 見、部】

皇^{〔168-53〕}【音黃^{〔一〕}・弘云大也匡也天也君也正也主也美也 然云極也

壯盛貌 魴云亡也^{〔皇〕}甫人姓 オホキニ^{〔一〇〇〕}【記】

天^{〔皇〕}〔168-62〕【スメラキ^{〔HHH〕}宣】

一^{〔皇〕}矣^{〔168-63〕}【オホイナルカナ^{〔LHLHLH〕}記】

希望^{〔168-64〕}【音亡又妄・應云說文出^{〔望〕}在外^{〔望〕}其甚還也字從望省^{〔望〕}聲。若無放反^{〔望〕}說文月滿與日^{〔望〕}相^{〔望〕}也。字從月。但此二字音體人多不辨^{〔望〕}故此兩釋・眞云武訪反希^{〔望〕}也又武方^{〔F〕}反看^{〔望〕}也。・魴云從口從省。口傳云平^{〔望〕}《ノソム^{〔HH〕}》去^{〔望〕}《ノソム^{〔HH〕}》。ノソムシニ^{〔HHH〕}選 ウラム^{〔LH〕}詩 ワスル遊】

一六九頁

望^{〔望〕}〔169-14〕【宋^{〔一〕}云音亡^{〔一〕}又妄^{〔R〕}・順云此間云^{〔望〕}月。毛知豆歧^{〔モ〕}チツキ^{〔LHLH〕}《平》モチ切】

庶^{〔望〕}〔169-22〕【コヒネカヒノソマク^{〔LHLH〕}後】

缺^{〔望〕}〔169-23〕【ウラミノソム^{〔LHHH〕}律注】

一^{〔望〕}月〔169-24〕【順云】

尫^{〔尫〕}羸^{〔169-31〕}【音注^{〔一〕}・應云弱也短小曰^{〔尫〕}々々小也。】

班宣^{〔169-33〕}【弘云補姦^{〔一〕}反別也次也賦也編也位也列也賜也布也還也。・應云案古書或作頒。々遍也賦與也・東云遍付與也。長孫訥^{〔S〕}言云從歹。麻杲云從刀。分瑞玉也運也・玉云^{〔班〕}制謂尊卑之差也。アカツ^{〔LH〕}選 ツイツ^{〔HHL〕} アマネシ^{〔LLE〕}論 ホトコス^{〔HH〕} 永超僧都云 一^{〔班宣〕}アカチノフ^{〔LHLH〕}】

斑駁^{〔169-53〕}【音同上・應云又辨^{〔班〕}駁也^{〔班〕}文貌雜色爲^{〔班〕}。經編マタラナリ切】

一^{〔班〕}蘭^{〔169-62〕}【應云編爛、經^{〔班〕}、非。】

斑茶婆^{〔169-63〕}【信云山名増^{〔一〕}云般茶婆山譯曰白山亦云姓也】

琴^{〔169-71〕}【音禽^{〔一〕}・慈云禁也。言^{〔一〕}君子守正以自禁。神農作。・中云本置五絃。文王加一武王加一。長三尺三寸六分。大者廿絃云々・平備云^{〔琴〕}乃已等^{〔ノコト〕}コト切】

一七〇頁

新羅―^{〔琴〕}＜170-11＞【順云和之良岐古度^{〔シラキコト〕}（^{（L L L L L H）}）】

日本―^{〔琴〕}＜170-13＞【順云俗用倭―二字。】

倭―^{〔琴〕}＜170-14＞【夜末度古度^{〔ヤマトコト〕}（^{（L H L H）}）】

鴟尾―^{〔琴〕}＜170-21＞【度比能乎古度^{〔トヒノヲコト〕}（^{（H H、H H H、L）}）】

百濟―^{〔琴〕}＜170-23＞【久太良古度^{〔クタラコト〕}（^{（L L L L H）}）】

瑟＜170-24＞【音^{（レ）}蟲^{（レ）}・弘云悶^{〔悶〕}也・中云樂器也庖義氏作長八尺二寸。

似箏而大廿八絃・信云今案簫―^{〔瑟〕}也。今案簫―^{〔瑟〕}秋涼風氣也非樂器也・備云―^{〔瑟〕}ノ己等^{〔コト〕}（^{（L H）}）・玉云壹也羅貌矜莊貌。簫―^{〔瑟〕}猶簫條。眞云七^{（S）}音】

烏―^{〔瑟〕}＜170-42＞【】

―^{〔瑟〕}叱＜170-43＞【眞云今案取上半音、可呼主頰^{（レ）}の音也。説二今字皆放此。】

琵琶＜170-51＞【順云毗^{（レ）}婆^{（レ）}―音俗云微^{（レ）}波^{（レ）}・中云智周云本出胡中。馬上所鼓也。推手前、曰琵琶、引却曰琵琶。牟云長三尺《像三才》五寸《五行》二孔《日月》四絃《四時》或作批把。以手―批把。因^{（レ）}名。】

王舍城＜170-63＞【在土部】

現^{（H）}＜170-64＞【中云胡^{（L）}甸^{（R）}反露也 眞云示也 壬部 眞云アラハス^{（L L H L）}】

聖＜170-72＞【在耳部】

六 心部

二三六頁

心<236-11>【源爲憲口遊(F)云音深(F)火之精色赤・弘云神也容也・中云一(F)意也・魴云五藏之主曰一(F)・唯識論云集起名心と。コ、ロ(LL)詩 ナカヒタ(LLH)集】

↑(F)<236-21>【廣(L)同上】

中心<236-22>【ロ、ロノウチ】

多一(F)<236-23>【順(L)云師說奈加古可遲(F)カコカチ(LLH, H)《周易》】

發一(F)<236-31>【珠肝心記云合(L)云去々呂於去須(F)コ、ロオコス(LLHLLH)識疏】

一(F)意識(F)<236-33>【慈(L)云一(F)積聚義意思重意識了別義了識達義と唯識云一(F)——(F)意識(F)】名之差別】

智慧<236-43>【「類(L)云惠音」弘云胡(L)桂(R)「反察也精明也・中云解也明也。眞(H)トサトリ(HH)】

心一(F)<236-51>【トシ集】

所惠(L)<236-52>【音同上・應(L)云調衣食曰一(F)也。分(L)人(L)以(F)する財一(F)謂之(F)一(F)也。仁也愛也・魴云同上俗反。シタカフ(HLL)易《順也》 ウツクシム(LLH)詩 タノム(LH)後】

惠雲<236-61>【中(L)云慈古作一(F)。若依台者應作慧字に。】

慈(F)<236-63>【弘云枝茲(L)「反愛也敏也・中云内典云拔苦爲慈云々」ウツクシヒ(LLH)詩・下弘云秘(R)飢(F)「反痛也傷也・中云哀也・魴云大―觀世音并(F)善(F)也。哀切傷貌。苦吟・俱舍頌云此行相如次與樂及拔苦。】

二三七頁

慈哀<237-11>【和音行圓云一(R)一(H)】

哀愍(F)<237-12>【慈(L)云哀慈也愍悲也】

子息<237-14>【弘云思力(F)「反氣也喘也止也勞也滅也歸也休也安也返殖也林也銷也。・應云兒子曰一(F)。々々氣在人身中所稟以生也。今人出錢(L)生子(L)亦曰一(F)。義一也・慈云一(F)者滅也。ヤム(H)易ヤスメリ(LLH)記 ト、マル(HHH)詩 イコフ(LLH)】

息利<237-33>【中(L)云慈云一(F)者長生義・珠云子義】

止一(F)<237-41>【中(L)云安也勞也。】

消一(F)<237-42>【アリサト(LH)集《恩下》】

有情<237-43>【「音清」・弘云『似盈反』靜也實也・中云志也・眞云性也心意也。ナサケ(LH)集 コ、ロ切・慈云有(F)情識(F)故に。言衆生(L)者不善理(L)也・應云語別也。云々】

關一【情】<237-54>【ロ、ロツキ遊】

無一【情】<237-61>【アチキナシ（LL、LLF）同】

五一【情】<237-62>【中云眼耳鼻舌身】

性<237-63>【音姓^(R)・弘云生也・中云一^性行也心一^性也・眞云志也稟天氣^一而生也。ヒト、ナリ】

天一【性】<237-72>【ヒト、ナリ（HHHH）遊】

失意<237-73>【順云古々路万都比（ロ、ロマトヒ）（LLLLHL）】

々【意】者<237-74>【ミレハ（LHL）白】

二三八頁

意<238-11>【弘云於記^(H)反志也・中云心也・珠云去々呂（ロ、ロ）（LHL）ロ、

ロ（LHL）選 オモフ（LLH） オモミル（LRLH）白】

謹慎<238-14>【弘云視震^(R)反誠也謹也靜也思也憂也恐也敕也・眞云誠也。シ、シム（LHL）易 眞云シン（LL）】

思察<238-23>【「音筭」 弘云首辭反念也願也辭也容也・慈云一^思者察也推也觀也。音筭 オモヒ（LLL）選・恤云又音司。口傳云去聲者オモヒ（LLL）平聲者オモフ（LHL）】

是思<238-34>【眞云去聲一^思慮也。】

尋一【思】<238-41>【眞云息慈反念也。】

思議<238-42>【中云憶念也。】

盡思<238-43>【中云慈云息字^(R)反深謀遠慮曰一^思。】

一^思量識<238-51>【慈云即第七識。一^思謂一^思慮、量謂量度。一^思慮第八一度^{して}爲我^一故。又恒審^に一^思量^{して}餘識^{には}無故。】

不可^ニ求一^思<238-61>【詩注云一^思辭也。】

忠<238-63>【季云音中^(F)・弘云微躬^(F)反厚也敬也直也・野々^{王卷}事君之名。・魴云心信 タ、シ論 忬】

懇到<238-72>【・弘曰口很反美也誠也信也・應云至誠曰一^懇。亦堅忍也。到至極也苦也。・玉云守其志一也・珠云祢毛古呂尔（ネモコロニ）（LHL）】

二三九頁

懇^懇【^(H)】<239-12>【干云上通。】

快意<239-13>【弘云苦夫^(R)反楚也喜也可也・中云稱心也・眞云喜心也。タクマシ（LLLF）易 コ、ロヨシ（LLLLF）記】

愷<239-22>【音颯・弘云和也樂康□^也。】

念住<239-24>【弘云奴^(L) 玷^(R) 反常也・中云思也・眞云下直遇反止也。

オモヒ(フ)(^{L L L H})詩】

背面―^[念]<239-33>【慈云背謂疏遠義、面謂親向義。謂以智・觀理・如鏡鑒面。背生死・向涅槃。云々《列疏》 伽抄云心樂涅槃・貪・求出・世・背生死・故即是定境。】

對面―^[念]<239-44>【慈云是親矚義。以智達如理・親矚其面・故・應云即定也慧也。言定慧照鏡・其猶對面・伽抄云違・背生死・欣・念涅槃一名――^[對面念]。又名背面―^[念]。云々】

「愚」^[慧]<239-61>【弘云欣建反・欽也・湍表也・敏也。音獻 ノリ(^{H L})書】

憲<239-63>【干云上俗】

愷<239-64>【弘云除蒸反・平也・又云除承反・失志貌。・類云澄^(L)音。】

―^[愷]愷<239-72>【應云澄暄、論作――^[愷愷]、非。】

忻<239-74>【觀佛經欣^(L)音・弘云闔也・善也・察也・宋云欣《同上》・季云与呂古比^{[E R R A] [L L L L]}・公云音欣^(L)通用欣字歟。ミル(^{L H}) ウ ヤマフ(^{H H H O}) ツ・シム(^{L L H})】

二四〇頁

―^[折]欣<240-14>【干云竝正。】

惇直<240-21>【弘云丁^(F) 昆^(F) 反厚也大也信也・應云古敦撲也。】

―^[惇]誨<240-23>【アツクヲシヘシ(^{H L H H H H})選】

慷慨<240-24>【應云又忼口葬反・忼慨大息也。又不得志一者也。下音鎧・弘云歡息也・應云―^[慨]歎^ハ大息也。忼―^[慨]壯士不得志於心情憤恚也眞云カイ(^{L H})】

悃<240-41>【音闔^(H)・弘云・悃也至也。】

悵<240-42>【弘云祚宗^(F) 反樂也慮也。タノシ(^{L L H})集】

恢大<240-44>【弘云苦回^(L) 反大也・應云又作𡗗・季云音灰^(F) 師曰比呂牟^{[ヒロム] (^{L L H})}】

悵<240-53>【季云音恢阿佐介留^[アサケル] 又里音】

恃^(H) 怙<240-61>【上・弘云時止反・賴也・怙也・負也・自・中云倚也・憑記也・眞云―^[恃怙]依倚也。タノム(^{L L H}) 易・下觀佛云戸音・慈云胡^(L) 古^(H) 反恃也・賴也・仰依也・負恃也。・東云質也。タノム(^{O L H}) 後】

爲怙<240-72>【應云或作擔。餘占反。言如屋擔遮堂室也。仍未詳。】

二四一頁

恃恃<241-11>【下鮒云正文】

垂修<241-12>【應云垂須經一^{〔修〕} 怙也謂無爲一^{〔修〕} 非。】

怙<241-14>【弘云他頰反服也靜也・玉云又都簞反 タシカナリ^{〔L H L O O〕} 顏】

一^{〔怙〕} 然<241-22>【見下注】

恬然<241-23>【弘云徒兼^{〔F〕} 反安也靜也・應云大論作淡然^{〔L〕} 徒濫反其義同。經怙《之鹽》誤。】

恬安<241-32>【シシカニ^{〔L H L O〕} 選 行圓云一^{〔恬〕} 一^{〔安〕} 〔R〕】

一^{〔恬〕} 悵<241-34>【應云徒^{〔L〕} 兼^{〔F〕} 反一^{〔恬〕} 靜也。下宜作淡。徒^{〔L〕} 濫反淡安也謂安靜也。經一^{〔悵〕} 徒甘^{〔H〕} 反憂心如一^{〔悵〕} 々憂也非。】

阿夷恬<241-44>【應云徒兼反。此云新學亦云新發意。】

懔^{〔懔〕} 怕<241-52>【「宋法花云音淡^{〔F〕} 拍^{〔S〕}」 慈云上徒^{〔L〕} 濫^{〔H〕} 反安也。靜也謂一^{〔懔〕} 然安樂也無味爲淡。玉徒^{〔L〕} 敢^{〔H〕} 反恬靖也安也。有作恬。靖也。有作悵。徒甘反憂也。非此中義。字書作悵。《徒監》・下疋白反無爲也靜也一^{〔懔〕} 安靜也無爲也。或作泊^{〔L〕}・應云一^{〔懔〕} 寂漠也亦恬靜也。言寂寥無人也。下無爲自持也。一^{〔恬〕} 然寂靜也。一^{〔懔〕} 無爲自持也・上中云悵唐韻亦言音與一^{〔懔〕} 同。有濫故不用・眞云一^{〔懔〕} 空也・弘云足也・東云《音同薄》一^{〔懔〕} 無爲也。木名也。眞云タム^{〔L〕} ハク】

二四二頁

憚怕<242-12>【應云憚怕、經一^{〔憚〕} 々豫愁。又憚怕。徒南反深也竝非。】
怕怖<242-21>【】

悵<242-22>【弘云徒^{〔L〕} 甘^{〔L〕} 反憂也。】

提一^{〔悵〕} <242-23>【應云徒甘反。】

忙<242-24>【季云音亡^{〔亡〕}】

茫怕<242-31>【應云茫怖、經作一^{〔怕〕} 匹白反憚一^{〔怕〕} 也。俗音普嫁反。】

懔<242-33>【類云俗普霸反怖也。又普白反。】

恕己<242-41>【・弘云尸^{〔尸〕} 預^{〔R〕} 反仁也如也・應云以心一廣度物一^{〔恕〕}。

仁心^{〔仁〕} 度物一曰一^{〔恕〕}・東云一^{〔恕〕} 心也捨人之誤失一也。禮也寬惠也好給一惠人一曰一^{〔恕〕}。オモハカル^{〔L R L L H〕} 詩 オモフ^{〔L H〕}】

衷一^{〔恕〕} <242-51>【オモヒ一オモフ^{〔L H L L H〕} オモハカリオモハカル^{〔L R L L H L R L L H〕} 詩】

忿怒<242-53>【弘云孚粉^{〔H〕} 反怨恨也悵也悲也・眞云怒也・唯識云云何爲一^{〔忿〕} 云々 ネタム^{〔L H〕} 遊 コ、ロヤム・下弘云奴^{〔L〕} 古^{〔H〕} 反責也悲也・東云憤也又《去》嗔也。イカル^{〔H H〕} 記】

滯^{〔R〕} 怒<242-64>【ヲサシキイカリ^{〔L L F H H〕} 列傳】

忿怨<242-71>【音鴛^(L)・弘云於^(F)願^(R)反恨望也忘也各也怨讎也・眞云惡也。】

怨思<242-73>【ウラムオモヒ^(LLLLLL)選】

恨^(R)<242-74>【・中云於願反恚也恨也又於袁反ウラム選】

二四三頁

嫌^(R)<243-12>【慈云於願反屈作冤枉作窓屈草自覆作宛。其^(R)字無於袁反・中云恨深慈云無平音。今案新切韻雖有平音^(R)——讎非^(R)恨。云々「然云《去》損己則怨違情也嫌若平也傷己未重心積大仇」】

多^(R)——<243-23>【中公云——讎也 眞云於袁反】

——^(R)敵^(R)<243-24>【同上慈云——者對也】

熙怡<243-31>【音飴^(L)・弘云悅也和也樂也・應云喜也——^(熙怡)和悅也。

上經作嬉。同虛^(F)之^(F)反樂也戲笑也非・公云音基^(R)伊^(H)和悅也下ヤハラク^(HHLL)孝】

懈^(R)怠^(H)<243-41>【慈云古隘反倦也懶也怠也・不可思議云——^(懈)者疲也。

オコタル詩・弘云間怠也・應云極也・眞云惰也 オコタル^(HHLL)詩・下選音決云音殆「・慈云」懈極怠懶也懈解也骨節解緩耳。切韻疲作駘。玉疲作——^(怠)。懈慢也惰也荒也放散體也壞落也懶也。タ

ユム^(LLH)書 オコタル^(HHLL)】

懈^(懈)<243-63>【眞云亦作——^(懈)。】

懶惰^(H)<243-64>【憲云落早反惰也又作懶懈怠也。・下弘云徒臥^(R)反怠也易也竄也懶也・憲云懈也遲業也不敬也・眞云正惰。オコタル^(HLL)書 眞云タ^(L)】

慵^(慵)<243-74>【眞云正——^(慵)。】

二四四頁

阿惰<244-11>【慈云徒臥^(L)反有作惰。傳云於六^(T)反無此字。寫謬。云々】

阿惰<244-13>【中云捷云辭規反相傳作郁音。字書無。見上注】

々^(惰)咽<244-21>【應云啗咽、經——^(惰)音墮設也。】

恩恩怨<244-22>【弘云於^(F)根^(F)反愛也惠也隱也。ウツクシム^(LLLLL)詩ネムコロナリ^(LHLLOO)《愛也》 フシム^(LH切)】

恂々<244-31>【弘云思巡^(L)反信也慄也敬也溫也慄也・應云——^(恂)々溫恭貌敬也戰慄也・然曰——^(恂)者均也。】

惟付<244-34>【弘云役葵^(L)反思也有也爲也辭也憂也度也侯也伊也謀也陳也・慈云思也念也謀也。・眞云想也・東云發語辭也。オモフ^(LH)詩 コレ^(HH)選 オモミレハ^(LRLHL)・下村之去聲 慈云倉

本^(H)反度也。・東云心有所度^一也。】

帷惟^{<244-52>}【唐韻云上洧悲反^一帷^{〔帷〕}幔。下辭也。】

八惟无^{<244-54>}【應云或惟務即八背捨也。】

懷^{<244-62>}【音槐^(一)・弘云歸也來也思也傷也和也德也深也止也主也安也・中云抱也・東云苞也念思也志也囊也藏也著也■也・玉云止住也。ナツク^(L L H)書 ハラム^(L L H)記 イタク^(H H L)ヤスシ^(L L E)詩
オモフ^{||}ヒ^(L L H = L)イタル^(H H □)ナツカシムス^(L L L H F L □)論 キ
タス^(□ □)選《來》 ムタク^(H H L)列 ヨル^(H L)フトコロ^(H H H H)禮
フトコロハス^(H H H H □)集】

二四五頁

一^{〔懷〕}哉^{<245-11>}【ヤスカラムヤ^(L H L L L H H)禮】

懷懷^{<245-12>}【上通ト正】

一^{〔懷〕}妊^{<245-13>}【中ニ云包藏也謂妊^一爲^一妊^{〔妊〕}娠^一】

心^一^{〔懷〕}【^{<245-21>}眞^{〔眞〕}抱也情也】

忱^{<245-22>}【類^{〔レ〕}謙^(一)音・弘云誠也信也。】

悚慄^{<245-23>}【宋法花云音聳^(H)栗^(一)・慈云怖也懼也・應云惶遽也・中云肅敬也・東云慚^{〔慚〕}也愧也・又云惻革^(一)反病也・下慈[□]^{〔云〕}力質

^(一)反戰也謹敬也懼也感也・應云憂感。オソル詩 ヲノ、ク^(H H H L)
オツ^(H L)選 眞云リチ^(○ L) 慄慄[】]

一^{〔棟〕}竦^{<245-41>}【干云上慙^一棟^{〔棟〕}下^一棟^{〔棟〕}敬^一】

怖慄^{<245-42>}【オチヲノ、ク^(H L H H H L)列】

戰慄^{<245-43>}【應云懼貌。】

懼^{<245-44>}【音具・弘云恐也悲也驚也病也・中云怖也・東云迫也僑也
畏也憂也。オチテ^(H L H)詩】

悟^{<245-53>}【音誤^(R)・弘云覺也愚也對也解也。漢書注云音忤。サト
ル^(H H)選】

恠^一^{〔恠〕}【^{<245-61>}應云恠恠、經^一恠^{〔恠〕}。非。】

耶忤^{<245-62>}【類云悟^(R)音 應云得^一忤^{〔忤〕}曰疴《苦駕》非體也案 東云
送也觸也送心相觸也 サカフ^(H H L)易 ソムク集】

忤^{<245-71>}【弘云何且^(R)反善也抵也極也。】

勇悍^{<245-72>}【東云音汗^(カ N R)・弘云勇也・應云^一悍^{〔悍〕}果敢也桀也勇
有力也^一悍^{〔悍〕}傑也謂智出千人也・東云戾或作忤善說也。又《上》・慈
云勇者升進義悍者堅牢義。】

二四六頁

悞犯<246-13>【憲韻吾故^(R)反錯^一悞^一又作誤。】

慶慰<246-21>【今附广部 ヨロコフ^(LHL)書 ア^(R)選 ニキハヒ^(L)・^(O)唱・下音畏^(R)・慈云^一悞^一謂隨喜・弘云安射怨射居。ヤスムス詩】

恤<246-31>【弘云彌徧反勉也恤也。】

振恤<246-32>【弘云思律^(T)反憂也・應云收也^一振恤^一憂貧也・又云又卹振^一也謂以財物^一與人^一也。經恤、未詳^三所出・眞云賑救也憂思也^一恤^一卹形別音訓相似。】

悛<246-43>【類^(L)詮^(L)音・弘云『且泉反』改也止也更也。アラタム^(LH)書】

悛<246-51>【音萱^(火)悛也】

悵<246-52>【季^(L)音叨過也須久^(ス)・弘云疑也悵也。悵《坎》】

懽<246-54>【弘^(L)呼官^(F)反喜悅也教也歡也。】

一^懽歡<246-62>【干^(L)竝正。】

止憩<246-63>【弘云却厲反息也企也。・應云止息之又作愒。】

愒<246-71>【見上注類云鎧音又憩音イコフ詩】

急<246-73>【音給^(T)・弘云居^(F)立^(T)反堅也盡也・中促遽也迫也。】

二四七頁

悵々<247-11>【或反古也音邑^(T)・弘云歎息也不安也・應云^一悵々不舒貌。・東云居之所居也於心志不舒也。有宗廟先君之主^一曰都。無曰邑^一也。悵也^一悵々不安也^一悵^一憎歎息也・玉云悵也^一悵々然耕也。】

敷愉<247-23>【「類云俞音」・弘云與珠^(F)反樂也服也喜也薄也・應云纂文作孚瑜。言吳色也方言作怱《芳俱》^一愉^一悅也怱^一愉^一謂顔色和悅也。タノシフ】

除愈<247-33>【慈云臾乳反差也間^一愈^一也。切韻作瘳。病瘳也。玉作^一

愈^一。益也勝也心憂爲悵。病差爲瘳^と・應云差《眞云所懈》也・弘云瑜主^(F)反賢也・東云又《音同愉》・眞云瘳^一古通今別 マサ^(HLL)易 イヨ^(HLL)タトヒ^(LLL)イユ^(H)記】

愚癡<247-51>【上音虞^(L)・弘云癡^(H)也・眞云癡也。・慈云如聞^一如言^一而取於義於語法中^一迷及謬者名^一愚癡^一。オロカナリ切】

一^愚蠢<247-61>【弘云敕容反愚也・應云丑縫^(原作縫)傷恭反^一愚也土而癡騃音昏者也愚無所知也亦鈍也。蠢《蠢》】

詳愚<247-71>【イツハリオロカシテ^(LHLHRO)詩】

詐^一愚^一<247-72>【イツハリオロカシテ^(LHLHRO)論語注】

一【^惡】^惡癡<247-73>【弘云都絳^(カウ)反愚也・應云癡也聲類韻集音丑巷反愚癡也一^癡鈍也無知專愚曰一^癡也。愚無所知也亦鈍也頑聾也。・東云《又音同棟》悞一^癡。】

二四八頁

樂癡<248-14>【應云貪飡無劑畔一味著無厭足。若於苦中一如駝食蜜也。新經論翻爲耽嗜者一是。】

縱恣<248-24>【ホシマ、^(LRHH)顏 下ホシマ、^(LRHH)詩 眞云シ^(レ)】

自恣<248-31>【弘云子利^(R)反置也縱也・東云縱心也能也縱逸也・玉云疾也。道宣云】

々^[恣]態<248-34>【音黠^(R)・弘云意恣也恣也・應云又作能謂能度人情貌・東云姿詹也意案常秉意不改大姿。案姿容貌姣好《工巧》也意美也案也。スカタ^(LH)白】

無態<248-51>【應云《音同》三昧名。】

嬌慢<248-52>【宋法花云音嬌^(レ)・弘云逸也恣也高也・中云傲。眞云ケウ^(LH)・下慈云莫晏^(R)反欺爲謾一緩爲一^慢。易也輕侮也遲也惰也不畏也緩也倨也或爲慢・弘云教也。アナツル^(H□H)易ユルシ^(LF)集 オコタル^(HH)眞云マン^(LH)慈云嬌謂醉逸縱蕩身心嬌謂踞傲自尊卑物 唯識云云何爲一・珠云倭言由留比氏^(ULH)オコル^(HH)記 オソシ^(HH)集】

慢<248-73>【眞云亦作慢。】

増上慢<248-74>【慈云少得謂多得一名一一^[増上慢]。】

二四九頁

忽然<249-12>【弘云呼没^(T)反滅也忘也輕也・中云倏然也・慈云無端而有名一一^[忽然]也・眞云欸也連也。タチマチニ^(LH□L)記 イルカセ^(HH)詩】

惡作<249-21>【慈云烏故反憎也・慈云一^[惡]者悔也。即嫌所作業也。・從魴云一^[惡]嫌也。・唯識云悔謂一一^[惡作]。音與汚同 ニクミス^(HL)論・珠云弥奴久之^[ミヌクシ]^(LFL)ニクミスルフモ^(LHLLHH)論】

惡師<249-31>【弘云於各^(T)反陋也惡過也憎也何也・應云所爲不善也經從草一作慧。又儂。非・中云不善也。】

厭惡<249-41>【公任云下去聲 ニクム^(LH)善一^[惡]之處入聲。】

悔一^[惡]<249-43>【珠云合云久伊尔久牟^[クイニクム]^(LHLLH)】

惡一^[惡]<249-44>【干云上俗下正。】

險惡<249-51>【眞云烏各^(T)反不善也。】

憎一^[惡]<249-52>【季云音曾^(F)・弘云惡也憚也難也・中云一^[憎]疾也心有所惡也・眞云惡嫉也。ニクム^(LH)・應云下烏故反一^[惡]猶憎也憎

惡也憎《一外》也・中云去聲。】

惡賤<249-63>【慈云烏故反^{〔惡〕}猶憎也・中云去聲。】

可^{〔惡〕}<249-71>【眞云烏故反憎也又入聲。】

忘<249-72>【季音亡^{〔亡〕}・弘云亂也擾也・又中云武放反不記憶 眞云往事不記憶也 ワスル論 眞云マウ^{〔ON-H〕}】

二五〇頁

忌憚<250-11>【弘云渠記^{〔R〕}反怨也畏也敬也難也憎也。應云『渠記^{〔R〕}反』恐也^{〔忌〕} 恐畏也憎惡也・眞云憎怨也猜也疑畏也。 イム^{〔L-H〕}・下音但・應云難也・眞云徒旦^{〔R〕}反畏也難《去聲》也・珠云阿之加流^{〔アシカル〕}・公云音但^{〔R〕} ハ、カル^{〔H-H, H-L〕}】

妬忌<250-23>【憲云嫉色曰^と嫉行曰^と。憚也。】

怵忽<250-31>【弘云忻往^{〔H〕}反忽失色・應云古怵《呼晃》々忽忘也^{〔怵〕} 無形不繫之辭也狂貌^{〔怵忽〕}——眼亂也似有^{〔怵忽〕}無也虛妄見也。】

忿^{〔怒〕}<250-34(補)>【】

慌^{〔忽〕}<250-41>【應云呼晃反又怵虛往反謂虛妄見也惟怵惟忽似有無也——^{〔慌忽〕}眼亂也迷或也。】

愆咎<250-44>【音褻^{〔F〕}・弘云失也過也・應云古褻遍。籀文^{〔には〕}儻・東云

罪也案凡物差過亦謂之^{〔愆〕}亦憊。說文褻籀文儻・公云音堅^{〔R〕}ア ヤマチ^{〔L-L-L〕}】

愆期<250-54>【スクス^{〔L-H〕}易】

憲^{〔愆〕}<250-61>【弘云愆字。】

昏沈<250-62>【季音昏^{〔F〕}・弘云亂也癡也荒也・應云^{〔愆〕}不了也・憲云不明也。又呼困反迷忘也。】

憤吏^{〔闇〕}<250-71>【慈云公對^{〔R〕}反心亂也亂也煩也・弘云擾也・應云^{〔憤〕}吏也煩亂也——^{〔憤吏〕}猥衆也・不可思議云不靜也謂人物所煩亂闇也・東云案^{〔憤〕}一昏濁也。 眞云火イ^{〔L-H〕}】

二五一頁

忼々<251-12>【トホレテ選】

迦俚<251-13>【應云力尚反】

戀<251-14>【弘云力^{〔S〕}泉^{〔L〕}反係也病也・中云力卷反慕也・眞云慕念也。

ルハ、ン^{〔L-H〕}白】

恒<251-22>【弘云何^{〔L〕}登^{〔F-T-U(N)〕}反久也弦也常也慨大也・魴云常字代也。 ヒサシ^{〔L-L-F〕}易 アマネシ^{〔L-L-L-F〕}詩 ツネニ^{〔H-L-H〕}記】

一^{〔恒〕}山<251-31>【順云和名字久比須乃以比祢^{〔ウクヒスノイヒネ〕}^{〔L-L, H-L-L-L-H〕}

一云久佐木乃祢^{クサキノネ}（^リHH、^リH）木類】

憤^(H)〈251-34〉【音忿^(H)・弘云盛也盈也隕也裂也・應云滿也謂一^{〔憤〕}怒氣盈滿也。怒氣充盛也亦情感也懣也懣煩也・東云怨怒也發一^{〔憤〕}忘食也心一^{〔憤〕}々懣《音滿》也怒起也・玉云孔子曰與人言必待其心一^{〔憤〕}々乃後啓說之。イキトホリ（^リLL、^リL）後・下弘云於（^E）睡（^リ）反恨也怒也・中云於避反忿也。】

慍恨〈251-54〉【弘云於（^リ）問（^R）反恚也怨也恨也。・應云怒也。イカル^(H)論】

恒沙〈251-62〉【中云胡登（^F）反・慈云旃伽^ハは河神の名。河從神稱。此河具^モ五義^ハ、諸經多寄爲喻。】

恒河沙〈251-71〉【 】

一^{〔恒〕}住捨性〈251-72〉【眞云戸登（^F）反常也。有[■]一^{〔恒〕}住法也。】

慊一^{〔慊〕}〈251-74〉【應云苦簞（^H）反一^{〔慊〕}厭也厭足也快也一^{〔慊〕}々言勸《苦没》々也。亦一^{〔慊〕}快也。・眞云切恨也疑也或嫌憎一^{〔慊〕}也恨也通用・公云音劍（^R）恨也。 眞云ケム（^リL）】

一一五二頁

恨〈252-21〉【音良・弘云怨也。・唯識云々何爲一^{〔恨〕}】

春一^{〔恨〕}〈252-22〉【モトシメ集】

悔過〈252-23〉【「音與晦同」・弘云呼對（^R）反改也恨也咎也病也・中云

「改過也」懺摩唐云一^{〔悔過〕}。有云懺悔。梵漢合呼^{ナリ}。 眞云クエ（^リL）了義燈云以一^{〔悔〕}許字少相近故寫者有悞 クユ（^リH）書】

懺一^{〔悔〕}〈252-34〉【季云音尖（^リ）・應云此言訛略也。書無一^{〔悔〕}字。應云又磨。此云忍。謂容怒^{〔怒〕}我罪。半月又磨增長戒根。逋沙他此云增長戒。云々・南海傳云梵云痾鉢底《罪過也》鉢刺底提舍那《即對他説也》説己之罪・冀令清淨。舊云懺悔。非關説罪。一^{〔懺〕}摩乃是西音、自當忍義。悔乃東夏之字、追悔爲目。悔與^ト忍^ト迴不相干。若的佐梵本一諸除罪時應云至心説罪云々・不可思議云懺此云請受一也。悔者解也。】

惆悵〈252-64〉【音抽（^リ）・弘云懊（^R）惱也病也愁也・應云悲愁也。一^{〔惆悵〕}失志也。經作悵。力彫反且也。非經義。・下弘云敕亮（^R）反望也恨也 イタム集・應云一^{〔惆悵〕}失志也亦悲愁也・公云音籌一^{〔惆悵〕}病也 眞云チウ（^OH）チャウ（^OO-T-N）】

一一五三頁

悵一^{〔悵〕}〈253-12〉【見上注】

悵恨〈253-13〉【應云敕亮力尚反悵望恨也悵悲也謂悵々然愁貌。】

一^{〔悵〕}悵快〈253-21〉【弘云於亮反強也懟也。・應云快然心不服也】

悵々〈253-23〉【應云力尚反悲也謂一^{〔悵〕}々然愁悲也】

鬱快<253-31>【應云《音同》謂忿怒也——「快」々然心不伏也。】

悽<253-33>【弘云千(F)奚(L)反愴也病也。】

惻愴<253-41>【類云側(ヨク)音・弘云病也悲也・應云——「惻」然心中病也・東云愴——「惻」悲愴也悲傷也中心病也病也憂也懼也・玉云病之至也。イタム(LH)易 眞云シキ(LF)・下弘云楚高(F)反喪也傷也悲也・東云——「愴」怳也傷案傷猶悽慘也憂也——「愴」非也悽愴也。イタムラクハ(LHHH) イタマクハ(LHHH) ー「惻愴」イタム(LH)選】

慘烈<253-61>【弘云錯感(H)反憂也殺也貪也痛也・應云憂見也。下力折反猛盛也。 イタシ(LH)集 ウレフ(LH)】

一「慘」毒<253-64>【應云又慍、燥。毒也——「慘」憂也。】

不怛<253-72>【弘云都(F)達(T)反切也病也懷憂也・應云——「怛」憂也——「怛」懼也今或爲驚憚字也。 眞云タチ】

二五四頁

不憚<254-11>【應云都割反旁驚(ハ)曰——「憚」。經作慘怛之怛非也・又云徒旦反——「憚」驚也——「憚」畏也亦忌也。弘云達旦(R)反難也畏也驚也・東云丁佐(R)反 眞云タン(L)】

摩——「恒」理迦<254-22>【應云都達(T)反舊云摩德勒伽。亦云摩夷。此云母亦本母。或云行境界。謂起行所佐として、能生行一故。】

布——「恒」那<254-32>【應云】

毗飯——「恒」羅<254-34>【應云即蘇達拏本生因緣也。】

梅——「恒」麗藥<254-42>【在下】

一「恒」薩阿竭阿羅訶三耶三佛<254-43>【應云大品作多他阿伽度《此云如來》阿羅訶《應供》三藐三佛陀《正遍知》十號中三號。】

制——「恒」羅<254-54>【應云都達(T)反人名也。此正月星名。西國立名多此也。】

一「恒」策迦<254-63>【初革(在策之下)】【應云都達反龍王名。】

恹(格)惜<254-71>【慈云力(S)晋(R)反鄙——「恹」也。若慍作恹・眞云惜也・下・弘云胥亦反病也登也貪也・中云恹也。タハフ(H□L)集アタラシカル(HHHH) フシム(LH)後 ー「恹恹」イナフ(LH)遊】

二五五頁

可惜<255-12>【アタラ(HH)唱和集】

莫——「惜」<255-13>【サマラ(LFHL)遊】

慳貪<255-14>【慈云俗間他含反恪(□)已得也婪未得也・中云恪也。ヤフサカル(LLLL) フシム(LH)一名也】

憐愍<255-23>【季云音連^(レ)俗作怜・弘云愛也哀也・中云愛惜也。カナ

シフ^(H□HHL)集 アハレフ^(HHLL)切 眞云リン^(LL) レン 下音

閔弘云眉隕反傷也閔也愛也亂也・應云古^{「愍」}今作閔憐也。・慈云

一^{「愍」}者悲也。カナシフ書】

愍<255-41>【益云亦一^{「愍」}・宋云愍愍聰】

憫泣<255-42>【音同上・弘云憂也・應云一^{「憫」}々然也・玉云一^{「憫」}々憂貌

慇也部也。】

一^{「慇」}<255-51>【カナシレリ^(HHLLH)集】

愍憫<255-52>【干云ト一^{「憫」}傷ト一^{「憫」}默。】

怜<255-54>【廣云力丁^(F)切 心了也。】

怜<255-61>【類云蓮^(一)音 眞云蓮^(R)音】

可一^{「憫」}<255-62>【ウシクシムス^(LLLLLL)遊】

一^{「憫」}憐<255-63>【干云上俗下正。】

恰々<255-64>【應云苦^(H)洽^(S)反一^{「恰」}々用心也。・東云一^{「恰」}々勒也專用

也。 アタカモ^(LHLL) 白 タトくハ】

恠^{「恠」}々<255-73>【慈云古懷反一^{「恠」}異也驚一^{「恠」}也。凡奇異非常皆曰一^{「恠」}。

字從在《口瓦》「從心」。アヤシフ^(LLHL)集】

二五六頁

恠^{「恠」}恠^{「恠」}<256-12>【干云上俗。】

怪<256-13>【益】

慇懃<256-14>【音殷^(F)勤^(L)・弘云憂也病也・東云病切也心內懃勞也。

又《上》一々心憂現。一^{「慇懃」}心丁寧也委曲也稠疊也。慇^ハ懃、懃^ハ憐也。・下弘云憐也勞習也・中云一^{「慇懃」}丁寧也再三也。下或勤

煦云一^{「勤」}勤同從心^{「俗」}・玉云一^{「慇懃」}猶周至也。下行圓云ネムコロ^(LHLLO) 眞云オン^(LH) ロン^(H-NH)】

勤懃<256-33>【干云上^{「懃」}勞下懃一^{「懃」}。】

忉利天<256-41>【季云音刀^(F) 弘云憂勞也詠憂也・應云此應訛略。正

言多羅夜登陵舍天。此云・慈云卅^{「三十」}三天・中云帝釋爲主「四面各有八其故欲界第二天。」】

無恙<256-51>【弘云餘亮^(R)反憂也病也・應云病之憂也。上古草居露宿

一^{「恙」}噬蟲也善食人心凡相勞問無一^{「恙」}乎復因以爲病也。今人謂無一^{「恙」}無憂也。音養】

傷<256-61>【弘云尸向反感也思也痛・玉又尸姜反。・類云傷^(F)音。】

惕𦵏<256-63>【應曰餘^(一)章^(F)反通俗文作詳。虛辭也。漢書作惕。謂不

眞也。經作伴《側羊反一^{「伴」}弱也》非。□達】

怵惕<256-73>【「類云默^(一)音」・應曰恥律反愁也。下他狄^(S)反驚也懼

也愁□^{〔也〕}―^{〔愁〕}々猶切々也―^{〔愁〕}怵懼也悽愴也。下オソル易】

二五七頁

灼惕<257-12>【應云他狄^{〔S〕}反―^{〔灼〕}謂憂懼也亦病。】

灼惕<257-14>【應云之若^{〔S〕}反―^{〔灼〕}憂懼也亦通也。下愁也憂也。オソル^{〔LH〕}易】

惕<257-23>【類云鑑又憩音。イコフ^{〔LH〕}詩】

愁<257-31>【「季云音秋」・弘云『仕憂反』苦也悲也恚也。中云甚憂也。ウレフ^{〔LH〕}易】

愀然<257-33>【應云又湫。在須^{〔F〕}反禮記云孔子―^{〔愀然〕}作色謂顔色變動之貌。】

憔悴^{〔粹〕}^{〔辛〕}<257-42>【慈云上昨焦^{〔F〕}反下疾醉反。三蒼切韻作顛頽廣雅玉篇作―^{〔憔悴〕}愁也患也憂也病也】

悴^{〔粹〕}<257-53>【音萃カシク^{〔HH〕}白】

忡々<257-54>【弘云直^{〔S〕}忠^{〔F〕}反以詠心憂也。・詩云憂心―^{〔忡〕}々。】

患<257-62>【弘云胡^{〔L〕}串^{〔R〕}反禍也惡也苦也・中云憂也・眞云病也。ウレフ^{〔LH〕}記】

恒孃<257-64>【弘云丘^{〔F〕}方^{〔F〕}反恐也怯也・季云音匡^{〔F〕}「於豆^{〔オツ〕}〇^{〔L〕}」・應云下而羊^{〔L〕}反煩擾也謂煩恐惶遽也。楚辭遭此世之―^{〔恒孃〕}是。】

慣習<257-73>【應云又串古患反串亦習也・公云音貫^{〔L〕}或作串。ナラ<リ□□^{〔L〕}HH集】

二五八頁

志<258-11>【弘云之^{〔F〕}異^{〔R〕}反望也念也慕也知也記也擬也。・玉云尚書詩言亦。孔安國曰在心爲―^{〔志〕}。左氏傳以制六―^{〔志〕}。杜豫曰好惡喜怒哀樂也。謂恩意也識也・魴云誠心意曰―^{〔志〕}。ココロサシ^{〔LLL〕}記 和行圓云―^{〔志〕}】

恚<258-23>【弘云於睡反恨也怒也 フツクム^{〔LLH〕}詩イカル^{〔HH〕}列】

淹―^{〔恚〕}<258-31>【ヒサシキイカリ^{〔LLFFHH〕}列】

悉<258-32>【音膝^{〔T〕}・中云皆也 コト／＼ク^{〔HHL,LL〕}記】

悉^{〔悉〕}達多<258-33>【域云薩縛^{〔婆〕}喝刺他悉陀。「唐言一切義成」舊曰―^{〔悉達多〕}訛略。】

懾伏<258-41>【弘云章涉^{〔T〕}反服也怯。或也畏也・應云止葉齒葉反心服□―^{〔懾〕}也懼貌恐懼也失常也。オツ^{〔HL〕}選】

慴伏<258-44>【弘云徒^{〔L〕}頰^{〔S〕}反懼也。・應云即恐懾《之涉^{〔T〕}》也・眞

云又之^(レ)涉^(レ)反怯也・東云「^{〔懼〕}伏也服也畏也恐懼也。・公云音攝^(s)畏也。眞云セフ^(〇)」

懼懾<258-54>【干云上懼下失上氣亦作讐】

悼慨<258-62>【弘云徒^(レ)到^(R)反動也憐也愛也・應云傷也哀也哀憐也
「・玉云病也哀」^{〔懼〕}也懼也」・東云病也懼也病也悲」^{〔懼〕}也矜也。七年曰「^{〔懼〕}々與耄」雖有罪不可刑焉。九十曰「^{〔懼〕}。イタム^(LH)後」

悼慄<258-73>【イタミヲノ、ク^(LHHH)詩】

俱慄<258-74>【應云補迷^(レ)反。】

二五九頁

孫悌<259-11>【應云蘇寸^(R)反「^{〔孫〕}順也亦謙恭也。・下音弟 弘云發也行^{〔也〕}」應云大帝大禮反「^{〔悌〕}々樂也易也。善事兄曰「^{〔悌〕} 東云愷」^{〔悌〕}弟順於兄也發也謂發行也樂易也言性和樂而簡易也君子人之父母^{〔也〕}」又《去》又徒亥反孝「^{〔悌〕}也遜也孝順也弟恭也」

悌<259-24>【益^(レ)徒計^(R)切孝「^{〔悌〕}」又徒禮切愷「^{〔悌〕}」】

號愷<259-32>【應云鳥^(於)外反世尊名號也。眉目間貌。】

愷泥<259-34>【最勝燈王也】

慄動<259-41>【應曰胡郭恐縛反「^{〔慄〕}驚也」】

怍習<259-43>【應云放習經「^{〔怍〕}非。】

捷沓^{〔和〕}<259-44>【】

惕態<259-51>【應云而^(レ)酌^(T)反弱栗弱也。經「^{〔惕〕}奴的反「^{〔惕〕}憂也。下音貸 スカタ集】

惴々<259-54>【應云之睡^(R)反「^{〔惴〕}々懼也謂危懼也。】

憧々<259-62>【應云昌恭反「^{〔憧〕}々意不定也」^{〔憧〕}々往來也。字從童從『大』。經從心與^レ重同憧。遲也非。】

慄<259-71>【乃歷^(レ)反 オモフ^(LHO)詩】

歌懿<259-72>【應云於冀反「^{〔懿〕}美也專久而美也亦大也。】

懿師<259-74>【信云正作愷。蒲康反强也。是愷師摩王卽十轉輪王之第十王也。宜作懿字。於冀反美也・又曰與前同名。而此粟散王也。】

二六〇頁

愷焉<260-21>【應云胡代反患愁曰「^{〔愷〕}。亦苦也恨也厭「^{〔愷〕}也。今猶言患「^{〔愷〕}以有所苦也。】

慄<260-24>【】

作紀<260-31>【糸部】

慵<260-32>【モノウシ切】

耐<260-33>【無垢疏】

惶忙^{〔忙〕}<260-34>【應云又萌。莫芒反茫遽也「萌人」晝夜作無日用月無

月用火常思明故字從明或曰萌人思天曉故字從明。】

悽々<260-44>【應云力俱反——悽々謹敬貌。】

慙慙<260-52>【應云女六^{〔慙〕}反慙《他典》——慙也荊楊青徐之間曰慙。

梁益秦晉之間曰慙山之東西曰愧——慙也。不直失即謂之慙。々愧也心慙曰——慙也。】

鬱佛^{〔鬱〕}<260-63>【應曰父勿反——鬱心不安也亦意不舒泄不平也・然

云鬱謂鬱鬱——者意不泄也。】

慰問<260-73>【音畏^{〔慰〕}・慈云——者安撫之異名、問者詞微之別稱。安

撫詞微故云——慰問。ヤスムス^{〔慰問詩〕}】

二六一頁

——^{〔慰〕}諭<261-12>【慈云——者安、諭者曉。】

平等性<261-13>【眞云遍一切法故。】

離生性<261-21>【眞云離生■性故。眞如異名】

橋薩羅<261-23>【眞云舊云拘薩羅國也。此無所當故不翻。】

——^{〔橋〕}亘<261-31>【眞云始脂^{〔在尸之下〕}】【慈云忉利天主。姓釋迦、號は帝

釋、名は——^{〔橋尸迦〕}。此云繭兒。前身之名。佛常呼之・眞曰稻云一

名帝釋、一名鑠羯羅、一名補爛達羅、一名印達羅、一名婆颯縛。卽三十三天^の尊・慈云《在米部》】

——^{〔橋〕}陳那<261-51>【見邑部】

——^{〔橋〕}曇彌<261-52>【・慈云又但云瞿曇皆訛略也。正言喬答彌。佛姨母

故女聲呼。喬答摩是男聲。此云甘蓮^{〔應〕}種或曰炙種。釋迦能姓雖類多瞿曇釋迦最爲遺族。若毀之曰牛糞種^{〔泥〕}種。廣如域記。】

——^{〔橋〕}設隸<261-71>【舉赦反契】

低慙<261-73>【應云莫蘭反——忘也——兜也。律侵。非。】

二六二頁

苦懣^{〔懣〕}<262-11>【應云古懣莫本反——煩也悶也亦墳也朝鮮洌水之間煩謂之謨漫。】

悶<262-21>【イキトホル^{〔易〕}】

——^{〔悶〕}偈<262-22>【應云普力蒲力反——憶猶盈蒲也。】

不掩<262-24>【應云又儼於驗反意滿也】

狂慙<262-32>【應云呼濫反——^慙愚也郭璞曰鷄鳥——^慙急謂虛勇也。】

習忤<262-34>【應云又忤^慙翼世反忤習也悞明也狂——^忤也復爲也。】

權慙<262-42>【應云古謂息於反多意謂之——^慙忤張呂——^慙々々知也。】

忼慙<262-51>【應云口葬苦代反——^{忼慙}大息也。一云壯士不得志也。】

恣腹<262-53>【應云又恣。虛頰反。說文丘涉反恐息也經攝非。】

阿慙<262-61>【應云虛六反。】

々^慙氣<262-62>【應云穠氣經——^慙許六反——^慙起也非】

恐慙<262-64>【弘云玄^(R)鞏^(H)反懼也・眞云又丘^(F)用^(R)反。オトス^(HH)

^(L)記・下應云又遽同渠庶反遽畏懼也急也。】

——^慙怖<262-74>【慈云恐者畏、怖者懼。】

二六三頁

恐懼<263-12>【音具《在上》オツ詩】

惛——^慙<263-13>【音闔】

惶怖<263-14>【慈云上胡^(L)光^(F)反悚也。下普故^(R)反怕也。——^慙者

驚懼也・上弘云恐也懔也・應云謂恩遽也・中云悚懼也・東云——^慙

怖悚懼也恐懼心不安——^慙々憂懼無所憩止貌・下應云又惛惶——^怖也・中云畏也・眞云惶也。】

惛^慙<263-33>【弘云蒲戒反疲劣也極也。】

儻<263-34>【應云ツカル^(LH)白】

恥<263-41>【弘云癡理反愧也。】

恥辱<263-42>【ハチハツ^(LH, LH)論】

慙愧^(R)<263-43>【弘辭甘^(L)反愧也。・中云小恥也。ハツ切・下弘云踣

饋反慙也媿字醜也。・眞云羞——^愧鄙恥也。ハツ^(LH)選】

無慙<263-53>【慈云卽尼捷子正翻離繫亦云無——^慙離三界繫縛也以其露

形佛法毀之曰——^{無慙}卽無羞也】

媿媿<263-63>【干云竝正。】

慚<263-64>【】

憬<263-71>【弘云九永^(H)反悟也。】

忍<263-72>【弘云如軫^(H)反強也含也・中云含客也。】

安——^慙<263-74>【眞云耐也。上阿干反寧。】

二六四頁

一^{〔恚〕}辱<264-11>【】

懲改<264-12>【季云音澄^{〔レ〕}古留^{〔レ〕}・弘云雉陵^{〔レ〕}反止也苦也恐也・應云革也安改革前失一曰一^{〔恚〕}也。ハシメ列】

怡懌<264-21>【應云音亦^{〔一〕}——^{〔怡懌〕}樂也。怡^{〔ハ〕}心之樂也懌^{〔ハ〕}意解之樂也悦懌^{〔ハ〕}樂也。懌怡也。經作液非・弘云服也樂也改也 ヨロコフ^{〔一〕}書】

悱々<264-31>【弘云孚匪反心欲動也・東云欲言之貌。案人之思事理欲言又《音同溺》憂也・玉云其口——^{〔悱〕}々乃後爲說也。心欲病也。】

怒憾<264-41>【弘云胡紺^{〔ハ〕}反恨也・應云怨恨也不安也又《上》動也。・公云感^{〔一〕}恨也。】

感<264-44>【今私且入戈部耳】

哀慟<264-51>【弘云徒^{〔一〕}貢^{〔ハ〕}反哀過也。イタム^{〔レ〕}律】

懊懣<264-53>【弘云於陸^{〔一〕}反忼《信曰午喚反貪也》也貪也懣恨也・應云於報反——^{〔懊懣〕}悔恨也。】

怡悦<264-62>【弘云胡^{〔一〕}拙^{〔一〕}反脱也樂也服也蘇也好也・應云怡懌悦樂也・中云以^{〔ハ〕}劣^{〔一〕}反懌也。音閱^{〔一〕} ヨロコフ^{〔レ〕}選 又音セイ^{〔一〕}選・眞云喜也。悦税】

々^{〔悦〕}可<264-73>【眞云可^{〔ハ〕}然也。——^{〔悦可〕}猶悦一也。又可蓋也。】

二六五頁

一^{〔悦〕}頭檀王<265-11>【信云又輸頭檀又輸頭檀那此云淨飯】

悒々<265-13>【弘云於斟^{〔一〕}反和靜貌。・應云性和也・東云安也漢明帝、使蔡——^{〔悒〕}を西方一尋佛^{〔一〕}。】

忸怩<265-22>【應云女^{〔ハ〕}竹^{〔一〕}反慙恥謂之一——^{〔忸怩〕}。下季云音尼^{〔一〕}——^{〔忸怩〕}慙愧意・弘云慙也慙^{〔慙〕}也】

熙怡<265-31>【公云音基伊和悦也】

十忍<265-32>【眞云十行之果也。——^{〔忍〕}可決定義。】

慍<265-34>【弘云女棘^{〔一〕}反愧也。】

娑慍<265-41>【音匿^{〔一〕}・東云惡也・應云他^{〔一〕}則^{〔一〕}反穢也邪也。ヨコシ^{〔ハ〕}詩】

惹<265-43>【弘云如^{〔一〕}耶^{〔一〕}反淹也詁諦也。・玉云又如灼^{〔ハ〕}反】

一^{〔惹〕}曳<265-51>【自羅 不空】

悵頭<265-52>【應云又惹。而者而斫反。佛刹名。】

悖惡<265-54>【弘云補^{〔ハ〕}潰^{〔ハ〕}反逆也亂也擾也・應云古慙。同蒲沒補

潰反。眞云ホチ(〇)

兇悖<265-64>【音背(Ⓔ)・眞云一「悖」惡一「悖」逆兇惡也・公云音背(Ⓔ)或作慙。

音發。サカフ《易也逆也》ミタル(ⒻⒼ)孝マトハス】

依憑<265-72>【弘云白(Ⓐ)陵(Ⓖ)反依也盛也竝也太也貪也怒也・魴云湧一

「憑」《古》ヨル(ⒼⒼ)集《依也》アツラフ(ⒼⒼⒼ)タノム(ⒼⒼ)サカリニ(ⒼⒼⒼ)選】

二六六頁

憑怒<266-12>【サカリニイカテ(ⒼⒼⒼⒼⒼ)選】

悞<266-13>【弘云古悞(Ⓖ)反悞也亂也擾也。・東云心昏迷也不慧一也。】

悞<266-21>【東云匹(Ⓐ)夷(Ⓐ)反伎一「悞」惡性也】

悖<266-23>【弘云仇營(Ⓖ)反單也獨也・東云無兄弟一也・玉云亦箴・魴云無兄弟曰一「悖」無男女一曰獨。】

怯憊<266-32>【慈云去劫反畏也劣也多畏也弘云持去也難去也東云

難《去》眞也怖也懼也懦也畏伏也・下應云怯弱經一「憊」奴的反思也傷也非ツタナシ(ⒼⒼⒼ)記眞云カフ】

驚愕<266-43>【「留志」云尊(Ⓐ)・應云或作愕」・慈云五(Ⓖ)各(Ⓐ)反驚也・弘云譁也愕也・東云眞言也擊鼓也。說文作悞。驚懼也。】

忿「愚」遽<266-52>【憲云倉紅(Ⓖ)反速也・慈云一「愚」は迫、遽は急也。・昉云古作忽・魴云遽也。】

心忪<266-61>【弘云青(Ⓖ)公(Ⓖ)反惶遽也。音與鐘(Ⓖ)同。】

忽「愚」<266-63>【魴云同上。正文。】

慾<266-64>【「類」云欲音」・弘云貪一「慾」也・類云出字林。】

惠樂<266-71>【音喜(Ⓖ)嬉(Ⓖ)・中云好・法藏僧都大般若玄文云案恤喜一

「惠」通一「惠」字勝・眞云忻也俗作憺或喜。同也・東云或全作喜悅也情好也。コノム】

二六七頁

喜憲<267-12>【干云上「喜」樂下一「憲」好。】

憲見佛<267-14>【中云或本喜非】

協「協」<267-22>【音狹(Ⓐ)・應云一「協」和也合也同也。・東云和心從心同心

會也卒也。又作劬、叶。カナフ(ⒼⒼ)ヤハラク(ⒼⒼⒼ)オヒヤカス(ⒼⒼⒼⒼ)】

協<267-32>【在十部】

迫協「協」<267-33>【應云謂以威力」相恐懼也。亦言脅紲《或言恐》脅。】

協協「協」<267-41>【干云上俗下正。】

不愜<267-42>【音篋^(S)・眞云一^愜伏也心伏也快也可也・東云心服也可心也當也怕也叶意一也心服快稱也一^愜々小息畏羅禍患也。或作恚。・玉云恚志滿也患禍也。・公云音狹^(S)カナフ^(LH)白タカフ^(LH)タシカ^(LH)遊マカス^(LH)眞云ケフ^(OL)】

字愜<267-61>【・應云君頰反依字一^愜可也一^愜快也】

耶忤<267-63>【類云悟^(R)音・東云送也觸也送心相觸也。・應云得一^忤曰疴。《苦駕》非體也。案】

犯一^忤<267-72>【應云又忤々逆不遇也。】

忙<267-74>【東云莫郎^(L)反怖也迫也心有所處也。】

二六八頁

懸遠<268-12>【「季云音玄^(L)」中云胡涓^(F)反遙遠也古作縣。遙遠也。又胡遍反甸四爲縣。新切韻一^懸縣異・眞云《平》挂也抗也連也。云々カ、レリ^(LH)記ハルカナリ^(HLOO)顔トリカケ】

懸鈴<268-23>【中云垂下也・眞云繫也。】

一^懸隔<268-31>【慈云一^懸謂一^懸遠隔謂隔絶】

愜^愜愜^(H)<268-33>【干云上俗、音腦】

懊一^愜<268-34>【音奧^(ウR)・中云烏皓反一一^{懊愜}恨也。又烏到反悔也

非此義。惚惚^(チウNR)】

煩一^惱<268-43>【ナヤム^(LH)遊】

懊^(H)懣<268-44>【應云今皆作惱同奴道反一一^{懣懣}憂痛也】

周憊<268-52>【類云章^(F)音・慈云懼也。一一^{周憊}懣忙驚懼也。周遍驚懼不安之狀或爲章字。周流也。下有惶布一應爲二周章^(L)。由下而走已爲二周章一此爲二一^憊體亦即怖也。・中云恐懼也。】

々^憊惶<268-64>【中云慈云悚慄名一一^憊。・季云音黃^(L)ヲノ、ク^(HH)後 惶■】

恐憊<268-72>【應云虛業^(T)反一^憊聞《呼隔》懼也。謂以威力一相恐懼也一^憊怯也脅畏迫。今皆作脅^(脅)。經作恟踰二非。】

二六九頁

恐恟<269-12>【見上注】

愁懣^(R)<269-13>【干云上通。】

懣^(L)懣^(L)<269-14>【干云上通】

懣哉<269-21>【選音決云音茂 ヨイカナ^(LH)後 眞云ム^(L)】

愁<269-23>【音茂^(R)恟怒】

慈意<269-24>【慈云梅恒利末那云——「慈意」。作音「寫誤」。普門品】

慈氏<269-32>【域曰梅咄麗邪唐言慈卽姓也舊曰彌勒訛略 慈云梵云梅

咀利耶古云彌帝麗或彌勒皆訛略也】

博^博「^博」(「五百七」)<269-42>【補各^博「反廣也太也大通也廣大無所不通也」

六博^博「^博」<269-44>【處行曰麴才晉書記云——「^{六博}」用卽用六著并有頭擲之

如雙六也。■藏 公云卽雙六者非。雙六者曹植作。而曹植仙人篇

詠古詩——「^{六博}」故。可在十部】

愁惋^惋「^惋」<269-61>【應云烏喚反——「^惋」嘆驚異也。】

惋手<269-63>【應云烏^反喚^反「^反」謂驚異也未詳何義立名。 涅槃】

博博<269-71>【干云上通。 ウタ、メクラス古 ヒロム^反選】

妬慙<269-73>【應云脾滅反惡也急性也。】

二七〇頁

懦弱<270-11>【應云奴果^反「^弱」反——「^懦」亦弱也。】

慙懦^懦「^懦」<270-13>【干云上通。】

懟恨<270-14>【音隆^反・應云怨也忿也忿怒之怨也。 古謝字】

儻^反「^反」<270-22>【應云或作籠。同祿公祿孔反。下三蒼作綰。同力

計反很——「^反」也謂役很戾剛強也。】

惡又聚<270-31>【慈云其——「^惡」又形如無食子。落在地——子多爲聚。故爲

喻・應云——「^惡」又樹名其子形如無食子。彼國多聚以賣之。如此間杏

人。】

倏爾<270-42>【應云知劣^反「^倏」短氣貌——「^倏」々憂也意不定也。】

伽儻<270-44>【應云又作癢懣蒲戒反「阿闍世經」云「此云世間解・又云

蒲夷反】

迦儻<270-52>【應云此云智。々者知世因「知世盡道」故名世智。世智知

世也。】

羸儻<270-61>【應云疲極曰——「^儻」。々疲劣也。】

伎收<270-63>【應云支豉紀致反依字「害也恨也。】

悠遠<270-71>【類云由^反音・應云長也遐也行之遠也。 ハルカニ^反選

】

悠哉<270-73>【オモフラム^反「^悠」詩 オモフカナ^反 オモフ

シヤ^反】

二七一頁

一^{〔悠〕}々<271-11>【トカスカナリ^{（〇LHLOO）}遊】

慄然<271-12>【應云莫禹反失意貌怪愕之辭也爲其不達已意而非之也意未言也。】

剛愎<271-21>【應云扶逼^{（ト）}反戾也恨也。弘云很也。モトル^{（L・H）}白】

悞敢<271-23>【應云古禍^{（H）}反一^{〔悞〕}勇也一^{〔悞〕}慙《胡濫》煞^{〔殺〕}敵爲一^{〔悞〕}。々勝也一^{〔悞〕}決之勝也《今》亦作果。】

惶悸<271-32>【無垢稱疏云一^{〔悞〕}者怯怖也。應云古瘁其季反心動也氣不定也。】

他侈<271-41>【應云音是^{（〇H）}又時移^{（E）}反依字一怙恃也。】

々^{〔修〕}羅<271-43>【應曰巨支止支反。】

耳一^{〔修〕}<271-51>【應云耳須經一^{〔修〕}時紙反恃也】

貪捰<271-53>【應云或捰。今亦婪。力南^{（L）}反貪也衆皆競進也。愛財一曰貪一愛食一曰一捰。】

謙恪<271-62>【應云古窻。苦各反。一^{〔恪〕}恭也敬也謂謙虛敬謙也。】

恭一^{〔恪〕}<271-64>【應曰口各^{（S）}反一^{〔恪〕}敬也恭也。】

惓惓<271-72>【應云眷戀文作一^{〔惓〕}非】

懈倦<271-74>【玄贊云渠眷^{（R）}反正倦懈也約也極也止也亦卷字或作倦不知所從。信云或勸勞也】

二七二頁

儻儻<272-13>【音籠^{（L）}戾^{（R）}・魴云心忪一^{〔儻〕}懜^{〔懜〕}・下魴云儻一^{〔儻〕}。】

懔一^{〔懔〕}<272-21>【應云一一^{〔懔〕}悲吟貌。又懔顔色懼貌。一^{〔懔〕}敬。】

愷<272-23>【益云怛。徒各^{（T）}切忠也正也。又池陌切。怛《同上》一^{〔愷〕}《同上》忖一^{〔愷〕}也愷也。】

愆<272-31>【類云先愆反敬。】

儻<272-32>【留志云劑音。イカル^{（HH・L）}詩】

惣<272-33>【魴云惣^{〔總〕}云々一^{〔惣〕}《同上正文。》在手部 スヘテ選】

忼懣<272-41>【應云宜駟^{〔駟〕}《烏甲》盧。今人謂黑貂一爲駟^{〔駟〕}盧貂一是。】

諸掇<272-43>【應云字亦作怨。渠記反所以連綴簪記之。】

恒懷<272-51>【應云姪孃煩擾也。經一^{〔懷〕}人向反一^{〔懷〕}憚。】

恒遲<272-53>【應云於急^{（S）}反一^{〔恒〕}不安也一^{〔恒〕}々不舒貌。】

惛感<272-61>【應云於緣^(L)反^一【惛】憂也悲也。言腹中^一【惛】包憤滿也。】

震懼<272-63>【應云徒頰^(S)之涉^(S)反^一【懼】懼也。經疊非・公云音攝畏也】

桃戲<272-71>【應云調戲、經^一【桃】非。】

檣々<272-72>【應云歔々、經^一【檣】非。】

恭敬<272-73>【今且附草部】

懷<272-74>【音槐】

二七三頁

懷<273-11>【弘云胡乖^(火イ)反歸也來也思也傷也和也德也深也止也至也

安也。ナツク^(LLH)書 ハラム^(LLH)記 ヤスシ^(LLF) イタク^(HH)

イタル^(HHL) オモヒ^(LLE)選 キタス^(HHL) 《來也》 ムタク^(H)

列 ヨル^(HL) ナツカシムス^{(□L)LLFHO}論 フトコロ^(HHH)禮

オモフ^(LLH)詩 フトコロニス^(HHHHF)禮】

一【懷】哉<273-23>【ヤスカラムヤ^(LHLLHH)禮】

倨傲<273-24>【眞^(ハ)・吾告反自高也。 オコル^(HH)孝・公云音告

(ハ) 慢也同傲^(ハ)。】

倣<273-33>【類^(ハ)ハ詮音 アラタム^(LHL)書】

悞<273-34>【音萱^(L) 恨也】

忙<273-41>【季云音亡^(ハ)】

恢<273-42>【季云灰^(F) 師曰比呂牟^[ハロム]^(LH)】

悝<273-44>【季云音灰^(F) 阿佐介留^[アサケル]^(HHHL) 又里音。】

恫然<273-52>【季音通^(F) 又《去》 宋云 イタシ^(LH)書】

一【恫】矜<273-54>【イタシヤム^(LHLLH)書】

恣<273-61>【留志云預音。・公云音豫^(L) 病除也。】

懷<273-63>【音渠^(L)・魴云恩又《去^一【懷】ハチ^(L)列】

恹<273-71>【季云音叨^(タウ) 過須久^[ス久]^(LH) 恹《坎》】

忱<273-72>【謹音・季云麻古止^[マコト]^(LHH) 又多須久^[タスク]^(LH)】

悌取<273-74>【季云音希^(キ)・慈云應作ニ希。願也・又曰^一【悌】者望也・中

云慈云^一【悌】者須也。願。亦作希。同・眞云與希同。望也。・公云

音飢^(ケ) 行圓云 ヤフサカル^(LHLH)】

二七四頁

應<274-21>【今且附草部】

憂<274-22>【今私附又部】

懷<274-23>【弘云力甚反敬也危懼也。】

作<274-31>【ハツ^(LH)列】

感<274-32>【今且附戈部】

九想<274-33>【眞云息兩^(H)反思像也。・珠云於毛布尔^{「オモフニ」(LH)}】

恠<274-41>【留志云旨^(H)音】

慄然<274-42>【應云呼麥^(T)反敬一「慄」乖刺也猶乖戾也。カツテ^(LH)

顔】

辯<274-44>【今且置雜部中。】

忼<274-51>【類云時世反串 タナヒタリ^(HH, LH)選^(「下敷」)】

忼<274-53>【音太^(R)・昀云奢。】

慙<274-54>【徒對反 ニクマル^(LH)書】

愛<274-61>【今暫付ヱ部】

恤<274-62>【音戊^(スキチ)・公云音出^(S) メクム^(LH) 眞云シチ^(OL)

スキチ^(OO)】

憶^(「憶敷」)<274-64>【音億^(イク)・中云相念也・眞云懷思想念也。行圓

云オモフ^(LH)】

一^{「憶」}在<274-72>【ソノカニ^(HH)白】

忒<274-73>【今爲弋部】

窺<274-74>【シゝタク】

二七五頁

怒<275-11>【オモフ^(LH)詩】

垂慘<275-12>【應云垂頰、經一^{「慘」}恃怙也謂母一爲一^{「慘」}。非。】

小<275-14>【中云私兆反 不大也。スコシキ^(LH)詩】

幼小<275-22>【眞云之兆反卑一^{「幼」}也。么《於堯反一^{「么」}謂幼也》也。】

𧈧^{「慶」}蟲<275-24>【應云慶蟲經作一^{「慶」}近字也】

梅怛々<275-32>【應云此云慈。即舊云慈氏者也。慈有二因緣。一值慈

佛一發心。二物發慈心三昧。因^て名^{たり}。言彌勒或梅黎並訛也。】

慄<275-43>【音蓮・魴云亡訓內典。】

悽<275-44>【季云音陵^(L)悽也 於豆^{「オツ」(H)}・弘云哀也悽也怖也。】

怱<275-52>【音佛^(s)・昀――【佛^(f)】鬱・魴云――【佛^(f)】鬱香。モトル^(L, H)記】

七 糸部

懇<275-54>【宋云音素^(r)】訴《說文同上》ウタフ^(SH)詩 ウレフ^(L)

^H選 シロツ^(LL) 又所革反】

慄<275-62>【選音決云音牒^(s) 眞云怱^(s)音】

――【慄^(l)】然<275-64>【トオソル^(OHH) トオツ^(OHL)選】

一忽<275-71>【唯識疏序釋云從十繭一出糸名――【忽】。比止余利乃糸^(r)

トヨリノイト^(LHLLO) 朱 爲憲口遊云 四分鈔批云算經云度始起於忽

蠶口初出名忽十忽爲一絲十絲爲一毫釐分寸尺寸】

二七六頁

銓輕重於毫忽<276-13>【文鏡秘府論】

糸<287-11>【類云覓^(s)音・玉云微^{【原作微】}連也細絲也。】

二八七頁

糸<287-14>【魴云正】

糸頭<287-21>【音繫・應云繼也繫也子孫相繼續^{なり}。・玉曰繫也・應云

戸帝反謂達第五比丘名也 ツク^(HL)後】

婆糸<287-24>【應云胡詣反。】

糸毗<287-31>【應云下弟反。】

絲絲<287-32>【干云上通・順云音司^(シ)和^(ト)以度^(イト)・玉云蠶所吐

也・東云蠶所吐縷也一蠶爲忽。十忽爲――【絲】也。――【絲】絃也。フ^(H)
選 クミ^(LL)詩】

經緯<287-42>【中云古靈^(r)反・恹云佛留教語也・慧淨云――【經】徑也先聖

後聖《同》所履故・眞云又歷也亦輕定反――【經】緯也・玉云常也法也

界也義度也織也徑也示也。――【經】歷――【經】久歷遠也從理也角謂之――【經】

也五音別名也絞也・慈云爲常、爲法、是攝、是貫。云々久也――【經】

營規求也。――【經】野謂爲里數也。理也度也 ツネニシテ詩 クヒル

^(HH, L)論 ノリ^(H)選 ツクル命《造》ハカル^(LH)詩 フル^(LH)

令 ノトル^(SLH)列 イツ^(LH)遊《河》ワタル^(HH)白 ヘタ

リ切・下順云音尉和ノ沼歧^{〔又キ〕}^{〔HH〕}謂一^{〔緯〕}則經は可知・弘云東也横織絲也・東云經一^{〔緯〕}也圍也亦作絹^{〔に〕}。一^{〔經〕}而死自一^{〔經〕}。凡地東西爲緯・南北爲一^{〔經〕}と。又云十兆曰一^{〔經〕}十一^{〔經〕}曰姪。・初學記云五一^{〔經〕}易書詩禮樂今取春^{〔R〕}秋^{〔H〕}》又三禮《周^{〔R〕}一^{〔禮〕}》^{〔一〕}、儀^{〔一〕}一^{〔禮〕}》^{〔一〕}、一^{〔禮〕}》^{〔一〕}記^{〔一〕}。》三傳《左^{〔H〕}氏^{〔R〕}、公^{〔R〕}羊^{〔H〕}、穀^{〔S〕}梁^{〔一〕}》。》易書詩曰九一^{〔經〕}一^{〔一〕}。】

二八八頁

一^{〔經〕}營^{〔288-21〕}【トメクル^{〔OHHL〕} トイトナムシトキ^{〔OLLLHL〕}選】

曾一^{〔經〕}〈288-22〉【ムカシ^{〔HHH〕} 白氏文集】

五一^{〔經〕}〈288-23〉【見上注】

九一^{〔經〕}〈288-24〉【見上注】

八一^{〔經〕}九一^{〔經〕}〈288-31〉【慈云西方織疊八縷九縷而爲一莖經織作疊時至疊堅緻如此方作云絲布四絲五一^{〔經〕}方可堅緻 伽曰由堅緻故顯蛟虻等不能侵損首足皆覆云々】

經經〈288-43〉【唐韻云上徒結^{〔一〕}反。孝一^{〔經〕}下一^{〔經〕}書。】

坐經〈288-51〉【應云徒結^{〔一〕}反。類云迭^{〔一〕}音。】

經於〈288-53〉【中云或作逕。一^{〔經〕}巡之字或作逕。】

一^{〔經〕}過〈288-61〉【中云捷作逕^{〔一〕}云、居經反。又音一^{〔經〕}々也。】

設一^{〔經〕}〈288-63〉【眞云歷也。】

十二部一^{〔經〕}〈288-64〉【】

一^{〔經〕}記〈288-71〉【應云佛去世後四百年中從說一切有一分一^{〔一〕}出此部^{〔を〕}。唯立一藏。言^{〔は〕}經是根本。律阿毗曇還解經藏^{〔一〕}。既不出經^{〔一〕}故立一^{〔一〕}也。】

二八九頁

素咀纒藏〈289-11〉【域云舊曰脩多羅訛】

素怛纒〈289-14〉【應云都達^{〔S〕}順云音藍和一度毛都奈^{〔トモツナ〕}^{〔LLLL〕}・玉云維船也・東云繫船紆《音昨》也繫船繩也・慈云一一^{〔素怛纒〕}經也・應云力暫反舊言修多羅或修妬路此云綫。】

素咀攬〈289-31〉【慈云經也】

素在〈289-32〉【音訴^{〔ソ〕}・應云本也空也謂空虛也。・玉云綿也預也故也所也廣也。スナホ^{〔LHH〕}易 シロシ^{〔LLE〕}詩 モトヨリ^{〔LHL〕}】

一^{〔素〕}衰鳴^{〔ソナノヲ〕}^{〔LLEH〕}〈289-43(補)〉【古一】

一^{〔素〕}月〈289-42〉【弘云上白也】

後一^{〔素〕}〈289-43〉【】

已〔素〕（四三））＜289-44＞【音錯・應云盡也。・玉云法也散也數也獨也・眞云繩也。】

索訶世界＜289-52＞【城云舊曰娑婆又娑訶皆訛 慈云此云堪々忍。々受諸苦事。故。天授出血。善星掃跡。等そ。應云娑各反。舊云娑婆或娑訶此云堪忍亦雜會世界。】

緣＜289-63＞【音鉛（エンレ）・玉曰又餘絹（R）反脩也・東云由也因循從也附也欺言也。メクル（HH_LL_H）選 ヨリテ（HLH）「〔ト〕」ノモト シタカヒテ（HH_LL_H）列 ツラナル（HHH_L）集 モトホシス（HHHH_L）】

無〔緣〕＜289-73＞【公任（ヨシナシ）（HH_LL_H）】

―〔緣〕タクリテ（ト）（（ト）HL_LHH）葛（ア）＜289-74＞【白】

二九〇頁

因〔緣〕＜290-11＞【眞云上於隣（レ）反仍也―〔因〕緣也。《―〔緣〕、》與專反附也因〔緣〕也・慈云―〔因緣〕有二義、一所由二道理・唯識云謂有爲法親辦自果此體有二、一種子二現行。】

等無間―〔緣〕＜290-22＞【眞云古閑反隙也・唯識云謂現八識及彼心所前聚於後、自類無間等而開導令彼定生。】

所―〔緣〕々〔緣〕＜290-32＞【唯識云謂若有法是帶已相、心或相應所慮所託此體有二、一親、一疎。】

増上―〔緣〕＜290-41＞【眞云上作僧反益也加也――〔増上緣〕與力不障義也・唯識云謂若有法有勝勢用、能於餘法、或順『或』或違。雖前三緣亦是増上而今第四除彼、一取餘。】

因―〔緣〕＜290-52＞【中云因―〔緣〕也・慈云―〔因緣〕者所以義。珠云―〔緣〕訓由惠奈利〔ユエナリ〕】

因―〔緣〕＜290-54＞【眞云慈云新云緣起。因事、立制戒、也。十二分教。】相―〔緣〕＜290-62＞【眞云平聲因循從也。禮記云明王以相―〔緣〕。鄭玄云―〔緣〕猶因襲、也。】

―〔緣〕種現生＜290-64＞【憲云慈云是―〔緣〕籍義（なり）非―〔緣〕慮義（には）。】

緣起＜290-72＞【湛然曰述所記之興致述教法之所由】

―〔緣〕覺＜290-74＞【應云又云獨覺。舊經云占佛又辟支佛又辟支迦或具支迦皆訛。】

二九一頁

緑〔緣〕＜291-13＞【眞云良玉（ト）反青黃色也・玉云青也。ミトリ（HH_LL_H）詩眞云ロク（HH）】

―〔緣〕青＜291-21＞【順云一名碧青俗音祿省】

―〔緣〕豆子＜291-23＞【慈云伽抄云即摩訶沒特伽羅宗輪所云採菽氏也舊云

大目捷連廣說此緣如彌勒疏】

索縷<291-33>【眞（ト）主（ト）反絲也線也・東云線一【縷（ト）也與忽一相似也。
緝也麻紵之端也繫馬一曰維一繫牛一曰一【縷（ト）。結一【縷（ト）草名・玉云縷也
敗也。】

縷線<291-44>【信云力禹反線也又謂於之行弊者也。】

綫（縷）<291-52>【順云訓與縷一同。以度須知（イトスチ）（LLLLH）・東云正作一
【綫（ト）。・魴云古。】

線<291-54>【應云今（ハ）綫。私賤（ハ）反謂縫衣縷也。所以縫紵者也・玉云古
文・東云縷也・魴云絲也。】

線綫<291-63>【干云竝正。】

綫<291-64>【類云俗通又延音 玉云冠上覆也・魴云俗。】

綫綫<291-72>【類云宛（ト）延（ト）音・慈云有作蛭蟬二形。非。案諸書一【縷（ト）
結也結冠也綫綫也冠也綫（ハ）冠上覆也。冠前後而垂者不可車上（ハ）重一
敷（ハ）冠覆一。今理應作（ハ）婉美之婉、席蓐之筵（ハ）。文蓐華氈之類綺麗席。
——【縷（ト）爲茵蓐一不知義何所從・應云相傳坐蓐也未詳（ハ）何語。・上玉
云平紬也・東云又紬一【縷（ト）坐褥一也・又弘云餘戰（ハ）反冠上覆也・中
云古云——【縷（ト）外國精絹。 眞云エン（ハ）エン（ハ）】

二九二頁

縫綻<292-32>【應云徒覓反補縫也】

紋（綻）<292-34>【俗】

單縫<292-41>【音逢（ト）・應云以針一【縫（ト）衣一也。經撻非・東云以鍼一紵
《音秩》衣一也。補合也。又ヘル（ハ）詩 又ヒメ（ハ）】

絳<292-44>【「音降（ハ）」・玉云古贛反赤繪也。】

馬齒縫<292-51>【信曰以口相傳每葉之上相去四五指許橫縫是形似馬齒
間閑文者也】

鳥足（縫）<292-54>【信云前之橫縫每末二道閉形似鳥足張者也】

線（縫）<292-63>【信云紵也會也紵治銍《猪慄》反】

緹縹<292-71>【音體（タイ）・應云赤一【縹（ハ）緇色也帛の赤と黄色 なるなり也。淺
絳也一染謂縹是反一【縹（ハ）□也。赤黄色□也。・東云帛丹黄色也。陸
啼（ハ）音縹也衣服好也。・季云西京賦——【縹（ハ）師曰阿加之（ハ）】

二九三頁

囉緹<293-12>【音同上。】

々（縫）麗<293-13>【應云木名。】

習緒<293-14>【應云辭呂反業也事也餘也謂殘余也。大集云斷習氣】

是。東云絲端也謂端一【緒】也末也。】

弓一【緒】<293-23>【允云此云由都利【ヒツリ】(LLLL)】

事一【緒】<293-24>【】

緬(H)<293-31>【類云愔音・玉云微絲也。ハカルニ(LHO)集】

緬【緒】<293-33>【魴云正文】

純洪【韻】<293-34>【類云淳【スキン】音・應云謂專【(精)】一不雜也大也好也。

經作醇《不澆酒也》・又作淳濃之淳。其義一云・中云一【純】一也類音云不雜也・眞云至美也篤原也・玉云令也緣也文也皆也篤也專也。・昀云常倫【(レ)】反粹。之閏【(R)】反福廣。之允【(H)】反緑・魴云又《音與淳【(F)】同》唐天子憲宗之諱。モハラ【(HLL)】易 オホキニ【(LHLL)】書アツク【(HLL)】詩 イト【(HLL)】論 オモヘラク【(LHLL)】遊】

綃縠<293-61>【應云私遙【(L)】反生絲繪曰一【綃】。・東云蕭【(F)】霄【(F)】二音生絲綃也綺屬也一【綃】謂之綃也幕也。又疎交也・玉云繪名也縵也生絲也素也緯也 カトリキヌ【(HHLL)切】

絹<293-72>【玉云居椽反絹也總也縠一【絹】也。・初學記云舊制人間所織一【絹】布等皆廣二尺二寸長卅尺一爲一端と・順云和ノ歧沼【キヌ】(LH) カトリ】

二九四頁

純<294-12>【音與遁【(トNH)】同・魴云苞裏也。 ツム【(LLEH)】詩】

純陀<294-13>【域云准陀舊曰一【純陀】訛】

縫縵<294-21>【應云於通反縵衣也合袂曰縵也】

縵縵<294-23>【順云音兼【(F)】和ノ賀度利【カトリ】(HH)・玉云縵之繪・下東云音裏【(ヤウNF)】縵也桑也縵也染繪淺黃色似桑初生也縵一【縵】又《音同霜【(H)】》】

縵<294-33>【季云音裏【(ヤウNF)】・玉云馬一【縵】也帶也・順云和ノ波良於比【ハラオヒ】(LLEH)】

縵衣<294-41>【順云音與催【サイ】同一【縵衣】和ノ布知古路毛【ワチコロモ】(HH)・應云死三日生者成服曰一【縵】と。々摧也。言は傷摧也。一【縵】に 有錫一【縵】有疑一【縵】有總《音歲》一【縵】也。】

縵縵<294-61>【慈云疾陵【(L)】反帛也織一【縵】也通五色皆曰一【縵】。雜帛曰一【縵】。綾錦之屬・玉云似登反總也・順云漢書竹說讀與縵同。・下應云音曠【(R)】・慈云絮也綿也軟錦之類絮之細者曰一【縵】。ワタ【(L)】集眞云ノ【(LN)】ウ【(HN)】】

圭織<294-64>【順云音職【(シ)】訓於流【オル】(HL)・玉云成也。クム【(LH)】

臥一【織】<294-72>【順云久都比歧【クツヒキ】(LLELL)】

々^{【織】}躡<294-73>【万祢岐^{「メネキ」}（^{「レ」}）】

—^{【織】}複<294-74>【井乃阿之^{「キノアシ」}（^{「HH」}）】卷繪^{「者也。」}】

二九五頁

促—^{【織】}<295-11>【和^{「ハタオリメ」}（^{「HHHH」}）鳴聲如急織機^{「故名。」}

蟲多類】

駢—^{【織】}<295-13>【音志 保比^{「ホヒ」}コレリ集】

—^{【織】}師<295-21>【信云之力之貳反作布帛^{「之總名。」}下所緇反衆也。】

絨<295-23>【玉云上古字】

絛<295-24>【玉云上古文。】

綜習<295-31>【應云子宋^{（^{「文」}）}反領也習也—^{【綜】}理經^{「者也。」}機縷也。持絲文^{（^{「文」}）}者也屈繩制經^{「令得開合」也。}東云開合也機上織具也・珠云集也・順云和^{「（^{「レ」}）」}問^{「（^{「レ」}）」}スヘタリ^{（^{「H・OO」}）}選】

錯—^{【綜】}<295-42>【應云錯要其文—^{【綜】}理其義^{「也。」}借厠也。言相間厠也。
—^{【綜】}總也總括文義^{「也。」}—^{【綜】}紀也理也紀領絲別也。】

絞絡<295-51>【音狡^{（^{「カウ」}）}・中云縛也索繩也或本交義旨疏・東云—^{【絞】}縛也切急也紕繩索—^{【絞】}々刺也。又《平》蒼黃色也縊也案縊人^{「經死。」}・下類云落^{（^{「レ」}）}音・中云繞也縛也・玉云繩也縊也絮也。マ{ト—

ツ}フ^{（^{「HH」}）}選 メクレリ^{（^{「H・OO」}）}】

—^{【絞】}縊<295-63>【クヒリクヒル^{（^{「HH・LHH・L」}）}】

絡埰<295-64>【順云太々利^{「タハリ」}（^{「LH」}）】

絡石<295-71>【順云一名領石。苞石木^{「而生故名。」}和^{「都太」}（^{「H」}）葛類】

—^{【絡】}囊<295-73>【信云卽鉢—^{【絡】}也或名鉢囊或言鉢—^{【絡】}々力九反緯十絲爲—^{【絡】}又力各反】

二九六頁

繪車<296-12>【順云音會^{（^{「R」}）}・應云又纁。雜色也。論語—^{【繪】}事後素^{「也。」}鄭玄曰畫也。尚書山龍華蟲曰—^{【繪】}。孔安國曰—^{【繪】}會也、會合五采^{「也。」}舊經言種々車園。】

綺—^{【繪】}<296-23>【應云有文^{「曰綺」}五采曰—^{【繪】}。々畫也。】

錯纁<296-31>【音廻《去》・應云論語《如上注》・玉云縹布冠—^{【纁】}綾諸侯齊冠也似纂色赤也織餘也・東云畫也說文作繪。織也畫文也。
吏記—^{【纁】}事後^{（^{「フチ」}）}素^{（^{「シロキ」}）}・益云丘謂切紐—^{【纁】}也 エ力

イテ^{（^{「LHH」}）}】

纁^{【纁】}<296-43>【東云又作—^{【纁】}。】

功績<296-44>【應云今勳。子歷^(T)反。緝《信云且入^(T)反績。》也功也・玉云功勞也繼也事也業也成也・東云《又音同積^(シR)。》緝麻紵^一也。・順云字牟^(ウム)^(LH) フウム^(RLH) ヤシナフ^(HHO) 孝《音赤》】

相續<296-61>【音俗^(S)・中云繼連也。ツク^(HL)記】

績繳<296-63>【選音決云音灼^(S)・應云生絲縷也贈《子登》之狀者也。

結^一【繳^(S)於矢^一謂之贈^一也。謂贈之射者也。】^一【繳^(S)纏^(S)也。・順云鷹綜

宜可用此字敷。】^一【繳^(S)マキメクラス^(HLHH,HL)記】

纂修<296-74>【應云子卯反。字或作續繼也繼前修者也・玉云似組赤黑。】

二九七頁

纂集<297-13>【弘云衣良布^(エラフ)】

續<297-14>【玉云子卯^(H)反繼也。ツク^(HL)集】

纂續<297-21>【干云上^一【纂^(S)組、下^一【續^(S)繼。】

綺續<297-23>【應云綺嬾經^一【續^(S)非。】

縞<297-24>【玉云上字。・季云選曰^一【縞^(S)師曰加久^(LH)】

尋繹<297-32>【類云亦^(T)音・應云理也^一【繹^(S)抽也解也・玉云陳也長也事也終也充也。タツヌ^(LH)論】

絪<297-41>【玉云胡^(L)卦^(R)反礙也懸也持也止也獨也・順云和^(S)之計以度^(シケイト)^(LHLH) 然云^一【絪^(S)者卦也亦預也 眞云火イ クエ】

綱紀<297-44>【類云剛^(カウネ)音・憲云^一【綱^(S)紀^(S)大繩維^一持諸小索^一也。・下音^(キ)^(H)・玉云識也基也錄也會事也節理也。シルス^(HL)選 クリ^(HL)孝】

年紀<297-54>【慈云十二年爲^一【紀^(S)と。々記也。・中云^一【紀^(S)日也時日也。】

疑網<297-62>【慈云文兩^(H)反疑前如^一【網^(S)羅生^一難^(S)出。・中云罟也取魚^一具也。】

魚^一【網^(S)<297-71>【見後漢書】

罟^(フエ)^一【網^(H)<297-72>【ノアミ^(OL)選】

網<297-73>【玉云無往反羅罟^(S)總名。】

梵網<297-74>【見木部】

二九八頁

々^(網)他<298-11>【憲云^一【網^(S)罟結綱所以^一【網^(S)魚。】

納處<298-13>【中云奴^(L)答^(T)反受也・眞云内也・玉云藏也。イル^(HL)易 フサム^(LH)後】

^一【納^(S)衣<298-21>【中云上宮王云^一【納^(S)猶綴衣。】

吐^{【納】}〈298-23〉【ノタヒ申^(H L H O) ー^{【納】}は啓於上¹吐^は令於下。】

獻^リー^{【納】}〈298-31〉【イル^(H L) 選】

委細〈298-32〉【音聲^(セイ R)・中云小也・眞云微也・憲云精也。ホソシ^(L H) 論 クハシ^(L L H) 書 スコシキ^(L L L F) 記 ツラ^{／＼}^(L H L L) 遊】

ー^{【細】}々〈298-41〉【季云遊仙窟云ー^{【細】}讀保曾夜賀奈利^{【ホソヤカナリ】}サ、ヤカナリ】

子ー^{【細】}〈298-43〉【コマヤカニシテ^(L L H L O O) 遊 クハシ^(L L F) 集】

紬〈298-44〉【音抽^(L)・玉云大絲繪也・東云繹也探ー^{【紬】}尋繹義理也綾也似絶¹而緊也。麤繪以綿¹爲經緯¹也。・魴云麤絹曰ー^{【紬】}。・順云和ー都无歧^{【ツムキ】^(L L L)} ツイテ^(H L H) 選《續也》】

綢繆〈298-61〉【音同上・玉云韜也纏也。・下應云亡侯反ー^{【綢繆】}纏^(經) 綿也・魴云ー^{【綢繆】}情與意¹相密貌・季云末豆倍利^{【マツヘリ】^(H H L H)}】

縑素〈298-71〉【季云音留^(シ F)・玉云黑・東云黑色見。縑布冠名。凡染黑七入曰ー^{【縑】}。黑色繪也赤黃色也僧服也。】

二九九頁

縑^{【縑】}〈299-11〉【類云俗通】

紳〈299-12〉【季云音申^(シン F)・玉云束也大帶也。】

紉繩〈299-14〉【玉云女^(H) 巾^(F) 反索也襞也・應云單繩曰ー^{【紉】}と・東云ー^{【紉】}針也繩縷也。又《去》單繩末合也禪也。ムスフ^(H H L) 集】

阿紉〈299-24〉【應云女珍反】

紐〈299-31〉【應云女^(H) 九^(H) 反。經作伬。非・玉云絲采^(丑敷)・東云結也冠上鼻也束也。案束謂纏縛也結帛爲之也。糸也一曰結可解¹者。ヒホ^(H H) 集 ムスフ^(H H L)】

毗ー^{【紐】}〈299-42〉【 ー】

面縐〈299-43〉【應云面皺經作ー^{【縐】} 借字】

総〈299-51〉【類云忍音】

強ー^{【総】}〈299-52〉【ロハクネキ詩】

作紉〈299-53〉【應云渠記反所以聯綴簪記之也】

纍〈299-61〉【慈云力委^(H) 反積也・中云又紵。・玉云力雖反繫也素也綸也。】

累〈299-63〉【玉云上字・季云末豆不和^{【マツフ】^(H H L H)} ツラフ^(H H L) 易力サヌ^(H H L) 論】

曾ー^{【累】}〈299-71〉【カサナリ^(H H H L) カサナレリ^(H H H L H)】

々^{【累】}却〈299-72〉【慈云力委反積也。】

囑^{【異】}〈300-73〉【見口部】

縲^{【縲】}〈299-74〉【音界之平聲下音薛^(T)・應云縲^は是繫也、縲^は是索也。所以拘罪人一也。・上玉云落也・東云絡謹案謂網絡。】

三〇〇頁

縲^{【縲】}〈300-14〉【音薛^(T)・魴云繫也。】

縲^{【縲】}〈300-21〉【魴云縲^を一^{【縲】}縲《同上古俗》類云俗、又云縲^一【縲】二正先結反黑繩。】

縲^{【縲】}〈300-23〉【】

縲^{【縲】}〈300-24〉【俗】

縲^{【縲】}〈300-31〉【廣益云音泄^(T)繫也。】

縲^{【縲】}〈300-32〉【魴云音薛^(T)縲^一【縲】古獄】

縲^{【縲】}〈300-33〉【玉云居兩^(H)反落也錢貫也。・下音保^(H)・玉云小兒衣。】

結^{【結】}〈300-41〉【玉云徒愷反疑也緩也也 イツハル^(LHL)記 アサムク^(HH)】

四身繫^{【繫】}〈300-43〉【眞云古計反縛也。食^一【身繫】、瞋、戒禁取、執取。

具云此實執取身繫。】

繫^{【繫】}〈300-52〉【干云上通・類云計^(R)音・中云縛也・眞云係也係束也今亦

作^{【繫】}。連綴也。ツナク^(HHL)易 カ、ル^(LHL)詩 トラフ^(LHL)後ユフ^(HL)集】

幽^{【繫】}〈300-62〉【上宮王云在囹圄^一爲幽^一有枷鎖^一曰^一【繫^と。】

一^{【繫】}念^{【繫】}〈300-64〉【應云古繼、一^{【繫】}、今作係^に。々結束也連綴不絶^一也。】

檢^{【繫】}〈300-72〉【中云慈云牢也閉也拘也縛也。】

紹繼^{【繼】}〈300-74〉【應云市繞^(H)反^一【紹】繼也謂繼^一續先宗^一□^{【也】}。諡法曰

疏遠繼位曰^一【紹^と。】・玉云緩也取也。ツク^(HL)書 アサムク^(HH)後

・下宋法花云音計^(R)・中云續也今俗作繼^に・玉云餘也・信云

又作繼繫係大同續也綴也束也 ツク^(HL)易 ツラヌ^(HH)月 眞云

セウ^(LH)】

三〇一頁

繼^{【繼】}〈301-24〉【干云上通 ツク^(HL)選】

繼邁^{【繼】}〈301-31〉【應云^一【繼】續也、邁往也。謂相續而往也。】

統攝^{【統】}〈301-33〉【眞云他宋^(R)反總也又他孔反 スヘテ^(HL)選 眞云ツウ^(LHN) トウ^(LHN)】

結縲^{【結】}〈301-41〉【應云爾雅傳橫目孫炎曰二輔曰^一【結縲】。今關西饒之。俗名句屢草。律作茄萋。案茄說文加^(F)、歌^(F)二音。爾雅荷芙萋其莖

茹。此則於義「無施。花麤字未詳所出。一本作茹《・信云音加》蘆力胡^(L)反爾雅葭蘆璞曰卽葦也。蘆當誤「耳。」

々^{〔總〕}陳<301-61>【應云力主反言^ハ數如絲^一^{〔總〕}「多難陳」也。經屢非。」

絙<301-63>【玉云胡官^(F)反綬也 東云又五劉反繩索也經也 ワタレリ選】

結<301-71>【音絜^(T)・中云^一^{〔結〕}縛也・玉云成也構也旋也要也交也締也詘也。ムスホヽル^(HHH,HL)詩 カタナス^(HHH)老子^一】

一^{〔結〕}髮<301-74>【ヲアケテ^(OHL,O)白】

三〇二頁

一^{〔結〕}高<302-11>【信云櫟棹律^一^{〔結高〕}】

紇多<302-12>【應云胡沒^(T)反神名。」

紉羊<302-14>【應云似均昌緣反^一^{〔紉〕}謂雜縷也。」

五^{トド}繩<302-22>【ヌヒメセリ^(LLOO)詩】

絶<302-23>【中云情雪^(S)反斷也・玉云截也廢也滅也落也。タツ^(LH)詩
タエンタル^(LHL,H)選 スクレタル^(HH,LLH)後 ステヽ^(HLH)集】

一^{〔絶〕}阮<302-32>【タニヲワタル書】

妙^一^{〔絶〕}<302-33>【スクレタル物^(□[HH,LOO])遊】

氣^一^{〔絶〕}<302-34>【スヽナシ^(LH,LLH)遊】

絶^{〔總〕}<302-41>【順云音與施^(シ)^(F)同。和ヽ阿之歧沼^{アシキズ}^(HHH,L)】

離^一^{〔絶〕}<302-43>【應云式移^(F)反】

紆卷<302-44>【應云側耕反^一^{〔紆〕}繫繩也江河之間謂縈收繩^一爲^一^{〔紆〕}。々亦屈也。河彌善反。」

如縲<302-53>【應云古恒反大索曰^一^{〔縲〕}。々亦繩也。經絙非。」

如絙<302-61>【應云胡官^(F)反。見上注・玉云綬也・東云又五劉反繩索也經也。ワタレリ^(HHH)選】

爲總<302-64>【應云音歲蜀白細布也。凡布細而疏者謂之^一^{〔總〕}。」

重級<302-72>【應云音急^(S)次□^{〔也〕}謂階^一^{〔級〕}而升^一^{〔級〕}「^{〔級〕}是^一」^{〔級〕}階次也謂階之等次曰^一^{〔級〕}・東云階之次序也階^一^{〔級〕}也絲次第、階等也官之等次。」

三〇三頁

節^一^{〔級〕}<303-13>【シナヽ^(HLL)律】

一^{〔級〕}其<303-14>【應云階次也謂階之等數名曰^一^{〔級〕}案師旋斬首一人賜爵

一「^{〔綴〕}」。因名賊首「爲一^{〔綴〕}」】

周給<303-23>【音上同・中云賑也・眞云供一^{〔給〕}□^{〔也〕}・玉云供也及也足也備也 トキ論】

供一^{〔給〕}<303-32>【タテマツリ物^{（LHHHHH）}遊】

不暇一^{〔給〕}<303-33>【イトマアキツカス^{（LLHLHH、L）}選】

一^{〔給〕}使<303-41>【中云事也。】

一^{〔給〕}孤獨園<303-42>【眞云應云可言ニ阿那他。此云無親。舊義^{もて}譯孤獨一也。賓茶駄寫耶此云搏與。舊義類給一也。是須達多《此云善與》別名也。古云阿那那那或阿藍。皆訛略也。】

袂<303-54>【カサル^{（HH、L）}詩】

縱橫<303-61>【慈云即容之用反。南北曰一^{〔縱〕}東西曰橫。廣輪。々は一

「^{〔縱〕}」廣^は橫。有作縱。不知ニ所出。・又音從^{（L）}・應云從長也・然云

一「^{〔縱〕}」字平聲從淺一潛深一名之「爲一^{〔縱〕}」・眞云慈云豎也。・玉云恣

也放也縱也買也亂也緩也。タトヒ^{（LLL）}易 ホシマ、^{（LRHH）}書 ハ

ナツ^{（LH）}記 ユルス^{（LH）}論】

三〇四頁

縱奪<304-11>【憲^{（H）}ニ反緩也。】

一^{〔縱〕}捨<304-12>【中云亂放也】

一^{〔縱〕}心<304-13>【眞云足用反亦從從從夫六十而耳順七十而一一^{〔縱心〕}也恣也】

一^{〔縱〕}蕩<304-22>【憲云慈云一^{〔縱〕}謂一^{〔縱〕}恣、蕩謂蕩逸。】

紆鬱^{〔鬱〕}<304-24>【應云伊于^{（ウ）}反屈也縈也曲也。鬱哀思也心不安也。

マツフ^{（HH、L）}集】

縈^{（L）}一^{〔紆〕}<304-33>【トウツワク^{（OLLH、L）}水一一^{〔縈紆〕}】

一^{〔紆〕}伏哆<304-34>【應云衣于^{（ウ）}反】

爲紆^{（H）}<304-41>【音佇・應云籀《苦迴》屬細一者爲紆^{（L）}。《七泉》布白

而細曰一^{〔紆〕}。亦草名・東云麻之類也・順云上聲重今案一^{〔紆〕}布俗用

手作布三字云天都久利^{〔テックリ〕}^{（L、H、L）}是一^{〔紆〕}布歟。ヌク集 アサ

ヌク】

寔繁<304-53>【宋云音煩^{（L）}・應云輔袁反多也盛也・玉云扶元反馬髮・又

云扶藩反多盛也。シケシ^{（L、H）}選】

無繁<304-62>【眞云或作煩。文異、義同。】

一^{〔繁〕}者<304-64>【應云薄何^{（L）}反】

緡<304-71>【音與繁同・弘云扶元反冤也有人云 ヒロク^{（HH、L）}】

織長<304-73>【宋云音拈^(ヤン)鐵今通作載。凡從載者倣此に・應云一^{【織】}小也細謂之一^{【織】}。經載。非・眞云細也好也微也。文從女^一作嬌^一非。下平聲不短也・公^一云音占^(ト) ホソシ^(ル) 累經白緯曰一^{【織】}。儉嗇也。】

三〇五頁

封緘<305-21>【應云古咸反束索也篋也亦閉也。】

一^{【織】}婆<305-23>【應云《同上》石名。依字^一索也束篋也。】

絺一^{【織】}<305-31>【應云敕夷古咸反。】

一^{【織】}麗<305-33>【應云滅麗、經一^{【織】}。非。】

縵<305-34>【玉云且各^(ト)反參也・東云參一^{【經】}也今爲錯。又蘇可^(ト)反鮮潔貌又楚宜^(ト)反】

縛祇<305-43>【應云一種等首眞人。餘經作家々。須陀洹命絡。】

一^{【縛】}葛河<305-51>【應云舊云博又或薄又、婆又、虞又。此云青河。從池北面頗梨師子口^一流出。】

褰縮<305-54>【慈云所六^(ト)反短也或作茜・眞云退也・玉云斂也盡也止也亂也綸也蹙也縱《東西爲一^{【縱】}》也約束之名也・東云不伸也以繩^一束板^一也。亦作縮。引也聚也縱也繩謂之一^{【繩】}。シ、ム^(ル) 詩ユヒツク^(ル) 眞云宿^(ク) 音】

縮^(タム)<305-72>【】

舌一^{【縮】}<305-73>【應云一^{【縮】}退也。經宿非。】

一^{【縮】}鼻<305-74>【信云所陸反從也直也止也亂也】

三〇六頁

総^{【總】}布<306-12>【類云捻^(ト)音・玉云合也普也皆也最也結^(ス)也聚束也。・應云音念^(ト)輕絲絹曰一^{【總】}。々青白色也・順云和^一布散^{【サ】}】

總^{【總】}<306-21>【宋云一^{【總】}摠上同。惣俗。】

纏^{【纏】}縛<306-22>【音厘^(ル)・玉口^(ト)約也。マツフ詩 眞云田音・下中云苻釁反繫也・眞云繫束也・珠云由比旦^(ル) マツフ^(ル) 白ユヒツナク^(ル)】

纏^{【纏】}<306-32>【魴云繞也縛也圍也。】

纏<306-33>【魴云同上俗文。】

纏<306-34>【宋云】

纏^{【纏】}<306-41>【宋云俗。餘皆放此に・中云繞也。】

縛<306-42>【眞云本房攪^(ト)反。全 眞云亡我反。卅二字】

面―【纏】<306-44>【シリヘテニシハラル（シリル、シリル、シリル）白】

圍繞<306-51>【音遶（リ）・東云纏―【纏】也・慈云周廻曰圍、坐匠曰―【纏】（リ）。
メクル（リ、リ）記】

纏縛<306-54>【應云力前反―【纏】縷不解也】

皮―【纏】<306-62>【應云皮連古聯連續也連合也律作―【纏】】

終<306-64>【音衆（リ）・中云畢竟也・眞云卒也畢竟也・玉云極也竟也成也窮也・魴云畢也窮也―【終】南（リ）山の名 ヲハリ（リ、リ）選 ヲフ書云
𪛗《ツヒ（リ）》ヲハリ（リ、リ、リ）》注云―【終】字。】

三〇七頁

―【終】頭<307-11>【ハテツカタ集】

綺<307-12>【眞云虛彼綾文彩雜也・玉云有文繪・應云有文―【綺】と・順云俗云平聲之輕和ゝ加牟波太（カムハタ）（リ、リ、リ）―云於利毛能（オリモノ）（リ）】
（リ、リ）カトリ集 シロシ 眞云（リ）キ】

―【綺】靡<307-23>【眞云瑤云鮮好婉約美麗貌。】

縞素<307-31>【音誥（リ）又杲（リ）・玉云白色也練也・東云素也砥《此扇》鮮支也。案鮮支絹也。砥謂杆《古旱》治之也。絹練者亦名―【縞】。繪之精白者也。―【縞】冠祥之冠也。赤經白緯―【縞】也絹屬也。カトリ白 シロシ】

明練<307-43>【音鍊・中云鎔（トロシ）金、使を精、曰鍊と。煮て絲、令を熟、曰―【練】（リ）。今謂善知精熟、故云明―【練】也。明は簡也。謂簡―【練】分明也。ネル（リ）集・東云素帛也繪《熟絹》也。古與鍊凍同。今別。】

―【練】絲<307-54>【ネリイト（リ、リ、リ）】

―【練】磨<307-61>【慈云―【練】謂陶―【練】、磨謂磨瑩。即修治義・眞云正練・應云古鍊々冶金也】

練【練】<307-64>【眞云正】

練<307-71>【眞云鍊經多作―【練】。帛―【練】也。古通、今別也。】

―【練】樹<307-73>【應云棟樹。經―【練】。非。】

綾<307-74>【順云音凌（リ、リ、リ））和ゝ阿夜（アヤ）（リ）・玉云似綺細也。】

三〇八頁

網縵<308-12>【音曼（リ）・應云借音莫盤反謂肉―【縵】其指間也。字體作輓。々覆也。經輓非・玉云―【縵】樂は雜聲之和樂者也。雜并也。車無文―也。繪無文―也・東云凡無文、錦皆曰―【縵】。賜衣、曰―【縵】。表裏也。樂亂而無文、曰―【縵】。不緊也。又無敗反魚也。】

縹<308-31>【類云秀音・玉云五采也・東云刺五色線、以成文―也。錦名也文繪也・順云和ゝ奴牟毛能（ヌムモノ）（リ、リ、リ）・信云畫繪之事五綵俗謂之―【縹】（リ）。】

麻縵<308-41>【音溫^(ラ、F)・應云一問反一^{【縵】}亂麻也經蒞^{【紆文^(L)】}《紆文^(L)》非・玉云帛也縛亂也・東云袍也縵也舊衣也又於云^(L)反亂麻也。又《上》以麻著《張盧》衣也。赤黃色。又《去》束草舊絮。】

一^{【縵】}摩<308-52>【應云於雲反。】

縵衣<308-53>【信云相傳云無葉衣也莫旦反繪無文者也】

一^{【縵】}著<308-61>【應云輓著、文一^{【縵】}非。】

婉約<308-62>【眞云央略^(T)反一一^{【婉約】}和順妍美貌・東云要約也言語要也束也纏也屈曲一^{【約】}束也儉薄也纏束也誓信也期也少也繩也綸也又一豹^(R)反靴一^{【約】}也。又於妙^(R)反束也。和々余曾閑流^{【ヨソヘル】}ツハ、マヤカニ^(L、L、L、H、O)易セハ^{【シ^(L、L、L、O)論} ユヒツク^(H、L、H)詩ユハフ^(H、H) ムムテ^(L、H、H)律】

三〇九頁

一^{【約】}束<309-12>【常騰云倭云都止米波下万須^{【ツトメハケマス^(L、L、H、L、H、L)・又云伊比乎佐牟^{【イヒササム^(H、L、L、L、H)】}】}

約誓<309-14>【ウケフ古】

指約<309-21>【眞云於略^(T)反纏束也屈節也。信行云謂手足衆指每節一横文分明顯了也。又去聲非此義一矣・公云音券^(L)文^(L)貌。正可作二^{【綯】}綯に。或常音屈節也。玉篇綯字俗作從勾。而^{【約】}聲類作一^{【約】}。云々上^{【有指】}有指

圓節骨不現之好一猶非屈節一歟。眞云ヤク^(L、L)】

綯藻<309-41>【玉云許縣^(R)反遠也・應云文成曰一^{【綯】}と。亦文章貌・東云詳遵反《音同句。》繞也・公云音券^(L)《如上》アヤ^(L、L)記】

約^{【綯】}<309-44>【玉云上字。】

綯<309-51>【玉云求俱^(F)反救也。】

綯<309-52>【玉云徒高^(F)反絞也構。・季云奈不^{【ナフ^(L、H)】}】

紅<309-54>【類云洪^(L)音・玉云帛赤白。・眞云赤色之淺。クレナキ^(H、H、L)記 眞云クウ^(L、N、H、N)】

紅縹<309-62>【應云天一^{【縹】}也如帛之青白色也淺青色也有碧一^{【縹】}天一^{【縹】}骨一^{【縹】}各以其色言之・眞云匹^(T)眇^(H)反青黃間色也輕翠鮮妍之色・玉云帛青白色・東云青黃色。一^{【縹】}眇猶依係・公云音表ハナタ^{【ナナタ^(L、L、L)】}】

紺<309-74>【玉云式出^(T)反絳也。音ツキチ^(H、H、H) ヌレメ^(L、L、L)記 シリソク^(L、L、H、L)】

三一〇頁

紫<310-12>【音訾・眞云色赤黑也・玉云青赤色。眞云シ^(R)】

紺青<310-14>【慈云古暗^(R)反帛染青而揚赤色也一^{【紺】}含也青而含赤色。

上生經如紫——「紺」摩尼與此「色異。」】

緹^{【紺】}〈310-24〉【玉韻渠基反鹿子皮文。】

綦^{【紺】}〈310-31〉【玉云上字。類云其^{【紺】}音クツフ^{【紺】}】

纁入^{【紺】}〈310-33〉【季云音衫^{【紺】}帛青色・又音栽^{【紺】}・應云暫也微也劣也僅也不久也。鄭玄注禮記作栽。東觀漢記等作財^{【紺】}。隨作無定體・憲云藏代反・眞云始^{【紺】}□^{【紺】}也」近也・玉云紺淺色。然云——「纁」者僅得也 眞云サ^{【紺】}イ^{【紺】}】

——「纁」今^{【紺】}〈310-51〉【應云僅也」云々經作諧非】

帛緹^{【紺】}〈310-53〉【應云帛房經——「帛」帛也。力計^{【紺】}反亦綠色・東云紐麻也草色也麻三斤曰——「緹」と。 玉云草名。】

綌^{【紺】}〈310-62〉【玉云充^{【紺】}甘^{【紺】}反衣采鮮・東云女衣貌又他酣^{【紺】}反又《上》青黃色也按□^{【紺】}也。說文作綌。帛雜也。順云吐敢^{【紺】}反俗音奴^{【紺】}含^{【紺】}反。】

緹^{【紺】}〈310-72〉【音選音決云辱^{【紺】}・玉云數也繁也采也飾也 マタラカシ^{【紺】}テ^{【紺】}選】

被纁^{【紺】}〈310-74〉【應云山綺^{【紺】}反案森——「纁」好貌颯《素答》——「纁」長神貌——「纁」篋也・玉云冠織也。】

二二二頁

颯——「纁」^{【紺】}〈311-13〉【トシナフテ^{【紺】}選】

慘——「纁」^{【紺】}〈311-14〉【季云森醺^{【紺】}一音車飾貌。】

紃^{【紺】}〈311-22〉【玉云爲萌反冠卷□^{【紺】}也」維也・季云音宏^{【紺】}ツナ^{【紺】}選】

紃^{【紺】}〈311-24〉【玉云上字・順云訓乎^{【紺】}又與綱^{【紺】}同。罽之綱也。】

華纁^{【紺】}〈311-32〉【季云音嬰^{【紺】}・慈云——「華纁」者——「纁」以花^{【紺】}飾。或華飾之——

「纁」・中云冠系《古計反緒也》也輦——「纁」也・上眞云——「纁」美也又云用^{【紺】}平輕^{【紺】}。非去^{【紺】}也・玉云馬鞍也馬胸鞅也。・順云俗云鶯^{【紺】}尾^{【紺】}眞云ヤウ】

爲——「纁」^{【紺】}〈311-44〉【應云——「纁」絡也。經瑛《於京反玉光也。》】

——「纁」貫^{【紺】}〈311-51〉【應云論作纁瑱。非。】

——「纁」絡^{【紺】}〈311-52〉【】

綌^{【紺】}〈311-53〉【玉云乳佳反繼也繫也冠也飾也。】

綌^{【紺】}〈311-61〉【順云音與薤^{【紺】}同。和^{【紺】}冠乃乎^{【紺】}一云保々須介^{【紺】}又云於以加介^{【紺】}一名繫。或云老人髮落以此^{【紺】}繫冠^{【紺】}使不墜^{【紺】}故名老繫今不論老少^{【紺】}武官用之・應云安也。ヤス^{【紺】}ン^{【紺】}論】

綬^{〔H〕}〈311-73〉【順^{〔L〕}云音受和久美^{〔クミ〕}又用組字・玉^{〔L〕}云貫佩玉相承・東云卯^{〔綬〕}也組也紱也綸也致也遂也藹^{〔五擊〕}一^{〔綬〕}草名。】

三十一頁

組爰〈312-13〉【順^{〔L〕}云音祖 玉^{〔L〕}云綬也。 クミ^{〔L〕}選 クミス^{〔L F〕}】

苦綸〈312-21〉【順^{〔L〕}云音倫^{〔L〕}・應^{〔L〕}云鉤繳曰^{〔綸〕}。 々繩也・玉^{〔L〕}云絡也・唐前記云理也又力屯反。 眞云リン^{〔L〕}】

紛^{〔綸〕}〈312-24〉【眞^{〔L〕}云一^{〔紛〕}雜亂貌。】

一^{〔綸〕}眞^{〔L〕}〈312-31〉【】

紛馥〈312-32〉【信^{〔L〕}云芬馥、律作^{〔紛〕}。 非。】

紛紜〈312-34〉【類^{〔L〕}云云^{〔L〕}音・東^{〔L〕}云一^{〔紛〕}亂也。】

一^{〔紛〕}聒^{〔L〕}〈312-42〉【應^{〔L〕}云亂也誼語也。 下公活反聒擾耳孔也。】

一^{〔紛〕}動^{〔L〕}〈312-51〉【玉^{〔L〕}云孚^{〔L〕}云反玄^{〔紛〕}黑緩也縱放也亂也盛貌馬尾韜也一^{〔紛〕}々衆也苦也縞也】

續^{〔紛〕}一^{〔紛〕}〈312-54〉【慈^{〔L〕}云上匹仁^{〔L〕}反^{〔紛〕}々往來貌盛白衆也・下亂也盛貌衆也續々衆也紛々亂也謂之多亂下也一一^{〔續紛〕}盛貌飛也・中云往來貌・眞^{〔L〕}云飛空^{〔L〕}雜亂貌。 下順^{〔L〕}云音分^{〔F〕}今案俗所謂尾布久路^{〔尾フク〕}口^{〔O〕}・〇^{〔O〕}・〇〇^{〔O〕}・中^{〔L〕}云飛也・東^{〔L〕}云縞青紫綬也續^{〔紛〕}也相牽也馬尾飾也一

一^{〔紛〕}紜也・玉^{〔L〕}云苦也亂也 一一^{〔續紛〕}トマカヘリ^{〔O L L H L〕}選 トサカナリ^{〔O O H O O〕} 下季云美多流^{〔ミタル〕}イキトホリ^{〔L L L L F〕} マカフ^{〔L L H〕}唱 オホシ^{〔L L H〕}切 眞^{〔L〕}云賓フン^{〔L L〕}】

三十三頁

翩續〈313-14〉【季^{〔L〕}云師説也須良不^{〔ヤスラフ〕}選^{〔H H H L〕}】

紛々〈313-22〉【トオホウシテ^{〔O L H O〕}選】

補繕〈313-23〉【類^{〔L〕}云善^{〔R〕}音・應^{〔L〕}云一^{〔繕〕}之言善也治也補也修截也。 ヨ

クス^{〔L F〕}詩 ヲサム^{〔L L H〕}記 ツクロフ^{〔L L H L〕}後 眞^{〔L〕}云セン^{〔O L〕}】

一^{〔繕〕}ヲサメ^{〔L L H O〕}寫^{〔L〕}〈313-32〉【ス後】

白^{〔繕〕}一^{〔繕〕}〈313-33〉【應^{〔L〕}云字體作皚。 音善。 土名。 卽白土也。 亦名聖。 白聖一名白堊是。】

勒^{〔繕〕}一^{〔繕〕}〈313-42〉【應^{〔L〕}云市戰反陀】

踰繕那^{〔繕〕}〈313-43〉【市戰^{〔在繕之下〕}】應^{〔L〕}云此云合也應也計應合爾許度量同此方驛也。 自古聖王一日行也。 案西國^{〔繕〕}那亦有大小。 或卅里或卅里。 昔來皆取卅里也。 舊經論或云踰闍那或由延、由旬^{〔一畝〕}旬皆訛略。 見足部】

繫梨^{〔繕〕}〈313-63〉【應^{〔L〕}云於^{〔L〕}奚^{〔L〕}反・玉^{〔L〕}云青黑。】

縹<313-71>【玉云所巖^(L)反於旗旂 順云訓久流^(LH)】

一【縹】車<313-73>【於保賀^(ヲホカ)(^(LLL))】

繩<313-74>【音乘^(L)・眞云索也・玉云度也直也・順云一名索。タ、

ス^(LH)書 ナハ^(LL)選 ホム^(LH) イマシム^(LLHL)】

三十四頁

端出之一【縹】<314-13>【シリクヘナ^(LLLHL)修文殿御覽】

縹<314-21>【應云瓊^(L)反收績曰一^(縹)。旋也。・眞云繞也・東云收輦

《眷願》案謂一^(縹)卷也纏也紆也亂也・公云音永^(L)メクル^(HH^LL)マ
ツハレリ^(HHHLH)詩】

自縹<314-31>【應云直^(S)僞^(R)反以繩有所懸鎮也索也鎮竿也懸重曰一^(縹)
也懸鎮曰一^(縹)繩。フシツケス^(HHHLHF)集】

編^(LH)椽<314-41>【季云音邊^(F)・應云織也以繩次物曰一^(縹)。謂取棘

刺一^(縹)椽而臥也・玉云比連也列也・東云緝錄也辯也簡繩也又《上》
次也相著也 アム^(LH)詩】

一【縹】髮<314-52>【應云三蒼古辯字。蒲典反交織也。經云螺髻一亦是。】

一【縹】石<314-61>【應云次石也】

四維<314-62>【季云音惟^(L)選師說加多牟^(カタム)(^(HHL)) ツナク^(HH^LL)・應

云隅也聯結也亦一^(縹)持之也一^(縹)繫 中云天有四一^(縹)。東北爲報恩
(^(徳))之一^(縹)。西南信陽。東南常陽。西北號道。・玉云豈也。コ

ノ^(HH)詩 眞云ユイ^(LH)】

綱一【縹】<314-74>【僧尼令注云張之曰綱持之曰維】

三十五頁

作維<315-13>【應云蘇對^(R)反】

一【縹】車<315-21>【順云沼歧加不利^(ヌキカフリ)(^(HHHL)) 趙魏間謂之歷鹿^(L)。】

一【縹】竿<315-23>【音與敷同。久太^(クタ)(^(LH))】

繫維<315-24>【應云知立^(T)反一^(縹)絆也謂拘一^(縹)也兩足不相過謂之一^(縹)・眞云維也・東云繫馬也拘也拘繫也・公云音蟄^(S)應云思列^(T)
反馬韁也所以繫制畜勝者也一^(縹)々繫也・玉云攀也弓扶也緒也。順
云選師說訓歧都『賀』奈^(キツナ)(^(HH^LH)) 眞云節^(S)音】

紙<315-43>【音只^(H)・玉云善也絮也。・順云古文作帀。和^(ハ)賀美^(カミ)(^(H)
・東觀漢記蔡倫典作一^(紙)。・紡云以殼木皮一和藤皮麻一爲之。記
文字基曰一^(紙)。後漢書也】

絮<315-54>【玉云思據^(R)反幣帛也調也。・順云阿之和太^(アシワタ)(^(HHHL))・公
云音序^(L) ワタ^(LH)集 ト、ノフ^(LLHL)禮 ハナ^(LL)柳一^(絮)集】

達一【^紫315-63】眞云自慮反・應云微識佛法「不能堅固修行」也。瑠云
邊地下砂金不識三寶「不信因果」之輩也。】

紉<315-73>【順云女^(反)余^(反)反字亦作紉。和^(反)布祢乃能米^(反)ヲネノノメ^(反)列^(反)】

三六頁

緝綴<316-11>【玉云且入^(反)反續也明也光也。ヲサマル^(反)列^(反)】

綜緝<316-13>【ス^(反)アツム^(反)選^(反)】

綴緝<316-14>【應云七立^(反)反・珠云光也續《繼也成也》也・東云繫攝
頭索也。說文作緝。喪服注曰緝也明也纂也綴也綜也捷也——^(反)熙
光明也蹶踏貌。——^(反)々往來錄也。】

緝緝<316-31>【干云上俗下正諸與——^(反)同聲者竝準此。】

鳥緝<316-33>【信云宜作鞞𦵏。】

結緝<316-41>【信云亦鞞𦵏而用反鞞^(反)毳飾也結𦵏律作——^(反)】

絺<316-44>【音郗 玉云細葛也】

摩訶拘絺羅<316-51>【慈云丑脂^(反)反摩訶俱瑟恥羅云大膝。々蓋大故。
如律說。】

絜裏<316-54>【類云結^(反)音・應云——^(反)東也繫也・玉云清也結也イサキ
フ^(反)詩^(反)】

紕繆<316-63>【類云臂音・玉云緣邊也飾也理也緣也錯也。・順云万与
布^(反)一云与流^(反)一云与流^(反)季云詩云——^(反)師久美須^(反)・下音謀唐韻云又目^(反)又武彪反・應云紕猶錯「謬猶亂」也。誤也
經繆借字。下イツハリテ^(反)記 眞云メウ^(反)】

三七頁

緘<317-11>【玉云爲逼^(反)反縫也數也。・類云域音。ヌヒメ^(反)
記】

紗<317-13>【東云音沙^(反)・玉云赤衣也今云白絹也少也微也・東云紗絹
一曰縷小也似絹大輕薄。又紡絲麻縷曰——^(反)疎綃穀類。又《音同
眇^(反)》細編又《音要^(反)》小意也——^(反)縹𦵏^(反)小意也急戾也・順
云俗音謝^(反)今張於燈籠一者是。カトリ^(反)切】

紫^(反)<317-32>【東云或作——^(反)】

縵縵<317-33>【應云祛善祛阮反——^(反)猶縵帛不離散也。・上縵也類
云遣音・下玉云區也——^(反)反覆也——^(反)才ホヒマク^(反)
集】

綵緞<317-43>【音采^(反)・下順云音致^(反)訓歧比之^(反)・應云又作
纏。密也・玉云縷謂之——^(反)也。補也至也・東云繼納衣也練也・公

云音智^(L) ー^ー「^[緑綴]トイロキ^(ヒシウ)ヒウシテ^{(OLL^LL^LH^LH^LO}選
眞云サイ^(OL)チ^(R)」

綵畫<317-54>【・中云絹帛入色^也。五色之總名。或本作采。々亦^{「綵也。」}】

綵彩<317-63>【干云上繪^{「綵」}下光^{「彩」}。】

堅緻<317-71>【信云精微也至也補也】

婆^{「綴」}<317-73>【應云除致反 陀】

伊緻<317-74>【什云猪履反】

三一八頁

細纏<318-11>【應云又緻。】

弘綽<318-12>【應云昌若^(S)反寬也緩也・東云大也^{「綽」}云緩也^{「綽」}約婉
徑也・眞云金 眞云昌我反。卅二字 眞云シヤク^(OO^L)】

緗<318-22>【玉云側鳩^(L)反一入曰^{「緗」}也。青也青赤色也。】

緋<318-24>【季云音飛^(F)・玉云繡也・東云深絳色也練繪總名也。】

緞<318-32>【玉云勅^(S)高反韜也劍衣也。】

緞<318-34>【音叔^(T)・玉云縮也・順云今案俗云之々良岐^(シ、ハ、ラ、キ)^(HH^HH^H)・

^(L)是敷。】

紈<318-42>【季云音桓^(ハ、ン)・玉云素也。シラヌキ^(LLLL) ウス□キ】

緝<318-44>【玉云丑仁^(L)反紛也。ヒト^(LLL)論《單衣也》】

緯<318-51>【類云再音・玉云事。】

緩^(H)<318-52>【音浣・玉云遲也舒也。オコタル^(HHH^L)易眞云化^(LH)
キン】

徐^{「緩」}<318-54>【珠云由流久^(ユルク)^(LH^L)】

挺^{「緩」}<318-61>【トキユルフ^(LHLL^H)列】

緻<318-62>【順云音與散同。字亦傘・應云蓋也。・弘云左尔^(サ、ニ)反訓
加左^(カサ) ヌサ^(LL)集 眞云散^(R)音】

緻^{「綴」}<318-71>【東云《音同散^(R)》蓋也張帛蓋也。又《上》キヌカサ^(L^LH)
白】

紵婆<318-73>【選音決云音弗^(フ、ツ)・玉云綬也・應云此云子。依字^{「紵」}
綬也。】

三一九頁

衆緞<319-11>【音頤^(テ、チ、S)・應云以絲縛繪染之解絲^{「成文」}曰^{「緞」}。今謂
西國有淡澀汁點之成^{「緞」}如此方蠟點^{「緞」}也・東云錦^{「緞」}也練綵也

繪之有夾花也縛綵也・順云讀由波太【ヨハタ】

三三〇頁

夾一【縛】<319-23>【「俗云」賀字計智【カウケチ】(LLLL)】

紉【紉】(「四八四」)索<319-24>【應云居(居)柳(居)反繩三合曰一【紉】。一【紉】正也純察異之也亦攝也舉也。・東云以法「舉人非」也。法繩也察也一紐也督《都木(木)》反正也》也恭也急也戾也絞也。タ、ス(LLLL)書】

紉【紉】紛<319-41>【東云或作一【紉】 フサム(LLLL)列】

一【紉】繩<319-43>【アサハレルナハ(LLLL)選】

糾<319-44>【東云說文作一【糾】云繩三合也居兆反一【糾】々猶撩々也 魴云古文】

緇<319-53>【玉云去厥(去)反狄衣也・東云《又音同屈(クッス)》翟衣也。】

縵【縵】<319-61>【東云都下(下)反一【縵】絮相着貌藟《昌下》縵貌。】

囉縵<319-63>【應云尹賜反。】

連綴(「四九七」)<319-64>【音綴(テイRーテチT)・應云《去》連也合着也眞也合連也。又《入》縫也非此用(に)・東云一【綴】衣也惴惴也舍輅別名也表也緣也聯也縫也亦作輅止也・玉云雜采也拘也。眞云テイ(OL)テチ(OS)】

五一【綴】<320-11>【信云律云相去兩指之間許一【綴】也】

綫緝<320-13>【東云甫萌(萌)反振繩墨也又補幸(旦)反文綺布也。・應云綫緝、律一【緝】百莖反無文綺也。】

紉<320-23>【類云俗】

鞀絆<320-24>【應云音半馬一【絆】】

綁<320-31>【東云女(女)能(能)反單繩未合也祥也。又《平》一【綁】針也。】

絃管<320-33>【順云音與弦(化ンL)同和(古度乎【コトヲ】(LLLL))・憲云琴瑟之一【絃】、或本作弦。弓弦。絲曰一【絃】竹曰管(と)・眞云又決眊反以絲一加琴瑟之上也。繩索也・季云音堅(旦)・東云琴瑟一【絃】。案以絲加琴之上、以播揚詩之音。又《去》繩索也】

弦一【絃】<320-52>【干(干)上弓(弓)一【絃】下琴一【絃】。】

琴絃<320-53>【信云音禽下與弦同琴瑟等通名也然此謂琴之一【絃】又弦謂琴德云々今用琴絃七也】

綿<320-62>【眞云彌連(連)反好絮也・東云細考曰續也。連也微也經歷也遠也久也一【綿】々聯一【綿】相續不絕也。一【綿】蠻小鳥。新絮越人一【綿】々力々薄材言(は)薄力(力)也。佻從系。《丁計》絡也纏也靜也繭也。順云和(和)和太(ワタ)(一レ)一屯【】

三三三頁

繇【繇】<321-11>【眞云亦作一【繇】。】

木一【繇】<321-12>【順云和〱由布【^{ハフ}】（^{HH}） 祭祀具】

堵羅綿<321-14>【眞□【^ゴ】上都古反或作兜或覩細一【繇】也今案堵羅梵一【繇】唐言】

紋身<321-23>【順云音文（^ル）・應云謂繪有文章一曰一【紋】。又作文。アヤ（^ル）】

素<321-31>【音問 玉云亂也】

繚戾<321-32>【慈云力（^ル）小（^H）反說文力（^ル）鳥（^H）反一【繚】繞也一【繚】纏也謂相纏繞也。切韻唯有了達蓼菜、目精朗瞭、長鬢一四字之外更無了音之字。有ニ力小反。一僚炙ニ一【繚】繞・中云捷云了縛也義不叶一也。鸞師云宜爲了字。謂子無兩臂一不任統ニ於事務家業一畢了無所ニ付委也。武玄之云了像人無ニ兩臂一也。薛峴云了杓《力弔（^R）反行脛相交。》案行脛相交也。了字亦得矣・應云經作瞭《力彫反脂一【勝】非・選音決云音了（^H）メクラス（^{HHHL}）選】

結一【繇】<321-63>【^{ハシ}ハル（^{HHHL}）選 アツカハシ（^{HHHHH}）】

一【繇】選【選】<321-64>【然曰遠貌。】

緝<321-71>【順云音與縛一同。今案加良久ニ「カラクミ」（^{LLLLL}）敷。】

強總<321-73>【類云忍音一【強總】ロハクネキ（^{HLLE}）詩】

三三三頁

龜繇<322-11>【選音決云音由（^ル）・玉云與招與周反一【繇】壺也卽也牟也靈善也言至也用善也一【繇】過也道也喜也猶卽一【繇】今古也隨從也。此亦徭字或爲與猶（「猷敷」）同或爲卦兆之籀字在竹部。・又音冑（^R）魴云卦兆詞。季云与流【ヨル】モチキル書】

一【繇】繇<322-24>【干云上阜一【繇】、下卜兆辭音冑（^R）】

緊那羅<322-32>【慈云居（^H）忍（^H）反一【緊】捺洛云歌神・中云台云疑神。似人而有一角。《吉同》・玉云糾也急也。眞云キン（^{LL}）】

緊捺（「捺敷」）落<322-42>【奴萬應云此云歌神。是人非人也。頭作馬頭。舊云緊那羅或眞陀羅一訛。】

繩繩<322-51>【干云上通 ・中云食陵反索也。】

賴締<322-53>【應云徒計（^R）反。依字一【締】結不解一也。】

揪締<322-61>【鸞云結不解。帝音。】

灌綆<322-63>【應云古亂反汲器也。一【綆】格杏反汲井一繩也。】

繩紕【紕】<322-71>【應云又作縛。同女心反而鳩反牆繩也本機上縷也。】

紆婆<322-73>【應云古文絜同女林^(レ)女深^(レ)反樹名也。葉苦可煮爲飲^一治^二頭病^一也。如此間苦揀《力見》樹也。言此蟲甘之耳。】

三三三頁

紆絜<323-13>【干云竝正又如林反。】

懸繩<323-21>【應云論多作鉉。《胡大反舉鼎也》非繩未見所出。】

鞅紉<323-24>【應云直忍^(H)反牛鼻繩也——^[綱]索也。】

拘——<323-32>【應云文忍反牛糸也。文作倨——^[綱]非。】

線呵<323-34>【應云又作臬。同息里反。天童女名。】

綰^(H)達<323-42>【應云烏□反——^[釋]貫也・玉云烏皖反維——^[釋]也惡色絳也一曰綰也・魴云——^[釋]繫曰結。】

纒控<323-51>【應云或韁。紀良反馬——^[釋]也。眞云香^(R)音】

纏縛<323-53>【應云力前反——^[釋]縷不解^一也。】

皮——<323-61>【應云皮連、古^ハ聯。連續也連合也。律——^[釋]】

作縉<323-63>【應云亡巾^(F)反鉤魚繳《之若^(レ)》也——^[釋]綸也江東謂之一^[釋]。ヲ^(H)詩】

維那<323-71>【^(レ)「行事鈔云聲論翻次第相傳云悅衆」^(レ)「大覺云

出要律義音義云本音毗訶邏《寺》波羅《護》。聲論云正外國語應言^二婆邏^一。翻爲次第。」^(三)「南海傳云櫛^[授]事者梵云羯磨《事》陀那《櫛^[授]》意道以衆雜事指櫛^[授]於至^[ハ]舊云——^[維那]非維是周語意道綱維那是梵音略去羯磨陀字也】

三三四頁

維摩詰<324-23>【域云毗摩羅詰、唐言無垢稱。舊曰淨名。然淨則無垢、名則是稱。義雖取同一名乃有異。舊曰——^[維摩詰]訛略。】

維摩詰<324-34>【應云或云毗摩羅詰、亦鼻磨羅鷄利帝。此云無垢稱。《——^[稱]者名——^[稱]》或淨名・慈曰准^{といふ}依梵本云阿費摩羅枳里底。阿之言無。摩羅云垢。今既加費字一故是稱也。卽云無垢稱。枳里底說也。梵言多倒一今云無垢稱邊說也。順此唐音一正云說無垢稱經。其一^[維]摩云淨名義則可然。言^ハ則不可。單言——^[維]摩一但是無垢稱。闕一少阿羅二字。云々】

縫紵<324-63>【應云馳栗反縫衣也紵納也亦纏衣也。】

黑纁<324-71>【應云勒胡^(レ)反布縷也。】

縣<324-72>【弘云胡^(レ)遍^(R)反都城也官也垂也連也・玉云五鄙爲一^[縣]・順云和^(レ)阿賀多^[アカタ]^(L)選音決云音玄^(L)】

三三五頁

紡<325-11>【信₁云孚往_(H)反・玉云懸也縛也。・順云訓都无久_{「ツムク」} _(H)】

索<325-13>【東云俗蕭_{「素」}也乞也求也。又所戟反搜取也簡擇也・玉云十尋曰_{「素」}と。糾繩曰_{「素」}と。順云和奈波_{「ナハ」} _(LH)】

葦_{「素」} <325-23>【順云阿之奈波_{「アシナハ」} _(HHH) 祭祀具】

求_{「素」} <325-31>【慈云所戟_(T)蘇各_(T)反乞也求也。モトム_(LH) 詩ナ _(LH) 記】

以_{「素」} <325-33>【應云所格_(S)反盡也。經有作却_{「訛」}也。】

糾_{「素」} <325-41>【應云大曰_{「素」} 小曰繩。】

蕭_{「素」} <325-42>【】

縊<325-43>【玉云於豉反自經。クヒレヌ_(HH, LH)】

縷<325-51>【音隈_(ウヘ)・東云絞五色絲爲飾也五色絲幡脚】

清潔<325-53>【慈云古屑_(T)《先結_(T)》反亦清也。火部】

白縶<325-61>【應云白疊、經作_{「縶」}。知立_(T)反_{「縶」} 絆也。謂拘執也兩足不相過_{「謂之_{「縶」}」}也。非。】

紈縵<325-64>【應云下_{「紈縵」} 猶縵縵也。縵縵不相離也。】

紓_(H) <325-72>【】

幻<325-73>【音患_(R)・眞云_{「幻」} 化也・魴云術也。又胡盼反。】

三三六頁

繻<326-11>【注蒙求云音須_(F)】

第 二 部

研

究

篇

第一章 序論

第一節 日本古辞書史の概略

一 辞書とは何か

辞書は言語研究の成果である。辞書は言語社会の共有物である語彙について、その諸情報を一定の目的と収集原則に沿って集め、決まった分類方式に従って収める書物である。これは言語研究の一つの産物として、当時あるいはそれ以前の語彙の総体的なあり方を窺い知らせるものである。各時代の様々な目的によって編纂されてきた辞書の実状を究明することは、日本における言語そのもの及び言語研究の歴史を捉える有効な方法である。

ところが、本論で用いる「辞書」という語について次のように定義しておきたい。

辞典(ことば典)と字典(もじ典)と事典(こと典)とを合わせた概念

この定義に用いられる「辞典・字典・事典」の語については川瀬(一九八二)の定義に拠る^(注)。また、そこには次のようなことも記されている。

辞典

(前略)漢和辞典の場合は字典(字書)と区別がある…(中略)…古くから

漢和辞典でも字・辞双方を合わせて編纂されたものが出来ており、又、同時に百科事典的な要素も併合されている。(一三九頁)

字典

(前略)本来、漢和の字典が字典の基本である。…(中略)…しかしながら、わが国人の間に漢字・漢語の使用が熟して来ると、漢字漢語を併合した漢和辞典が広く行われて、字・辞の区別をしないものが、中枢を占めるようになった。(一三九頁)

事典

(前略)言葉の解釈を主とする辞典と区別して言うが、わが国の辞典は古くから事典と未分化の状態で発達している。その辞典の主流は漢和辞典で、すべて百科事典的であるのが特色である。(一四〇頁)

これらは日本辞書史における辞典・字典・事典の厳密な区別が難しいこととして理解できる。特に「漢和辞典」において三者の混淆が著しいことも窺われる。このような三者の区別の曖昧さは、中国辞書の変形再編から独自の漢和辞典モデルに辿り着く日本辞書史の展開によるものと考えられる。

本論は、そのような日本辞書史の流れの上で、一つ一つの暫定的な帰着として出来上がった各辞書の現状の解明に関心を持ち、その解析によってそれぞれの辞書史上の位置づけを考える。

二 中国辞書の伝来と種類

先述のとおり、辞書は言語研究の一成果である。それは書記言語で記された形態となり、辞書編纂は書記言語の存在を基盤として成立可能なものである。歴史に知られる限り、日本の書記言語の歴史は大陸から漢字と漢文が伝わって始まったとされる。大陸文化の受容の内実というのは典籍の伝来により、伝来した典籍を理解することは外来の文字と書記言語の受容を必要条件とする。こうして始まった漢字と漢文の受容は、漢土で撰述された辞書や注釈書といった参考書籍に支えられたところ大きい。日本における書記言語の濫觴と、大陸文化とともにもたらされた辞書との深い関わりを推測することは想像に難くない。日本辞書史の始まりを中国辞書から始まる所以である。したがって、日本辞書史を概観するためには、まず中国辞書に関する説明が先に行われる必要がある。

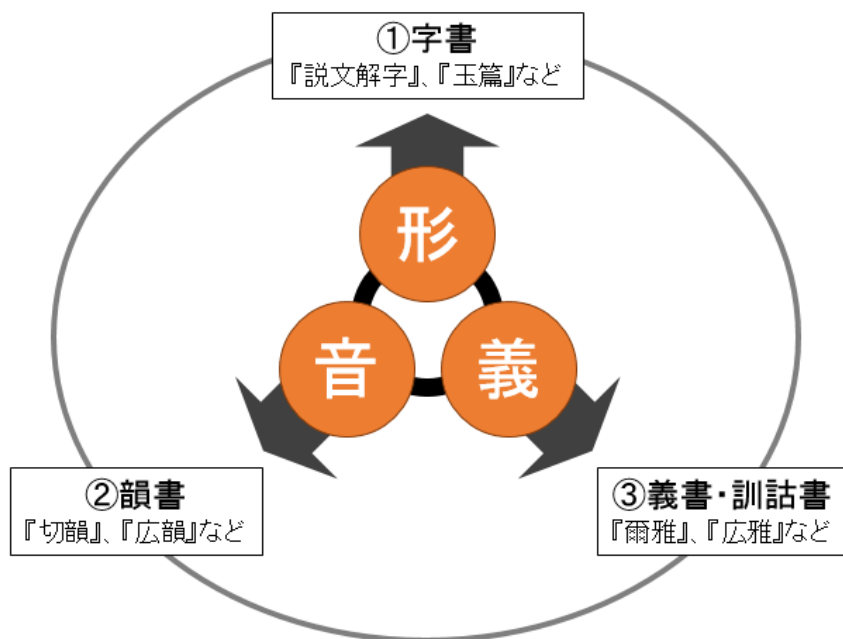
中国辞書は中国における言語研究の成果である。古代中国において言語研究が起こった背景には、言語そのものに対する関心よりはむしろ、経書の理解といった思想的な要望と、詩歌と文章の作成のような文芸的な需要がある。言語に関する学問を称する「小学」という名は、そのような位相をよく反映したものである。

古代中国における言語研究の基本単位は「形・音・義」三方面を備えた個々の漢字であった。基本単位が有する三方面のいずれに注目するかによって、文字学・声韻学・訓詁学といった下位分野に分けられる。その

ような言語研究の成果として中国辞書の形態は次の【図〇・1】のように三種に分けられる。

まず、漢字を字形によって類別した「字書」があり、代表的なものとし

【図〇・1】漢字の三要素と中国辞書の三分類



て『説文解字』と『玉篇』がある(①)。そして、漢字の音韻的な特徴である韻によって類別した「韻書」があり、『切韻』と『広韻』が著名である(②)。最後に、漢字の意義用法によって類別した「義書・訓詁書」があり、主要なものとして『爾雅』と『廣雅』がある(③)^(注二)。

そして、類書・音義・字様も辞書の範疇に組み込まれることがある。まず、類書は百科事典的な内容を意義によって類別したもので、『芸文類聚』や『太平御覧』などがある。次に、音義は、經典の語句の字音と意味を解説したもので、『一切経音義』や『經典釈文』といったものがある。そして、字様は漢字字体の異同や規範性を判別する目的で著された書で、『干祿字書』『五経文字』が代表的なものである。

三 日本辞書史のはじまり

先に中国辞書の伝来について述べた。ところが、日本は、中国大陆と海を挟んで隔たるのみならず、系統論的にも大きく異なる言語を使うため、辞書に要望される事柄は大陸のそれと必ずしも同じではない。書記言語の受容と変容の中で台頭した新たな要望は、日本独自の辞書編纂を触発することになった。

漢字と漢文が日本に伝来し、その受容が進むにつれ、文字と書記体系の運用に独自の変容が加えられることになった。そのような変容を漢字の三方面に分けてまとめると次のとおりである。

まず、「音」の方面からは日本漢字音の成立がある。すなわち、中国から伝わった字音が日本語の音韻体系に合わせて変化したのである。そして、「義」の方面では和訓の発生と固定化がある。つまり、漢字の字義に基づいて日本の固有語(和語)との結び付きが一定の規則性を持つようになる。最後に、「形」の方面では国字の出現がある。中国には存在しない日本固有の物や事柄を表すために、既存の漢字の構成原理に則って新しい漢字が作り出された。

漢字と漢文による外来の書記システムを受け入れる一方で、それらを日本語の表記に転用する試みも現れた。系統が違う言語の書記のために創出された文字である漢字を、日本語の書記に転用することも、新しい辞書出現を促した大きな要因であろう。いずれも中国辞書だけでは充足できない事項である。

日本における辞書編纂の歴史について川瀬(一九七七:三二～三三)は次のように指摘する。

我が国に於ける辞書編纂の発達の歴史を顧ると、既に繰り返し述べたように、主として漢字・漢語を学び、これを利用するために行なわれたものであるから、漢和辞典の形式がその中枢をしめている。…(中略)…実用的には、一種の辞書で両方(筆者注:読むための目的と書くための目的)が間に合うことが望まれるので、各種の編纂法(字形引・音引・意義分類体)を併せ参酌した形式を採る場合が多くなるわけである。

すなわち、日本辞書史は漢和辞書が主な流れとなり、しかも、その体裁は先述した中国辞書の分類を混淆したものが主流となったという事情についての指摘と解される。

四 日本辞書史の発達

記録に残る限り、日本の辞書編纂の歴史は奈良時代まで遡ることができる。これは漢字を日本語記に転用する試みの成熟と近い時期といえる。その代表的なものとしては、養老年間の所撰である「楊氏漢語抄」や「弁色立成」といった漢語抄類が断片的に残る。これらの編纂目的は漢籍と仏典の読解を助けるためと推測される^(注三)。

平安時代に入ると辞書編纂は量質ともに盛んになる。中国辞書の雄編である「原本玉篇」を抄略した空海撰『篆隸万象名義』は日本人による現存最古の辞書編纂として知られている。昌住撰『新撰字鏡』は部首分類体と意義分類体を折衷し、国字や和訓を本格的に取り入れた辞書である。和漢の学識に秀でた源順が醍醐天皇の皇女、勤子内親王の命を受けて撰した『倭名類聚抄』は、漢才の教科書と百科事典を兼ねた日本語辞書である^(注四)。菅原是善撰『東宮切韻』と藤原季綱撰『季綱切韻』はいずれも散逸したが、中国の韻書を集めてこれを取捨し、日本人の詩作に適した韻書を目指した書と推測される^(注五)。

平安時代には仏典音義も盛んに著述された時期である。主に「妙法蓮

華經」と「大般若經」に対するものが中心で、中算撰『妙法蓮華經釈文』、藤原公任撰『大般若經字抄』、真興撰『大般若經音訓』(散佚)が代表的なものである。これらの音義は仏典の字句を正しく理解するための参考書として、漢字・漢語の知識を網羅している。

院政期に撰述された『類聚名義抄』(原撰本)は、増大しつつある仏典理解を総整理して部首分類体に再編した辞書である。平安時代の辞書音義類を集大成する書として、当期の漢字・漢語の理解と利用の実態を示す一つの決算と評価される。

以上の平安時代の辞書は、充実した学問的な辞書が多く見られるという特徴が看取される。そして、和漢の注釈書及び辞書音義類、訓点本から漢文注と和訓を広く引用している。中国典籍からの漢文注を中心材料にしながら、和訓という日本独自の材料を交える試みが行われた時期である^(注六)。これは鎌倉時代以降定着する和訓本位の漢和辞書に辿り着くまでの様々な試行錯誤として興味深いところである。そして、平安時代は、鎌倉時代以降の辞書の母体となる著述が多く現れた時期として、日本辞書史に大きな意義を持つ。

注

(一) 川瀬(一九八二)は「辞典」を「言葉を分類して、表記・意味などを説明した書物」(二二九頁)とし、「字典」は「漢字の文字、一字宛を分類して、形・音・義を説

明した書物」(同頁)としている。最後に「事典」に関しては「事柄の説明をする辞典」(二四〇頁)と述べる。

- (二) 川瀬(一九七七・二七)は中国辞書を、(一)字形引の辞書(文字の形で類別したもの)、『(二)意義分類体の辞書(文字の意義で類別したもの)』、『(三)音引の辞書(文字の音で類別したもの)』の三種に分ける。これは本論でいう①字書、③義書・訓詁書、②韻書とほぼ一致するものと捉えている。

(三) 川瀬(一九七七・三九)

(四) 川瀬(一九七七・四一)

(五) 川瀬(一九七七・四一)

- (六) 大槻(二〇〇五a)は『新撰字鏡』『倭名類聚抄』『類聚名義抄』によってこのような試みの諸相を検討している。これら辞書で見られる体裁上の不統一が、和訓という材料の取り入れによって引き起こされたものであると推論する。

第二節 類聚名義抄

一 はじめに

ここでは本論に入る前に、研究の対象資料である類聚名義抄という辞書についての基本的な情報を述べ、その価値について触れておきたい。

二 書名について

類聚名義抄は、日本の院政鎌倉期の部首分類体の漢和辞書である。その注文と掲出語は和漢の様々な典籍からの引用であり、そのような事情は「類聚名義抄」という書名の由来からも推察される。

まず「名義」については山田孝雄が『國語學史』（寶文館、一九四三年刊）に「名義抄はその名義といふ語をば空海の『篆隸万象名義』にとりたるものならむと思はるる」（二〇七頁）と指摘する。つまり、「名義」は、中国字書の雄編『玉篇』（顧野王撰）を弘法大師空海が抄略した万象名義に倣った命名とする。万象名義と「玉篇」は部首分類体の辞書であり、類聚名義抄の基本体裁とも一致する。その後の研究で図書寮本名義抄の出典として万象名義から多大な影響を受けていることが実証されている。

もう一つ、「類聚」に関して吉田（一九五五a）は「倭名類聚抄」の夥しい基礎的引用があることから、これを採用したものであると、断じてよい」（四一頁）と述べる。すなわち、「類聚」は、源順が勤子内親王の命で著した倭名抄から採ったものと断じている。倭名抄は意義分類体を採用し、

類聚名義抄とは基本体裁を異にするが、和漢の諸典籍からの引文を類聚し、その出典を忠実に明示する態度は、類聚名義抄の編纂においても貫かれている。

以上より、「類聚名義抄」はその書名から見る限り、万象名義の部首分類体の体裁と、倭名抄の典拠主義的な学問態度に倣った辞書を目指した辞書と考えられる。

三 諸本の系統

類聚名義抄の現存する諸本は、「原撰本系」と「改編本系」という両系統^{注三}に大別することができる。二つの系統についての概略な紹介は次のようである。

原撰本系は院政期の仏教界における教学的な必要性から、先行の辞書音義類などを集大成した書物である。その成立は一〇八一年から一一〇〇年前後の間に、法相宗系統の学僧の手によってなったものと推定される^{注三}。原撰本の全容は基本的に「仏」「法」「僧」の三部をそれぞれ上下二帖に分けたものと考えられ、唯一の伝本である「図書寮本」には「法」の前半部に当たる「水」から「衣」までの二十部が残存する。

三六七五の各掲出項^{注三}には漢字漢語の見出しの下に、字体・字音や意味についての解説が漢文で施され、相当する和訓や日本漢字音情報が万葉仮名・片仮名で示されている。これらの情報は辞書や仏典音義類を中

心に日本と中国の諸典籍から広く集めたものである。特に各引用には略号などでその出典を明示しており、これは原撰本系の文献的な価値の中心核として注目されるところである。現存する伝本としては、一九五〇年、覆製本の公刊によって知られた「図書寮本」(宮内庁書陵部蔵・清水谷家旧蔵)が唯一である。

改編本系は原撰本系を土台に漢文注を最小化し、和訓を大幅増補するなどの改編が行われたものである。その結果として、原撰本における仏教専門書的な色彩は薄くなり、和訓中心の一般漢和辞書としての性格が強くなっている。原撰本系の大きな特徴といえる出典の忠実な明示が削られているのも、そのような性質の変化と関連する。

成立は一二世紀から一三世紀にかけての頃に真言宗系統の学僧の手になるものと推測される。一二〇部首を仏・法・僧の三部に分けている部首分類体の体裁を取り、図書寮本の現存部分とも部首立てと部首の配列が一致する。

現存する伝本としては唯一完本である「観智院本」(天理図書館蔵・東寺観智院旧蔵)をはじめ、「高山寺本」(天理図書館蔵・高山寺旧蔵)、「宝菩提院本」(東寺宝菩提院蔵)、「蓮成院本」(鎮国守国神社蔵・興福寺蓮成院旧蔵)、「西念寺本」(天理図書館蔵)が知られている。

唯一の完本である「観智院本」には、およそ三万四千語の和訓が収録されている。これは中世初期の日本語の諸相を窺い知れる重要な言語資料である。

料である。そして、当時の諸文献を解読する上での主要な参考資料としても高い価値を有する。

原撰本系と改編本系は、その淵源を同じくする同名の書ではあるが、目的と方向性を異にする別の辞書として扱うべきである。たとえば、同じく「言」に対する注文であるが、両者は次のように明らかな違いを呈する。

図書寮本

言【弘云魚韃反我也間也從也憊也問也・應云直言曰言々己事也。答述爲語爲人説也。一亦云也發端也・中云語也・眞云説也。・大覺云一在飛龍前行在跛鼈後・季云和礼・珠曰伊布去々呂波去々爾・ト記モノイフ・マウス選・コトハ詩・トク切】

〈覆製本七〇頁一行一段〉

観智院本

言【魚韃反ワレ・コ・ニ・イフ・コト・コトハ・トク・イフ心ハ・物イフ・ノフ・心ミル・ヨシ・タカシ・アヒタ・シム・トキ・從也・憊也】

〈法上四七頁〉

漢文注中心の原撰本と、和訓中心の改編本という対照的な様相が看取される例である。その一方で、改編本が原撰本からの「改編」であることを窺い知れる部分として、漢文注「魚韃反」「從也憊也」の一致も観察される。

このような両系統の大きな相異と関連性については、図書寮本名義抄の複製が初公刊されたときの解説(橋本、一九五〇)にも次のように指摘されている。

観智院本は比較的「正・通・或・古・俗訛字等を数多く掲載して漢字形の種々な種類を知らせることに重点を置くに反し、図書寮本は漢字よりも語彙熟語に重点を置いていいる。…(中略)…図書寮本は一般字書の用途よりも、仏教徒関係のものを対象として内典に表れるボキャブラリーの注釈が重視されている点で、ここに本帖の編者とその編纂意図の一半が理解されるものである。ここに図書寮本類聚名義抄と観智院本以下の類聚名義抄の本質的な相違があり、関連性がある。…(中略)…観智院本は漢字とその多様な字形、及びその和音訓に主力を注いでいるに反し、図書寮本は、熟語とその用例出典意義註が詳細である。この他に両本には本質的な相違は認められない。(二二～二四頁)

すなわち、その編纂目的の相違によって体裁上の違いが目立つものの、本質的には原撰と改編という系統の違いとして収束可能だという指摘である。類聚名義抄の両系統にはそれぞれの資料的な限界と問題が存する。すなわち、原撰本のばあいは零本という資料的な欠如という限界があり、改編本系のばあい辞書編纂経緯と収録和訓の出処といった問題が浮かび上がる。そのような限界を乗り越えた研究を可能にするためには、以上のような両系統間の相違と関連性を常に意識する必要がある。

四 図書寮本名義抄の価値

ここでは図書寮本名義抄が有する諸方面の価値について述べる。その価値の中心となる特徴は「忠実な典拠明示」である。典拠を忠実に明示する出典利用態度は、平安時代の学術世界における本文主義的な特徴の一端を窺わせるものである。そして、典拠の明示は、辞書編纂の過程における典籍利用の実態を明らかにする上での重要な手がかりである。すなわち、辞書に投影された作り手の言語観や学問的な背景などの再現を一層容易にするものである。そのような特徴に基づいて図書寮本名義抄の内容を検討し、その出典利用と編纂の仕組みを明らかにすることは、日本における辞書編纂の歴史の究明に繋がるのはもちろん、そこに投影された言語観や学術的な背景にまで辿り着くという大きな意義を持つ。

築島(一九七六・三三～三四)は図書寮本名義抄が持つ辞書史・漢文訓読史・音韻史・語彙史の方面からの価値について述べている。それをまとめて示すと次のとおりである。

まず、辞書史の観点からは、院政期の主要な音義辞書類を網羅したものである。この価値を取り上げられる。これはその忠実な引用態度と出典の明示によって確認可能なことである。引用された音義辞書類の中には今は伝わらない佚書も含まれるが、その復元も可能となる。そして、現存するとしても鎌倉時代以降のもののみとなる典籍があり、院政期以前の古

形との対照を可能にする^(注四)。忠実な引用態度と出典明示そのものが、当時の辞書編纂における先行辞書の継承という学問態度の実証として大きな意義を持つのは言うまでもない。

次に、漢文訓読史上の観点から、訓点本から採られた和訓の価値が注目される。図書寮本名義抄における和訓、特に片仮名和訓は主に漢籍訓点本から引用されたものである。現存する漢籍訓点本は鎌倉時代以降のものが中心となり、院政期以前の資料は僅かなものである。平安時代の漢籍の訓読を検討する上で、図書寮本名義抄の所収和訓は資料的な空白を埋めるものとして高い価値を持つ。しかも、和訓には出典注記が明示され、元となる訓点本との比較検討を容易にする。

続いて、音韻史の観点から日本語音韻情報と漢字音情報の収録が注目される。まず和訓、つまり、日本語語彙に付けられた声点(アクセント符号)は、院政期における京都方言のアクセント体系の再現を可能にするものである。これは日本語アクセント史の重要資料として位置づけられる。そして、片仮名で記されている和音と呉音といった漢字音に関する情報は、日本漢字音の研究資料として高い価値を有する。

最後に、語彙史の観点から収録された日本語語彙の価値を取り上げられる。所収の日本語語彙は忠実な出典明記とともに引用され、出典にまで遡れることが実証された。これによって古辞書の所収語彙が必ずしも当代の通用語の採録ではなく、文献を通じて採られた前代の語彙である

ことが傍証された。これは古辞書収録語彙の利用における重要な示唆として意義深い。

以上の築島(一九七六)の指摘に加えて池田(一九九三b:一一〇―一二)は文字史の面からの価値について指摘している。図書寮本名義抄は独自の字体研究によって字体の類似による配列を行い、それ自体が字体研究資料として価値を持つと述べる。そして、そこで行われた類似字形の記述を解明していくことは文字史を考える上での一つの視点であると指摘する。

五 図書寮本名義抄の仕組み

図書寮本名義抄は単字あるいは複数の漢字からなる掲出語に対して、字体・字音・意味・和訓といった諸情報を注文あるいは掲出語そのものによって示した辞書である。これらの注文について宮澤(一九九二)は類別を行い、各注文類型の間に大体の配列序列が認められることを指摘している。その注文類型を配列序列に従ってまとめると次のとおりになる。

- ① 字体注
- ② 正音注
- ③ 義注・又音・異体等の引文
- ④ 万葉仮名和訓
- ⑤ 呉音注
- ⑥ 訓点本等による片仮名和訓

- ⑦ 玉抄等による片仮名和訓
⑧ 和音注

築島(一九五九)と大槻(二〇〇二)を参照して注文の形態的な分類を示すと次のとおりである。

表記文字

(A) 漢字表記(万葉仮名を含む)

(B) 片仮名表記

出典名の表示形態

(イ) 「出典名一云一内容」

(ロ) 「内容一出典名(右寄り小字)」

各注文類型が実際どのように収録されているかを、実例を取り上げて説明する。【図〇-2】は図書寮本名義抄の複製本四八頁に所在する「陂澤」を掲出語とする項目である(注五)。掲出語は熟語であるが、注文はいずれも単字「澤」に当たるものである。ここでは八種の出典注記が確認され、各出典注記には○を付け傍らに①～⑧の符号を示した。

陂澤

① 云音宅水草交曰一和々佐波又容飾具云
―俗用脂綿云阿布良和太② 云水聚曰

―充州人謂一爲掌言水亭處如掌中也一潤也。③ 云陂一也下有水曰一也。
④ 真云林一也又灌一名。⑤ 東云水鍾也恩也蟬一海蟲也水所歸也光潤也。
⑥ ウルホフヒ⑦ 詩 ウツクシヒ ナタラカナリ
⑧ 真云タク シタラカナリ⑨ 録

① 「川(順)」は源順撰『倭名類聚抄』の略称で、撰者の名に由来するものである。その注文の内容は、まず、正音注「音宅」と義注「水草交曰澤」「又容飾具云澤俗用脂綿」が漢文で記され、万葉仮名和訓「佐波(サハ)」「阿布良和太(テブラワタ)」が見られる。続いて、② 「广(応)」は玄応撰『一切経音義』、③ 「中」は中算撰『妙法蓮華経釈文』、④ 「真」は真興撰『大般若経音訓』、⑤ 「東」は菅原是善撰『東宮切韻』の略称である。いずれも漢文による義注である。以上の①～⑤の出典表示形態は(A)漢字表記、(イ)「出典名一云一内容」で共通する。

⑥と⑧は注文分類の「⑥訓点本等による片仮名和訓」に当たるものである。出典表示の形態が(ロ)「内容一出典名(右寄り小字)」となるのが⑥⑧の漢文注とは違う特徴である。⑥「詩」は『毛詩』、⑧「顔」は『顔氏家訓』の略称で、その訓点本から採った和訓であることを示す。すなわち、和訓「ウルホフ(ヒ)」と「シタラカナリ」は『毛詩』と『顔氏家訓』の本文における「澤」の傍訓を採録したものである。

ところが、⑥と⑧の出典注記が直接付く二つの和訓の間には、出典注記のない二つの和訓が見える。出典表示のシステムティックな側面を考えると、隣の和訓(④または⑤)と同じ出典であるために、重複注記を避けたものと推測される(注六)。

最後に⑨「真」は真興撰『大般若経音訓』の略称で、片仮名による和音注を引用している(注七)。その出典表示形態は①～⑤の漢文注と同じく(イ)

「出典名一云一内容」である。

上述した内容を、出典注記・出典表示形態・注文の表記文字・注文類型にまとめると次のとおりである。

- ③ 川…(A)(イ)／②正音注＋③義注＋④万葉仮名和訓
- ③ 广…(A)(イ)／③義注
- ③ 中…(A)(イ)／③義注
- ④ 真…(A)(イ)／③義注
- ③ 東…(A)(イ)／③義注
- ③ 詩…(B)(ロ)／⑥訓点本などによる片仮名和訓
- ③ 顔…(B)(ロ)／⑥訓点本などによる片仮名和訓
- ③ 真…(B)(イ)／⑧和音注

これを見ると、宮澤(一九九二)の分類と配列序列の妥当性が改めて確認される。そして、出典表示形態・注文の表記文字・注文類型の対応では一定の傾向性も観察される。つまり、(A)漢字表記(②)(④)と(イ)「出典名一云一内容」、(B)片仮名表記(⑥)と(ロ)「内容一出典名」の対応が多く観察される(注八)。

以上、実例を取り上げて図書寮本名義抄の注文の構造について簡単に紹介した。図書寮本名義抄には様々な情報が一定の原則に沿って配列されていることが窺われる。

注

(一) 原撰本を「原本」と称することもあり、その唯一の伝本である図書寮本で称されることもある。改編本は和訓を広く集めて増補したことに因んで「広益本」「増補本」といわれることがある。

(二) 原撰本系の成立年代と事情については築島裕(一九七六・三九〇頁)の推論を参照。

(三) 図書寮本名義抄の全項目数は、項目の認め方によって出入りがあるが、本稿では翻字篇の翻字で認めた項目数を基準にする。

(四) 吉田(一九五五a)は「佚文集録書としての、小学家的歴史的価値が高い」(四三頁)と指摘している。

(五) この図では、原本にある朱書によるヲコト点や声点、仮名音注といった符号は示さず、出典表示以外の略字は原字に変えた(→↓也、と↓云)。

(六) 出典注記を有する和訓の隣に位置する出典無表示の和訓に対して、前と後ろのどちらの和訓と出典を同じくするかについては異論が存する。一つは、実例を取り上げて前方とする築島(一九五九)と山本(二〇〇二)の主張があり、もう一つは、出典表示システムの整合性と一貫性を前提に、後方と訓の出典が働きかけるとする大槻(二〇〇二)がある。

但し、山本(二〇〇二)は、隣の和訓の出典注記の省略とはいえないもの(「真性」の出典無表示和訓)の存在を言及し、それらの多くが国書の和訓と一致することを指摘している。

(七) 吉田(一九五四b・一五〇一七)は真興撰『大般若経音訓』を「漢字漢文に依る音注釈義が主となり、片仮名表記による和音及び和訓が附けられたもの」とする。

(八) このような対応の傾向性は築島(一九五九)が指摘しているところである。

第三節 先行研究

一 図書寮本名義抄研究の濫觴

図書寮本名義抄は戦後間もない一九五〇年、宮内庁書陵部による複製本の公刊によってその存在が公に知らされた。研究の歴史は、公刊された複製本に附された橋本不美男氏の「図書寮本類聚名義抄」に端を発する。解説であるだけにその内容は、改編本系諸本との関係、書誌、部首立て、仮名と略記法、出典、改編本系諸本との違いと編纂意図にわたる構成である。特に結語における次の推論はその後の研究によって裏付けられるに至った。

この図書寮本は未精撰本に属する一転写本であり、緇衣階級を対象として、漢字よりも漢語（語彙）を主とした——これは或は未精撰、草稿本の一過程或る状態を指示するものかもしれない——字書であり、観智院本等は図書寮本系が一応の推敲を了えた後、前者の目的とは別に、純粹な漢和字書としての体裁に改編したものではなからうかということになる。（二五～二六頁）

そして、一九五一年の「図書寮本類聚名義抄出典索引」はその後の出典研究を導く大きな役目を果たした資料である。しかし、所々遺漏があり、池田（二〇〇一）はその補訂版の性格を帯びる。

二 出典研究の深化

吉田金彦氏の「図書寮本類聚名義抄出典攷」（吉田、一九五四 a・b・一九五五 b）は、出典考証を中心に図書寮本名義抄の全貌を明らかにし、その後の出典に基づく研究に大きな示唆を与えた。そして、「類聚名義抄小論」（吉田、一九五五 a）ではその編纂における仏教教学上の目的と意義について述べている。池田（二〇〇〇）の「出典略注」は、吉田氏の出典研究を踏まえ、その後の研究成果を広く採り入れて簡略にまとめたものである。

吉田氏の類聚名義抄に関する一連の研究は、二〇一三年の著書『古辞書と国語』（臨川書店）に「第一部 類聚名義抄の研究」にその後の研究成果を反映して加筆、再収された。

一方、築島裕氏は訓点語研究の立場から図書寮本名義抄が有する価値に注目した。図書寮本名義抄の公刊以前に築島（一九五〇）は、改編本系の和訓に対して、遊仙窟・文選・白氏文集・日本書紀・祝詞などの和漢の典籍との関係を追及した。これは類聚名義抄の和訓研究における先駆的な論考といえ、図書寮本名義抄の公刊によってその卓越さが裏付けられた。

築島（一九五九）は、図書寮本名義抄所収の和訓を引用形式と出典類型との関係について論じている。そして、その一部に対して、現存する訓点本の傍訓との比較検討によって例証している。それによって、図書

寮本名義抄所収和訓の忠実な引用態度と、その訓点語研究上の価値が明らかにされた。

三 出典序列論の実証

図書寮本名義抄の注文引用における典籍間の序列に関しては、吉田（一九五五a）に指摘がなされたとおりである。宮澤俊雅氏の一連の研究は、徹底的な全数調査の手法によって図書寮本名義抄の主要出典からの注文引用における一定の序列の存在を実証したものである。宮澤（一九七七・一九八六・一九八七・一九八八）はそれぞれ中算釈文・倭名抄・万象名義・法華音訓（慈恩撰書の主なもの）を対象として取り上げて検討し、主要出典間の収録順位を確定、一部は推定している。

「図書寮本類聚名義抄の注文の配列について」（宮澤、一九九二）において玄応音義についての池田（一九九一b）と真興音訓についての山本（一九九〇）の論考まで取り合わせ、図書寮本名義抄における主要八出典の収録序列の全貌をまとめている。さらに、この論考では注種（注文の類型）間の序列も合わせて検討し、最終的に次のように序列を次のようにまとめている。

- 一 字体注
- 二 正音注

正音は反切よりは類音注を優先して採用

反切は「慈―弘―广―中―真―東―玉―川」の順に採録
義注・又音・異体等の引文

「域（大唐西域記）―慈―弘―广―憲（明憲）―中―然―真―東
―玉―川・面（孫愐切韻）・方（蔣魴切韻）」
ただし、「弘」の欠ける部首では「真―玉―東―」

四 真仮名和訓（主に「川」の引文）

五 吳音注（主に「公」の類音注）

六 訓点本等による片仮名和訓

「易―書―詩・記・論・選―月―後―律・列・礼・集―白・遊・唱
―切」

七 玉抄等による片仮名和訓

八 和音注（主に真興和音）

ところが、池田（一九九四・二八）は、宮澤氏の一連の研究における序列の推定・確定に関して、それが各出典の同時参照という仮説の上で成り立っていることに異見を示す。

四 出典利用と辞書成立をめぐる議論と実証

図書寮本名義抄の成立経緯に関しては、先述の出典序列論も含め、様々な議論が行われてきた。その中心はやはり出典に基づく議論となる。特に注文における引用数が最も多い玄応音義に関しては、図書寮本名義抄成立における位置づけについて様々な検討が行われてきた。

原・山本（一九八三）は、図書寮本名義抄における玄応音義の掲出語お

よび注文撰取のパターンを網羅した論考である。ト部く邑部までの四九二の対象項目に対して、玄応音義との掲出語および注文の対応を類型化する。そのうち玄応音義で同一またはそれに準ずる掲出語と注文を確認している。これによって玄応音義からの引用における忠実な引用と一部改変という現状を明らかにした。

望月郁子氏の一九九二年に出版された著書『類聚名義抄の文献学的研究』は、類聚名義抄という単一辞書の名を掲げた研究書としては、戦前の岡田希雄の『類聚名義抄の研究』以来のものである。特に第二章「図書寮本『類聚名義抄』における『篆隸萬象名義』の引用の方法―改編本におけるそれとの対比のために―」では、図書寮本の撰述における万象名義の位置を追及する。つまり、万象名義の注文を採録せず、慈恩撰書と玄応音義の注文を採る項目が少なからずあることから、空海の説より慈恩や玄応の説がより重視されていると結論した。これは、宮澤（一九七七・三八〇）が推定した「慈恩・弘法・玄応…」の順序に対する批判である（注二）。

池田証壽氏は「図書寮本類聚名義抄所引玄応音義対照表」（池田、一九九一a・一九九二）を作成し、図書寮本名義抄所収の玄応音義引用文と原典との対応項目をことごとく摘記している。そのような全面的な作業に基づいて池田（一九九一b）は玄応音義の引用が慈恩撰書、万象名義に次ぐことを明らかにした。そして、それを基に、図書寮本名義抄の成

立に「玄応音義によって掲出項を立項し、注を引用した後で、篆隸万象名義により増訂して行く方針」（三〇頁）の推定に至る。これは池田氏自身が「内典先行辞書後補論」と名付けた見解である。これは先掲の望月氏の見解と相違するところもあるが、実証的な方法論によって出された池田氏の結論を否定することは難しいであろう。

池田氏は、さらに万象名義を原撰部（池田、一九九三a）と続撰部（池田、一九九三b）に分け、図書寮本名義抄との関わり合いについて、その採録範囲、字順上の影響を中心に検討した。その結果、万象名義の利用が主に常用字というべきものを中心とする範囲で行われていること、対応部首において万象名義の字順に拠る部分が半分を占めていることを指摘する。これによって図書寮本名義抄の編纂における根幹資料としての万象名義の位置づけを明らかにした。

山本（一九九三）は、玄応音義からの掲出語採録の経緯について検討している。玄応音義における掲出語の出現回数と出現巻次によって検討を行い、次のような傾向を確認する。一、玄応音義に二回以上掲出されている掲出語は採られる傾向が強いこと。二、玄応音義卷二十二の瑜伽師地論の部分の掲出語が他巻に比べて多く採られる傾向にあること。これは玄応音義利用の新たな側面であり、図書寮本名義抄の編纂背景や目的と関わることとして意義を持つ。

大槻信氏は、辞書と「材料」の關係に注目し、平安時代の古辞書、新撰

字鏡・倭名抄・図書寮本名義抄について考察している。大槻(二〇〇五a)は、それらの検討を踏まえて、平安時代の辞書における「材料」、特に和訓の影響についてまとめた論である。平安時代の漢字漢語を対象とする辞書の中で、和訓という材料の採り入れが体裁の不統一という結果をもたらしたことを論じている。その中で図書寮本名義抄については、成立における和訓収録の影響について検討する。辞書成立と材料に対する依存性という仮説の上で、平安時代の各古辞書を検討し、それらを貫く特徴を証明するに至ったのは、卓越した方法論といえる。

注

(二) 宮澤(一九七七)は中算釈文と名義抄との対照の後、「主要な出典の採録序列は、内典釈を先に、外典釈を後に、例えば慈恩・弘法・玄応・中算・真興・東宮切韻・倭名類聚抄のように並べられるかと思われる」(三八〇頁)と推論し、出典序列論を具体化している。ただし、これは「勿論、この序列は、それぞれの資料と名義抄の対照調査をした上でなければ確定することは出来ない」(同頁)という認識とともに出されたものである。

第二章

図書寮本名義抄の編纂材料

第一節 はじめに

本章では図書寮本名義抄の出発点といえる「編纂材料」に注目し、その受け入れの現状について検討する。

図書寮本名義抄は部首分類体の辞書である。『説文解字』以来の部首分類体の辞書は単字の掲出語^{〔注一〕}を基本とする。それに対して図書寮本名義抄は二字以上からなる掲出語を掲げる項目が多い。これはすでに橋本（一九五〇）からも指摘されてきた事実である^{〔注二〕}。しかし、辞書編纂の基本単位を表す掲出語に、複数の文字が含まれるということは、その単位を分類し配列する上で困難を引き起こす原因となる。

このような掲出語の現状は、図書寮本名義抄がその編纂の材料の多くを慈恩撰書、玄応音義、中算釈文といった熟語中心の仏典音義類から採ったことと関係する^{〔注三〕}。そして、それは仏典音義を土台に一般字書へ移行した日本辞書史の流れの上で現れた「過渡的な現象」としても理解される。その現象の実態を明らかにすることは、図書寮本名義抄の辞書史的な位置づけを確かめるといふ意義を持つ。

以下、本章では図書寮本名義抄が持つ辞書発達上の「過渡的な現象」について、その出発点となる「編纂の材料」を中心に検討してみる。

第二節 編纂材料の概況

一 辞書編纂の目的

辞書という文献は、利用目的があり、それに沿って材料を集めて一定の基準で並べたものである。そうすると、辞書編纂の材料について述べる前に、まず編纂目的について考える必要がある。吉田（一九五五a…四五〇四六）は図書寮本名義抄の編纂が目指したこととして四点を指摘する。それを要約すると次のとおりである。

- 1 仏典読誦のための字音の明確化
- 2 法相宗関係の訓詁学における便益
- 3 世俗辞書を越えて百科全書的な仏教事典の作成
- 4 正確で権威的な外典の訓点語の併載

吉田氏の指摘を見ると、仏教教学上の必要による辞書作りがその目標として見出される。特に3と関連しては図書寮本名義抄を「仲算の法華経釈文や真興の大般若経音訓の撰述における、堅実該博な訓詁精神の発展が結集したもの」（四五頁）と指摘する。2と3の側面は、図書寮本名

義抄における仏典音義類の利用と関わり、1と3は辞書類の利用と関係する側面である。そして、4は訓点本の利用と繋がる。以下、このような編纂上のねらいを意識しながら検討していくことにする。

二 編纂材料の分類

図書寮本名義抄は和漢の様々な種類の典籍から幅広く採られた材料からなる辞書である。これら編纂材料は各出典典籍の中でその一部分として機能していたものである。その出典典籍の形態と内容は、図書寮本名義抄の編纂材料の性質を考える上で重要な手がかりとなる。

各典籍から集められた編纂材料の利用は、掲出語におけるものと注文におけるものとに大別できる。以下、編纂材料の出典について掲出語と注文とに分けて見ていこう。

掲出語に関してはその形態から考えてみる事ができる。部首分類体辞書の中で単字掲出語は最小かつ最適の単位である。それに対して、複数字の掲出語は部首分類体という体裁にはあまり適合な単位とはいえない。それにもかかわらず、図書寮本名義抄にはそのような不適合な材料が存在し、検討が必要である。

複数字の掲出語に関する先行研究としては次のようなものが挙げられる。まず、原・山本(一九八三)は卜部・邑部までの四九二の対象項目に對して、玄応音義との掲出語および注文の対応を類型化する。そのうち

玄応音義で同一またはそれに準ずる掲出語と注文を確認したのは四五六項目(九三%)にのぼる。この部分的な検討の結果については池田証壽氏も、「図書寮本類聚名義抄所引玄応音義対照表」(池田、一九九一a・一九九二)の作成による全面的な検討に基づいて「名義抄所引の玄応音義全体にも妥当するといつてよいようである^(注四)」と付言する。

さらに、宮澤(一九九二)において決算されている出典利用上の序列についての実証を受けて、山本(一九九二)は仏典音義類からその掲出語の採録を行う際にも序列が働いていたことを指摘している。そして、山本(一九九三)は玄応音義から採り入れられた掲出語に関して、法華經・大般若經・成唯識論とともに瑜伽師地論の字句が重視されていることを指摘する。

以上の先行研究により、図書寮本名義抄における熟語掲出語の多くが、仏典音義類を出典とする仏典の字句であることは疑いようがない。

一方、図書寮本名義抄の注文における材料には、その出典が忠実に注記されており、それに基づいた検討が行われてきた。注文の出典については吉田(一九五四a・b・一九五五b)「図書寮本類聚名義抄出典攷」^(注五)

が詳しく考証している。この論考で吉田氏はここで図書寮本名義抄の出典を、(甲)内典関係(仏教関係図書)、(乙)外典関係(それ以外の漢籍)、(丙)訓点本関係、といった三種類に大別している。その詳細は次のとおりである^(注六)。

図書寮本名義抄の出典分類

- (甲) 内典関係(仏教関係図書)……67点
 - (イ) 法華経関係
 - (ロ) 一切経音義関係
 - (ハ) 大般若経関係
- (ニ) 法相宗関係
- (ホ) その他
- (乙) 外典関係(それ以外の漢籍)……36点
 - (イ) 字書韻書関係
 - (ロ) その他成書
- (丙) 訓点本関係……27点

この分類を見ると、図書寮本名義抄が様々な典籍から材料を取り集める中で、仏教関係の典籍の数が多いたるが看取される。先に述べた図書寮本名義抄の編纂目的に照らしてみれば、仏典の字句を解説している既成の仏典音義類の利用は、辞書編纂の効率性を高める要素といえる。すなわち、すでに仏典の読誦および理解のために加工された情報の再利用として、追加的な加工を最小限にできる効率高い材料といえる。仏教関係図書の中では特に法相宗および法華経関係の音義類が多いことが指摘される^(注七)。引用頻度の高い出典の中には『妙法蓮華経音訓』『妙法蓮華経釈文』といった法華経の音義、『大般若経音訓』『大般若経字抄』のような大般若経の音義が含まれる。以下、これら仏典に関する音義と注釈書類を「仏典音義類」と称する。

外典の中でも「原本玉篇」「宋本玉篇」万象名義など玉篇系字書と、切韻系韻書の頻用が目立つ^(注八)。これら辞書類は、儒家経書の訓詁学の上で

成立し、漢訳仏典の訳出と仏典音義の成立にも直接的または間接的な影響が考えられる^(注九)。これは「字句の理解」という編纂目的に適した材料の源泉といえる。以下、これら字書と韻書の類を「辞書類」と呼ぶことにする。

最後に訓点本は、『毛詩』『文選』『白氏文集』といった漢籍を中心に、漢文原文の上に訓点を差した形態の資料である。図書寮本名義抄では片仮名和訓の出典として用いられる。訓点本の傍訓は、漢文原文に対する注釈的な性格も帯び、仏典音義類や辞書類とも通じる面がある。しかし、典籍の形式の面で、加対象である本文から離れず、独立した形態を持たない。辞書編纂の材料としては、独立した文献として成立している仏典音義類と辞書類に比べると、参考資料としての整頓は不十分な資料といえる。図書寮本名義抄に採り入れられた材料は和訓(日本語情報)であり、材料の性質という面からも他の辞書類・仏典音義類とは異なる。掲出語と注文を通じて中心的な材料となるのは辞書類と仏典音義類からのものである。本章での検討では仏典音義類と辞書類を中心に議論する。以上、図書寮本名義抄の編纂材料の分類について述べた内容を概略すると次のとおりである。

○掲出語——複数字掲出語は主に仏典音義類からの採録

配列・分類は辞書類に影響

○注文——仏典音義類・辞書類から漢文注

訓点本から和訓

続いて、編纂材料の主な出典である仏典音義類と辞書類に関して、形態および内容的な基本特徴を概観する。

三 仏典音義類の基本的な特徴

図書寮本名義抄の仏教教学的な狙いを考えると、個別經典の字句に対する解説と訓詁を兼ねた仏典音義の利用は、すでに仏教教学的な目的に合わせて加工された材料の利用という点で、効率的な手法であったと考えられる。実際、図書寮本名義抄の注文における出典注記の現況を見ても、辞書類よりは仏典音義類からの材料がより頻繁に用いられている（第四節で詳説）。特に玄応音義との関係は深く、注文引用で第一位であり、多くの掲出語も採り入れられていることは先述のとおりである（注一〇）。ここでは玄応音義を取り上げ、仏典音義類の形態と内容的な特徴について概説する。

⑦項目の配列基準は、対象とする經典における字句の出現順による。

たとえば、玄応音義卷第六所収の妙法蓮華經音義（注二）には「耆闍崛山―無復―逮得…」の順で項目が連なる。これは法華經序品の經文「如是我聞。一時佛住王舍城耆闍崛山中。與大比丘衆萬二千人俱。皆是阿羅漢。諸漏已盡。無復煩惱。逮得己利盡諸有結…」（注二）の字句を出現順に拾ったものである。

①掲出語の形態は、先の玄応音義の例で見たように熟語が中心である

（注三）。単字に対する注文しか含まないばあいでも、掲出語は經典に現れる熟語のままであることもある。仏典音義類の利用は經典本文における対応箇所との照合必要とする。そのような利用環境を考慮すると、単字の掲出語よりは複数字の形態のほうが識別上の有利である。

⑨注文の内容は、熟語、特に仏教用語についての事典的な説明と、単字に対する辞書的な説明に分けられる。前者は仏典理解のための参考書としての特殊性が著しく、後者は先述した辞書類からの影響が見られる。先掲の玄応音義の項目「耆闍崛山」と「無復」の例を見ると次のとおりである（注一四）。

(1)耆闍崛山【或言伊沙崛山、或言揭梨駄羅鳩胝山、皆訛也。正言娑羅陀羅矩吒山。此譯云鷲臺、又云鷲峰。言此山既栖鷲鳥又類高臺也。舊譯云鷲頭、或云靈鷲者、一義也。又言靈者仙靈也。按梵本無靈義、依別記云、此鳥有靈、知人死活、人欲死時、則群翔彼家、待其送林、則飛下而食、以能懸知、故号靈鷲也。娑音渠乙反。】

(2)無復【武于反。謂非有也、或作无。說文、古文奇字作无也。聲類云、無、虛无也。復、扶救反。說文、往來也。謂往來復重也。】

(1)は法華經の冒頭に出る山名「耆闍崛山」に対して、他の音訳表記や意訳語およびその由来といった仏教事典的な説明を施している。それに対して、(2)は熟語とはいえない文字列「無復」の下に単字「無」と「復」

の字音・意味・字体に関する辞書的な説明をそれぞれ収録する。特に「説文」「聲類」といった辞書類の書名が見えるのは注目される特徴である。

以上により、仏典音義類の基本特徴は次のようにまとめられる。

⑦項目配列——経文出現順の配列

⑧掲出語形態——熟語掲出語

⑨注文内容——特殊用語辞典的な説明と辞書的な説明の混淆収録

四 辞書類の基本的な特徴

先述のとおり、図書寮本名義抄には玉篇系字書と、切韻系韻書が多く引用されている。特に同じく部首分類体である玉篇系字書は、部首の選定や部首内における項目配列といった辞書編纂の構造的な側面のモデルとなった^{注一五}。その中でも弘法大師空海の手になる万象名義は「原本玉篇」の抄略本として図書寮本名義抄の編纂材料としても重視された書である。引用頻度は出典注記「弘」に限っても第四位にのぼるほどである^{注一六}。以下、万象名義を例にして、部首分類体辞書の形態と内容的な特徴を概観する。

⑦項目の配列基準は、部首分類体、すなわち、漢字一字が有する「形」の側面による。すなわち、各漢字は「部首」という字形上の共通分母によって分類され、さらに各部首内では主に字形上の類似性あるいは意味上の連関によって並べられる。いずれにしても一字の漢字が持つ固有の特

徴によるものである。

①掲出語の形態は、上述した配列・分類の基準と合わせて、その基本単位は単字を基本とする。たとえば万象名義の心部の冒頭を見ると、「心——息——情——性——意——旨——惠……」のように単字の掲出語が連なる。同じく部首分類体を標榜する図書寮本名義抄の編纂材料としても適合度を高くする特徴といえる。

⑨注文の内容は、単字に対する字音と意味を中心とする訓詁的な説明である。たとえば、「心」の例を見ると次のとおりである。

「胥林反」のような反切による字音注と、「神也容也」のような「〇也」体の意味注が収録されている。このように訓詁的な説明を中心にする特徴は、仏典理解の土台として字句の理解を求めた図書寮本名義抄の編纂目的にも符合するものである。

以上により、辞書類の特徴は次のようにまとめられる。

⑦項目配列——字形による分類配列

⑧掲出語形態——単字掲出語

⑨注文内容——訓詁的説明の収録

五 仏典音義類と辞書類の対比

以上で述べた仏典音義類と辞書類の特徴を対比すると次の【表一―1】

【表一-1】仏典音義類と辞書類の対比

	仏典音義類	辞書類
㊦項目配列	経典出現順	字形基準
㊦掲出語形態	熟語	単字
㊦注文内容	訓詁的な説明 特殊用語の説明	訓詁的な説明
辞書編纂上の利点	仏典理解と仏教用語に 最適な材料	部首分類体の形式に 最適な単位
辞書編纂上の難点	部首分類体の 基準適用が困難	・

ような形式において複数の漢字の「形」が共存する掲出語の存在は、分類と配列の基準適用を困難にする要素になるわけである。これは図書寮本名義抄の編纂が抱える問題点である。

のとおりである。図書寮本名義抄の部首分類体という辞書の形式を考えると、辞書類の材料は、その分類配列のために別途の工夫を必要としない。一方、仏典音義類のばあいには、经文出現順に配列されているものを字形基準に分類して再配列することになるため、別段の検討を要したと考えられる。熟語単位となる掲出語形態は字形による分類配列基準を適用する上で、問題要素となる。先述したように、字形を基準に材料を分類し配列するということは、個別漢字の固有の特徴による分類体系を指すということである。この

ところが、仏典音義類の注文の内容は、辞書類とは根本的な相違があるとはいえない。吉田（一九五五c:三六）は辞書類と仏典音義類の根本素材は同じで、「音義の作製に辞書を参照する事も当然ありうべき事」と述べ、基本材料における同質性と相互参照を指摘する。これは仏典音義類を単字字書に再編することを可能にした要因の一つである。図書寮本名義抄は仏典音義類のそのような側面によって成立可能だった辞書である。

次は、以上で概観した辞書類と仏典音義類からの材料が、実際のように入付け込まれているかについて検討する。特に仏典音義類の利用実態に注目する。

第三節 掲出語における編纂材料

一 単字掲出語と複数字掲出語

先に述べたように、仏典音義類からの材料は部首分類体辞書の材料として使うことに問題が予想される。その理由として、仏典音義類が経典から採った熟語^{注17}を掲出語とすることを取り上げた。これは対象字句を経文から検索識別する上での便宜を考慮した工夫で、実質的には単字に対する注文のみを含むばあいも存在する。经文における出現順という明確な配列基準はそれを一層固く支える。

次の(3)は、このように仏典音義類からの材料利用における困難を窺える例である。

(3)唯識【慈云唯謂簡別、遮無外境。識謂能了、詮有內心。・章有十門。

釋名如第二門。】〈072-74〉

この項目の注文は慈恩撰書の一つ『成唯識論述記』から採られ^{注一八}、掲出語「唯識」も同書からのものと考えられる^{注一九}。その注文には「唯」に対する部分と、「識」に対する部分、「唯識」全体を対象とする部分とが混在している。しかし、「唯」と「識」との間では形態的に共通要素を見出せない。このような材料の処理では、掲出語の複数ある構成字のいずれの特徴に合わせて分類・配列するかという問題が起こる。

実際、(3)の「唯識」のばあい、「識」の部首に従い、言部に配属されている。しかし、図書寮本名義抄が零本であることを考えると、「唯」に従って今は伝わらない口部にも同語が収録されていた可能性は否めない。実際、「恒沙」のばあいは次のように「恒」と「沙」両方に従って水部(4)と心部(5)にそれぞれ収録される。

(4)恒沙【慈云梵伽河神名。河從神稱。見歹部】〈027-41〉

(5)恒沙【中云胡登反・慈云梵伽河神名。河從神稱。此河具五義諸經多寄爲喻。】〈251-62〉

(4)と(5)の注文を見ると、慈恩撰書からの注文「梵伽河神名。河從神稱」が重複する。(5)は「恒」の音注を備える。一方、(4)のばあいは、隣の項目

に「沙」の音注と意味注があるため、ここではあえて重複する内容は省かれたものと考えられる。熟語の掲出語を持つ材料を部首分類体に並べ直すことの難しさが推し量られる例である。

【表一-2】図書寮本名義抄の各部首と
掲出語の形態

部首	頁 ^(注)	項目	単字	複数字
水	61	664	174(26%)	490(74%)
ㄚ	5	57	11(19%)	46(81%)
言	32	349	86(25%)	263(75%)
足	20	216	45(21%)	171(79%)
立	6	54	14(26%)	40(74%)
豆	3	34	7(21%)	27(79%)
卜	5	64	19(30%)	45(70%)
山	11	126	45(36%)	81(64%)
石	11	135	46(34%)	89(66%)
玉	13	140	38(27%)	102(73%)
邑	15	151	29(19%)	122(81%)
阜	26	250	46(18%)	204(82%)
土	23	262	81(31%)	181(69%)
心	41	456	115(25%)	341(75%)
巾	10	104	29(28%)	75(72%)
糸	40	415	107(26%)	308(74%)
衣	18	198	56(28%)	142(72%)
合計	340	3675	948(26%)	2727(74%)

注:勉誠社覆製本(1969年刊)の頁による

【表一-2】は図書寮本名義抄の現存部分における掲出語の形態的な分類を部首ごとに示したものである。これは単字の掲出語を採るばあい(単字)と、二字以上の掲出語を採るばあい(複数字)に分けた結果である。いずれの部首でも複数字のほうが単字を二倍以上上回

り、大きな格差が確認される。複数字の掲出語は、全体三六七五項目^{〔注二〇〕}のおよそ四分の三に近い二七二七例にのぼり、単字を採る例は四分の一ぐらいに過ぎない。

部首ごとに検討すると、複数字の割合が特に高い部首は、ㄩ・足・豆・邑・阜部である。最も割合が高い阜部のばあいは、その原因として「阿弥陀・阿羅漢・阿闍梨・佛陀」などの梵語訳語に頻用される「阿」「陀」などが含まれることが考えられる。「阿」のばあいは阜部の冒頭八頁（一八六―一九三頁）にわたって連なっているほどである^{〔注二一〕}。足・邑部に対しても同じことがいえるが、ㄩ部と豆部に関してはこれは違う理由が考えられる（後述）。

それに対して、単字掲出語が比較的に近い部首としてはト・山・石・土部があるが、最大でも四割は超えない。いずれの部首も具体的な物名を単字で表すものが多いように見受けられる。

二 複数字掲出語の更なる分類

複数字の掲出語を詳しく検討すると、その中には次のようなバリエーションの存在が確認される。

(6)訓詁【應云吁運反―導也教也誠也・中云誨也・眞云言―也試也・東云赦也注解也以善言―男女也。又男曰教女曰―也。

【表一-3】複数字掲出語の細部分類

部首	漢語熟語	梵語訳語	字体掲出	計
水	386 (79%)	84 (17%)	20 (4%)	490
ㄩ	28 (61%)	1 (2%)	17 (37%)	46
言	206 (78%)	51 (19%)	6 (2%)	263
足	127 (74%)	42 (25%)	2 (1%)	171
立	35 (88%)	3 (8%)	2 (5%)	40
豆	26 (96%)	1 (4%)	0 (0%)	27
ト	43 (96%)	1 (2%)	1 (2%)	45
山	65 (80%)	11 (14%)	5 (6%)	81
石	85 (96%)	1 (1%)	3 (3%)	89
玉	86 (84%)	14 (14%)	2 (2%)	102
邑	42 (34%)	76 (62%)	4 (3%)	122
阜	99 (49%)	98 (48%)	7 (3%)	204
土	131 (72%)	37 (20%)	13 (7%)	181
心	286 (84%)	37 (11%)	18 (5%)	341
巾	66 (88%)	6 (8%)	3 (4%)	75
糸	265 (86%)	36 (12%)	7 (2%)	308
衣	109 (77%)	20 (14%)	13 (9%)	142
合計	2085 (76%)	519 (19%)	123 (5%)	2727

議也從也。フシフ詩・下音故・弘云釋―也・應云又音古訓古言也訓導也釋也・東云古今異辭訓古言又姑戸反俗音古非訓也故古也。】〈076-62〉

(7)大豆【順云一名菽〈音叔〉和名万米】〈128-12〉

(8)阿彌陀【應云此言無量壽・慈曰―弭多那庾沙云無量壽。】〈186-43〉

(9)慈氏【域曰梅呬麗邪唐言慈即姓也舊曰彌勒訛略 慈云梵云梅呬麗耶古云彌帝麗或彌勒皆訛略也】〈269-32〉

(10)況況【干云上谷・中云許訪反矧也。捷云寒冰也。今案非文意。】

〈068-24〉

まず、(6)と(7)は漢語熟語で、複数字の掲出語の中で最も多い割合を占

めるものである。それぞれの注文を見ると、前者には熟語を構成する単字「訓」「詁」に関する漢文注と和訓、後者には熟語「大豆」に当たる和訓が引用される。注文は辞書的な説明が中心で、仏教の宗教色は特に感じされない。それに対して、(8)と(9)は梵語の音訳および意識語で(以下、梵語訳語)、仏教伝来と仏典漢訳によって登場した語である。その注文には他の音訳表記や意識といった梵語の翻訳関連情報が見られ、仏教色の濃い内容である。最後に(10)の掲出語は、異体関係にある二つの文字を取り合わせたものである。つまり、実質的に一文字の複数の字体を示したものであるため、熟語よりは単字に近い性格を帯びる(注三)。

以上より複数字掲出語は、漢語熟語(6)・(7)・梵語訳語(8)・(9)・字体掲出(10)の三種類に分類可能である。特に字体掲出のばあいには実質的に単字のように働き、他の二種類とは違う取り扱いが必要である。以上にしたがって、各部首の複数字掲出語を三種類に分類してみると【表一・3】のとおりである。

まず、看取されるのは、漢語熟語の高い割合である。複数字掲出語を取る全二七二七項目のうち、七六%を占める二〇八五項目が漢語熟語の掲出語である。そして、もう一つの特徴としては、各部首における梵語訳語と字体掲出の分布のばらつきである。以下、これらの三つの下位分類について検討する。

三 漢語熟語のばあい

先述のとおり、複数掲出語の八割近くを占める類型である。この類型は梵語訳語と字体掲出という数少ない要素を選別したあとのものという側面が強い。したがって、今後この類型に属する掲出語については更なる検討による細分類の余地もある。

【表一・3】に示された各分類における分布を見ると、豆・ト・石・巾部は総体的に漢語熟語に集中しているように見える。特に豆部には漢語熟語に分類された掲出語の中に次のように、「豆」の種類を表す語が連なる。

豆部

大豆<128-12>、烏豆<128-14>、鵲豆<128-22>、珂孚豆<128-24>、大角豆<128-32>、白角豆<128-33>、赤小豆<128-42>、黒小豆<128-44>、紫小豆<128-51>、黄小豆<128-52>、緑小豆<128-53>、野豆<128-54>、篇豆<128-61>、天豆<128-64>、澡豆<128-72>、鹿豆<128-73>、斑豆<129-11>、巴豆<129-13>、宛豆<129-14>、登豆<129-21>、豌豆<129-22>、蠟豆<130-12>、登豆<130-13>

部首内の全三四項目のうち、複数字掲出語を持つ項目は二七例である。その中で二二例が豆の名称である。そのうち、一二項目には倭名抄からの万葉仮名和訓のみ収録し、倭名抄から掲出語と注文、両方採り入れられたような例である。これは部首の特性上、「豆」が入る物名が立項され

た考えられる。しかし、辞書類からまとまった量の項目をこのように取り入れたことは注目される。同じような様相は石部においても見られる。

石部

石鐘乳<147-24>、慈石<147-32>、礎石<147-34>、玄石<147-43>、絡石<147-51>、領石<147-52>、石衣<147-53>、石髪<147-54>、敷石<147-61>、桃花石<147-63>、浮石<147-64>、磐石<147-71>、磐戸<148-14>、常磐<148-21>、堅磐<148-22>、増磐<148-23>、石流黄<148-24>、石流黄蓋<148-32>、圍碁<148-42>、碁子<148-53>、碁局<148-62>、彈碁<148-64>、碁碁<149-41>、荒碁<149-43>、直碁<149-44>

各項目の注文は倭名抄や『文選』などから収録された万葉仮名・片仮名和訓が中心で、掲出語も倭名抄に存在するものである。

四 梵語訳語のばあい

梵語訳語のばあい、水・言・足・邑・阜・土・心・糸・衣部に集中し、特に邑部では漢語熟語の二倍となり、かなり特殊な様相を呈する。阜部は漢語熟語と梵語熟語とがほぼ同じ割合を占める。全体的に漢語熟語が多数を占める中で両部首のこのような様相は異例といえる。邑部と阜部における梵語訳語掲出語の主要なものをまとめて示すと次のとおりである。

邑部

- 【那】 橋陳那<171-43>、解橋陳那<171-53>、却賓那<171-61>、摩訶迦多衍那<171-71>、大迦多衍那<172-24>、刹那<172-34>、毗盧舍那<172-51>、盧舍那<172-53>、那爛陀僧伽藍<172-74>、那提迦葉<173-13>、那伽室利<173-22>、安繕那<173-24>、阿履那<173-32>、首訶既那天<173-34>、那提乾天<173-42>、那羅延<173-44>、諾健那<173-52>、那地迦<173-54>、踰繕那<173-62>、那婆摩利<173-72>、那伽<173-74>、那由他<174-11>、那迦波羅<174-14>、那隣羅賓洲<174-24>、那々比丘<174-34>、那延羅那羅<174-42>
- 【耶・耶】 毗奈耶<175-22>、伽耶城<175-31>、伽耶迦葉<175-54>、毗梨耶<176-12>、薩迦耶見<176-14>、阿頼耶<176-21>、阿遮利耶<176-24>、橋奢耶<176-34>、維耶<176-44>、邪維<176-54>、邪旬<176-62>、邪舍<176-63>、邪輪伽<176-64>、邪若達<177-11>、跋耶<177-21>、跋耶<177-22>
- 【鄔】 鄔波柁邪<177-23>、鄔波弟鑠論<177-43>、鄔波索迦<177-51>、鄔波斯迦<177-71>、鄔波尼殺曇分<178-22>、鄔波婆娑<178-33>、世羅鄔波<178-42>、鄔魯々々罰底迦<178-44>、鄔柁南<178-53>、鄔陀夷<178-62>、鄔波離<180-43>
- 【部】 部多<179-22>、部多奴悉沒栗底<179-24>
- 【郁】 郁多<180-23>、郁鳩<180-32>、郁枳<180-33>
- 【邠】 邠坻<182-14>、邠耨文陀尼子<182-32>、邠耨文陀弗<182-43>、邠祁文陀弗<182-51>、林邠<182-54>
- 【郵】 沙郵<183-23>、郵樓多<183-24>、郵婆<183-33>
- 【郅】 郅祢<185-21>、呵郅<185-22>

阜部

【阿】阿彌陀<186-43>、阿羅漢<186-64>、阿毗曇<186-74>、阿毗達磨藏<187-21>、阿僧企邪<187-23>、阿僧祇<187-34>、阿摩勒果<187-42>、阿摩羅菓<187-51>、阿輸迦<187-53>、阿育王<187-63>、阿若憍如<187-64>、阿難陀<187-71>、阿含<188-12>、阿笈摩<188-21>、阿會亘脩天<188-22>、阿利邪<188-24>、阿練若處<188-32>、阿蘭拏<188-54>、阿蘭那<188-64>、阿蘭若<188-73>、阿須倫<189-13>、阿脩羅<189-24>、阿素洛<189-31>、阿那婆荅多<189-33>、阿泥律陀<189-41>、阿菟樓陀<189-54>、阿泥盧豆<189-61>、阿那律<189-62>、阿奴律陀<189-63>、阿世邪<189-71>、阿揭陀藥<189-73>、阿闍底迦<190-12>、阿顛底迦<190-23>、阿提目多伽<190-31>、阿祇利<190-33>、阿迦花<190-42>、阿泥律<190-44>、阿跋摩羅<190-54>、阿梨樹枝<190-63>、阿逸多<190-71>、阿氏多<190-73>、多陀阿伽度<191-13>、阿羅訶三藐<191-21>、三佛陀<191-23>、阿闍梨<191-31>、阿素羅<191-43>、阿闍世王<191-61>、阿耨<191-71>、阿摩羅菓<191-72>、阿浮呵那<191-74>、阿難賓坻<192-13>、阿夷<192-31>、阿闍貴<192-34>、阿夷羅婆提河<192-42>、阿耨大泉<192-44>、阿利羅跋提河<192-53>、阿濕卑<192-64>、阿那般那三昧<192-73>、阿喻訶涅喻訶<193-14>、辛阿<193-24>、阿邏荼迦羅摩子<193-42>、阿鼻至<195-23>、阿鼻旨<195-31>、阿迦尼<195-34>、阿伽<195-42>、阿惟顏<195-44>、阿僧伽<204-51>、陳那菩薩<204-53>、際陽<204-64>、防那<207-52>、阿死羅摩登祇旃荼<209-11>

【陀】佛陀<186-54>、周陀<186-61>、薩陀<186-62>、薩陀<193-54>

路伽邪陀<193-62>、逆路伽邪陀<193-74>、頭陀<194-21>、難陀<194-41>、孫陀羅難陀<194-43>、跋難陀<194-53>、伽陀<194-61>、周陀<194-63>、莎伽陀<194-71>、諾瞿陀<194-74>、帝陀羅<195-21>、拘某陀華<195-53>、俱某陀<195-61>、沙門拘羅那陀<195-73>、婆羅末陀<196-11>、佛陀<203-74>、難陀<204-11>、跋難陀<204-12>

邑部は「那・邪・耶・鄔」の四字、阜部は「阿・陀」僅か二字に偏重していることが分かる。他に梵語訳語が多く分布する部首を見ると、水部の「波・洛・泥・沙・須」、言部の「訶・譚・諾・譌・識」、足部では「跋」、玉部の「璃・珊」、土部の「坻」、心部の「恒・橋・侈」といった梵語音訳語に頻用される字に同様の集中が見られる。

一方、山部の「山」、土部の「城」、衣部の「衣」は、西域の地名や物名などの翻訳の際に意識される部分に現れる用字である。いずれも仏教色の強い語彙であるのは同じである。その一覧は次のとおりである。

水部

【江・池】獼猴江<006-42>、獼猴池<007-52>、無熱惱池<062-53>

山部

【山】十寶山<135-72>、前正覺山<136-13>、鷲峯山<136-22>、靈鷲山<136-44>、前正覺山<145-51>、鷲峯山<145-61>、鷄足山<145-64>

土部

【城】王舍城<217-32>、上茅城<217-42>、廣嚴城<217-44>

衣部

【衣】欽婆羅衣<328-64>、葛摩衣<328-71>、饑摩衣<328-72>、
扇那衣<328-74>、翅夷羅衣<329-11>、鳩夷羅衣<329-13>、
饑羅鉢尼衣<329-21>、憍奢邪衣<329-31>、葛摩衣<329-33>、
領鉢羅衣<329-34>、褐刺縹衣<329-42>

これらの掲出語の出自は仏典音義類をはじめとする仏教関連書籍にしか考えられない^(注三)。梵語訳語は図書寮本名義抄の掲出語採録における仏典音義類の影響を見る一つの指標として有効と考えられる。

五 字体掲出のばあい

もう一つ、字体掲出に関しては、水・彡・土・心・衣部に集中する。特に彡部では僅か四六項目の複数字掲出語のうち、一七項目が字体掲出である。その字体掲出語は次のとおりである。

彡部

氷氷<065-13>、決決<065-72>、凍凍<066-21>、淩淩<066-33>、
馮馮<066-62>、漸漸<066-63>、涼涼<066-73>、冷冷<067-23>、
準準<067-53>、沃沃<067-62>、潔潔<067-63>、彫彫<067-72>、
沸沸<068-14>、滅滅<068-22>、滅滅<068-23>、況況<068-24>、
將將<068-44>

字体掲出を複数字掲出語から離して、単字掲出語に準ずるものとして扱うばあい、彡部における単字掲出語と複数字掲出語の割合は、一九%対八一%から、四九%対五一%となる。他の部首と比べて特殊な現象である。

「將將<068-44>」を除く一六例は、いずれも「彡」と「彡」の微細な違いによる類形別字・異形同字の混同を弁別するためのものである。これは彡部が抱える字形上の問題による現象である。そして、「將將<068-44>」以外の項目には『干祿字書』からの引文を収録し、その掲出語も同書に見られるものである。『干祿字書』は辞書類に分類される出典で、その掲出語の出自と注文の内容を見る限り、仏教色は特に見られない。

本節では掲出語に関して、単字と複数字といった形態的分類を行った。そして、後者に対してはさらにその性質を検討し、漢語熟語・梵語訳語・字体掲出の三種に分けた。複数字の中で中で字体掲出に関しては、他の二種類とは違い、辞書編纂の材料として単字に準ずるものに分類するのが妥当である。そこで、図書寮本名義抄の掲出語はその語内容によって、単字及び字体掲出と、漢語熟語および梵語訳語とに再分類をできる。前者を「一字掲出語」、後者を「熟語掲出語」と呼ぶ。以上の検討によると、仏典音義類および辞書類と、掲出語の各類型との間の連関性は、「一字掲出語と辞書類」、「熟語掲出語と仏典音義類」の間により強く働いていることと推察される。

第四節 注文における編纂材料

一 注文の出典注記

前節では掲出語における材料利用が仏典音義からの熟語を中心とすることについて確認した。ここでは掲出語のみならず注文とともに引用することが多い。本節ではその注文における材料採録の実態について仏典音義類と辞書類といった出典種類の利用状況を中心に検討する。

図書寮本名義抄の注文には、引用出典の注記が行われ、それを基に本辞書の編纂における出典利用の実態を掴むことが可能である。本節では、図書寮本名義抄の注文に見られる出典注記に対して、橋本(一九五一)と池田(二〇〇一)といった図書寮本名義抄の出典索引、そして、吉田(一九五四 a・b・一九五五 b)の出典考証を手がかりにして、内典・外典・訓点本の三分類を行った。その概略を次に示す。

総項目数	——三六七五項
出典条数	——八九二三条 (直接・八一六八条、間接・七五五条)
仏典音義類	——三七八三 (直接・三三三六条、間接・四四七条)
辞書類	——三四二八 (直接・三二五七条、間接・二七一条)
訓点本	——六一一 (注二四)
無注記	——一〇八四
未詳	——一七 (直接・一〇条、間接・七条)

これに基づいて、全三六七五項目における仏典音義類と辞書類の引用

状況を検討する。それぞれの引用状況を示すと次のようである。

① 仏典音義類〇、辞書類×	……一三七六(三七%)
② 仏典音義類〇、辞書類〇	……一〇三〇(二八%)
③ 仏典音義類×、辞書類〇	……八五七(二三%)
④ 仏典音義類×、辞書類×	……四一二(一一%)
計	……三六七五

仏典音義類または辞書類を含む項目は全体項目の九割にのぼり、仏典音義類を含む(①+②)だけでも六五%である。さらに、仏典音義類または辞書類を含む三二六三項目における収録現状は次のようにまとめることができる。

(A) 仏典音義類を含む(①+②)	……二四〇六(六五%)
・ 辞書類は収録せず(①)	……一三七六(三七%)
・ 辞書類と共に収録(②)	……一〇三〇(二八%)
(B) 辞書類を含む(②+③)	……一八八七(五一%)
・ 仏典音義類は収録せず(③)	……八五七(二三%)
・ 仏典音義類と共に収録(②)	……一〇三〇(二八%)

先に述べた仏典音義類を含む項目(A) ①+②は図書寮本名義抄の六五%の項目に含まれ、辞書類を含む項目(B) ②+③の五一%を上回る。しかし、その格差が大きいとまでは言い難い。ところが、それぞれの分布の詳細を見ると、その様相に違いが見えてくる。

(A)のうち、辞書類を収録しない項目(①)は共に収録する項目(②)より多い。それに対して、(B)は、仏典音義類を収録しない項目(③)が共に収録する項目(②)を下回る。すなわち、仏典音義類は辞書類なしに収録される傾向がより強いが、辞書類のばあいには仏典音義類とともに収録される傾向がより多いわけである。これは「仏典音義類」が優先され、その隙間を「辞書類」によって補強するという方針が働いた結果ではないかと推測される。それは池田(一九九一b:一五)の次のような推論の妥当性を統計的に裏付けることともなる。

名義抄の撰者は、玄応音義によって提出項と注文を採録した後、注文は玄応音義より篆隸万象名義を優先するという出典の採録序列に従って篆隸万象名義から注文を増訂して行く方針であったと考えられる。

しかし、二三%—二八%—三七%、それぞれ五%、九%ぐらいの差であまり大きな傾向の違いと見出すことは難しい。そこで、前節で検討した掲出語の類型との対応関係によってより詳細な検討を進める。

二 掲出語形態との関連

注文の編纂材料と、掲出語の形態との対応関係を【表一—4】にまとめた。前節で仏典音義類からの影響が相対的に強いとされた「熟語掲出語」と、そのような影響が比較的に強くない「一字掲出語」とに分けた。

【表一—4】を注文材料の出典として仏典音義類と辞書類を基準に読み解くと次のとおりである。

仏典音義類から注文を引いている二四〇六項目(A)のうち、一字掲出語は三九〇項目で一割強に過ぎず、九割近くが熟語掲出語を採る。それに対して、辞書類の注文を引用する項目(B)においては、熟語掲出語を採るものが半数以上(五四%)を占めるものの、一字掲出語を採る項目との差は大きくない。すなわち、仏典音義類から引用した注文は熟語掲出語に著しく偏重している。それに対して、辞書類から引用した注文の分布はそのような傾向は相対的に弱い。

辞書類と仏典音義類とが共存する一〇三〇項目(②)を除いてみると、このような傾向性の違いは一層大きくなる。仏典音義の注文を引くが、辞書類の注文は引かない項目(①)のばあい、単字掲出語と複数字掲出語の割合の差は、八%と九二%で更に開く。一方、辞書類の注文を採るが仏典音義類の注文は採らない項目(③)では、逆転して一字掲出語が六九%を占め、三一%の熟語掲出語を大きく上回る。これは「仏典音義類—熟語掲出語」、「辞書類—一字掲出語」といったある種の相関関係を類推させることである。

続いて、【表一—4】を掲出語形態から読み解いてみると、次のとおりである。

【表一-4】注文出典と掲出語形態の対応

	一字		熟語		計
	単字	字体掲出	漢語熟語	梵語訳語	
音義○(A=①+②)	366(15%)	24 (1%)	1547(64%)	469(20%)	2406
音義○辞書×(①)	93 (7%)	3 (1%)	836(60%)	444(32%)	1376
音義○辞書○(②)	273(27%)	21 (2%)	711(69%)	25 (2%)	1030
辞書○(B=②+③)	767(41%)	118 (6%)	974(52%)	28 (2%)	1887
辞書○音義×(③)	494(58%)	97(11%)	263(31%)	3 (1%)	857
辞書○音義○(②)	273(27%)	21 (2%)	711(69%)	25 (2%)	1030

注：仏典音義類は「音義」、辞書類は「辞書」と略

単字掲出語のばあい、全八六〇項目の半分以上が辞書類のみ(③、四九四項目)に集中され、共存(②、二七三項目)と音義類のみ(①、九三項目)の順で分布が急激に減る。辞書類のみ引用する項目を見ると、次のように万象名義をはじめとする字音・意味の注を併せて持つ辞書からの引用である。

譚【弘云徒耽反着也詭也誕也。・東云國也。又《上》。・季云之豆加
尔須】〈080-63〉

一方、音義類のみ引用する単字掲出語の中には、次のような項目が多数見られる。

洵【金類云二古】〈004-62〉
注【類云俗法今】〈004-63〉

いずれも「法」の異体字を掲げる項目であり、字体掲出語と立项目的を同じくする。これは単字掲出語の典型的な形態とはいえない特殊な例といえよう。出典注記は「類」が見えるが、これは郭彥撰『一切経類音決』を指す。類音決は散佚した書であるが、その体裁は音注と字体注を中心とする仏典音義類と推定される(注二五)。そして、玄応音義、中算釈文のような巻音義とは違って、字様書のような性格を併せて持つ。つまり、仏典音義類の中でも特殊な部類といえる。このような例は九三項目のう

ち、一六項目にのぼる。

全一二一項目の字体掲出語では辞書類(③)への偏重がさらに高まり、共存(②)、仏典音義類のみ(①)の順で分布が減る。特に仏典音義類のみの分布は次に示す僅か三例に過ぎない。

沍灋【類云一正】〈004-61〉

滌源源【又云三谷】〈005-34〉

辨泚【又云二谷水上浮萍。】〈058-31〉

続いて、漢語熟語の例では、仏典音義のみ引用する項目(①、八三六)と、仏典音義と辞書類を両方引用する項目(②、七一一)が大きな差もなく分布する。一方、辞書類のみの項目(③、一六三)は量が大きく減る。

このばあいは、音義のみ(①)、両方引用(②)の項目を見ると、玄応音義・中算釈文といった巻音義類から字音・意味注を中心とする引用が多く見受けられる。辞書類のみの項目は次に示す一連の項目のようなものが特徴的である。

天河【順云一名天漢。和云在下】〈007-11〉

漢河【又云天河一名一】〈007-12〉

銀河【又云天河一名一和名阿麻乃賀波】〈007-13〉

半天河【又云和名岐乃宇豆保乃美都竹籬頭水】〈007-14〉

これらはいずれも倭名抄に載る項目と万葉仮名和訓を引く項目である。

万象名義のような字音・字義注を中心とする例は多く含まれない。つまり、辞書類の例としては万象名義で表される典型的な類型とは向きを異にする材料のように見受けられるものである。

梵語訳語になると、仏典音義類のみの項目(①、四四四)に集中される傾向が一層強い。これは掲出語の属性を考えると、理解が難しくない。辞書類と共存(②、一二五)、または辞書のみの(③、三)はわずかに存在する。次の例は、梵語訳語の説明の中、音訳に用いられた漢字の字義と字音を解く内容である。

緊那羅【慈云居忍反一捺洛云歌神・中云台云疑神。似人而有一角。《吉

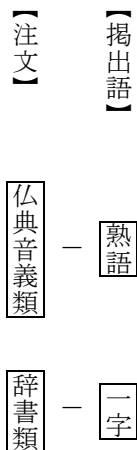
同》・玉云糾也急也。 眞云キン】〈322-32〉

以上の検討で注文の出典と掲出語の類型との対応における傾向性を確認した。仏典音義類の注文を引く項目は熟語掲出語を採るものに偏り、一字掲出語のばあいは逆に辞書類の注文を引く項目が多い。これによって、注文と掲出語の引用において「仏典音義類注文―熟語掲出語」「辞書類注文―一字掲出語」という同伴性が看取される。これを典型的なものとすれば、非典型的な例も存在する。たとえば、先述した仏典音義類である類音決の引文が一字掲出語に単独収録されることが、辞書類の倭名抄の注文が熟語掲出語に単独収録されるといった例がそれである。掲出語の引用のみならず、注文の引用においても、仏典音義類が大きく主

導し、全体的に辞書類はそれに従う材料として位置づけられる。

第五節 まとめ

以上、本章では図書寮本名義抄における編纂材料の利用実態を分析してみた。その分析の観点として、「仏典音義類」と「辞書類」という編纂材料の出典による分類と、「掲出語」と「注文」という編纂材料の利用先による分類を用いた。編纂材料の出典による分類は、掲出語においてもある程度看取できるが、出典注記によって明示される注文においてより明確に検討可能である。掲出語に対してはその語としての性質によって検討し、「熟語掲出語」と「一字掲出語」とに分類するにとどめた。最終的に、図書寮本名義抄における編纂材料の利用実態を把握するために、最初の二つの観点、つまり、出典による分類と、利用先による分類を融合させ、次のような連関性が見出される。



注

- (一) 本論ではその構成文字数にかかわらず「掲出語」の語を用いることにする。ただし、単字であるばあい、必要に応じて「掲出字」の語を使うことがあるが、文字数以外の違いはないことを断っておく。
- (二) 図書寮本と観智院本に対して水部の掲出語を調査して対比する。図書寮本のばあいは「標出の基本字語」三八〇例のうち、「一字」五一例、「語彙」三二九例あるとする。観智院本のばあいは、「標出の基本字語」九二〇例に対して「殆んど一字標出のみ」と記す。(一九二〇頁)
- (三) 慈恩撰書との関係については池田ほか(一九八八)に詳しく、玄応音義との関係については原・山本(一九八三)と池田(一九九一a・b・一九九二)に詳しく論じられている。以上の論考によると、図書寮本名義抄の掲出語の多くは仏典音義類から採り入れられたもので、特に玄応音義からのものはその根幹をなすといえるほど多い。山本(一九九三)によると、これら掲出語は主に瑜伽師地論・法華経・大般若経の本文に現れる字句が中心とする。これらは法相宗の所依經典といえるべきものである。
- (四) 池田(一九九一b・一八)
- (五) これは吉田金彦氏の著書『古辞書と国語』(二〇一三年刊、臨川書店)の第一部第二章「図書寮本類聚名義抄出典攷」として加筆再収された。
- (六) 吉田(一九五五a・四三〇四四)が具体的な書目を挙げて分析した内容をまとめたものである。
- (七) 吉田(一九五五a・四四)
- (八) 具体的な書目は吉田(一九五五a・四三)と池田(二〇〇〇)を参照されたい。
- (九) 吉田(一九五五c・三六)は辞書類と仏典音義類の根本素材が同じであるとし、「音義の作製に辞書を参照する事も当然ありうべき事」と述べている。
- (一〇) 原・山本(一九八三)は卜部く邑部までの四九二の対象項目に対して、玄応音義との掲出語および注文の対応を類型化する。それを簡略にまとめると次のとおりである。

- 第一類 (同一見出あり／その一つの項から注を採る) ……二九〇例
第二類 (同一見出あり／その二つ以上の項の注を取合せ) ……一五例
第三類 (同一見出あり／異なる見出からも注を取合せ) ……五五例

第四類 (同一見出あり／異なる見出からのみ注を採る)	……………三例
第五類 (同一見出なし／異なる見出から注を採る)	……………三二例
第六類 (玄応音義の字体注に示された字を見出に採る)	……………五四例
第七類 (玄応音義による見出の下に参照注記のみ〓空見出)	……………二七例
第八類 (図書寮本の注が「尸無注」)	……………二例
第九類 (見出の用字に小異あり)	……………一例
第十類 (見出の字に過不足あり)	……………九例
第十一類 (玄応音義に見られない注)	……………四例

このうち同一またはそれに準ずる掲出語があるとされる第一～四・六～十類を合算すると、四五六項目(九三%)に対して掲出語と注文ともに玄応音義からの採録が確認される。

(一一) 玄応音義所収「妙法蓮華經音訓」は、慈恩大師窺基撰のものを載せたものである。図書寮本名義抄では慈恩撰書の中核をなし、図書寮本名義抄との関係について宮澤(一九八八)が詳しく論じている。

(一二) 「大正新脩大藏經」巻九(經典番号…二六二)による。傍線は筆者による。

(一三) 同じ仏典音義類でも掲出語における熟語と単字の採用には少し差があるようである。玄応音義のばあいには、ほぼすべての項目が複数字掲出語を採るが、中算釈文では単字掲出語も相対的に多く見られる。

(一四) 以下、玄応音義の本文は「高麗大藏經」所収のものを利用する。

(一五) 玉篇系字書からの影響の実証的な研究としては、宮澤(一九七三・一九八七)・池田(一九九三a・b)がある。宮澤氏の研究では図書寮本名義抄の注文出典として万象名義の利用が「空海原撰部」と「後人統撰部」とに分けられることを指摘し、注文における位置づけを精査している。それに対して、池田氏の論考では、図書寮本名義抄の字順に対する万象名義の影響を検討している。図書寮本名義抄の編纂における「原本玉篇」の影響について、望月(一九九二・三五)は次に指摘する。

中日双方の諸家の諸説を集大成した字書に対する要求が、漢字文化社会に高まっていたと思われる。諸家の諸説を集大成した字書に『玉篇』がある。『玉篇』は引用諸注文の出典を明示した字書である。原撰本『類聚名義抄』は、『玉篇』を、その意味での手本とし、日本版『玉篇』、つまり、『漢字の音・語義』についての中国・日本における僧俗諸家の諸説の集大成をめざして編纂された字書である。

(一六) 宮澤(一九七三)は図書寮本名義抄における出典注記「弘」と「玉」が、万象名義

の「空海原撰部」(第一～四帖)と「後人統撰部」(第五・六帖)からの引用であると指摘する。しかし、出典注記「玉」に対しては他の典籍からと考えられる注文も含まれる。

(一七) 本論では「複数字」と「熟語」という語を用いるが、前者は構成文字数という形態的な特徴に注目した語であり、後者は掲出語が語として持つ意味単位としての側面を意識した呼び方である。

(一八) 池田ほか(一九八八・四〇八)

(一九) 『成唯識論述記』は仏典注釈書であり、卷音義のような掲出語と注文の明確な区別は視覚的に目立たないが、注釈の対象語句は特定可能である。

(二〇) 図書寮本名義抄の全項目数は、項目の認め方によって出入りがあるが、本稿では翻字篇の翻字で認めた項目数を基準にする。

(二一) 池田(一九九三b・六)に同様の指摘がある。

(二二) 異形同字のばあいは勿論、類形異字の弁別例のばあいも、掲出語を構成する複数の単字は字形的に類似するか、共通分母を共有する。したがって、部首分類体の分類配列基準の適用は他の複数字掲出語より容易である。

(二三) 実際、梵語訳語を掲出語とする五一八項目のうち、注文に仏典音義類の出典注記を含むものは四四五項目である。出典注記のない注文しかない五〇項目を除き、一つの出典注記しか見られない三二三項目は、すべて仏典音義類からのものである。特に単一出典項目では、玄応音義(二二一項目)が最も多く、大唐西域記(三九項目)、信行撰書(三三二項目)、慈恩撰書(二二項目)、真興音義(二二項目)の順である。

(二四) 訓点本の条数は出典注記の数であるため、収録和訓の数とは相違がある。

(二五) 散逸文献であるが、池田(一九九五)はこの資料を「字様の形式を持つ字書体の一 切経の音義書」として位置づける。

第三章

図書寮本名義抄の項目配列

第一節 はじめに

前章では図書寮本名義抄の掲出語と注文における編纂材料の利用について検討した。本章ではそれに続き、掲出語と注文で構成される図書寮本名義抄の項目が、いかに分類・配列されたかについて考察する。

図書寮本名義抄は部首分類体の辞書として、各項目の分類配列は、部首をはじめとする字形上の特徴を基準によって行われたものである。しかし、前章でも述べたように、図書寮本名義抄の掲出語は熟語のばあいが多く、これは上記の分類配列基準の適用を困難にし、様々な問題を起す。これは仏典音義類の部首分類体への再編として、図書寮本名義抄の編纂が抱える根本的かつ重大な課題であったはずである。図書寮本名義抄撰述において、そのような問題をいかに乗り越えたかを考究することとで、この辞書が持つ特性を知る手がかりが見つかることが期待される。その問題克服の実態を明らかにすることは、図書寮本名義抄の辞書史的な位置づけを明らかにするという意義を持つ。

第二節 部首をめぐる問題

部首分類体^{注一}は漢字辞書を編纂するにあたって、その形の方面から分類配列する手法である。その中で「部首」は掲出語で代表される各項目の分類と配列に関わる中心的な基準である。すでに部首分類体で編纂された図書寮本名義抄の項目配列を考察する前に、部首をめぐる問題に迫る必要がある。

部首分類体の辞書の編纂で問題となるものとして、次のようなものが指摘される^{注二}。

- ① どんな部首を立てるか（部首立て）
- ② 部首の配列原理は何によるか（部首配列）
- ③ 部首内の字の配列原理は何か（部首内項目配列）
- ④ 字をどの部首に配属させるか（部首配属）

図書寮本名義抄の部首に関しては、零本である現存部分にしか確認しようがない。ところが、全巻揃って伝わる観智院本の部首立てと部首配列を見ると、図書寮本名義抄の現存部分と対応する法帖の前半部は一致する^{注三}。図書寮本名義抄の現存しない部分も、少なくとも部首立てと部首配列に関しては恐らく観智院本と一致するものであったと推測可能である。観智院本と図書寮本の間には、①②は一致、③④においては相違が認められる。

観智院本名義抄の部首に関しては酒井（一九六七）が実査を行い、①に

関しては玉篇を仰ぎ、②③においては「字形類似」という原則が認められることを明らかにしている^(注四)。①部首立てと②部首配列に関しては図書寮本名義抄に対してもこれと同じことがいえようが、③の面では単字中心の観智院本名義抄と事情が大きく異なる図書寮本に適用するのは難しい。

図書寮本名義抄の項目配列③に関して、宮澤(一九八七)は万象名義との関わりが予想されることを指摘している。これを受けて池田(一九九三a・b)は万象名義と対応する部首^(注五)を取り上げ、その部首内における項目配列に及ぼした影響を実証している。池田(一九九三a)は次のような指摘を行う。

図書寮本名義抄に熟字項が多いとはいっても、同一の単字を含む熟字項は連続して掲出されるのが原則であり、当該の項もしくは前後の項に単字の注文(音注・義注・字体注・經文校異・和訓)が全く見えない熟字項は皆無といつて差し支えない。体裁の上から図書寮本名義抄を単字字書とすることは勿論できないが、内容の上から図書寮本名義抄を単字字書として評価することはできる。(一頁)

このような指摘を前提にして、「同一の単字を含む熟字項」の連続からその「同一の単字」を抽出し、その抽出された単字の配列順と万象名義の字順とを比べている。その結果、図書寮本名義抄の項目配列に「万象名義の出現順」と一致する部分を導き出している^(注六)。これは図書寮本

名義抄の項目配列を考える上で、重要な指摘である。

ただし、池田(一九九三a・b)は連続する「同一の単字を含む熟字項」の中の構造については詳しく言及しない。「同一の単字を含む熟字項」の連続をなす項目間の関係と配列については検討の余地がある。

一方、図書寮本名義抄の項目配列については山田(二〇〇〇)が簡略化して示している。注文構成については「(字体注↓音注1↓義注)×n↓音注2↓和訓↓音注3」のように簡略化する。そして、掲出字配列に関しては「代表字↓異体字↓熟語」といった「掲出字セット」が存在し、一定の配列順を成していることを指摘する。これらの指摘は図書寮本名義抄の情報構造を的確に帰納したものとして参考になる。

以下、本章では以上の先行研究の指摘を踏まえ、図書寮本名義抄の項目概念を定義し、その構造について検討する。

第三節 項目について

一 掲出項と被注項の定義

本節では本格的な検討に入る前に、項目配列の基本単位である「項目」という概念の定義を行う。

図書寮本名義抄の本文を眺めると、大字で記された掲出語と、その下に小字双行で記された注文の組み合わせが一つの単位となることを直観

的に把握できる。覆製本の二四五頁の本文を簡略に示した【図二-1】を見ると、掲出語と注文の視覚的な対比によって各項目間の境界は難なく把握できる。この「掲出語＋注文」の構成の項目単位を「掲出項(略号 E:Entry)」と呼ぶことにする。掲出語の分類に関しては、第二章における形体的な分類(単字と複数字)を基準とする。

掲出項はそれを代表する掲出語の字数 (WL:Word Length) によって、「単字掲出項 (sE:Single character Entry)」と「複数字掲出項 (pE:Plural characters Entry)」に分けられる。【図二-1】から見ると、①・⑨は単字掲出項、②～⑧・⑩は複数字掲出項である。複数字の掲出語は、語の性質によってさらに漢語熟語・梵語訳語・字体掲出に分類できる。②～⑥・⑧・⑩は漢語熟語、⑦は梵語訳語である。

ここでは複数字掲出語に対して、その掲出語と注文の対応によってさらに細分する。次の複数字掲出項(1)は、掲出語「詭詐」とその注文との対応における複雑な関係が見られる例である。

- (1) 詭詐 【a弘云俱毀反責也欺也奇也 公云音貴異詐言也 アヤシ選イ ツワル集 b・下憲云測駕反偽也 c・慈云詭詐者虚偽之稱。
d下アサムク記 イツハリ後 眞云作】〈078-61〉

この掲出項の注文は、掲出語の個別単字「詭」「詐」に対する注文(a・b)があり、掲出語全体の「詭詐」という熟語についての注文(c)に分けら

【図二-1】項目配列の例示(76 頁)

③ 設如 同集 ④ 設得 中云設許也設會也 權之所言曰設 ⑤ 敷設 眞云施設也 ② 設使 タトヒ事	⑥ 設固 眞云設假 設也 ⑦ 設利羅 眞云舊云舍利。唐云 身骨。 ⑧ 訓答 音授・弘云 詛也呪也 ⑨ 詡 吁甫反東云 詡々猶普也	⑩ 訓詁 應云吁連反訓導也教也誡也・中云誡也・眞云 言訓也試也・東云赦也注解也以善言訓男 猶普也和也 ① 設 弘云熱反置也施也合也 眞云陳也許也列也飼也。マウク記 ① 女也。又男曰教女曰訓也。議也從也。ラシフ詩・下音故・弘云釋詁也・應云又 音古訓古言也訓導也釋也・東云古今異辭訓古言又姑戸反俗音古非訓也故古也。
---	--	--

れる。つまり、一つの掲出項内にそれぞれ記述対象を異にする三つの注 文のまとまりが存在するわけである。aとbのばあいには、単字掲出語を 中心とする辞書では、それぞれ独立した項目として立てるはずのもので ある。

ここでは、注文の実質的な記述対象を「被注語」といい、被注語とそれ に対応する注文のまとまりを合わせて「被注項(e)」と定義する。そし て、上述した掲出項と同様に、その被注語の字数(wl)によって「単字被 注項(se)」と「複数字被注項(pe)」という形態的な分類が可能である。

(1)のばあい、㉔は複数字被注項、㉕と㉖は単字被注項に分類でき、一つの複数字掲出項が三つの被注項を含む(1pE || 2se + 1pe)こととなる。もちろん、次の(2)「設利羅」のように複数字掲出項の中に一つの複数字被注項のみの類型(1pE || 1pe)もある。

(2) 設利羅【真云舊云舍利。唐云身骨。】〈076-42〉

そして、次の(3)のように複数字掲出項に単字被注項のみ存するばあい(1pE || 1se)も少なくない(注七)。

(3) 設得【中云設計也設會也 真云權之所言曰設】〈076-32〉

その確認のためには内容的な検討を必要とするが、以上をまとめると次のような定義となる。

掲出項と被注項の定義

- ・ 掲出項(E) || 掲出語(W) + 注文(D)
 - ┆ 単字掲出項(se) .. WL || 1 (WL : 掲出語の文字数)
 - ┆ 複数字掲出項(pe) .. WL || 2
- ・ 被注項(e) || 被注語(w) + 注文(d)
 - ┆ 単字被注項(se) .. wL || 1 (wL : 被注語の文字数)
 - ┆ 複数字被注項(pe) .. wL || 2

二 出典における掲出項と被注項

掲出項は形態的な単位であり、被注項はそれをさらに実質的な内容によって細分した単位である。掲出項と被注項に関して、図書寮本名義抄の編纂に使われた辞書類と仏典音義類の出典においては次のような傾向が見られる。

辞書類のばあいは、単字掲出項が中心であり、掲出語 || 被注語の例が多い。したがって、一つの掲出項には一つの被注項で済む簡単な構造である(1pE || 1se)。次の万象名義の例はそのとおりである。

(4) 詔【調字。疑也、悦也。】万象名義(三)13 オー1(注八)

それに対して、仏典音義類のばあいは、複数字掲出項が中心であり、掲出項と被注項の対応は先掲の図書寮本名義抄の例と同様に複雑な様相である。次の(5)と(6)・(7)は図書寮本名義抄の項目「詔曲」と、その出典と思しき慈恩撰書および玄応音義の注文である(注九)。

- (5) 詔曲【慈云丑冉反倭也調詔同憇其意道其言曰詔諛也。傾身似有下也・應云亦倭也。・真云詔僞也曲媚也。】〈088-41〉
- (6) 詔曲【上丑冉反。倭也。説文作調同。莊周云、希其意。道其言曰詔。玉篇詔諛也。傾身似有下也。有作調同】「法華音訓」〈20 左2〉
- (7) 詔曲【説文、調或作詔同。丑冉反。詔、倭也。莊周云、希其意、道

図書寮本名義抄の(5)は、主に単字「諂」に対する注文を引用する中で、熟語「諂曲」に対する真興音訓の注文を引いている。これに対応する「法華音訓」の(6)と玄応音義の(7)は、掲出語は同じく熟語「諂曲」を掲げるが、その注文はいずれも実質的に単字「諂」のみを解説する内容となる。図書寮本名義抄における掲出語と注文の間のねじれは、このような参考資料の在り方に影響された側面があろう。

部首分類体の辞書編纂における利用を考えると、辞書類万象名義の(4)のような例が分類と配列基準の適用に容易である。それに対して、(6)・(7)のような仏典音義類の在り方は、掲出語と注文との複雑な様相を処理するための別段の工夫を必要とする。以上を見ると、図書寮本名義抄における掲出語と被注項の複雑な対応は、仏典音義類で見られる特徴に近いことが分かる。すなわち、仏典音義類から採用された材料の影響が強いといえよう。

三 掲出項と被注項の対応

図書寮本名義抄における掲出項と被注項の複雑な対応は、特にその対応上のねじれの様相を類型かすることによって明らかにされる。単字掲出項のばあいには、論理的に一つの掲出項内に一つの単字被注項しか存在し得ない。掲出項と被注項の間の「ねじれ」が発生し、複雑な対応様相を

見せるのは複数掲出項に限られることが推知される。

ここではまず言部^{注10}を対象に取り上げてその実態を調べてみることにする。この部首における掲出項は三四九条、そのうち単字掲出項が八六条、複数字掲出項二六三条である。一方、被注項は全部で四三五条あり、そのうち、単字被注項は三三二条、複数字被注項は一〇四条である。

掲出項、つまり、掲出語の形態による単位では、複数字が単字の三倍になるほど圧倒する。それに対して、被注項、すなわち、注文の実質的な対象による単位では、これが逆転する結果が看取される。これは図書寮本名義抄における掲出語形態と注文内容との対応に、一種の「ねじれ」が存在することと解される。つまり、掲出語の形態だけを見るかぎりでは熟語が多いが、その注文の内容による検討では単字字書的な特質が浮き彫りになるわけである。これらの対応を簡略に示すと【表二一】のようである。

さらに掲出項と被注国の対応を類型化すると次の五種類にまとめられる。

まず、「一は単字掲出項に単字被注項が一つあるだけの類型である。最も簡単な対応関係にあり、主に辞書類で多く見られる類型である。この類型は八六条である。次の(1)はその例である。

(8) 設【弘云戸熱反置也施也合也・眞云陳也計也列也飼也。マウク記】

【表二-1】掲出項と被注項の対応（言部）

掲出項(E)		被注項(e)	
単字 (sE)	86 (25%)	単字 (se)	86 (20%)
複数字 (pE)	257 (75%)	単字 (se)	245 (56%)
		複数字 (pe)	104 (24%)
計	349	計	435

【表二-2】掲出項と被注項の対応類型（言部）

パターン	掲出項数	被注項数
I sE=1 (se)	86 (25%)	86 (20%)
II pE=1 (pe)	62 (18%)	62 (14%)
III pE=1 (se)	127 (36%)	127 (29%)
IV pE=2 (se)	32 (9%)	64 (15%)
V pE=n (se) + 1 (pe) n ≥ 1	42 (12%)	96 (22%)
合計	349	435

続いて、Ⅱは注文が掲出語の熟語全体に対する被注項のみ分布する例であるが、その数は六二条^(注二)にのぼり、言部掲出項全体の二割を占める。次の(9)はその例である。

(9) 設使【タトヒ律】〈076-24〉

次に、Ⅲは注文が掲出語の一部の単字だけを被注語とする類型である。掲出語が複数字であるだけで、注文の内容は単字掲出項と同じといえる。次の(10)の例はその該当例である。

(10) 詭証【魴云居委反詐忘言也・應云証也不實也隨惡也。タカフ列イツハル顔 アヤシ選】〈080-14〉

これは熟語「詭証」を掲出語とするが、注文の内容は「詭」に関するものしか見当たらない。言部にはこのような掲出項が一二七条あり、複数字掲出項の半数に近い。

そして、Ⅳは掲出語を構成する単字それぞれに対応する二つの被注項を含める類型である。実質的には単字項を複数まとめた形となる。次の(11)はその用例である。

(11) 訓詁【應云吁運反訓導也教也誠也・中云誨也・眞云言訓也試也・東云赦也注解也以善言訓男女也。又男曰教女曰訓也。議也從也。ヲシフ詩・下音故・弘云釋詁也・應云又音古訓古言也訓導也釋也・東云古今異辭訓古言又姑戸反俗音古非訓也故古也。】〈076-62〉

熟語「訓詁」を掲出語として採るが、注文は前半が「訓」を、後半が「詁」を解説する内容になっている。このような類型が言部に三二条あり、全体の約一割近くを占める。Ⅲとともに掲出語が複数字であるが注

文は単字のものしかないので、掲出項と被注項の対応がねじれている類型といえる。

最後に、△は一つの掲出項内に熟語を被注項とする部分と、単字を被注項とする部分がともに存在する類型である。最もねじれが著しい複雑な様相である。その用例は四二条である。先掲の(1)がこれに当たる。それをここに再収する。

(1) 詭詐【弘云俱毀反責也欺也奇也 公云音貴異詐言也 アヤシ選 イツワル集 ・ 下憲云測駕反偽也 ・ 慈云詭詐者虚偽之稱。下アサムク記 イツハリ後 眞云作】〈078-61〉

以上、三四九条の掲出項を四三五条の被注項に分解し、その対応の様相を五種類に類別してみた。これをまとめて示すと【表二一2】のとおりである。その中で、被注項と掲出項の対応がそのままとなるものは、①と②であり、両者の対応に「ねじれ」が起る類型は③～⑤である。

このような実態は図書寮本名義抄が玄応音義、慈恩撰書、中算釈文といった卷音義類から甚大な影響を受けたのと無関係ではないと考えられる。卷音義はそもそも原典の文字列をそのまま見出しとして組み込み、原典との照応やそれに対する従属的な立場が強く意識される中で撰述された書物である。図書寮本名義抄はそのような「卷音義」からの引文を「部首分類体」に再配列した書物ともいえ、上で指摘したような形式と

実質内容の不一致もそのような流れの上で理解すべきであろう。そして、そのような過渡期的な様相は「単字字書」としての萌芽となり、以後の改編はその点をさらに整備した形で行われたものと考えられる。

図書寮本名義抄には単字字書として見るには整然としない部分が多く目立つのであるが、単字字書への整備を可能にする土台として項目内および項目間における有機的な組織性は注目されるところである。まず注文の分析によつて各項目内の有機的な組織性を確認することが可能であろう。

第四節 項目群の設定

一 項目間の類縁性

前節では掲出項とその内部の被注項との関係について検討してみた。ところが、各掲出項の配列を見ると、隣接する項目同士で同じ字を共有する例がよく見られる。これは先述した池田(一九九四)でも指摘された特徴である。次は、先掲の【図二一1】の①～⑦である。

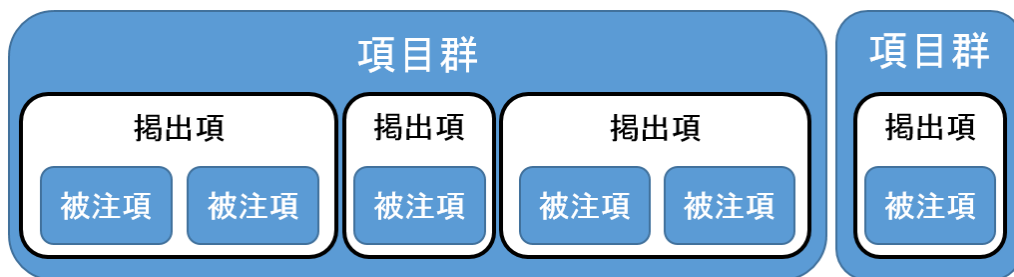
- ① 設【弘云熱反置也施也合也・眞云陳也計也列也飼也。マウク記】
〈076-22〉
- ② 設使【タトヒ律】〈076-24〉
- ③ 設如【同 集】〈076-31〉

- ④ 設得【中云設許也設會也 眞云權之所言曰設】〈076-32〉
- ⑤ 敷設【眞云施設也】〈076-34〉
- ⑥ 設固【眞云設假設也】〈076-41〉
- ⑦ 設利羅【眞云舊云舍利。唐云身骨。】〈076-42〉

①～⑦は掲出語の形態を見ると、それぞれ独立した掲出項である。これらの項目は「設」を共通分母として一群を形成する。特に①・④・⑥は同じく「設」を被注字とする。それぞれ親項目(①)、追加項目(④・⑥)、熟語項目(②・③・⑤・⑦)といった役割分担があるように見受けられる。本章では、このような一群の項目を「項目群」(注二)と呼ぶことにする。

項目群を構成する掲出項は、親項目と子項目とに大別できる。親項目とは、項目群の代表字に関する形音義の情報をも二種類以上備え、項目群内の他項目の本体と見られる項目である。それ

【図二-2】被注項と掲出項と項目群の関係



に対して子項目は代表字の情報の一部しか備えず、本体となる項目への追加的・補助的な性格を帯びる項目と定義する。
被注項―掲出項―項目群の三段階の単位は【図二-2】のようにまとめられる。

二 項目群の類型

項目群の構成に関しては次の四つの類型が考えられる。

- A 親項目＋子項目 (親子)
- B 複数の親項目＋子項目(複数親)
- C 複数の子項目のみ (親無し)
- D 親項目のみ (親単独)

Aは親項目と子項目という典型的な構造の類型である。心部を対象に調べると、全体四五六項のうち、一七四項目(六六群)がこの類型である。このばあい、付随的な情報を載せる子項目の立項意義が注目される。たとえば、次の(12)～(17)の項目群がこの類型に当たる。

- (12) 心【源爲憲口遊云音深火之精包赤・弘云叔也容也・中云心意也・魴云五藏之主曰心・唯識論云集起名心。コ、口詩 ナカヒタ集】〈236-11〉
- (13) †【廣云同上】〈236-21〉
- (14) 中心【コ、ロノウチ】〈236-22〉

(15) 多心【順云師説奈加古可遲】〈236-23〉

(16) 發心【珠肝心記云合云古々呂於古須 識疏】〈236-31〉

(17) 心意識了【慈云―積聚義意思重意識了別義了識達義廿唯識云―
一名之差別】〈236-33〉

親項目(12)を中心に子項目(13)～(17)が連なる。各子項目は、字体提示(13)、関連熟語(14)～(17)といった役割を果たす。特に(14)～(16)は関連熟語に当てられた和訓を収録するために立項されたもので、注目される。

Bは項目群内に親項目、つまり、中心的な項目が複数存在する例である。心部においては一〇四項目(二三群)がこれに当たる。たとえば、次の(18)・(19)は「悖」を軸とする項目群である。

(18) 悖惡【弘云補潰反逆也亂也擾也・應云古慙。同蒲沒補潰反。 眞云

ホチ】〈265-54〉

(19) 兇悖【音背・眞云―惡―逆兇惡也・公云音背或作慙。音發。サカフ

《易也逆也》 ミタル孝 マトハス】〈265-64〉

両者の間には親子のような明らかな格差はなく、いずれも親項目のようである。両項目の注文はその出典を異にするが、そのような事情と複数の親項目の存在との間には何らかの関連が予想される。

Cは項目群の中にこれといった中心項目がない類型である。心部の中では六項目(三群)がこの類型に分類される。次の(20)・(21)はその例である。

(20) 平等性【眞云遍一切法故。】〈261-13〉

(21) 離生性【眞云離生■性故。眞如異名】〈261-21〉

周囲に親項目のような項目も見当たらず、単字「性」の関連熟語のような項目二つのみで構成される項目群である。ちなみにこれらと同様に「性」を軸とする次のような項目群が全く離れた箇所に収録されている。

(22) 性【音姓・弘云生也・中云―行也心―也・眞云志也稟天氣而生也。

ヒト、ナリ】〈237-63〉

(23) 天性【ヒト、ナリ遊】〈237-72〉

こちらの項目群はAに当たり、親項目が見られる。Cの存在は図書寮本名義抄における項目増補によるものとも考えられ、未整稿としての一面が窺われる。

Dは単一親項目で構成される項目群である。事実上「群」とは言い難いが、図書寮本名義抄の項目配列においては項目群と同等な層位で扱う必要がある。心部では一七二項目がこれに当たる。次の(24)のような例である。

(24) 忠【季云音中・弘云微躬反厚也敬也直也・野―事君之名。・魴云

心信 タ、シ論】〈238-63〉

以上、項目群の類型について検討したが、心部に対する分布をまとめ

ると次のとおりである。

心部	
掲出項	四五六項
項目群	二四四群
A (親子)	一七四項目／六八群
B (親複数)	六六項目／一五群
C (親無し)	六項目／七群
D (親単独)	一七二項目／一七二群

第五節 まとめ

本章では、図書寮本名義抄における項目配列の構造について考察した。

まず、直観的に把握可能な掲出語を基準とした「掲出項」を、注文と掲出語の対応関係の検討によって把握可能な「被注項」単位に細分した。これによって図書寮本名義抄が有する掲出語の形態と注文の内容との対応における「ねじれ」が浮き彫りになった。

続いて、個々の掲出項を乗り越え、複数の掲出項にまたがる「項目群」という単位を設定した。これは整然としないように見える図書寮本名義抄の項目配列を貫く原則と組織性の一端を明らかにする有効な手がかり

である。

以上の検討の結果は次のようにまとめられる。

一 図書寮本名義抄の掲出語は熟語中心の印象であるが、その注文との対応を検討すると、単字中心的な様相を見せる。このような形態と内容の「ねじれ」は、特に仏典音義類からの材料を採り入れている項目に強く現れる。

二 図書寮本名義抄の掲出項の配列は、個々の項目だけでは説明がつかないことがあり、「項目群」という複数の項目を併せた単位設定によってより容易に行える。しかし、その中には重複する項目群も存し、未整然とした特徴が見られる。

注

(一) 部首分類体と類似した述語として、「字形引き」というのがある。これは字形が検索のキーとなるという側面に注目した述語である。図書寮本名義抄のばあい、配列の大きな分類は部首という字形に基づく側面によるものの、各部首内の配列は必ずしも字形によらないため、図書寮本名義抄を字形引きの辞書と称するには聊か躊躇いが存す。本稿で「部首分類体」という項目の分類基準に着目した述語を採るのはその所以である。

(二) 山田(一九九七：九三)

(三) 図書寮本名義抄の冒頭には「類聚名義抄篇目頌」と題する収録部首目録に当たる一覧がある。そこに挙げられる二十部首の内容と順番は観智院本の該当部分と一致する。ただし、図書寮本名義抄の本文を開くと、そのうち「面・齒・色」の三

部首は隣接部首の中に埋め込まれている。

(四) 部首配列に関しては「意義類似」も影響しているとするが、字形類似のほうが絶対的であると述べる。

(五) 篆隸萬象名義との比較検討は前半部(原撰部・玉・土・邑・足・心・言)と後半部(続撰部・水・山・石・阜・糸・巾・衣)に分けて行っている。

(六) 「万象名義の出現順」による区間の他に、「仏教要語」が密集する区間、「類聚字形・異体字」の連鎖による区間、「韻書と関係あるか」と推測される区間を導き出している。

(七) このような分布類型の存在は、すでに池田(一九九三^a)でも指摘している内容であり、図書寮本名義抄の単字字書的な特徴として取り上げられる。

(八) 万象名義の翻字引用は図書寮本名義抄の例に準じて行う。但し、句読点は筆者による。所在は〇帖／〇丁表(オ)・裏(ウ)／〇行の順で記す。

(九) 池田ほか(一九八八)の判定による。

(一〇) この部首は図書寮本名義抄の現存部分111葉(本文がない表紙と背紙は除く)の約1割(9.4%、16葉)を占め、大きい分量を占める。

(一一) 複雑な対応様相を見せる②③⑤の類型の用例数は、掲出項を基準にして数えた。これは形態的な分類との格差がより浮き彫りにするためである。

(一二) 項目群という配列単位の必須条件は、共通の単字によつて代表されることが物理的に隣接することである。したがって、この条件を満たせば単独掲出項がそのまま一つの項目群となることもあり得る。

第四章

図書寮本名義抄の注文類型

第一節 はじめに

前章では図書寮本名義抄の項目配列の構造について考察した。本章では各項目内における注文がどのように配列されるかについて考究する。

図書寮本名義抄の出典に関する研究として、注文の引用という次元で行われた研究が多い。これは本辞書の一大特徴である「忠実な出典注記」に因むもので、いかなる典籍からいかに注文を取り入れているか、あるいは影響されているかを考える。様々な典籍からの引用によって成立している文献として、その出典の忠実な注記という特徴を有効に生かしたアプローチである。

第二節 注文の類別

図書寮本名義抄の注文は、漢字漢語の掲出語に対する「形・音・義」三方面からの情報を網羅したものである。それは中国訓詁学の成果を字書や経書注釈などから直接または間接的に吸収した結果である。

注文には中国の字書である「原本玉篇」とその抄略本である万象名義から引かれた字音注と意味注が多く見られる。そして、玄応音義や中算釈文などの仏典音義からの引用も字音と字義の情報が中心である。これに加えて『干禄字書』のような字様からの字体注記まで加わり、漢字の形・音・義という三要素に関する記述を備えている。それに日本古辞書の独自要素として漢字・漢語と結び付いた「和訓」を別分類として立てると、図書寮本名義抄の注文は四つの要素で類別可能である。以下、本章での注文類別はこの四つの要素を中心とする。

注文類型に関しては、宮澤（一九九二）が、①字体注、②正音注、③呉音注、④和音注、⑤義注、⑥真仮名和訓、⑦訓点本等による片仮名和訓、⑧玉抄等による片仮名和訓の八類に分けている。池田（一九九一b）は音注を類音注と反切に分け、字体注は字体注と経文字体注に細分している。本章での注文類型は、形・音・義・和訓、四つの大分類と、先行研究の類別を参考にした小分類に分けられる。その注文類別の詳細は次のとおりである。

【注文類型】

A 形

A1 字体注…主に『干禄字書』からの字体関連情報。あるいはそれに準じる形式の情報（「古文○同」など）。

A2 経文字体注…「経作○非」など。

B 音

B1 正音注…切韻で代表される中古中国音に基づく字音情報。

B1-a 類音…類音注による字音情報。

B1-b 反切…反切による字音情報。

B1-c その他…類音注・反切いずれにも該当しない類型の字音情報。

B2 呉音注…主に『大般若経字抄』からの呉音情報。

B3 和音注…主に『大般若経音訓』からの和音情報。片仮名による字音情報。

C 義

C1 義注…漢文による意味情報。^(注一)

D 和訓

D1 真仮名和訓…主に『和名類聚抄』からの万葉仮名表記の和訓。

D2 訓点本等による片仮名和訓…主に訓点本などからの片仮名表記の和訓。

D3 云型片仮名和訓…主に玉抄などの典籍から引用された和訓。^(注二)

以下、四つの大分類の基本属性について言部の被注項、四三五条を例に挙げて検討する。

第三節 注文類型の検討

一 字体注の検討

字体注を収録している被注項は五三例(一一%)で言部の全被注項の約一割に過ぎない。漢字の「形」についての情報は掲出語そのものの提示

によって達成される部分が大きく、あえて注文として記述する必要は限られる。その少ない分布はこういう事情に起因すると考えられる。詳しい収録状況を見ると音注・義注などの他の注文類型とともに収載される例がほとんどで、字体注だけのものは次の五例のみである。

① 諫諫【干云上通。】〈071-34〉

② 訕【弘云謚字。】〈079-61〉

③ 訕【類云今】〈086-13〉

④ 講講【干云上通。】〈092-64〉

⑤ 譬【益云俗辯字。】〈098-22〉

しかし、字体注単独収録例のうち①～④の四例はいずれも同被注字の隣接項目において音注と義注などがすでに収録されているもので、当該項目は異体字情報の記述のために立項されたものと考えられる。実例は下記の「例一」のようである。

【例一】

⑥ 諷諫【上、風、上同。見詩。下音澗・弘云正也更也・眞云淨也又直

言以悟入也公云音漢イサム珠云伊佐牟眞云一諫《且録》】

〈071-22〉

⑦ 三諫【或反古云三遍伊佐牟】〈071-32〉

⑧ 諫諫【干云上通。】〈071-34〉

「例二」の場合、⑥の項に「諫」という単字の音注・意味注・和訓などが示されている。さらに⑦はその関連熟語に当たる万葉仮名和訓を示すための項目であって、その次に字体記述のための項目として⑧が配列される流れである。この三つの項目はいずれも「諫」という単字に関するものとして項目のレベルを超えた一つのまとまりを形成している。このような分布様相における組織性は図書寮本名義抄の辞書記述の構造を捉えるうえで重要な手掛かりを与えている。

二 音注の検討

音注が収録されている被注項は二七一例(六二%)で全体の六割強を占める。このような高い収録率は、漢字の基本要素であることに起因すると考えられる。音注をさらに細分すると正音注は二七〇例、呉音注は一六例、和音注は二七例の分布を呈する。このような各小分類間の分布を眺めると、正音注はほとんどの例に分布するという優位が見られ、呉音注と和音注を圧倒している。つまり、音注として正音注が単独収録されることはあっても(二三四例)、呉音注あるいは和音注のみの項目は次の「例二」に示す「訊」(89-43)の一例しか見られないのである。しかも、その唯一の例に対しても実は正音注未収録とはいき切れない事情が確認される。

「例二」

⑨問訊【慈云息晉反問也辭也言也執問通問曰一。】(89-41)

⑩訊【中云又作訊 眞云審問也然云廣辭也廣以己事宜其問辭如法花

中云々 眞云信音】(89-43)

⑪訊訊【干云上俗類云信音 トフ後】(89-52)

問題の⑩「訊(89-43)」と同じ被注字に対する項目である⑨と⑪にはそれぞれ正音注が引かれている。⑩における正音注の不在は情報の過度な重複を避けたものかと考えられる。つまり、⑨⑩⑪の三項目にわたる「訊」についての記述全体からすると正音注は欠けていないといつてよからう。

一方、音注を収載していない項目(二四二例)に対しても検討する必要がある。これらの用例の中には「例二」のように隣接項に同字の音注が載っているものが多く見られる。そのような場合、果たしてこれを音注未収録として記述情報の欠如と見なすべきかという疑問が残る。この点については更なる調査と検討が必要であらう。

三 義注の検討

義注を収載している被注項は三一九例(七三%)で全例の七割強を占める。これは音注よりもさらに高い割合であって、前述の音注とともに図書寮本名義抄の注文を構成する大きな柱であることが窺われる。特に義

注収録項目の七割近く(二二二例)は音注と一緒に収録されているものである。図書寮本名義抄における注文の根幹として音注と義注の位相を窺い知れる結果である。一方、義注のみの項目も一〇二例にのぼる。詳しく見るとまず熟語被注項が七五例で最も多く、次に同被注字の隣接項がある単字被注項の例が二三例ある。他には言部に属しない字(中・唯・教・喻)を被注字とする項目が四例ある。詳しくは次の「例三」を見られたい。

【例三】

⑫唯識【慈云唯謂簡別、遮無外境識謂能了、詮有內心。・章有十門。

釋名如第二門。】〈072-74〉

⑬識蘊【眞云記也了也。】〈073-13〉

⑭知識【宋云音式・弘云知也・然曰聞名爲知見形爲一。是人益我菩提之道名善知識・唯識云了別名一・慈云識者驗也・法花云善知識者是大因緣 眞云サトル シル記 モノシル】〈073-14〉

⑫の掲出項「唯識」には「唯識」「唯」「識」の三つの被注項に分けられるが、いずれも義注だけ引いている。次の⑬は「識」の単字被注項だけであるが、(一)には義注しか収録されていない。しかし、⑭は「識」に対する音注・義注・和訓の注文類型を揃えている。この三つの掲出項(被注項としては五項)は「識」を軸にしてつながる項目群ともいえるもので、⑭が最も基本的な項目で、⑫と⑬はそれに従属するような構成である。

つまり⑫と⑬は同一項目群内にすでに存在する音注と和訓などの情報をあえて繰り返さず、独自の義注だけを記述するために作成された項目といえる。それぞれ一つの出典からの引文のみ収録していることは、引用原典の利用方針と当該項目の立項との関連を示唆する。

義注を収録していない94例に関しても検討が必要である。その特徴としては、義注以外の注文類型のいずれかを単独で収録する項目が多い(八〇例)ことが挙げられる。これは先に取り上げた「例三」の場合と類似した様相が予想される。詳しくは次の「例四」を見てみよう。

【例四】

⑮許【弘云虚語反進也聽也從也然也諾也所也與也・中云聽也一可也・了

義燈云以悔一字少相近故寫者有悞。ス・ム】〈074-74〉

⑯爲許【眞云聽也珠云由流須】〈075-14〉

⑰爾許【眞云一猶所。】〈075-21〉

⑱於某甲許【同】〈075-22〉

⑲幾許【同・又云擬也。イクハクハカリ集 ソコハク】〈075-23〉

⑳芥子許【中云擬也然也。】〈075-31〉

㉑作許【ソコハク遊】〈075-33〉

㉒那許【同】〈075-34〉

㉓如許【同】〈075-41〉

㉔何許【トロロ集】〈075-42〉

上掲の項目の中で㉑～㉔の四項目は義注を収録しない項目で、和訓し

か載っていない。しかし、これらの項目は「許」に関する記述項目のグループといえる⑮～⑳の流れで考えるべきである。つまり、㉑～㉔は特定の注文類型（ここでは和訓）の記述のために設けられた項目で、義注を含めた他の注文類型は⑮を中心にした隣接項目に委ね、あえて繰り返さないわけである。このような例を見ると、注文類型の不備についての判断は単一項目に限らず、被注字語を共有する隣接項目との関連の中で考えるべきではないかと考えられる。

四 和訓の検討

和訓が収録されている被注項は一四八例（三四％）である。前述の音注・義注には及ばないにしても、全体の三分の一を超える項目に分布しており、注文類型の中で一定の位相を占めることが窺われる。この注文類型は、図書寮本名義抄の重要な特徴といえる「漢和辞書」としての性質の核心要素として重要である。上述したような分布の量的な現状は、本辞書における和訓についての扱いを窺わせるものともいえる。

しかし、和訓を収録している項目は、字体注あるいは音注や義注など漢文による他の類型の注文と共存することが多い。これは漢訳仏典を中心とした仏教教学の集成としての本辞書の位置づけからすると当然の結果である。そして、図書寮本名義抄は漢文注優位の体裁であり、和訓の存在はその付随的な要素として位置づけられることがいえよう。和訓を

有する項目において他の注文類型との共存現状をまとめると、次のとおりである。

和訓のみ……………	二九
和訓＋字体注……………	一
和訓＋音注……………	六
和訓＋義注……………	二
和訓＋音注＋義注……………	一〇三
和訓＋字体注＋音注……………	一
和訓＋字体注＋音注＋義注……………	六
合計……………	一四八

最も多い類型は「和訓＋音注＋義注」で、漢字の音と義という基本要素に対する和訓の従属性が反映した結果と考えられる。

ところが、上述したような漢文注優位の傾向にもかかわらず、図書寮本名義抄に和訓を単独収録している項目（二九条）が少なからず存在するのは注目に値する。これらの項目は音義についての漢文記述を一切収録せず、唯一日本語による意味情報である和訓のみを収録している項目で、かなり異例的な存在である。特に漢籍の訓点資料の本文をそのまま抜き出したような形をしている次のような項目は仏教書中心の内容構成である本辞書においてかなり特徴あるものといえる。

^{アヘク} ㉕ 許群臣之徳失。【顔氏】〈074-51〉

㉖ 誠々之々哉々【イメ／＼顔】〈077-42(補)〉

②⑦ 訥於言【論語】〈087-31〉

②⑧ 詳 譽 太子【史記世家】〈099-41〉

②⑤②⑥は『顔氏家訓』「省事」と「誠兵」、②⑦は『論語』「里仁第四」、

②⑧は『史記』「晋世家」からの引用である。②⑥を除く三項目は出典の訓点資料の字句と傍訓そのものを掲出字語として繰り込み、注文には出典注記のみ載せた形式をとる。しかし、それぞれ「訐」「誠」「訥」「譽」の被注項が隣接しており、上掲の用例はその付加情報として漢籍訓点本における例を提示する目的で立項したものと考えられる。他の和訓単独収録例に対してもこのような例が多い。つまり、項目群という流れを視野に入れると、これらの和訓単独収録例には付加情報の記述という特別な目的で立項されたために、隣接項目の既出情報はあえて省いているわけである。これを漢文注優位の方針を覆すような反例にはするのは適当ではないと考えられる。むしろ漢文注優位の方針は揺るがないまま、漢字漢語に関する様々な形態の情報を盛り込むという意図性の下で行われた措置として解するのが適当であろう。

第四節 項目群と注文類型

前節まで図書寮本名義抄の各項目を被注項という概念の導入によって

分析した。さらに各項目に見られる注文類型の分布という物差しで、項目内の記述構造を検討し、個別項目のレベルを超えた単位での組織性を観察することができた。つまり、個別の項目に切り離すと一見未整備な項目のように見られるが、隣接する項目との間の組織性という観点の導入によって、それが有意図性の下で行われた記述情報の分散配列と解されるのである。

つまり、図書寮本名義抄が有する未整稿としての姿ともいえる側面が、実は先行音義類から取り入れられた構造的な根幹に漢籍訓点本や字様などの諸典籍からの多様な形態の情報を組み込むために意図性を持って行われたことといえる。以下では形式や実質内容の面で何らかの同質性を帯びる隣接項目のまとまりを「項目群」と呼ぶことにし、その実情についてさらに詳しく検討する。

まず言部には次の「例五」のような掲出項が並んでいる。

【例五】

①設【弘云戸熱反置也施也合也・真云陳也計也列也飼也。マウク記】
〈076-22〉

②設使【タトヒ律】〈076-24〉

③設如【同 集】〈076-31〉

④設得【中云一許也一會也 真云權之所言曰一】〈076-32〉

⑤敷設【真云施一也】〈076-34〉

⑥設固【真云一假一也】〈076-41〉

⑦設利羅【眞云舊云舍利。唐云身骨。】〈076-42〉

最初の①「設〈076-22〉」は正音注（「尸熱反」）と義注（「置也施也合也」など）および訓点本からの片仮名和訓（「マウク」）を揃えている。

字体注以外の基本的な要素を完備している「基本項」といえるものである。続いて②③は基本項の単字を含む漢語に対応する片仮名和訓をそれぞれ引いているもので「熟語和訓項」といえる。その次の④⑤⑥は基本項の単字を含む熟語に関する、いわば「関連熟語項」である。最後に⑦は基本項の単字を含む梵語の音訳語についての項目で、「音訳語項」といえる。以上をまとめると上掲の七項目は「設」という単字を軸にして「基本項（①）―熟語和訓項（②③）―関連熟語項（④⑤⑥）―音訳語項（⑦）」の項目群をなしている。

項目群は他にも分布しているが、言部の冒頭に並ぶ次の「例六」の項目群について検討しよう。

【例六】

⑧言【弘云魚韃反 我也間也從也僖也問也・應云眞言月言々已事也。

答述爲語爲人説也。―亦云也發端文・中云語也・眞云説也。・大

覺云―在飛龍前行在跋鼈後・季云和礼・珠曰伊布去々呂波 去々
尔 コト記 モノイフ マウス選 コトハ詩 トク切】〈070-11〉

⑨言【魴云魚偃反。言唇急口弱。・類云去偃反。】〈070-31〉

⑩言【魴云去偃反言急貌。・類云魚偃反唇上急。】〈070-33〉

⑪言【魴云而渉反・類云侈葉反。】〈070-41〉

⑫言【魴云叱渉反・類云醜周反不中。】〈070-43〉

⑬方言【湛然曰唐梵二方言音不同。云々】〈070-51〉

⑭所言【信云―即讒也故尼有言人戒僧言人得吉尼得墮】〈070-53〉

上記の例を見ると、まず「⑧言〈070-11〉」は基本項と見られる。続く⑨⑩の四項目は、前の「言」と字形は類似しているが字音・字義は一致しない「類形別字」で、その弁別を示す目的でここに配列された「類字弁別項」と解される。注文は簡略で正音注と簡単な義注ぐらいを揃えているだけであるが、いずれも蔣魴切韻と類音決からの引文のみであるのも注意すべきであろう。最後に⑬⑭の二つの項目は基本項の単字「言」関連熟語に関する項目である。したがって、音注などは略し、熟語に意味に関する注文（義注）だけを収録している。

以上をまとめると上掲の七つの隣接項目は「基本項（⑧）―類形字弁別項（⑨⑩⑪⑫）―関連熟語項（⑬⑭）」の組み合わせで一つの項目群をなしていることがわかる。

上掲のように基本項の被注字をそのまま軸にする項目群も存するが、下記の「例七」は少し事情を異にする。

【例七】

⑮認過【音仍・應云失物而誌《記也》也。經作仞。《八尺曰―律詁、

仞、非・東云諸物案失物而諸之曰―。議已物在他人識而索也。・珠云去聲倭言止牟 止米之利弓 ナヤメリ記《難也》】

〈086-14〉

⑯所認【應云所認律一非。音刃・弘云難也讀也解也・玉云不忍言也。

カタムス論】〈086-31〉

⑰訥【東云認又作一・弘云如陵反厚也因也就也重也仍字】〈086-34〉

⑮～⑰はそれぞれ「認」「訥」「訥」に対する項目であって、字形の類似以外は無関係な別項目の連続のように見受けられる。しかし、いずれの項目に見られる字体注の内容によって三つの項目の被注字は仏典における用字の混同に関わっており、字音と字体の面で相互関連性が観察される。その関連性は次のようである。

まず字音の側面からの関連性は次のようである。図書寮本名義抄に収録されている正音注だけでは⑮と⑰が一致する一方、広韻で代表される

切韻音系の韻書には⑮と⑯が一致する様相である。いずれにしてもこの三項目は「認」を中心に互いに字音の面で密接な関連を有することが窺われる。

続いて字体注から見出される相互関連性である。⑮「經作仞：律訥非」、⑯「所認、律訥非」、⑰「認又作訥：仍字」のような字体注が見られる。まずこれらの注文の内容をより図示するために⑮～⑰の各被注字の字形に対してA・B・Cの符号をそれぞれ割り当て、「仍」にもDを与える。

その注文で示された内容は、⑮は「經典にAをDにする異文がある。律に(Aを)B・Dにする異文があるが間違いである」、⑯は「所Aを律においてBにする異文は間違いである」、⑰「AはCにすることもある。万象名義のDについての記述をもってCに当てる」のようである。これらの相互関係をまとめると「表四-1」のとおりである。

[表四-1] 「認—訥—訥」の対応関係

字形	音注	切韻音系	本文校異
⑮A	a	b	A-D/A-B
⑯B	b	b	A-B
⑰C	a	a	A-C/C=D

A=「認」、B=「訥」、C=「訥」、D=「仍」
a：去声 21 震(而振切)，b：平声 16 蒸(如乗切)

の構造で組織性を有する項目群として見ることができる。

図書寮本名義抄の撰者は以上のような相互関連性を意識して⑮～⑰の項目を順次並べて示したと考えられる。したがって、これらの項目は「基本項(⑮)―本文校異項(⑯⑰)」

第五節 まとめ

本章では第三章で導入した「被注項」という概念を基に、図書寮本名義抄の注文に見られる有機的な組織を検討した。

「例一〜七」に例示した項目群はその有機的な組織の実証例である。これによって各項目間の組織性が見出され、未整備な断片の羅列のように見えた項目に対して一つの連続体として把握することができる。これは図書寮本名義抄における収録情報の実態についての体系的な検討の土台として意義を持つ。

今後の課題としては、項目群の概念の導入によって、分散されている情報を実質内容的な単位（主に単字）ごとに分類・再配列し、収録情報をより体系的に検討するための基礎資料を作成する。作成された資料そのものは、院政期の仏教教学の一端を示す図書寮本名義抄という辞書の内実への分析結果として有用である。これは「改編」といえる作業であるが、内容の増補削除なしに再編しただけの資料といえる。これをもとにして観智院本などの改編本系諸本との対象を行い、改編本形成における原撰本の利用・影響を具体的に考察する材料として利用することを想定している。

注

- (一) 宮澤（一九九二）では又音注や異体などの情報まで含めているが、本稿では又音と異体の注記はBとAに分類した。そして、本稿の「義注」とは、池田（一九九二）において釈義の部分の字体注・經文字体注・義注に分けるときの義注に近い分類である。
- (二) 宮澤（一九九二）では「玉抄等による片仮名和訓」とあるが、本稿では大槻（二〇〇一）における片仮名和訓の典拠表示形式の分類を参照して「云型片仮名和訓」とする。

第五章

図書寮本名義抄の意味記述の構造

第一節 はじめに

前章では図書寮本名義抄の各注文類型の分布を通じて、その記述情報配列の組織性について考察した。それに続いて本章では、図書寮本名義抄の意味記述に着目し、その二重言語辞書としての側面の実態を明らかにする。それによって日本辞書発達上における本辞書の位置づけを確かめることになる。

本章では図書寮本名義抄の意味記述の要素として漢文義注(以下、義注)と和訓を想定する。これらに関して先行研究では主に和訓を中心に、主にその訓点語研究資料としての側面に注目した研究が進められてきた。その代表的なものとして築島(一九五九)、呉(二〇〇〇)、山本(二〇〇〇)といった論考がある。図書寮本名義抄における和訓と義注を、意味記述という共通の役割を持つ要素として検討した論考は管見に入らない。

以下、意味記述要素として和訓と義注が共有する特徴と、互いに異なる側面を明らかにする。それによって、本辞書における和漢二重言語記述の意義を明らかにすることを目指す。

第二節 図書寮本名義抄の辞書記述

一 辞書記述の類型

前章では図書寮本名義抄の注文類型の分類について詳説を行った。ここでは、それを基に図書寮本名義抄の辞書記述の類型を示すと次のとおりである。

- A 字体情報(形)
 - A1 字体注
 - A2 経文字体注
 - A3 掲出語
- B 漢字音情報(音)
 - B1 正音注
 - B2 呉音注
 - B3 和音注
- C 意味情報(義)
 - C1 義注
 - C2 和訓

前章での注文類型分類との相異は、掲出語そのものを字体情報の記述として取り上げた点と、和訓を独立させずに義注と共に意味情報としてまとめたところである。後者に関しては、和訓と義注の間に言語の違いのほかには辞書記述の要素として区別する意味はないという認識によるものである。そして、和訓という日本古辞書の特徴的な要素は、それと機能的に類似した義注との対比によってより明らかにできる。

以上の辞書記述の類型について、実例を挙げて解説する。たとえば(1)では「言詞」という掲出項内に「詞」の被注項として次のような注文が見

られる。

(1) 言詞 【①音辭。應云②意内而言外也、審言語也。中云③言辭也。④或作辭。⑤不受也訟也。⑥辭辭辭辭、四形聲類以爲皆詞字。新切韻、詞辭異。真云⑦言語也、告也。直言曰言、言已事也。答述曰詞、爲人說也。⑧論語作辭。東云⑨請也、安定詞也。⑩コトハ選 真云⑪シ。俱舍云⑫詞謂訓釋言詞。】
〈74-54〉（丸数字と傍線、筆者による。以下同じ）

まず、字体情報である掲出字そのもの(A3)と字体注(A1、④)および経文字体注(A2、⑥⑧)が見られる。次に、漢字音情報として正音注(B1、①)と和音注(B3、⑪)が見える。最後に、意味情報として義注(C1、②③⑤⑦⑨⑫)と和訓(C2、⑩)が示されている。特に意味情報の記述(以下、意味記述)においては古典中国語(漢文)による義注と、日本語による和訓とが併存する、二重言語的な様相を見せる。

二 意味記述における二重言語使用

日本辞書の歴史は中国字書の改編から始まり、それを促した原因として中国字書だけでは充足されない日本独自の必要の出現が指摘される^注。ここである日本独自の必要とは、漢文読誦および理解における日本語の関与、漢文の日本語書記への転用、といったことに因むことと考えられる。国字の発生、日本漢字音の成立、和訓との結び付きといった事

象を挙げられる。図書寮本名義抄における二重言語的な意味記述はそのような日本の必要に対処した結果であろう。中国字書には見られない、または違う様相を見せる部分は、日本古辞書成立の意義と繋がる。図書寮本名義抄の二重言語的な意味記述は、このような日本古辞書史的な意義に迫る鍵として有効である。

図書寮本名義抄に関する大槻(二〇〇五a)の次のような指摘は注目値する。

改編本系類聚名義抄が「漢和」辞書を指向しているのに対して、原撰本系と称される図書寮本はやはり「漢漢」辞書であり、和訓には補助的な機能しか与えられていない。注文として、まずは漢文注があり、そこに和訓が添えられる形をとる。(二二二～二二三頁、傍線は筆者による)

また、望月(一九九二)も改編本系と原撰本系の対比の流れで、図書寮本名義抄の注文において、主となるのは漢文であり、和訓は従に留まることを指摘している。さらに図書寮本名義抄の項目において和訓を含む項目は約三分の一に留まるという統計^注からも、和訓の補助的な位置づけを窺い知れる。しかし、このような統計的な検討だけでは、漢文による記述情報と日本語による記述情報とが機能的にどのように関わり合うかは見えてこないという限界が存する。以下、義注と和訓の関わり合いの詳細を検討する。

第三節 意味記述の概観

一 義注について

義注は形式の面で「単字型」と「述文型」に分けることができる。「単字型」は、掲出字の意味を、類義関係にある字で表す形式で、「○也」の形式が多い。それに対して複雑で長い構文で記述したものは「述文型」とする。次の(2)の例によってそれぞれの分類に当たるものを例示する。

(2) 讀誦【上音獨。弘云①抽也、出也、書也、説也。眞云②目對文而口唱也。ヨム論下音頌。弘云③詩也、歌樂也、公也、言也。應云④倍文曰誦、以聲節之曰誦。倍佩。慈云⑤讀者披文、誦者暗説。】〈070-61〉

①と③はそれぞれ「讀」と「誦」の意味を、それと類義関係にある字によって記述した単字型義注である。そして、②と④は「讀」と「誦」の意味を説明文的に解いた述文型義注である。⑤は「讀」と「誦」の意味を合わせて解説している。この項目に關していえば、単字型はいずれも万象名義(①③)からの引用であるのに対して、述文型は真興音訓(②)と玄応音義(④)および慈恩撰書(⑤)から引用される。

対象を言部全体に拡大して引用頻度を出典ごとに調べてみると(注三)、単字型義注を三三二条、述文型義注を一七八条確認できる。これをさらに出典ごとに引用頻度上位一〇位まで並べると、【表四-1】のようになる。

【表四-1】漢文義注における出典文献の引用回数順位

単字型漢文義注			述文型漢文義注		
順位	出典注記	引用頻度	順位	出典注記	引用頻度
1	弘	132 (40%)	1	广(応)	77 (43%)
2	广(応)	48 (14%)	2	茲(慈)	18 (10%)
3	真	42 (13%)	3	真	16 (9%)
4	中	27 (8%)	4	東	11 (6%)
5	東	24 (7%)	5	中	10 (6%)
6	茲(慈)	19 (6%)	6	然	6 (3%)
7	玉	9 (3%)	7	方(魴)	6 (3%)
8	憲	7 (2%)	8	弘	5 (3%)
9	公	5 (2%)	9	玉	5 (3%)
10	然	2 (1%)	10	沼	3 (2%)
その他		17 (5%)	その他		21 (12%)
計		332	計		178

注：各出典名は原文のままに記し、略字と考えられるものに対してはその原字を括弧に括って併記

単字型の中では万象名義(弘)で代表される玉篇系字書の引用が圧倒的に多く(注四)、述文型のほうは玄應音義(應)および慈恩撰書(慈)など仏典音義・注釈書からの引用が目立つ。

以上の分類とその特徴をまとめると次のようである。

義注の分類

単字型——主に玉篇系字書からの引用
述文型——主に仏典音義類からの引用

二 和訓について

和訓に関しては「片仮名型」と「万葉仮名型」に分けられる。これに関して橋本（一九五〇）は「万葉仮名を使用する場合は、大概諸書からの転載が多く、編者自身が諸訓点本によって訓を加える場合は、多く片仮名を使用している」（七頁）と述べ、これを受けて築島（一九五九）は万葉仮名表記のものは「すべてが辞書・音義・訓注の類と考えられる」（頁）とし、それに対して片仮名表記のものは「音義辞書の類と、訓点本の類とが併存するようである」と両者の相違を指摘する。次の（3）はその典型的な例である。

（3）言【弘云魚韃反。我也、問也、從也、憺也、問也。應云：直言曰言、言已事也。答述爲語、爲人説也。言亦云也、發端也。中云：語也。眞云説也。大覺云言在飛龍前、行在跋鼈後。季云①和礼。珠曰

②伊布去々呂波、去々尔。③コト記モノイフ ④マウス選 ⑤コトバ詩 ⑥トク切】〈070-11〉

①と②は「言」に対する万葉仮名型の和訓で、それぞれ『季綱切韻』と『成唯識論疏肝心記』から引用したものと推測されている^{注5}。③～⑥は片仮名型の和訓で『史記』『文選』『毛詩』などの漢籍訓点本、日本人による漢和字書の一種と思しき『小切韻』から引用されたものである^{注6}。

和訓に対しても対象を言部全体に拡大して引用頻度を出典ごとに調査した^{注7}。その結果、片仮名型二二二条、万葉仮名型一六条の分布が確認

【表四-2】日本語義注における出典文献の引用回数順位

片仮名型日本語義注			万葉仮名型日本語義注		
順位	出典注記	引用頻度	順位	出典注記	引用頻度
1	詩	35 (17%)	1	朱・珠 ^{注3}	9
2	記	24 (11%)	2	季	5
3	集・白 ^{注1}	24 (11%)	3	弘	1
4	× ^{注2}	20 (9%)	4	或反古	1
5	巽(選)	15 (7%)	計		16
6	書	14 (7%)			
7	遊	14 (7%)			
その他		73 (34%)			
計		212			

注1：『白氏文集』からの和訓。出典注記は「集」と「白」に分かれる。

注2：出典が注記されていない和訓の合計。

注3：善珠撰『肝心記』からの和訓。出典注記「珠」は撰者名に因み、「朱」はその略字。

された。さらに、出典ごとに引用頻度上位のものを示すと、【表四-2】のとおりになる。片仮名型は漢籍訓点本からのものが上位を占め、仏典注釈（朱・珠）と辞書からの引用が多い万葉仮名型との違いは、築島（一九五九）の指摘どおりである。

以上の分類とその特徴をまとめると次のようになる。

和訓の分類

片仮名型——主に漢籍訓点本の傍訓の引用

万葉仮名型——主に仏典注釈および辞書からの引用

第四節 義注と和訓の分布

一 分布のパターン

以上で概観した「義注」および「和訓」という意味記述の両要素の関わり合いについて考える。先述した望月（一九九二）と大槻（二〇〇五a）の指摘によると、図書寮本名義抄の意味記述において義注と和訓の位置づけは、前者が主、後者が従となる。

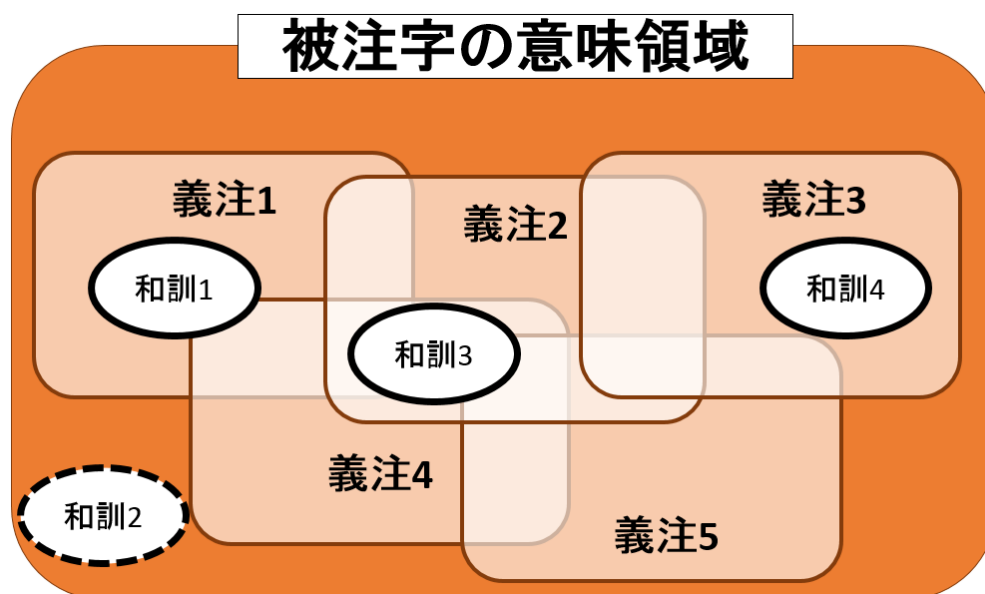
各被注字の意味領域に対する義注と和訓の位置づけを図式化すると、次の【図四-1】のとおりである。義注1～5がそれぞれ意味領域を占め、和訓1・3・4もそれと重なる領域を占める。一方、点線で囲った和訓2は義注のいずれとも重ならない意味領域を独自の示す。仮に和訓の役割を義注で表している意味領域の日本語による繰り返しに限定するならば、和訓2は実在しないはずである。

実際の様相を見るためには、義注と和訓がともに収録される項目の実態を把握する必要がある。意味記述を有する項目内における義注と和訓の分布は、理論的に次の三種類が考えられる。

- Ⅰ 義注のみ
- Ⅱ 義注＋和訓
- Ⅲ 和訓のみ

Ⅰは義注のみで望月（一九九二）と大槻（二〇〇五a）の指摘に反する余地はない。Ⅱにおいては、和訓がことごとく義注と意味領域が重なる

【図四-1】義注と和訓の関係



すると、つまり、【図四-1】の「和訓2」のようなものがなければ、先行研究の指摘とおりということになる。そして、Ⅲは当然存在しないはずである。しかし、現状はそうではない。

二 分布の現状

まず和訓が存在しないため、義注と和訓との関係について議論の余地がないⅠは除く。図書寮本名義抄における意味記述の現状を見ると次の(4)～(6)のような項目がある。

(4) 訓訓【干云上通。弘云翊運反。誠也、導也、教也、従也。ヲシフ詩】
〈077-12〉

(5) 説【弘云始悦反。言也、解也、讀也、告也。慈云説者示也。珠云止久。ツク詩《音悦、服也》ヤドル舎也又音選音決云悦《兩都賦》又音、与税同。恤云誘。中云説猶言。ヨロコフ】
〈079-14〉

(6) 不諱【イマズ顔】〈098-31〉

(4)と(5)はⅢに該当する例である。(4)において毛詩訓点本から引用された和訓「ヲシフ」は、万象名義からの義注「教也」と重複する。これを見ると、義注で示された意味（「教える」）について和訓が繰り返して記しているように見受けられる。つまり、和訓の補助的な働きとは義注の二重言語的な重複記述であるように考えられる。

ところが、(5)はこれとは異なる様相が見られる。ここには毛詩訓点本から引用された「ツク」「ヤドル」、そして出典未詳の「ヨロコブ」、仏典注釈書から引かれた「止久(トク)」が載っている。その中で「ツク」「ヤドル」は義注の中で意味的に類似したものが見当たらない。義注と和訓は相補的な意味記述を行っているように見られる。ちなみに和訓の後ろには和訓の意味に相当する「服也」「舎也」といった義注を付き添えらる。これは他の義注とは意味的に重ならないことを考慮した措置と考えられる。

(6)は義注なしに和訓「イマズ」だけを収録し、Ⅲに分類される例である。このように意味記述が専ら日本語によって行われる項目は図書寮本名義抄を通じて二〇七例も存し^(注八)、これは片仮名型和訓を持つ項目の二割強を占める割合である。このような項目の存在は、補助的な要素という和訓の位置づけとは矛盾するように見受けられる。

言部全体(三四九項目)において意味記述は二九六項目に見られる。これをさらにⅠ～Ⅲの類型に分けて示すと次のとおりである。

Ⅰ 義注のみ	一五三項目
Ⅱ 義注＋和訓	一〇六項目
（単字型義注＋片仮名型和訓）	一〇〇項目
Ⅲ 和訓のみ	三七項目
合計	二九六項目

第五節 義注と和訓の共存(ロ)

一 義注と和訓の意味的な対応

以下の考察では、まず和訓と義注がともに収録されている項目に対して両者の比較検討を行う。義注と和訓に対して互いの意味領域の重複を把握するためには、中国語と日本語に分かれている記述言語の相違を解決する必要がある。その方法としては、和訓の漢文化あるいは義注の日本語化が考えられる。本論では平安時代後半期の訓点資料を中心に漢字と日本語語彙との対応の実用例を網羅した『訓点語彙集成』(以下「集成」)を利用して後者を中心に進めることにする。その手順は次のとおりである。

比較の対象は、単字型義注と片仮名型和訓とに絞る。片仮名型和訓の出典である訓点本の傍訓は、経書本文の字句に対してその訓読注を意識して当てられた和語である。したがって、訓読注と通じる側面がある。一方、単字型義注は主に玉篇系の字書から引用された内容で、その成立土台の一つは経書の訓読注である。一方、「集成」は各訓点資料の本文を主に一字単位で区切り、それに付けられた訓点を網羅した資料である。したがって、これを利用した和訓化は、漢字一字単位で行うことに適する。

ロに該当する一〇六項目の中で、単字型と片仮名型の組み合わせの例は一〇〇項目にのぼる(注九)。ここで、該当する項目における和訓と義注と

の意味領域の重なり合いを検討する。検討の手順として、まず単字型義注を日本語化するため、図書寮本名義抄の単字型義注の注字(「〇也」の「〇」に当たる字)に当てられた日本語の実例を「集成」を用いて集める。たとえば(7)を例にして説明すると次のようである。

(7) 信受【音迅。弘云①誠也、明也、驗也、用也、敬也、宿也、重也、處也。慈云信者證入、受者領納、又云玄贊等云於此信中略爲十釋云々《理趣疏》又可見》。華嚴云信能增長智功德、信能必到娑地云々。玉云極也、再宿曰信、遣使相聞曰信。②マコト易、ノフ後《申也》、オモヒテ遊、カタミ。勝曼云、信、③ツカヒ。】〈073-31〉

単字型義注の注字は「誠・明・驗・用・敬・宿・重・處・極」が見られ、「集成」よりそれに当てられた和訓の実用例(以下、付訓実用例)を探してみた。その結果は次のとおりである。

誠::サネ/マコト(38例)/モハラ
明::アカサク/アカシ/アカス/アカスラク::
驗::アキラカ/アキラカニス/アキラム/アラハ::
用::コレヲモテ/ツカフ/フク/モチウ/モチテ::
敬::アガム/ウヤマフ/ウラヤム/カシヅク/ツツシム/キヤブ/キヤマフ
宿::アラカジメ/イヌ/エフベ/オキナ/カミ::

重…アガム／アツムズ／オモウス／オモクス…

處…アト／イル／オイテ／オク／カクス／コトワリ…

極…アクマデ／ウク／カギリ／キハ／キハマリ／キハマリテ…

〔注…（ ）は用例数〕

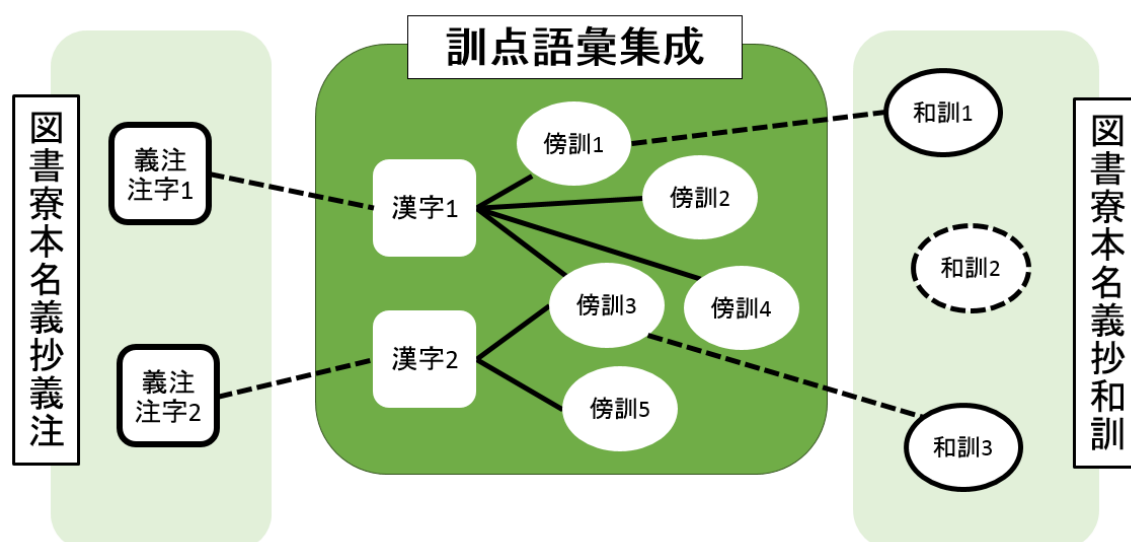
これらと和訓「マコト・ノフ・オモヒテ・カタミ・ツカヒ」と照合すると下線を引いた「マコト」のみ見当たり、他の和訓は付訓実用例には見られない。

こうして集められた付訓実用例に見られる和訓は、実際の訓点資料に使われた当該注字の字義に基づく付訓である。注字と同じ漢字が各文献で示す様々な派生義が日本語化したものと見なしでも大きな問題はないと考えられる。以上の手順は【図四-2】のようである。

信…アキ／アキラム／ウク／ウベナフ／カタガタ／カタミ（1例）／カ
ナフ／キハム／サネ／シルシ／ツカヒ（10例）／ツカフ／ツツシム
／ノブ（3例）／マカス／マコト／マコトニス

「カタミ」は図書寮本名義抄と同じく『遊仙窟』の用例であり、他の文献からの例は見つからない。これは唐代伝奇小説に見られる口語的な表現に対する意識的な付訓と見られる。「ツカヒ」と「ノブ」はある程度の用例数が確認される。義注が持たない意味領域を、和訓によって示したものと解釈できる。以上の検討と単字型義注とともに収録されていない

【図四-2】「集成」による単字型義注の和訓化



用例五三例をまとめて示すと次のとおりである。

【和訓と単字型義注との意味的重複】

- ① 単字型義注と意味的に重複する和訓・二一四例(五〇%)
- ② 単字型義注と意味的に重複しない和訓・五九例(二六%)
- ③ 単字型義注と共存しない和訓……………五三例(二四%)
- 合計……………二二六例

二 訓点本における日本語対応の実用例と和訓の対応

続いて和訓と掲出字との結び付きについて検討する。先述したように和訓は言部の一四三項目に二二六例が確認できる。それらに対してそれぞれの実質的な被注字を確定し、その被注字をもって「集成」漢字索引で検索した実用例に当該和訓が含まれるかを検討した。

まずは「集成」漢字索引に被注字の使用例が見当たらない二二例を除外した和訓二〇四例に対して次のような手順で確認を行った。たとえば、項目「調[08354]」には「ト、ノフ月・アシタ詩・シラへ白・ナヤマス遊・クビル」の五つの和訓が収録されている。「集成」漢字索引で「調」を引くと下記に示すように「トトノフ」「アシタ」「シラベ」「ナヤマス」は見られるが、「クビル」は確認されない。

【「集成」漢字索引の例】

調…アグ(1)／アシタ(1)／コシラフ(1)／コトバ(1)／シラブ

(20)／シラベ(4)／シラム(1)／シラメ(1)／ツイモノ(1)／ツキ(2)／トトノフ(36)／トトノヘ(3)／トトノホル(9)／トラフ(1)／ナヤマス(1)／ミツキ(9)／モタリ(1)／モチアグ(1)／モテアソブ(1)／ヨス(1)

少なくとも「集成」においては「調―クビル」の実用例は見当たらないことを確認できた。同じ手順で和訓二〇四例を検討し、実用例あり一六〇例、実用例なし四四例の結果が得られた。

【和訓の被注字の実用例としての有無】

- ⑦ 被注字の実用例として存在……………一六〇例(七一%)
- ⑧ 被注字の実用例として存在しない……………四四例(二〇%)
- ⑨ 被注字未収……………二二例(九%)
- 合計……………二二六例

第六節 和訓のみ(目)

先述のとおり、言部において和訓が収録されている項目は一四三項目で、和訓二二六例がある。このような分布の量的な現状は、本辞書における和訓についての扱いを窺わせるものともいえる。

しかし、各注文内における分量的な面とともに、注文の配列順序(注二〇)などの質的な側面まで考えると図書寮本名義抄ではやはり音注や義注と

いった漢文注に重点を置いていいると考えられる。これは漢訳仏典を中心とした仏教教学の集大成としての性格とも整合する。この和訓の義注への従属的な位置づけを全否定することには無理がある。ところが、漢文注優位の傾向にもかかわらず、図書寮本名義抄には和訓のみ収録する項目が見られる。言部においても二九項目、全体の一割弱を占めるこのような例の存在をどう解釈するかは問題である。これらは字音と字義についての漢文注は一切見えず、和訓のみの異例的な存在である。特に次に示す例は、漢籍の訓点資料の本文をそのまま抜き出したような形をしており、仏教書中心の構成の中では異質なものと言えよう。

- (8) 訐群臣之德失をアハク 【顔氏】〈074-51〉
 (9) 訥於言オンシ 【論語】〈087-31〉
 (10) 詳譽イツハデホルマネス 太子ヲ 【史記世家】〈099-41〉

ところが、上掲の(8)～(10)の項目の前後には同じ被注字を共有する親項目のようなものが見られる。その親項目に相当するように見える項目には、字音や字義といった共通の被注字に関する基本的な漢文注が施されている。次に示す(8')～(10')はそれぞれ(8)～(10)の親項目に相当する項目である。

- (8') 訐 【弘云柯戴反。揚惡也。】〈074-44〉
 (9') 譽訥 【文集或音義云音蹇。弘云難也、吃也。應云言不通利謂譽吃。下應云古訥同。奴骨反。遲鈍也、難也《弘同》。東云言語難也、鈍也、難言也、譽言也。應又云難蹇也。】〈087-11〉
 (10') 譽 【宋云音預、又平聲。珠云保麻礼。玄贊云面讚爲譽、背讚名稱。眞云余。】〈099-22〉

これを見ると、先掲の(8)～(10)のように掲出語そのものが訓点資料の字面の体裁を採る項目は、(8')～(10')のような親項目があつてこそ存在可能だったと考えられる。すなわち、親項目には収められない訓点本における用例を提示するために立てられた子項目である。

上述したように、言部には和訓のみを収載する例は併せて二九例あるが、特に二字以上の字句が目立つ。これらは共通の被注字を持つ「項目群」の子項目として位置づけることが可能である。そして、それによって漢文注優位の中で、なぜ漢文注を全く含まない日本語のみの異例な項目が存在するかという疑問に答えられよう。

第七節 まとめ

以上で検討した単字型義注および被注字の実用例和訓と、図書寮本名

義抄の和訓との対応を次のようにまとめて結びたい。

図書寮本名義抄の和訓が、単字型義注の実用例和訓と重なるかについての検討では、①図書寮本の和訓が単字型義注の実用例和訓と重なる場合(一一四例)、②重ならない場合(五九例)という結果になった。これを和訓の漢字義注に対する従属性の目安とすると、①は従属的な意味記述、②は独自の意味記述を行っていると解釈できる。

図書寮本名義抄の和訓が、被注字の実用例和訓に含まれるかについての検討では、⑦図書寮本の和訓が被注字の実用例に含まれる場合(一六〇例)、⑧含まれない場合(四四例)の結果を確認した。これを和訓が表す意味の一般性に対する目安として考えると、⑦は被注字の一般的な意味にかかわる和訓、⑧は被注字の特殊な意味にかかわる和訓として解釈できよう。

以上を合わせてみると、図書寮本名義抄における和訓の意味記述上の機能については次のようなことがいえる。

- 一 義注で表された意味の重複標示が主流である中、義注で覆いきれない部分を単独で表示する機能がある
- 二 重複標示・単独表示いずれにおいても一般的な意味のほうが多いが、単独表示では相対的に特殊な意味の記述が目立つ。

注

(一) 山田(一九九五)は日本辞書史の始まりを次のように述べている。

現在知るうる限りにおいて、日本辞書史は、外国語辞書(中国語辞書)にはじまると考えてよい。……中国辞書史の知識なくして日本辞書史の理解は難しいが、日本における辞書の必要性和中国におけるそれとは必ずしも全同ではない。(六九頁)

これによると、日本独自の辞書は、中国辞書では充足しない日本独自の「必要」から望まれたことが窺い知れる。

さらに大槻(二〇〇五a)はその「必要」の背景と内容について「漢字漢文を日本語として理解し、また、日本語をもとに漢字で文を綴るという営みの蓄積の中、日本語を含み持つ辞書が必要とされるようになった(一一〇頁)」と述べ、その始発である平安時代の古辞書を研究することの意義を「日本人にとって、あるいは日本語にとって、辞書とはいったい何なのか」という問いに対する答えとして位置づけている。

(二) 吉田(一九五六)は全項目数を三六五七項(五二頁)に数え、そのうち和訓を含む項目は一八七項(三三%、五五頁)とする。

(三) 「●云…」などの出典注記が率いる、漢文義注を含めるひとままとりの引用文を一例として数えた。ただし、一つの出典注記の下に単字型と述文型が共存する例はそれぞれ数えた。

(四) 万象名義に次ぐ玄応音義といったものを出典とする単字型漢文義注に対しても更なる精査が求められるが、見通しとしてはこれもまた玉篇や説文解字からの孫引きが多く含まれることが予想される。

(五) 吉田(一九五四a・七三・七四)

(六) 『小切韻』に関しては吉田(一九五五b・九二・九三)の推論による。

(七) 片仮名型の場合、出典注記が直接付いていないものに対しては築島(一九五九)と山本(二〇〇〇)の考察に従い、実質的に隣接する出典注記の適用を受けるものとして見なして数えた。

(八) 大槻(二〇〇五a・一二四)の次のような指摘による。

片仮名和訓を持つ項目数は総計九六四条で、うち片仮名和訓のみの項目が二〇七条存するから、二〇%強が片仮名和訓のみの項目である。これは少

ない数とは言えない。

(九) 日本語義注の数は延べ一七三例で、各項目には複数の日本語義注を収載する例も多い。

(一〇) 注文および出典ごとの配列序列については宮澤(一九九二)を参照されたい。

第六章

図書寮本名義抄の和訓収容の実際

―毛詩訓点本の和訓を中心に―

第一節 はじめに

前章では図書寮本名義抄の項目配列と注文配列における組織性を基に、和漢両言語による意味記述の構造について考察した。本章ではそれに続き、意味記述要素の一つである和訓の収容と辞書内の位置づけについて考える。そのために、特に毛詩訓点本という個別出典との関係に対象を限定して行う。

類聚名義抄の文献的な価値は高いが、特に古代の日本語語彙を集めたものとして重視され、その全貌を伝える観智院本は日本文学の諸作品の注解においても広く利用されている。しかし、このような和訓の利用にはその質についての注意が要される。類聚名義抄の和訓の質について、その検討の必要性は中村(一九八七)が指摘しているとおりである。^(注二)

図書寮本は類聚名義抄の古態を伝え、和訓には出典注記が忠実に示されている。これは各和訓の質についての考察を、それがどのような書物の、どのような文脈におけるものかまで遡らせる土台である。

図書寮本名義抄には千五百を越える片仮名和訓が漢籍の訓点本から引

用されている。図書寮本は法相宗の学侶による撰述と推定され、注文の出典は概ね仏教関連の典籍であることを考えると、主に漢籍から行われた片仮名和訓の引用は異例といえる。

図書寮本の片仮名和訓にはそのすぐ下に右寄せの小字で出典が示されている。出典表示の中で「詩」は『毛詩』の訓点本からの引用を示すと推定されるものである。『毛詩』は儒家の主要經典の一つとして重要視された典籍であり、図書寮本には一七〇例の片仮名和訓がこの書より引用されている。本論では「詩」出典表示が付いている片仮名和訓(以下「詩」表示和訓」と略す)を対象として取り上げ、図書寮本名義抄の片仮名和訓の性格および収録意義について考える。

図書寮本における毛詩訓点本からの和訓引用については次のような先行研究がある。まず、築島(一九五九)は本書の和訓と、現存する個別訓点本との照合を行って高い一致度を確認し、平安時代における漢籍訓点資料の不足を補う材料として図書寮本所収の和訓の価値を明らかにしている。毛詩の訓点本からとされる和訓については、静嘉堂文庫蔵本の清原宣賢点本との比較表を示して、毛詩からの和訓採録が本文はもちろん注からも多く行われたことを実証した。

山本(二〇〇六)は「詩」表示和訓の全面的な検討を行い、現存する訓点本の傍訓と一致しない例に対しては異体字や訓点相違などの可能性から綿密に検討している。さらに、出典注記が付されていない和訓に対し

ては、その前の和訓の出典注記が及ぶ可能性について追及している。一方、毛詩訓点本の全ての和訓を収録する方針ではなかったことも指摘する。特に図書寮本へ採録されなかった訓点本の和訓については、漢字の珍しい意味用法に基づく特異な付訓か、そもそも漢字自体が珍しいかの理由で必要度が低いとされたのではないかと述べ、図書寮本の和訓の性格を考える上で重要な示唆を与えている。

本稿は以上の先行研究の業績を踏まえて、毛詩訓点本から引用された和訓についてその原典内の情報にまで遡って付訓の背景を検討し、さらに被注字と和訓との関係について追及する。これによって図書寮本収載の和訓の一面を明らかにする。

第二節 研究対象

本研究の対象となる毛詩訓点本からの片仮名和訓は「その出典が毛詩であることが明示されているもの」に限る。しかし、本辞書における片仮名和訓の出典表示の構造についてはまだ未解明の部分が残されている。

毛詩訓点本からの引用が確実あるいはそうと推定されるものは次のとおりである。

【対象1】「詩」出典表示が付いている和訓（一七〇例）

直接「詩」の出典表示が付加されており、毛詩からの引用であることが明確な用例である。

【対象2】隣接和訓の「詩」出典表示が及ぶとされる和訓（一九例）

これらは山本（二〇〇六）において「疑似出典無表示」という名称で取り扱われた用例である。直接出典注記が付いているわけではないので出典無表示の例のようにも見られるが、実はその前の方の和訓に付されている「詩」出典注記の出典表示が及ぶものとされる。たとえば「a^詩 b^礼」（a・b・cは和訓、詩・礼は出典注記）におけるbのような例を指す。

まず【対象1】の一七〇例は出典が明示された例として対象用例にするのに問題がない。しかし、【対象2】の場合はどの隣接和訓の出典表示が及んでいるのかについては異論^{（注二）}と不確実な部分が残し、一概に対象用例とするのは難しい。本章ではそのような不確実性の排除のため出典が明示されている【対象2】の一七〇例だけを対象とすることにする。

この一七〇例の中には漢字二字に対する付訓をそのまま引用したものがある。これらの中で分割不能な「悠哉（オモフラム）」以外の七例は次のように単字に分割して検討対象とし、都合一七七例となる。^{（注三）}

湍迅（トクトシ／015-51）

→湍（トク／015-51）、迅（ツジ／015-51）

少壯(ワカクサカリナリ／235-14)

↓少(ワカク／235-14)、壯(サカリナリ／235-14)

衷恕(オモハカリオモハカル／242-51)

↓衷(オモハカリ／242-51)、恕(オモハカル／242-51)

詳愚(イツハリオロカシテ／247-71)

↓詳(イツハリ／247-71)、愚(オロカシテ／247-71)

悼慄(イタミヲノハク／258-73)

↓悼(イタミ／258-73)、慄(ヲノハク／258-73)

強総(ロハクネキ／299-52)

↓強(ロハク／299-52)、総(ネキ／299-52)

強総(ロハクネキ／321-73)

↓強(ロハク／321-73)、総(ネキ／321-73)

悠哉(オモフラム／270-73)

しかし、一七七例の中には次に示すような重複例が存する。

A、別項—同字—同訓(九例)

- ・ 洩(フカシ／017-51) — 洩(フカシ／028-34)
- ・ 訓詁(訓／ヲシフ／076-62) — 訓詁(訓／ヲシフ／077-12)
- ・ 恕已(恕／オモハカル／242-41) — 衷恕(恕／オモハカル／242-51)
- ・ 懼(オゴテ／245-44) — 恐懼(懼／オシ／263-12)
- ・ 慶慰(慰／ヤスミス／246-21) — 慰問(慰／ヤスミス／260-73)
- ・ 惛(イコフ／246-71) — 惛(イコフ／257-23)
- ・ 怒(オモフコト／259-71) — 怒(オモフ／275-11)
- ・ 強総(強／ロハク／299-52) — 強総(強／コハク／321-73)
- ・ 強総(総／ネキ／299-52) — 強総(総／ネキ／321-73)

B、同項—同字—同訓(一例)

・ 懈怠(懈／オコタル—オコタル／243-41)

C、別項—同字—異訓(四例)

- ・ 安詳(詳／アキラカ／089-73) — 詳愚(詳／イツハリ／247-71)
- ・ 悚慄(慄／オソル／245-23) — 悼慄(慄／ヲノハク／258-73)
- ・ 懷(ヤスシ／244-62) — 懷(オモフ／273-11)
- ・ 純淑(純／アツク／293-34) — 純(シノム／294-12)

D、同項—同字—異訓(三例)

- ・ 詒(オクラヌカ—オクレリ／097-41)
- ・ 經緯(經／ツネニシテ—ハカル／287-42)
- ・ 哀(オモハカル—カナシ／340-13)

E、同項—別字(一例)

・ 染汙(染／ソム／014-14) — 染汙(汙／アラフ／014-14)

以下では「同字—同訓」であるA・Bの一〇例の重複を引いた一六七例を基本用例数にして考察する。

第三節 毛詩訓点本との比較検討

比較資料となる毛詩の訓点本としては、全巻揃って現存しており、覆製本の公刊によって利用が便利な静嘉堂文庫蔵『毛詩鄭箋』(以下「静嘉

堂文庫本」と略す)を中心に検討を進める。静嘉堂文庫本は清原宣賢による訓点本であり、明経博士清原家の訓法を伝えるものとして資料的な価値が高い。この点本が書写された年代は一六世紀初頭であるが、承安四年(一一七九)の祖点を引き継いでいることがその奥書によつて判る。平安中期以来の漢籍の訓点伝承における保守性を考えれば、院政期の毛詩訓点本の有り様を窺う資料としては大きな問題はないと考えられる。^{注四}

図書寮本の和訓との比較検討は次のような原則に沿つて進めた。検討の手順と分類方法は呉(二〇〇〇)のもの^{注五}を参照した。

○図書寮本の「詩」表示和訓に対して、その被注字が静嘉堂文庫本に存在するか否かを検討し、被注字が存在する場合はその傍訓と図書寮本の和訓とが一致するかを確認した。

○被注字の傍訓としては、左訓および異訓なども含めた。原則として全訓が仮名あるいはラコト点で記され、それが図書寮本の和訓と一致するものを一致例とした。

○語幹を同じくする自動詞と他動詞(例…うごく―うごかす)は一致と判定した。活用形の相違だけの場合、助詞と助動詞および形式名詞の添加されている例(例…くはだつ―くはだてば)も一致例として認める。音韻変化による語形の変化(例…くむが―くが)や仮名遣いの違い(例…おとろへ―をとろへ)は無視した。

上記の過程による照合の結果を分類すると次のとおりである。

一 被注字・和訓ともに一致……………一三五例(八〇・八%)

二 和訓は一致せず……………一六例(九・六%)
三 被注字が見えず……………一六例(九・六%)

概していえば、用例の約八割は単純一致するが、残りの約二割の例は少なくとも現存訓点本とは単純には一致しないという結果である。単純に一致しない三二例についてはさらなる検討を要する。次に上記の三つの分類それぞれについての検討の詳細を示す。

一 被注字・和訓ともに一致(一三五例)

ここに分類されている用例は、静嘉堂文庫本において被注字が確認され、その傍訓も当該「詩」注記和訓と一致すると判定したものである。本章の調査で確認されたのは一三五例^{注六}で、訓点本の本文内の分布を本行と割注に分けてみると、本行に一〇一例、割注に三四例である。

本章の調査で用いた静嘉堂文庫本『毛詩鄭箋』の体裁を見ると、詩篇の本文(経文)と詩全般の理論(大序)および各詩篇の大要(小序)を大字の「本行」にし、これらに対する毛公と鄭玄の注釈(毛伝・鄭箋)を小字双行の割注にして合わせた体裁の書物である。本行は儒家の經典である毛詩の中枢をなす部分であり、割注はその注釈として付随的な位置付けの要素であると言えよう。このような訓点本内の内容的な重みと和訓の採録との影響についての検討のため、本行と割注とに分けて詳細を検討する。

まず本行の一〇一例について検討する。一致例の七割以上が本行に付された傍訓であるのは、毛詩における中枢的な部分という典籍内の位相が意識された結果として解される。文献内における文字量は割注のほうが本行の約二倍の量であること^(注七)を考えると本行重視の傾向が認められる。毛詩訓点本の本行から引かれた和訓の実例を挙げると次のようである。^(注八)

a、濼(ミヅアヒ／049-22)

梟^{音読符}驚、在^{ハツアヒ}濼^{ミヅアヒ} (17:172) 《伝》濼水會也

b、躋^{ノボル}躋(躋／ノボル／201-63)

朝^ニ齊^に于^に西^に (03:124) 《伝》躋升

c、域(タモツ／228-64)

正^{カミとして傳タモツム傳}域^{のヲ傳} 二^{カミトス箋}彼^ニ四^ニ方^ニ (20:261) 《伝》域有也

d、歩(オコナフ／133-53)

天^{ヲコナフ}、歩^を 二^{ヲコナフ}艱^ニ難^ニ (15:210) 《伝》歩行

aとbは使用頻度が低い字として字義の理解が難しい例、cとdは平易な字の常用的ではない字義を取った例である。いずれも注釈が施され

ているのは経文のままでは正しい理解が難しかったためであろう。そのような注釈に基づく字義の理解が付訓に影響することが考えられる。本行からの用例を眺めると総じて使用頻度の低い漢字、常用される漢字の非常用的な和訓が多く見られる。これについては後述する。

続いて割注からの三四例についての検討である。先述のとおり、割注は本行に対する訓詁敷衍の注釈であって、毛詩という典籍内における位置づけは本行よりは低い。しかし、本行には及ばないにしても經典を正しく理解するための典拠としてそれなりの權威が認められる要素と言える。まず全例の二割が割注から採録されたことを見ても、図書寮本の和訓引用において割注が特に排除された形跡はないと言える。ちなみに毛伝から一五例、鄭箋から一九例の引用が確認されており、両注釈の間の偏りは見られない。

訓詁は難解な経文の字句の意味を突き止めてより平易な表現に書き直したものである。したがって、割注は注釈として概ね平易な字の一般的な用法の多いはずである。しかし、実際の検討では次のように平易とは言いい難い例が少なくない。

a、決擇^{サクリテ}(決／サクリテ／065-34)―伝

水決復^{ルをす}、入爲^と汜^と。(01:383)

b、講(カマフ／092-54)―伝

に^{とはカマフを}
左旋講^レ兵 (04:231)
カウスル

c、足(フモト／102-11)―箋

は^{のフモトを}
下謂^二山足^一 (01:347)

d、薰陸(陸／クムガ^{注九}／205-62)―箋

ヲ^ノヲ^ヒシ^シ猶^下離^ニ之^ニ生^ニ於^ニ陸^一自^ナ然^カ上^上也 (04:068)

上掲のa～dの例はいずれも字としては平易なほうであるが、和訓は非常用的なものである。割注からの和訓にこのような例が少なからずある原因としては、訓点本における付訓の意義という側面が考えられる。あまりにも平易な意味用法で常用訓で十分読めると判断される場合は、和訓を示す意義が低いため省略されることがある(注二〇)。実際、静嘉堂文庫本にも訓読符だけが付され、具体的な和訓は示されていない例が存する。つまり、割注は相対的に平易な字句が多いが、傍訓が付される箇所は限られるわけである。これは結果的に図書寮本に引かれた和訓の性格ともかわることである。

二 和訓は一致せず(一六例)

これらの一六例は、被注字は静嘉堂文庫本に存するが、その傍訓は一

致しない用例である。一致しない事情としては、まず図書寮本の和訓とは違う和訓(異訓)が記入されているのが五例、そして訓点本のほうが音読みになっているものが九例、最後にどう読んだのか示されていない例が二例である。

山本(二〇〇六)では図書寮本撰者の所持本と静嘉堂文庫本『毛詩鄭箋』との間に本文と訓点の相違が少なからずあった可能性を指摘している。本章では訓法の相違に着目して、和訓が一致しない例に対する再検討を行い、その推定される一致箇所を探してみた。その結果、本行から一〇例、割注から六例に対して和訓の採録位置を推定することができた。詳しくは次に示すとおりである。

二― 異訓が付されている箇所(五例)

次の六例は静嘉堂文庫本に和訓は付されているが、それと図書寮本の和訓とが一致しない例である。

a、洗濯(濯／ス、ク／016-72)―本行

アラフ^{アラフ}モタヒ^{モタヒを}可^二以^一濯^レ疊 (17:276) 《伝》濯滌也

○すすぐ…①水をかけて汚れを流す。水で清める。水できれいに洗う。

○あらう…①水などでよごれを落とす。すすぎ清める。着物などを洗濯する。米などを研ぐ。

(語義は『日本国語大辞典』より抜粋。以下同じ)

b、著洿(洿／シボル／044-61)―割注

蠅之爲_レ蟲、汗_レ白使_レ黑。汗_レ黑使_レ白 (14:218)

○しおる…②濡れて塩けを帯びる。また、濡れて汚れる。濡れて弱る。

○けがす…①きたなくする。よごす。醜くする。

c、悼慄(慄／ヲノ、ク／258-73)―割注

皆爲_レ之、悼_レ慄 (06:286)

○おののく…恐れてふるえる。わななく。戦慄する。

○おそれる…恐怖を感じる。身に危険を感じたりしてびくびくする。心がひるむ。

d、況(コ、[茲也]／044-23)―本行

毎_レ有_レ良_レ朋_レ 況_也、永歎 (09:078) 《伝》況茲

《箋》茲(コ、ニ)對之長歎而已

e、出(出／ヤメヅラナリ／145-22)―割注

生_ニ裏_一公_一而 出 (03:340)

《観》出[…ヤメヲレタリ…]

a、cは両者が意味的に近い関係にあるもので、dは注釈理解の相違が和訓の相違に繋がったものと考えられる。いずれも図書寮本撰者の所

持本においては図書寮本所収の和訓が付されていても無理がないものと判断した。

ただし、eの場合は図書寮本所収の和訓「ヤメヅラナリ」の意味が不詳で、静嘉堂文庫本の対応箇所と推定される「生ニ裏公而出」の傍訓、「ヤメラレタリ」の誤写ではないかと考えられる。ちなみに観智院本には「ヤメヲ(仮名索引ではラの誤写とする)レタリ」という和訓が収録され、提示した毛詩訓点本の傍訓と一致する。これを原撰本から観智院本へ継承された和訓とすれば、観智院本の基となった原撰本と図書寮本の本文の相違を示唆するものと解されよう。

二二 音読している箇所(九例)

次の例は静嘉堂文庫本においては音読になっているが、その意味としては図書寮本の和訓が指すものと通じると判断される用例である。

a、淪没(淪／ヒキキル／020-54)―本行

若_レ此、無_レ罪、淪_一胥 以 鋪 (12:199) 《伝》淪率也

《色》率ヒキキル…師羨遵洽_{已上同}(下ヒ辞字)

b、話言(話／ヨシ[善言也]／078-13)―本行

其維哲_一人、告_ニ之_一話_一言_一、順_レ德之行 (18:118)

《伝》 語言古之善言也

c、歌謡(謡／ウタフ／092-24)——本行

我歌且、謡（05:207） 《伝》徒歌曰謡

d、經緯(經／ハカル／287-42)——本行

經（二）始靈臺（一）。經之、營之。（16:334） 《伝》經度之也

e、純(ツ、ム／294-12)——本行

白茅 純束（01:403） 《伝》純束猶包之也
《箋》皆可以白茅裹（ツ、ム）束（ツカネ）以爲

f、楊(カサヌ／333-63)——割注

諸侯狐裘、錦衣、以楊之（06:270）
《疏》白狐皮爲裘、其上加錦衣以爲楊

g、褰縮(縮／シ、ム／305-54)——割注

九（一）月 肅 霜（二）肅縮也。霜、降而收（三）縮萬物（四） （08:077）
○しじめる…ちぢめて小さくする。ちぢめる。

h、沐浴(沐／ユスルム／017-13)——本行

薄言歸 沐（15:148）

○ゆするあむ…頭髮を洗う。

i、慈悲(慈／ウツクシビ／236-63)——割注

慈和 徧服 曰順。（16:282）

まず a と e は注釈(率、善言、歌、度、包)に基づいた付訓が予想可能な箇所である。F の場合は二次注釈である『毛詩正義』の内容を参考すると「楊」は「皮衣の上に錦衣を重ねて着る」という意味で理解され、図書寮本の和訓「カサヌ」はこれに拠るものと考えられる。g の場合、經文の「肅」に当てられた和訓「シ、ムル」は毛伝の「縮」を典拠とすると考えられる。特に「收縮萬物」においては「縮」の訓読みも可能であろう。h と i は文脈的な理解として「髪を洗う」「慈しみ」という意味として受け取られ、それに相応する傍訓として図書寮本の和訓が付された可能性が高いとされた例である。

二―三 読み方未詳の箇所(二例)

次の二例は、静嘉堂文庫本には読み方の具体的な語形が示されておらず、判断が難しい用例である。

a、音(コエ／126-11)——本行

燕（ユキ）于飛。下（二）上其音（一） （02:061）
《箋》戴嬌將歸言語感激聲有小小

b、滅(ミゾ／035-14)―本行

ツいて 音読符を れにす

築^レ城伊滅(16:389) 《伝》滅成溝也

アリ

《箋》方十里曰成、滅其溝也

aの例は、訓読符だけ加点されているが、これはいわゆる常用訓による読みを想定した加点と解される。他の訓点本においては具体的な読みまで示されている可能性は存在すると考えられ、この文脈では「オト」よりは「コエ」が相応しいと考えられる箇所である。

bの場合は注釈の内容を参照すると「滅は、四方十里の周りを囲む溝」と理解され、「ミゾ」という和訓が当てられても問題はない箇所と考えられる。

三 被注字が見えず(一六例)

ここに分類された一六例は静嘉堂文庫本の本文から被注字が見当たらなかった例である。本文相違の可能性についての指摘はすでに先行研究で行われているとおりで、ここでは異文あるいは異体字に関する検討を行った。その参考資料としては『經典釈文』の「毛詩音義」、鎌倉時代に書写された毛詩訓点本の残欠である大仏寺蔵『毛詩二南残卷』を用いて再検討を行った。その結果、次に示すように一二例に対して一致箇所を推定することができた。

a、湔浣(浣／アラフ／041-44)―本行

アラフ

薄^に湔^二浣^一 我衣^{がを} 《伝》湔謂濯之耳 (01:089) 《釈》湔又作浣

アラハム江

b、謫罰(謫／セム／086-61)―本行

室^一人交^{コモ} 偏^{アマネク}、謫^{セム}我^を (02:330) 《伝》謫責也

カハル

c、詒(詒／オクラヌカ／097-41)―本行

ヲクレリ傳

貽^二我佩^一玖 (04:146) 《伝》言能遺我美寶

ヲクラヌカ箋

《箋》庶其敬己而遺己也 《釈》詒我「音怡」

d、詒(詒／オクレリ／097-41)―本行

同右

e、諺(カツテ／097-43)―本行

なぞカツテ キ ヤムルこと

胡慥莫^レ懲 (12:155) 《箋》慥曾 《釈》亦作慘

コル、

f、訝(ムカフ／100-63)―本行

のノユキテ トツクときにハク ありてムカフ

之子^シ于^一歸 百^一兩御之(01:230) 《伝》御迎也

《大》之子于歸百兩訝之「訝迎也」

《釈》御之「御…本亦作訝…」

g、蹠(ツマヅク／121-51)——本行

ネカハク伝ワレ
願言、則嚏ツマツカン伝
(02:102) 《伝》嚏路也
ヲモハ、箋ハナヒム箋

h、島(ヲカ／208-32)——本行

く 訓読符
如_レ山、如_レ阜し ヲカの (09:143) 《伝》大陸曰阜

i、訴(ウタフ／075-52)——割注

る ヲカフ
不_レ善乎昊_一天愬とはウタフルそに 天之也 (12:024)
ソスルソ

《釈》本亦作訴

j、蹠(フム／121-52)——割注

メバ フムとは のを
進則蹠_一其胡_{一 (08:205)}

k、詳愚(詳／イツハリ／247-71)——割注

イツハリヲロカにして
賢者、皆伴_一愚ツクラ 不_レ爲_二容_一貌を (18:058)

L、絢(カザル／303-54)——割注

コレを てカザルハトカハロキを
以 英_レ裘 (01:327)

最終的に一致箇所が見つからなかったのは次の四例である。

誠島(誠／イトシメ／077-31)

陂諝(諝／コレ／096-22)

紕繆(繆／アヤマツ／098-51)

衷恕(衷／オモハカリ／242-51)

以上より当初の計数を改めると次のようになる。

一 被注字と和訓ともに一致……………一六三例
本行……………一一〇例
割注……………四三例
二 和訓不一致……………〇例
三 被注字未見……………四例

第四節 毛詩訓点本からの和訓の性質

以上の検討によって、一六七例のうち一六三例に対して、毛詩訓点本のどの箇所から引用されたかが判った。以下その原典から読み取れる情報に基づき、毛詩訓点本から引用された和訓の性質について考える。

先述したとおり毛詩の経文は上古漢語による詩篇であって、そこには使用頻度が高くない難字も多く含まれる。そして図書寮本に引かれている毛詩訓点本の和訓の中には、珍しい字のもの、あるいは平易な字に対する珍しい和訓が少なからず存することは先に言及したとおりである。以下ではどのような字に対するどのような和訓が引かれているのかとい

う、図書寮本における訓点本利用の一特徴について追及する。

一 被注字の平易度について

山本(二〇〇六)は毛詩訓点本から収録されなかった和訓について、史記についての同様の検討の結果と対比しながら次のように述べる。

漢字とその和訓とも極めて平易であるために依拠した点本に附訓されていなかった可能性の考えられるものが若干認められた一方、その漢字が珍しい意味で用いられているのに伴い和訓も特異だったり漢字自体が珍しいために、必要度が低いとして敢えて採録されなかった可能性の高いものが相当数認められた。この点は毛詩についても同様であり、(後略)

すなわち「珍しい」漢字、「珍しい」意味に基づいた和訓が採録されなかったことが多いことを指摘する。この「珍しい」という表現は、使用頻度の低い、常用的ではないものという意味として理解できる。採録されなかった和訓に対してはそれとおりであると考えられる。しかし、疑問になるのは、すでに図書寮本に収録されたほうの「珍しさ」である。どれほど珍しいあるいは珍しくない被注字と和訓が引かれているのであろうか。

漢字の常用性について、池田(一九九三)は「常用漢字表」と「JIS漢字(第一・二水準)」をそれぞれ狭義と広義の常用字として取り上げて

【表五-1】常用漢字・表外漢字・JIS漢字コードへの収録状況

	常用漢字	表外漢字	未収字
第一水準	①90	③ 5	5
第二水準	② 2	④ 9	24
第三・四水準	0	0	13
未収録	0	0	11
合計	92	14	53

検証している^{注二〇}。本章では最新の漢字政策の動向を反映して「改定常用漢字表」(二二三六字、以下「常用漢字」と略す)^{注二二}と「表外漢字字体表」(一〇二二字、以下「表外漢字」と略す)および「JIS漢字コード」を暫定的な基準にして、毛詩訓点本からの和訓の被注字の常用性を検討する。重複を除いた一五九字^{注二三}の和訓の被注字に対して常用漢字および表外漢字、JIS漢字コードの各水準の収録状況^{注二四}を合わせて示すと【表1】のとおりである。

全一五九字の中で、常用漢字が表外漢字に収録されている字(【表五-1】の①④、以下「表収録字」と略し、これ以外の字は「未収録字」と略す)は全部で一〇六字で、いずれもJIS第一・二水準漢字に収まる。相対的に常用性の高い表収録字は全体の三分の二を占め、残りの三分の一は表に収録されていない常用性の低い字である。このような様相は本行と割注とに分けて見ても大差はな

1、表収録字（一〇六字／六六・七％）

歲況注瀉濯濱王破童約純素絕結絲經綠縫繕衣衰言訓試話
詳誘說調謠都阜阻除陰陽隆音(以上六六字、常用漢字)懼洒淝
瑕訛訝謂謔跋(以上九字、表外漢字)

【割注】 决減出壯密小少强愚慈望染渡漬澤碎索編縮訴講警足迅陸（以上二五字、常用漢字） 忽灌纏誘（以上四字、表外漢字）

【未詳】
衷（常用漢字）
謬（表外漢字）

2、未収録字（五三字／三三・三%）

【本行】 墉壑慤惟悒懃憺汙汗洵洽浣渼淪湄澍漚濞縈紕絜緝繫繫詒

謾謾謫謪謭謭跂跂跼跼蹶蹶靖（以上三八字）

【割注】峻恕恚懈洿湣緜綰褻譏跽躓（以上二三字）

【未詳】誠諛（以上二字）

以上より、毛詩訓点本からの和訓の被注字は概ね常用的なものが多いが、常用的とはいえない字も少なからず含まれていることがわかる。

二 意味注釈の存在について

毛詩訓点本からの和訓の被注字について、常用的な字のほうが優勢であることは窺われたが、和訓との結び付きはどのようなものであろうか。

以下では原典における意味注釈の存在を取り上げて、特に常用的な字に

図書寮本は橋本進吉の言うところの「読むための辞書」として珍しい用字や特殊な意味に基づいた非常用的な和訓の収録も行われたものと推測される。その収録に当たって付訓の典拠として和訓の収録価値にも関わる意味注釈の存在は大きな意義を持つ。

小助川貞次（一九九八）では訓点資料の加點内容の典拠として注釈の利
用について論じており、注釈内容の理解は文脈の理解とともに相當に意
を用いられていることを指摘している。原漢文に對する理解が加點の前
提であるとすれば、理解の拠り所である意味注釈は特に難解字句への付
訓と不可分のものと考えられる。意味注釈は、特に毛詩のような難解な
上古詩歌の加點においては大きな影響を及ぼすものである。一方、図書
寮本の「詩」表示和訓の中には原典の意味注釈も一緒に引いた箇所があ
り（注一五）、図書寮本の和訓引用における原文の意味注釈の影響を窺わせる。

意味注釈が付加されているのはどのような箇所であろうか。難解な字句の理解という存在意義を考えれば、注釈は、珍しい用字あるいは特殊な意味で使われた平易な字に必要なものと考えられる。したがって、意味注釈の存在は当該字が一般的に用いられない字、あるいは非典型的な意味を取るものであることを示す指標として考えられる。

まずはこの指標の有効性を検討するために、先に常用字・表外字への収録によって窺われた字の常用性との対応を【表2】にまとめて示す。

調査は静嘉堂文庫本の体裁上、本文から意味注釈を求められる本行の例（一一〇例）を対象とする。

【表五―2】をまず常用字・表外字への収録、つまり漢字の常用性を基準にして見ると、まず未収録字において注釈を有する例への著しい偏りが観察される。それに対して、相対的に常用性の高い表収録字のほうでは拮抗する様相を呈する。すなわち、常用性が低いほうにおける意味注釈の分布集中の傾向が確認され、非常用的な漢字と意味注釈の存在との関連が窺われる。

表収録字の例をさらに注釈の有無に分けて見ると、まず注釈がある例のほう(Ⓐ)は「説―ツク」「謂―ツトメ」などのように漢字と和訓との非常用的な対応と言えるものが多く見られる。

しかし、注釈がないほう(Ⓑ)は「念―オモヒ」「歳―トシ」のように常用的な字義に基づいた付訓とされるものが多い。つまり、表収録字の中でも意味注釈を伴うのは非常用的な字義に基づいた和訓が多いという傾向が観察される。漢字と和訓との対応の常用性と、意味注釈の存在とが相関性を有することが窺い知れる。^{注六}

表収録字における被注字と毛詩訓点本から

の和訓との対応を示すと次のようである。

【Ⓐ】表収録字―注釈有(四八例)

洒(ソ、ク／016-62)	洒灑也(6:034)
濯(ス、ク／016-72)	濯滌也(17:276)
淵(フカシ／017-51)	淵深也(2:064)
況(コ、[茲也]／044-23)	況茲也(9:078)
濱(ホトリ／055-41)	濱厓也(1:276)
將(オクル／068-44)	將送也(1:234)
訓(ヲシフ／076-62)	訓道也(19:049)
試(モチキル／077-43)	試用也(10:171)
話(ヨシ[善言也]／078-13)	話言古之善言也(18:118)
訛(ウコク／078-44)	訛動也(11:193)
説(ツク[音悦服也]／079-14)	説服也(1:265)
諠(タハブレ／082-72)	戲諠(4:427)
調(アシタ／083-54)	調朝也(1:198)
詳(アキラカ／089-73)	詳審也(3:025)
謂(ツトメ／090-43)	謂勤也(1:360)
謡(ウタフ／092-24)	徒歌曰謡(5:208)
誘(ミチヒカヌカ／094-63)	誘道也(1:400)
訝(ムカフ／100-63)	御迎也(1:230)
跋(フム／102-34)	跋躐(8:204)
童(カフロ[羊之無角者也]／122-43)	童羊之無角者也(18:113)
正(ヤム[止也]／131-73)	正猶止也(2:091)
歩(オコナフ／133-53)	歩行(15:210)
瑕(アヤマシ／164-21)	瑕猶過也(2:312)

阜(オホイナリ／186-11)	阜大也(6:198)
除(ヒラク／196-34)	除開也(9:134)
陽(アタハカナリ／203-22)	陽温也(8:019)
阻(ナヤム／203-61)	阻難也(2:158)
崑(ヲカ／208-32)	大陸曰阜(9:143)
城(キツク／217-14)	築城(9:217)
均(トノホル／219-51)	均調也(9:059)
城(タモツ／228-64)	城有也(20:261)
士(コト「事也」／234-61)	士事也(5:209)
惠(ウツクシム／236-52)	惠愛也(17:338)
息(トハマル／237-14)	息止也(1:346)
恩(ウツクシム／244-22)	恩愛(8:093)
懷(ヤスシ／244-62)	懷安也(2:105)
慰(ヤスミス／246-21)	慰安也(14:213)
恣(ホシマハ／248-24)	恣謂狡狴淫戲不以礼也(7:151)
恒(アマネシ／251-22)	恒偏(17:054)
悠哉(オモフラム／270-73)	悠思也(1:058)
懷(オモフ／273-11)	懷思(1:102)
經(ツネニシテ／287-42)	經常(12:262)
經(ハカル／287-42b)	經度之也(16:334)
素(シロシ／289-32)	素白也(1:326)
縫(ヌヘル／292-41)	縫言縫殺之大小得其制(1:332)
純(ツノム／294-12)	純束猶包之也(1:403)
約(ユヒツク／308-62)	約束也(11:152)
繕(ヨクス／313-23)	繕之言善也(4:186)

【B】表収録字―注釈無(二三例)

哀―オモハカル／哀―カナシ／維―コレ／衣―キヌキス／陰―クモル
 ／王―キミ／音―コエ／凝―コル／結―ムスボ、ル／堅―カタシ／言
 ―コトハ／歳―トシ／純―アツク／審―アキラカニ／心―コ、ロ／衰
 ―オトロヘンタル／絶―タツ／憎―ニクム／注―イル／溺―オホ、ル
 ／都―ミヤビカナリ／悼―イタミ／念―オモヒ／破―ワル／崩―クツ
 ル／与―トモニ／隆―イカヅチナル／緑―ミドリ／壹―ヒトタヒ／慄
 ―ヲノ、ク／慄―オソル／懼―オヂテ／絲―クミ

以上ではまず常用的な字に対する非常用的な付訓を確認する尺度の一
 つとして意味注釈の存在を取り上げ、その有効性について検討した。そ
 れによつて特に毛詩訓点本の和訓の中には、常用的な被注字の非常用的
 な字義に基づいた特異なものも多く含まれ、意味注釈の有無がそれを窺
 う指標としてある程度有効であることを確認した。意味注釈の意義はこ
 のような文献内の明示的な典拠として重視され、図書寮本の和訓採録に
 おいても大きな影響があつたものと推される。

三 色葉字類抄による常用性の検討

以上、被注字および和訓の常用性について見てきた。以下では、同時
 代の古辞書である『色葉字類抄』との対照によつて、毛詩訓点本からの
 和訓とその被注字との関係が有する常用度について検討する。

峰岸(一九八四)では平安時代の借字表記の分析によつて定訓の存在お
 よび実態を確認し、三卷本『色葉字類抄』の所収語に対する掲出最上位

漢字が常用の漢字であろうと推論している。これは社会一般に広く通用されていた「定訓」と古辞書との関連を実証した論考として注目される。

院政期成立の『色葉字類抄』は橋本進吉の言う「書くための辞書」に当たるものであつて、図書寮本とはその辞書編纂の趣旨と利用の仕方が異なる。しかし「書き」と「読み」の不可分性を考えれば、編纂時期が近い両辞書の背後には当時広まっていた共通の言語的な認識の存在が考えられる。つまり、漢字と日本語の対応関係に対する社会共通の認識が多かれ少なかれ両辞書に反映していることと推測される。以下では毛詩訓点本からの和訓と被注字との対応について『色葉字類抄』の収録語と掲出最上位漢字と対照し、その対応の常用性について追及する。

まず毛詩訓点本からの和訓に対して、その被注字が三巻本『色葉字類抄』（前田本・黒川本）の掲出最上位字あるいは合点付の字と一致する例を「常用性が高い」例にし、それ以外は「常用性が低い」例として分類した。このような手順で全一六七例の和訓と被注字の対応を確認した結果、約八割の例は和訓と被注字との対応は常用性が低いと判定された。このような傾向は本行と割注と分けて見ると、本行のほうがより著しい。結果を本行と割注に分けて【表五-3】に示した。

意味注釈がある例に限って対照してみると、『色葉字類抄』による調査で常用性が低いと判定した例と注釈有の例、常用性が高いと判定した例と注釈無との一致率が高い。これは先に検討した意味注釈の有無と和

訓と被注字の関係の非常用性との関連についての推論を裏付ける結果である。これをまとめて示すと【表4】のようである。しかし、常用性は高いが意味注釈があると判定した七例、常用性は低いが意味注釈がない二〇例は、先述した傾向に合致しないように見える例として検討の余地がある。

以上、『色葉字類抄』との比較によって毛詩訓点本からの和訓全例とその被注字との対応の持つ常用性を検討してみたが、全般的に常用性が低い和訓、言い換えれば漢字の異例的な字義に基づく和訓が多かった。

【表五-3】常用性の分布

	本行	割注	未詳	計
常用性高	25	14	0	39
常用性低	95	29	4	128
合計	120	43	4	167

【表五-4】本行における常用性と注文の有無

	注釈○	注釈×	計
常用性高	7	18	25
常用性低	75	20	95
合計	82	38	120

【表五-5】意味注釈の有無と表収録の状況

	表収録字	未収録字	計
常用性高	㉗32	㉘ 7	39
常用性低	㉙81	㉚47	128
合計	113	54	167

先に述べた被注字の常用性と合わせて検討すれば【表五-5】に示すとおりである。最も多いのは平易な字に対する非常用的な和訓(㉘)で、続いて非常用的な漢字の非常用的な和訓(㉚)が続く。平易な字に対する常用訓が占める割合は二割弱に過ぎない。これは図書寮本が「読むための辞書」として広く和訓を集めた結果として解される。そして、定訓として読みが自明な箇所は無加点のままになることが多い訓点資料の加点様相に抛ることとしても理解できる。一方、常用性の高い和訓が毛詩より上位の出典からすでに収録されているために、毛詩からは常用性が低い和訓が引かれたのではないから常用性が低い和訓が必要がある。これは毛詩訓点本にあるにも関わらず図書寮本には引用されなかったという「不採録」の問題にもかかわると考えられる。

第五節 まとめ

本章では毛詩訓点本からの和訓一六七例を取り上げ、その性質について被注字との対応の常用性に注目して考察した。原典における採録箇所の推定を行い、それから得られた文脈と意味注釈という情報に基づいて考察を進め、さらに成立時期に近い『色葉字類抄』を援用してその検討結果の裏付けを試みた。その検討の結果をまとめると次のとおりである。

一 毛詩訓点本からの和訓一六七例の内、一六三例に対してその採録箇所の推定ができた。その分布は本行からのものが一二〇例、割注からのものが四三例である。

二 毛詩訓点本からの和訓の被注字(重複除いて)は、相対的に常用的な字が一〇六字(六六・七%)、非常用的な字が五三字(三三・三%)で、平易な字が多く見られる。

三 被注字と和訓の結び付きは、非常用的なものが一二八例(七六・六%)、常用的なものが三九例(二三・四%)で、非常用的なものが多い。これは「読むための辞書」として多様な和訓の収集に努めた結果で、読みが自明な場合の付訓の省略が多いという訓点本の加点事情と関連することであろう。

四 被注字と和訓の常用性の対応は次のとおりである。

- ② 常用的な漢字の常用的な和訓……………三二例(一九・二%)
- ③ 常用的な漢字の非常用的な和訓……………八一例(四八・五%)
- ④ 非常用的な漢字の常用的な和訓……………七例(四・二%)
- ⑤ 非常用的な漢字の非常用的な和訓……………四七例(二八・一%)

五 非常用的な漢字の和訓、常用的な漢字の非常用的な和訓の場合は、訓点本において意味注釈を有することが多い。それは多様な和訓の収集にあたつてその付訓典拠を意識したこととして推される。このような典拠重視の態度は平安時代の本文主義の流れを汲むこととして捉えられよう。

注

(一) 中村(一九八七)は、改編本系の観智院本類聚名義抄の和訓に関して「漢字に対する和訓の正当性」「和訓の定位」を検討するに当たつて、次のように述べ、複雑多様性と玉石混淆の性格を有する和訓の質について研究する必要を指摘している。

漢字に対して単に和訓を付記しているだけでは、時代を互り、多義・多用法を兼ねる漢語の、どの書物の、どのような文脈における意味であるのか判断できないのみならず、そもそも果してその漢字に対する本来の訳語(訓)であるのか、それとも他訓の錯入かという根本的疑問さえ抱かせる。和訓から考えても、定着した訓以外については、その訓の意味を果してその漢字の意味範疇で考えてよいのかという疑惑が常に付随する。(中略)故に、この「和訓の宝庫」としての『名義抄』を活用し、古訓の研究を進めるためにも

これ等の訓の原拠・由来を明らかにして、漢語との対応の歪みや誤記を訂正しておくことが書誌的・形態的な研究以上に急務とされなければならない。(後略)

(二) 出典注記がない和訓の出典表示については大きく二つの異論が提示されている。一つは、前方和訓の出典表示が及ぶことが有力だとする築島(一九五九)と山本(二〇〇六)の見解である。これは訓点本との比較によつて導かれたことであるが、その適用が難しい例の存在も指摘されている。もう一つは、大槻(二〇〇一)における後方(和訓)の出典注記がその前の出典無注記和訓にまで及ぶとする主張である。これは出典表示システムの整合性という理論的な立場から説得力を持つが、訓点本との比較による実証的な検討が必要である。

(三) 本稿で「詩」表示和訓の各用例は、「掲出項(覆製本の頁(三桁)―行段(二桁)／被注字(必要な項に限る)／和訓」の形式で示す。たとえば「訓詁(Sho)／訓／ヲシフ」は覆製本の七六頁の六行二段にある「訓詁」の掲出項に「訓」の和訓として収録されている「ヲシフ」を表す。

(四) 呉(二〇〇〇)は図書寮本所収の論語訓について鎌倉・室町期転写の訓点本との比較検討を行い、図書寮本和訓が代表する平安時代の論語訓と大きな違いが見られないことを指摘している。これは博士家における漢籍訓法伝授の保守性を窺わせる例として解され、毛詩の訓の場合もこれに准じて理解して問題ないと考えられる。

(五) 呉(二〇〇〇)は論語訓に対して次のように分類している。

- 1 見出し字が論語にあらわれ、和訓も一致するもの
- ① 本文からのもの
- ② 注文からのもの

2 見出し字は論語にあらわれるが、和訓は一致しないもの

3 見出し字が論語にあらわれないもの

本稿で扱っている毛詩訓を収録する項目には、二字以上の漢字からなるものがあり、掲出字と被注字の区別が必要とされる。したがって、本稿では上記の分類で見出し字の代わりに「被注字」を基準にして調査を行った。

(六) これは築島(一九五九)の一七例、山本(二〇〇六)の一二八例を上回る数であるが、一致判断の基準の違いによるものと推測される。

(七) 「国風・周南」を取り上げて本行と割注の文字数を数えてみると、本行は約一三〇〇字、割注は約二四〇〇字で、割注が本行の約二倍である。

(八) 以下、静嘉堂文庫本『毛詩鄭箋』の翻字の末尾には「卷…行」を位置を示す。他に

異文・注釈・辞書などを関連情報として示す時には冒頭にそれぞれ以下のような略称を付ける。

《伝》…毛伝、《箋》…鄭箋、《観》…観智院本類聚名義抄、《色》…三卷本『色葉字類抄』、《釈》…『經典釈文』、《大》…大仏寺蔵『毛詩二南殘卷』

(九)『日本国語大辞典』の語誌によると、「クムガ」は現代語において「クガ」に繋がる語形と考えられ、図書寮本名義抄のほかに石山寺本『大般涅槃經』の平安中期点、『色葉字類抄』においても同語形が確認される。他の語形として「クヌガ」が北野本『日本書紀』に見られる。その語源を「クニガ」とすると、第二音節における母音の脱落などの音韻変化を経る過程で発生した語形ではないかと考えられる。

(一〇)峰岸(一九八〇)は高山寺蔵の史記点本二点の加点点例を分析し、これらの訓点本における加点は「難読・誤読を回避すべく、その訓法を的確に明示しようとする」ために施されたもので、定訓で十分読める箇所には無加点点の場合が多いことを指摘している。

(一一)池田(一九九三)は篆隸万象名義の図書寮本名義抄採録字と非採録字との常用性をJIS漢字(広義の常用字)にあるかどうかを目安として検討している。これによって漢字の常用性が証明されると言い切れないにしても、傾向は認められると述べている。

(一二)丙(二〇一一)は「常用漢字表」(一九八一年)のうち名詞の常用訓を持つ三八八例に対して平安時代の常用字・常用訓との一致を検討している。『訓点語彙集成』、観智院本類聚名義抄、『色葉字類抄』から導出された平安時代の常用字と常用訓とを比較して、約八割の高い一致率を確認している。

(一三)同じ被注字の別訓としてそれぞれ数えられた以下の重複例を除外した全一五九字について調べた結果である。

- 1 詳(アキラカ／089-73)―詳(イツハリ／247-71)
- 2 詒(オクラヌカ／097-41)―詒(オクレリ／097-41)
- 3 阜(オホイナリ／186-11)―阜(ヲカ／208-32)
- 4 懷(ヤスシ／244-62)―懷(オモフ／273-11)
- 5 慄(オソル／245-23)―慄(ヲノ、ク／258-73)
- 6 經(ツネニシテ／287-42)―經(ハカル／287-42)
- 7 純(ツ、ム／294-12)―純(アツク／293-34)
- 8 哀(オモハカル／340-13)―哀(カナシ／340-13)

(一四)この調査における収録判定は、旧字体と新字体(經(常用漢字)―經(図書寮本))やマとメ(決(常用漢字)―決(図書寮本))などのような異体字関係の字を広く含めて行った。

(一五)次の九例の和訓には出典注記の後ろに原典の注釈が引用されている。

況(ロ、[茲也]／044-23)、話言(話／ロ、[善言也]／078-13)、説(ツク[音悦服也]／079-14)、南謨謨／ハカル[謀也]／091-11)、諧諧(諧／イツハリ[不信也]／096-23)、童(カフロ[羊之無角者也]／123-43)、正(ヤム[止也]／131-73)、暨(イコロフ[息也]／216-62)、士(ロト[事也]／234-61)

(一六)山本(二〇〇六)は意味注釈の存在と和訓の特異性について次のように指摘している。

史記では、図書寮本名義抄に採録されていない比較的特異な和訓については、字義を示す集解注が存する場合が、採録されているものに比べてかなり多いことを指摘した。(中略)但し、毛詩の場合は、図書寮本名義抄に採録されている和訓においてもこれまで指摘した如く「正ヤム詩事」、「説ツク詩服、ヤトル舎、」等のように、毛伝・鄭箋の注記を附記して掲げているものが少なくなく、字義を示す毛伝・鄭箋が存するような比較的特異な和訓をも、かなり採録していることを示していると言えよう。

第七章 結論

以上、本論では図書寮本名義抄の翻字を基に、その基礎的な構造を中心に考察を行った。各章における検討内容は次のとおりである。

第一章では、序論として、まず日本古辞書の歴史について中国辞書からの影響を中心に概観した上で、類聚名義抄の書名の由来、諸本の系統、その価値および記述構造について概説した。そして、図書寮本名義抄に関する研究の大きな流れをまとめて記した。

第二章では、図書寮本名義抄における編纂材料の利用に着目した考察を行った。まず、編纂材料をその出典の特徴によって「仏典音義類」からのものと「辞書類」からのものとに分類した。そして、辞書記述上の機能的な相違によって掲出語と注文に分け、各材料群の利用実態を計量的に検討した。その結果、仏典音義類が主に熟語掲出語を中心に主要材料として使われ、辞書類はそれに次ぐ材料として利用されていることが明らかになった。特に「熟語掲出語」における仏典音義類、「一字掲出語」における辞書類の主導的な利用が窺われることを確認した。

第三章では、辞書編纂の基本単位である「項目」の配列の実態についての検討を行った。まず、図書寮本名義抄における項目を、物理的な区切りによる「掲出項」と、内容検討によって把握可能な「被注項」とに分

けた。その上で、同じ単字に対する情報が隣接する複数の被注項に分散されていることに注目し、「項目群」という概念の導入によってこれを貫いた。この検討によって、図書寮本名義抄における情報配列の体系性と重層性の一端を確認した。

第四章では、さらに細密な単位である注文類型の分布に見られる体系性について検討した。特に前章で指摘した同字の情報が隣接項目に分散されることに関しての更なる考察である。そのために、図書寮本名義抄の注文を、字体注・音注・義注・和訓の四つの類型に分け、各項目群の中でどのように分布しているかを検討した。これによって、図書寮本名義抄の項目間における立体的な組織性を確認した。

第五章では、図書寮本名義抄における意味記述要素である「漢文義注」と「和訓」との関係について検討した。漢文注中心の図書寮本名義抄に和訓を収録した意義について、「単字型義注」が分布する項目を中心に考察した。その結果、和訓の意味記述要素としての機能は、主に義注で表された意味の重複表示であるが、独自の意味も表すことを確認した。特に独自の意味では当該字の意味としては特殊なものが目立つことが確認される。

第六章では、図書寮本名義抄の和訓の特質について、個別出典である毛詩訓点本からのものに絞って考察した。まず、図書寮本名義抄所収の毛詩和訓に対して、現存する毛詩訓点本との照合によって原典における

採録箇所を推定した。そして、推定される箇所の前後文脈および注釈によって、当該和訓の被注字に対して持つ性質を確認した。

第一部で示した辞書本文の翻字だけでは、その内容的確に理解可能になったとは言えない。利用者が内容の詳細をより容易かつ的確に理解するためには更なる加工を行った注釈書が必要である。本論で行った翻字はそれに進むための土台作りとして意義を持つ。注釈書は、まず句読点を施して文の区切りを示した上で、頻出する仏教要語や難語に対する語釈が必要である。これは日本語学と中国語学はもとより、仏教学への知識を要する作業である。

第二部で行った図書寮本名義抄の辞書記述における基礎的な構造についての検討の結果は、より簡明な形に変えて、図書寮本名義抄という辞書に対する利用凡例とする必要がある。これは注釈書とともに、一等資料として名高い古辞書を、様々な分野の利用者から容易に利用してもらうための手立てである。

以上は、今後の課題といえる作業であり、本論における成果が究極的に目指す方向性の確認である。

参考文献

- 池田証壽(一九九一a)「図書寮本類聚名義抄所引玄応音義対照表(上)」『人文科学論集』(信州大学)二五号
- 池田証壽(一九九一b)「図書寮本類聚名義抄と玄応音義との関係について」『国語国文研究』八八、北海道大学国語国文学会
- 池田証壽(一九九二)「図書寮本類聚名義抄所引玄応音義対照表(下)」『人文科学論集』(信州大学)二六号
- 池田証壽(一九九三a)「図書寮本類聚名義抄と篆隸万象名義との関係について」『人文科学論集』二七、信州大学人文学部
- 池田証壽(一九九三b)「図書寮本類聚名義抄の単字字書的性格」『国語国文研究』九四、北海道大学国語国文学会
- 池田証壽(一九九四)「類聚名義抄の出典研究の現段階」『人文科学論集』(信州大学)二八号
- 池田証壽(一九九五)「図書寮本類聚名義抄と類音決」『訓点語と訓点資料』第九六輯
- 池田証壽(二〇〇〇)「図書寮本類聚名義抄出典略注」『古辞書とJIS漢字』第三号
- 池田証壽(二〇〇一)「図書寮本類聚名義抄出典索引」『古辞書とJIS漢字』第四号
- 池田証壽(二〇〇五)『図書寮本類聚名義抄の翻字本文及び注解の作成に関する基礎的研究』、平成一四年度～平成一六年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書

- 池田証壽・小助川貞次・淺田雅志・宮澤俊雅(一九八八)「法華釋文並類聚名義抄引慈恩釋對照表」『北大國語學講座二十周年記念論輯辭書・音義』(汲古書院)
- 大槻信(二〇〇一)「図書寮本類聚名義抄片仮名和訓の出典標示法」『国語国文』七〇(三)、京都大学文学部国語国文学研究室
- 大槻信(二〇〇五a)「和訓と材料―和訓の収集―」『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開』汲古書院
- 大槻信(二〇〇五b)「平安時代の辞書についての覚書」、『国文学解釈と教材の研究』五〇巻五号
- 吳美寧(二〇〇〇)「図書寮本類聚名義抄における論語の和訓について」『国語国文研究』一一六、北海道大学国語国文学会
- 川瀬一馬(一九七八)『古辞書概説』(訂正版)、雄松堂書店
- 川瀬一馬(一九八二)『日本書誌学用語辞典』、雄松堂書店
- 小助川貞次(一九九八)「上野本漢書楊雄伝天曆二年点における典拠の問題について」『訓点語と訓点資料』記念特輯、訓点語学会
- 酒井憲二(一九六七)「類聚名義抄の字順と部首排列」『本邦辞書史論叢』、三省堂
- 芮真慧(二〇一一)「平安時代における常用字と常用訓——「常用漢字表」所載の名词を中心に——」『国語国文研究』一三九、北海道大学国語国文学会
- 築島裕(一九五九)「訓読史上の図書寮本類聚名義抄」『国語学』三七、国語学会
- 築島裕(一九七六)「国語史料としての図書寮本類聚名義抄」『図書寮本類聚名義抄』、勉誠社
- 築島裕(一九九四)「静嘉堂文库蔵本毛詩鄭箋古點解説」『毛詩鄭箋(二)』(古典研究会叢書 漢籍之部3)、汲古書院
- 築島裕(二〇〇七～二〇〇九)『訓点語彙集成』、汲古書院

中村宗彦(一九八七)「類聚名義抄和訓の定位」『国語国文』五六(九)、京都大学文学部国語学国文学研究室

橋本進吉(一九一六)「古本節用集の研究」『東京帝國大學文科大學紀要』二(勉誠社の復刻版(一九六八年)を利用)

橋本不美男(一九五〇)「図書寮本類聚名義抄解説」『図書寮本類聚名義抄』宮内庁

橋本不美男(一九五二)「図書寮本類聚名義抄出典索引」『書陵部紀要』第一号、宮内庁書陵部

峰岸明(一九八〇)「高山寺藏史記點本の加點態度について」『高山寺古訓點資料第一』、東京大學出版會

峰岸明(一九八四)「平安時代における漢字の定訓について」『国語と国文学』六一(二〇)、東京大学国語国文学会(『平安時代古記録の國語學的研究』(東京大學出版會、一九八六)に再収)

宮澤俊雅(一九七三)「図書寮本類聚名義抄に見える篆隸万象名義について」『訓点語と訓点資料』第五二輯

宮澤俊雅(一九七七)「図書寮本類聚名義抄と妙法蓮華經釈文」『松村明教授還暦記念国語学と国語史』(明治書院)

宮澤俊雅(一九八六)「図書寮本類聚名義抄と倭名類聚抄」『松村明教授古稀記念国語学論集』(明治書院)

宮澤俊雅(一九八七)「図書寮本類聚名義抄と篆隸万象名義」『訓点語と訓点資料』第七七輯

宮澤俊雅(一九八八)「図書寮本類聚名義抄と法華音訓」『北海道大学国語学講座二十周年記念論輯 辞書・音義』(汲古書院)

宮澤俊雅(一九九二)「図書寮本類聚名義抄の注文の配列について」『小林芳規博士退官記念国語学論集』、汲古書院

望月郁子(一九九二)「『類聚名義抄』(改編)のねらい―観智院本言部の漢文注を手がかりに―」『類聚名義抄の文献学的研究』、笠間書院

望月郁子(一九九九)「仏教界に辞書は在ったか―古字書の新研究―」、笠間書院
山田健三(一九九五)「奈良・平安時代の辞書」『日本古辞書を学ぶ人のために』世界思想社

山田健三(二〇〇〇)「類聚名義抄―その構造と歴史性―」『日本語学』二〇〇〇年九月号、明治書院

山本秀人(一九九〇)「図書寮本類聚名義抄における真興大般若經音訓の引用法について―叡山文庫藏息心抄所引の真興大般若經音訓との比較より―」『訓点語と訓点資料』第八五輯

山本秀人(一九九二)「図書寮本類聚名義抄における標出語の採録法について―注文の出典との関連を視点に―」『小林芳規博士退官記念国語学論集』、汲古書院

山本秀人(一九九三)「図書寮本類聚名義抄における玄応一切經音義の標出語の撰取法について」『鎌倉時代語研究』一六輯

山本秀人(二〇〇〇)「類聚名義抄における史記の訓の採録について―図書寮本における不採録の訓を中心に―」『鎌倉時代語研究』二三輯

山本秀人(二〇〇二)「図書寮本類聚名義抄における出典無表示の和訓について―国書の訓との関わりを中心に―」『高知大國文』第三二号

山本秀人(二〇〇六)「図書寮本類聚名義抄における毛詩の和訓の引用について―静嘉堂文庫藏毛詩鄭箋清原宣賢点との比較から―」『小林芳規博士喜寿記念国語学論集』、汲古書院

吉田金彦(一九五二)「類聚名義抄小論」『国語国文』二四・三

吉田金彦(一九五四a)「図書寮本類聚名義抄出典攷(上)」『訓点語と訓点資料』第二輯

吉田金彦(一九五四b)「図書寮本類聚名義抄出典攷(中)」『訓点語と訓点資料』第三輯

吉田金彦(一九五五a)「類聚名義抄小論」『国語国文』第二四卷第三号

吉田金彦(一九五五b)「図書寮本類聚名義抄出典攷(下)」『訓点語と訓点資料』第五輯

吉田金彦(一九五五c)「国語学における古辞書研究の立場——音義と辞書史」『国語学』第二三号

吉田金彦(一九五六)「類聚名義抄の展開」『訓点語と訓点資料』第六輯

吉田金彦(一九七一)「辞書の歴史」『講座国語史3 語彙史』(大修館書店)

使用テキスト

○図書寮本類聚名義抄…『図書寮本類聚名義抄』、宮内庁書陵部解説、勉誠社、一九六九年

○観智院本類聚名義抄…『類聚名義抄』正宗敦夫校訂、風間書房、一九八六年

○篆隸万象名義…『高山寺古辞書資料第一』(高山寺資料叢書六)、高山寺典籍文書綜合調査団編、東京大学出版会、一九七七年

○妙法蓮華経釈文…『妙法蓮華経釈文』(古辞書音義集成四)、吉田金彦解説、汲古書院、一九七九年

○妙法蓮華経音訓…『高麗大蔵經・一切経音義(慧琳撰)』(第四二卷)、東國大學校、一九七六年

○妙法蓮華経玄賛…『大正新脩大蔵經・經疏部二』(第三四卷・普及版)、大正新

脩大蔵経刊行会、一九八九年

○一切経音義(玄応撰)…『一切経音義(上・中・下)』(古辞書音義集成七・九)、小林芳規解説、汲古書院、一九八〇～八一年

○大般若経字抄…『大般若経音義・大般若経字抄』(古辞書音義集成三)、築島裕・沼本克明解説、汲古書院、一九七八年

○原本系玉篇…『原本玉篇残卷』(古代字書輯刊)、中華書局、二〇〇四年(初版一九八五年)

○大広益会玉篇…『大廣益會玉篇』(古代字書輯刊)、中華書局、二〇〇八年(初版一九八七年)

○大宋重修広韻…『校正宋本廣韻附索引』藝文印書館、二〇〇二年

○倭名類聚抄

・『諸本集成倭名類聚抄』(増訂再版)、京都大学文学部国語学国文学研究室、臨川書店、一九九九年(増訂初版一九六八年)

・『古写本倭名類聚抄集成(第一部・第三部)』馬淵和夫編、勉誠出版、二〇〇九年

○干祿字書…『校本祿字書』広島大学文学部国語学研究室編、油印本謄写、一九六二年

○色葉字類抄…『色葉字類抄研究並びに総合索引』中田祝夫・峰岸明共編、風間書房、一九六四年

○静嘉堂文庫本毛詩鄭箋…『毛詩鄭箋(一・二・三)』(古典研究会叢書 漢籍之部一・三)、米山寅太郎解題、汲古書院、一九九四年

○大仏寺本毛詩殘卷…『毛詩二南殘卷』(京都帝國大學文學部景印舊鈔本第十集)、京都帝國大學文學部編、一九四二年

○經典釈文…『經典釋文彙校』黃焯彙校、中華書局、二〇〇六年

○改定常用漢字表…「常用漢字表」(平成二二年内閣告示第二号附表)、二〇一〇年十一月三〇日

○表外漢字字体表…「表外漢字字体表」(国語審議会答申)、二〇〇〇年十二月八日

○JIS漢字コード…『7ビット及び8ビットの2バイト情報交換用符号化拡張漢字集合』、日本工業標準調査会、二〇〇〇年